アニメージュ
アニメージュ2020年1月号増刊
スター☆トゥインクルプリキュア
特別増刊号
定価1500yen
綴込みピンナップ
A 表紙イラスト
B プリキュアキャスト
集合ピンナップ
応募者全員サービス
缶バッジセット&
アクリルスタンド
アニメージュの
『スタプリ』
『ミラクルユニバース』
特集
29ページ収録!
映画
スター☆トゥインクル
プリキュア
星のうたに想いを
こめて
公開記念大特集
TV&映画
設定資料集
小松こずえ
イラスト
メッセージ
スタッフ
インタビュー
TV
宮元宏彰
村山 功
高橋 晃
柳川あかり
映画
田中裕太
田中 仁
小松こずえ
今井美紀
大曽根悠介
野島淳志
村瀬亜季
キャスト
インタビュー
1 プリキュアチーム
成瀬瑛美
小原好美
安野希世乃
小松未可子
上坂すみれ
2 プリキュアの仲間たち
木野日菜
吉野裕行
伊藤美紀
多田野曜平
大地 葉
3 ノットレイダー
細谷佳正
遠藤 綾
村川梨衣
鶴岡 聡
4 映画ゲスト
知念里奈
付録 B2ポスター
A 小松こずえ描きおろし
映画イラスト
B 星座ドレス&スタープリンセス
設定資料
まるごと1冊
スター☆
トゥインクルプリキュア

アニメージュ1月号増刊『スター☆トゥインクルプリキュア』特別増刊号

2020年1月1日発行

STAFF

[Editor] 久保田志乃

[Contributing Editor] 林 優歩

[Writer] ぽろり春草

[Proofreading] 東京出版サービスセンター

[Cover Layout] 間中幸子（クウ）

[Designer] 山川夏実
柳川ユリ
里信亜沙子（クウ）

[Advertising] 岩水洋子
伊藤沙織
篠田 茂

[Marketing Analyzer] 片山伸之
小林茂樹

[Public Relations] 斎藤信恵
松本留衣子
本田友紀

[Supervisor] 松下俊也
川井久恵
鈴木雅展

[Special Thanks] 東映アニメーション
東映
マーベラス
バンダイ

Contents

STAR☆TWINKLE PRECURE SPECIAL ISSUE

SPECIAL COLUMN

イラスト：いなとめまきこ

STAR☆TWINKLE PRECURE ×Animage

※本書に再録したページの情報はすべて「アニメージュ」に掲載した当時のものです。

付録

B2両面ポスター
表紙イラスト／星座ドレス・スタープリンセス・星座フワ

［表紙］
原画・仕上／東映アニメーション

［付録B2ポスターA面］
原画／小松こずえ
仕上／竹澤 聡
背景／今井美紀

スター☆トゥインクルプリキュア
©ABC-A・東映アニメーション
Illustrated by TOEI ANIMATION

STAR☆TWINKLE PRECURE
Photo by Masao Ohyama

TV

スター☆トゥインクルプリキュア

★2019年2月3日より放映中★毎週日曜日★朝8時30分
★ABCテレビ・テレビ朝日系
HP★http://www.toei-anim.co.jp/tv/precure/

STAFF
シリーズディレクター／宮元宏彰　シリーズ構成／村山 功　キャラクターデザイン／高橋 晃　音楽／林ゆうき・橘 麻美　美術デザイン／増田竜太郎・いいだりえ　色彩設計／佐久間ヨシ子　製作担当／澤守 洸・堀越圭文　プロデューサー／佐藤 有（ABCテレビ）・田中 昂（ABCアニメーション）・矢﨑 史（ADK）・柳川あかり　アニメーション制作／東映アニメーション

VISUAL POINT
シリーズ後期の変身前スチール。5人でVサインを合わせ、作品のシンボルである星マークを描く構図だ。メンバーの仲良し感を見せる絵は『プリキュア』シリーズではおなじみだが、実は今作の本編では、こうした5人横並びの仲良しシーンはほとんどない。ある意味、エクストラ感のあるシチュエーションだ！

MOVIE

映画スター☆トゥインクルプリキュア 星のうたに想いをこめて

★2019年10月19日（土）より公開中
HP★http://www.precure-movie.com/

STAFF
監督／田中裕太　脚本／田中 仁　音楽／林ゆうき・橘 麻美　総作画監督／小松こずえ　作画監督／松浦仁美・中谷友紀子　美術監督／今井美紀　CGディレクター／大曽根悠介　色彩設計／竹澤 聡　撮影監督／髙橋賢司　製作担当／澤守 洸・井桁啓介　アニメーション制作／東映アニメーション

VISUAL POINT
宇宙に浮遊してユーマを囲む、印象的なスター＆ミルキー、そして奥に見える「ユーマの星」。色味も含め、これまでの映画ポスターとは趣の違った絵面だ。「地球から冒険に旅立つ感じ」を出すため、あえて地上の街の灯りも見せている。

STAR☆TWINKLE PRECURE SPECIAL ISSUE

『スター☆トゥインクルプリキュア』の魅力をお伝えする、丸ごと一冊プリキュア特集！
スタッフ・キャストの言葉で、ひかるたちの旅の軌跡をあらためて振り返ろう。
公開中の秋映画と、クライマックスに向かうTVシリーズの魅力を解説します!!

星のプリキュア

宇宙(そら)に輝くキラキラ星!

キュアスター★星奈ひかる
CURE STAR HOSHINA HIKARU

声 成瀬瑛美

「星奈ひかる」名づけの経緯

「みんなでアイデアを出し合って決めました。実は下の名は"あかり"案もありました。ABCアニメーションの田中昂Pが『"ひかる"は強すぎる気がするので、"あかり"はどうですか?』と。柳川あかりP(東映アニメーション)の名前が主人公になるから、僕はそれも面白いかなと思ったんですが(笑)、今は"星奈ひかる"が一番だと思っています」(シリーズ構成・村山 功)

DATA

学年★観星中学校2年3組
誕生日★4月12日
出身★観星町(地球)
口癖★「キラやば～っ☆」

キュアスター変身バンク

絵コンテ:宮元宏彰　演出処理:高戸谷一歩

「どの変身シーンも、どれだけキャラの性格や変身後のモチーフなどの面白さを出せるかを意識して作りました。キュアスターなら、軽やかさ、かわいらしさがポイントです。原画は藤原未来夫さんが担当しました」(シリーズディレクター・宮元宏彰)

星奈家の外観(美術ボード)

観星町の外観コンセプトである、アメリカンカントリー調が意識されている一軒家。ひかるの部屋の丸窓は、劇中で天体観測ができるようにという意図で設定

夏祭りの浴衣姿

ハロウィン仮装(イエティ)

ある日、自分が描いたオリジナル星座そっくりの宇宙妖精・フワと出会ったひかる。さらに宇宙人のララとも知り合って大興奮! それまではあまり友達付き合いがなかったが、ララと仲良くなり、さらに上級生のえれなやまどかとも親しくなっていく。
また、プリキュアとして宇宙にも出て、様々な人と出会う。元々、並外れた好奇心の持ち主なので、変化に富んだ日々を楽しく送るが、それがひかるのイマジネーションをどう広げていくのだろうか?

天にあまねくミルキーウェイ！

天の川のプリキュア

キュアミルキー★羽衣ララ

CURE MILKY
HAGOROMO LALA

声 小原好美

地球で最初に出会ったひかると行動を共にするサマーン星人のララ。性格は真面目で、結構な慎重派。斜め上の感性のひかるとは、最初は反りが合わないこともあったが、ララも周囲に合わせようとしすぎないことを覚えていく。

観星中にも通って、地球人の中で暮らしていくうち、故郷にいた頃とは違う価値観を自然と身につけていった。そしてついに、学校の友人たちに正体が知られてしまい……。しかし、ララがみんなを大切に思う気持ちはしっかりと伝わった。

DATA

学年★観星中学校２年３組
誕生日★７月７日
出身★惑星サマーン（星空界）
口癖★「〜ルン」「オヨ〜」

「羽衣ララ」名づけの経緯

「これについては語感だけで決めました」（村山）、「とにかく『宇宙人っぽく！』ということで。プリキュアには、星、天の川、太陽、月、銀河（虹）のモチーフや春夏秋冬モチーフ（P.69参照）があるので、変身前の名前もそれに寄せて考えたりもしました」（プロデューサー・柳川あかり）

夏祭りの浴衣姿

ハロウィン仮装（ツチノコ）

キュアミルキー変身バンク

絵コンテ：宮元宏彰　演出処理：高戸谷一歩

「ララは『抑圧されているところから解放されていく』というキャラ性もありますが、変身シーンではかわいくお茶目な感じを出す形にしました。原画の板岡錦さんが、さらにそこを盛ってくれました！」（宮元）

惑星サマーンの全景（美術ボード）

ララの故郷の星。AIもうまく利用した理想社会だが、必ずしもそれが正解ではない。星の形はコスモグミケースがモチーフで、脚本段階から仕込まれていた

太陽のプリキュア
宇宙を照らす！ 灼熱のきらめき！

キュアソレイユ★天宮えれな
CURE SOLEIL AMAMIYA ELENA

声 安野希世乃

DATA

学年★観星中学校３年
誕生日★９月８日
出身★観星町（地球）
口癖★「チャオ！」「いいねぇ！」

スポーツ万能、フランクな性格で、大人気のヒスパニック系少女。ひかるとララと親しくなり、プリキュアにもなったことで、家の手伝い中心だった生活に変化が生まれた。

他者への寛容さも持ち合わせ、精神的には非の打ち所がないタイプだが、サボテン型宇宙人とのコンタクトでは、自分の想いが裏目に出て苦悩した。また、テンジョウの罠で、幼い頃の自分の悩みとも向き合うことに。しかし、それらはえれなにとって、今後のステップアップになりそうだ。

「天宮えれな」名づけの経緯

「語感から"えれな"のイメージが最初に固まりましたね。当初は"キュアエレナ"にしようと考えていたのですが、「エレナは普通に女性の名前だから、キュア花子になるみたいな感じですよ」という意見が出まして。それで、変身後は太陽モチーフの"キュアソレイユ"になりました」（村山）

キュアソレイユ 変身バンク

絵コンテ：宮元宏彰　演出処理：高戸谷一歩

「アクティブでカッコいいイメージを意識しました。"走るキャラクター"にしたいとも思っていたので、変身の動きもパルクールから連想しています。原画は山岸正和さんです」（宮元）

夏祭りの浴衣姿

ハロウィン仮装（ネコ）

花屋ソンリッサ（美術ボード）

天宮家のダイニング（美術ボード）

花屋のひさしはお日さまイメージ。ソンブレロを被った大きなサボテンなど、メキシコを意識した外観や内装で、「手狭な家に住んでいる大家族」がコンセプト

夜空に輝く！神秘の月あかり！

キュアセレーネ★香久矢まどか

CURE SELENE KAGUYA MADOKA

声 小松未可子

DATA

学年★観星中学校３年
誕生日★11月23日
出身★観星町（地球）
口癖★「ごきげんよう」

「香久矢まどか」名づけの経緯

「『まどか』は僕が出した案だったかな。もし漢字で書くとしたら“円”です」（村山）、「“まどか”は満月のイメージからきました。変身後のモチーフつながりですね」（柳川）

キュアセレーネ変身バンク

絵コンテ：宮元宏彰　演出処理：高戸谷一歩

「凛とした感じを出すことを考えました。原画は吉田亘良さん。歌はみんな共通なので似たような流れにはなりますが、まどかは初期４人のうちの４番目なので、特に違う表情や動きをつけるよう気をつけました」（宮元）

香久矢家のダイニング（美術ボード）

香久矢家の弓道場（美術ボード）

由緒正しい家柄の大邸宅。全体に四角くて重厚感のある、古い屋敷のたたずまいだ。ダイニングの調度品からも、裕福で厳格な雰囲気が出ている

文武両道の心優しい生徒会長として、学校でえれなと人気を二分するお嬢様。えれなとは顔見知り程度だったが、プリキュアになったことでつながりができ、ひかるとララのようなコンビ感も生まれていく。

　何でもそつなくこなす、驕らない性格だが、どこか自分に自信が持てない繊細さを持ち合わせている。父の言いつけを守るばかりで「自分自身がどうしたいのか？」をあまり気にせず生きてきたまどか。ここから徐々に主体性が芽生えていきそうだ。

銀河に光る虹色のスペクトル！

宇宙のプリキュア

キュアコスモ★ユニ
CURE COSMO UNI

声 上坂すみれ

ある時は星空界のトップアイドル、ある時は宇宙怪盗、そしてまたある時はノットレイダーの幹部（！）と、多数の顔を持つレインボー星人。故郷を滅亡させたアイワーンへの怒りと惑星レインボー復活のため、時に非合法的なやり方で生き抜いてきた。

ひかるたちと知り合ってプリキュアの仲間になるが、今もやや距離を置いている。一方で、アイワーンの心情が、実は自分の悲しみに通底していると気がつき、人を恨む感情では前へ進めないと認識した。

キュアコスモ変身バンク

絵コンテ：宮元宏彰
演出処理：高戸谷一歩

「クールでカッコよく、大人っぽい感じを意識して動きをつけてみました。その中で、コスモらしいかわいさも出せればいいかなと。原画は石川てつやさんです」（宮元）

DATA

誕生日★10月11日
出身★惑星レインボー（星空界）
口癖★「～ニャン」

レインボーパフューム

「ユニ」名づけの経緯

「UNITやUNIFORMの接頭にあるユニ（"単一"という意味合い）から採っています。UNIVERSEやUNIQUEとか、いろいろと連想できて、ダブルミーニング的な面白さもあると思います」（柳川）、「レインボー星人は、全員が長オリーフィオの分身のような存在なんです。その意味合いも入れた名前です」（村山）

夏祭りの浴衣姿

惑星レインボーの神殿（美術ボード）

アイワーンに滅ぼされる前は、惑星で採掘されるレインボー鉱石を精製。それによる力で、神殿のあるエリアなど一定の空間でのみ生存可能な環境を作っていた。現在は立ち寄る人もいない不毛の地に

宇宙いっぱい ありがとう

プリキュアキャスト座談会

プリキュアの優しさが胸にしみる秋映画。
一緒に紡ぎ合った思い出は宝物！
そしてラスト10話を切ったTV本編、みんなの想いは
宇宙を照らす光となる!?

ユニは地球ではどうやって生計を？

――プリキュアチームにユニが加わって早数ヵ月、5人の結束も高まっている感じですか？

成瀬 もちろんです。みんな元気いっぱいで頑張ってます！

小松 パワフルになった気がします！

小原 9月にプリキュアライブもあって(P.52)、ますます元気です！

成瀬 もうユニも、完全になじんだ感があるし。

上坂 ユニとしては、みんなからのウェルカムムードが嬉しいです。現場には転校生みたいな気持ちで入ったんですけど、いいクラスだなって思います。

成瀬 やったぁ！

――ただ、劇中でのユニは、仲間になった後もひかるたちとは少し距離を置いていますね。普段の生活も謎ですし。

上坂 ララみたいに、みんなと一緒に学校に行くのかなと思いきや、そうでもなく、第35話では猫の集会に参加していたりして。たぶんこういう風来坊みたいなところは、元々の性格なんじゃないかと。猫モチーフのキャラですし、一人で行動が好きな子で、ひかるたちもそれを分かった上で自然に受け入れてくれている感じがします。「なんでユニは学校来ないの？」って普通はなりそうなんですけど。みんな「ユニはいつでも戻って来てくれるよね」みたいなスタンスなので、とても居心地がいいです。いい仲間に巡り会えたなと思います。ドーナツやおにぎりをほおばったり、お魚を見て興奮したり、故郷を思い出してふと無口になっちゃったり……そんなユニの顔は、気心が知れている相手だからこそ見せているんだと思います。馴れ合いはしないけど、お互いのピンチには絶対に駆けつける、そういう仲間意識がある感じですよね。

安野 ユニも結構、地球を気に入ってる気がする。アイワーンにも「行くところがないんでしょ？ だったら……」って手を差し出して。

上坂 第二の故郷みたいには、ちょっと思っているのかも。絶対口にはしないでしょうけど。

安野 ツンデレか！(笑)

上坂 でも、どうやって生活費を稼いでいるのかな？

小松 日常シーンだと、結構プルンスと一緒にいることが多いよね。

上坂 じゃあプルンスのドーナツで生計を？ それか、迷惑を掛けないよう、密かに地球人の姿に変化して、コンビニとかでアルバイトしてるとか！

安野 健気だね！

成瀬 歴代シリーズ、追加戦士の登場って定番ですけど、「学校ではどう名乗るんだろう？」って妄想するのがいつも楽しくて。今回も、いろいろと想像を膨らませてたんですよ。虹空ユニかな、とか。

他4人 ああ！(感嘆)

小松 地球人としての名前？

成瀬 そうです、そうです。でも、「ユニも学校に来ないと！」みたいな言い方をしないのが、ひかるらしいと思うし、私もユニとの今の関係がすごく好きです。ただ、名字がないままなのは珍しいパターンですよね。

上坂 さすがプリキュアマスター、名付け方も完璧ですね！ きっとバイト先では「虹空」って名札つけてますよ(笑)。

小松 とりあえずバイトはしてるんだね！(笑)

映画主題歌に込めたユーマへの想い

――『映画スター☆トゥインクルプリキュア 星のうたに想いをこめて』が公開中ですが(P.38～)、ゲストキャラのユーマとの触れ合いがお話の軸になっていますね。

「ユニも学校に来ないと！」みたいな言い方をしないのがひかるらしい

成瀬瑛美

なるせ・えいみ　２月16日生まれ／ディアステージ所属／でんぱ組.incメンバー。アニメへの出演は『アイカツ！』（星宮りんご／歌唱担当）、『まめねこ』（マジカルMAJIKO）ほか

小原　ユーマと向き合うシーンが多いんですが、ユーマって赤ちゃんのような存在で、何を言っているかも分からない。ちょっとしたことでも怒り出したり泣き出したり。そんなユーマに対する接し方が、それぞれ少しずつ違うんです。そうやって、いい刺激を受けたユーマが、どう成長していくのか。その姿を見て、私たちも成長していくというお話なのだなあと感じました。

――ユーマは言葉ではなく、音楽でコミュニケーションをとるので、演じるうえでもちょっと勝手が違いますよね。

小原　そこは、アフレコ段階で絵をかなりきれいに仕上げてくださっていて、私たちが万全の形で収録に臨めるよう、スタッフさんたちが頑張ってくださったんです。

上坂　表情も豊かだったよね。

成瀬　ユーマとのやりとりに関しては、苦労した覚えが全然ないです。

小松　しかも収録する前にユーマの「声」も聴かせてもらったので、私たちもイマジネーションが湧いたように思います。

成瀬　今まで聴いたことがない音で、新しい感覚がしました。本当に宇宙から来た生き物みたいな。

上坂　ちょっと喋っているようにも聞こえるんですよね。

小原　お子さんたちはそういうのを敏感に感じ取るだろうから、きっとユーマの感情も伝わるんじゃないかなぁって。

他４人　うんうん！

――ユーマと心を通わせる映画挿入歌「Twinkle Stars」の印象は？

成瀬　まず曲の構成が面白くて。セリフはないですが、ちょっとミュージカルみたいで、ストーリーが見える壮大な曲になっています。この歌でユーマへ想いを届けるので、そういう説得力を持たせられるように歌いました。

小原　冒頭パートの「ながれぼしのうた」の後、セリフのように口ずさむところから始まって、５人で歌い上げていくんです。最初にメロディだけを聴いた時には「歌うのが難しそう！」って印象でした。監督さんやスタッフの皆さんから「映画のクライマックスで流れる曲です」とうかがったので、ただ歌うだけでは通用しない感じもして。「ララの気持ちになって、ユーマに向けてどれだけ気持ちを注いであげられるかなあ？」って。本編のお芝居だけじゃなく、歌もとっても重要になると分かって、正直すごいプレッシャーを感じました。でも、いろんな気持ちを込めて歌えたと思うし、収録を通して自分自身も歌に満たされた気持ちになりました。５人バラバラでの収録だったので、全員がそろった完成版を聴いた時はとっても感動しました。

成瀬　したした！

小原　いつもの変身シーンの歌も、個性が違う５人の声が合わさった時、すごいパワーを感じましたが、それと同じくらいのパワーがこの「Twinkle Stars」にも込められているなって。この歌もぜひ何回も聴いて、一緒に歌ってもらいたいです。

上坂　歌ったほうがいいと思います！　歌うだけで元気になれると思うから。

安野　とてもドラマチックな歌ですよね。語るように歌い出すところから、徐々に集まってきて５人になって、「ユーマも一緒に！」という歌だと思うんです。その気持ちが込めやすくて、歌詞を見なくてもメロディだけで伝わってくるというか。曲全体が「あなたとつながりたい」という矢印が出ていて、しっかりと想いがのっていると感じました。だから歌うのも気持ちがいいし、出来上がったものを聴くのも気持ちがいいです。私はここちゃん（小原さん）の次に収録したんですが、ブースの外で待っていたら、ここちゃんの歌声が聞こえてきて、「頑張って歌ってる〜！」と見守っていました。終わって出てきたここちゃんは、すべてを出し切った顔をしていたんです。

小原　ブースの扉を開けたら、きよさん（安野さん）がいて、思わず「お姉ちゃん！」って抱きつきました！

安野　それだけ、いろいろなものを詰め込んで歌ったんだろうなって。それと、みんなで声をそろえて歌いたいなって、私は勝手に思ったので、収録済みの人たちの音量をぐっと上げてもらって、それを聴きながら「一緒に合唱」しました。

上坂　私もそうしたよ。

成瀬　ええっ本当!?

小原　わぁ、この５人で良かった。なんだか泣けてきちゃった！

上坂　レコーディングの最後が私だったので、「みんなお待たせ！」という気持ちもあって。みんなの声を聴きながら歌ったら、とても心強かったです。一回聴いただけで理解できるメッセージが詰まってます。

小松　冒頭の「ながれぼしのうた」は、誰もが聞いたことのある童謡という設定なんです。それを不思議な生き物のユーマに伝えていくという、メッセージがこもった歌です。冒頭の童謡パートから、みんなで歌い上げるパートにつながっていくのが、とてもドラマチックですよね。この映画のエッセンスをギュッと詰め込んだ一曲になってます。私のレコーディングはえいちゃん（成瀬さん）の次で、えいちゃんの声の音量を上げて、聴きながら歌いました。

成瀬　みんな、そうだったんだぁ！

小原　劇中ではスターとミルキーが歌ってる途中で、他の３人が歌いながら降りてくるんです。

成瀬　それがもう神様みたいなんです！

安野　神降臨!?（一同・笑）

小原　その時に「来てくれた！」ってハッとした顔をするんです。私も、アフレコしていて同じ顔になりましたもん！　来てくれてありがとう！って。

成瀬　分かる！　演じてるとかじゃないんですよ。

小原　それくらいシンクロしてました！

ララの正体はいつかみんなに知られるだろうと思っていました

小原好美

こはら・このみ　６月28日生まれ／大沢事務所所属／最近の出演作は『かぐや様は告らせたい〜天才たちの恋愛頭脳戦〜』（藤原千花）、『まちカドまぞく』（吉田優子）ほか

映画アフレコ日にはAIがララ様を応援！

――TVの話に移ります。まどかは様々な稽古事をやっていて、成果はちゃんと出しているのにあまり自信が持てないというのが興味深いです。

小松　そうなんです。ピアノコンクールでも優勝したのに（第24話）、「私は楽しく弾けなかった」って。芯の強さや元々の才覚もあるとは思うんですけど、きっとこれまでは親に「これを習いなさい」と言われてやってきた部分があると思うんです。ピアノの回も、弓道の回（第16話）も、自分と競う「ライバル」のキャラクターによって自分を見つめる感じがあって。特に弓道の回は、強い意志をもった相手から「負けない！」という強気なオーラを当てられて、まどかは「なんで私にそんな敵意を向けてくるんだろうか？」みたいに戸惑って（笑）。

安野　オークションの回（第15話）でも思ったけど、まどかは実は負けん気があるんですよね。

小松　そう、負けん気は強いんです

よ。でも、自分では気がついていないというか。自分一人では強い意志が持てなくて、ライバル的な存在がいてくれることで、ようやく燃える。そういう意味では、周りの人たちに非常に助けられているんです。これらのエピソードは、そういう自我がまどかに芽生えるきっかけになったんだろうなと感じました。
安野 すごく良い考察だなぁ。さすが中の人！
――ララは第29話、家族が優秀な人ばかりの中で、かなりコンプレックスを持っていたことが分かりました。
小原 ララは自分の家族のことをずっと語らなくて。そこは私も、何があったんだろう？　ってずっと思っていたんです。ただ、ララみたいな状況って、子どもでも大人でも結構あるある話ですよね。特にララは家族がみんな優秀だから、「自分だけできない子だ」って強く落ち込んだと思うし。私も少なからず、子ども時代に似た経験があったんですよ。
成瀬 そうなんだ。
小原 私も勉強が全然できない子で、父からはとにかく「勉強頑張れ」と、だけど母は「勉強じゃない何かできっと才能があるよ」と言ってくれて。そういう環境で育ってきていたので、ララに共感する部分が大きかったです。幼稚園や小学校に入ると、みんなだんだんと周りの子との差を意識し始めると思うんですよ。勉強だけじゃなくて、かけっこが遅いとか、工作で時間がかかってしまうとか。そういう悩みに、ララを観て「自分も頑張ろう」って思ってくれたらなと思いました。
――続く第30話のララは、AIとの絡みも良かったですね。
小原 そうなんです。AIさんとの絆の話でもあって。第29話のアフレコ後に伊藤美紀さん（AI役）が「来週は大事な回だから頑張ろうね、小原。終わったらお酒飲もう！」って言ってくださって。伊藤さんは同じ事務所の先輩なんです。映画のアフレコ日にも、朝に私のLINEにピコンと伊藤さんから着信がきて「ララ様、今日は大事な日ですね。キラやば～っ☆な一日を頑張ってください」って。
他4人 おおおっ！
小原 第30話を感激して観ながら支度していたら、そのメッセージでまた泣けてきちゃって！
小松 素敵！　すばらしい絆！
成瀬 この現場、いい人しかいない！
小原 ララとAIさんだけじゃなく、キャストの絆も深まった回でした。
――第32話、5人のパワーアップは、フワが「プリキュアを守るフワ」と言って発動したのが熱かったです。
成瀬 5人のプリキュアもキラキラにドレスアップして、さらにかわいくなったし！
小原 フワと一緒に技を放つのは、私たちももちろん嬉しかったですけど、木野日菜ちゃん（フワ役）が一番喜んでいました。今までのフワは応援するだけで、プリキュアに助けられる側だったから。それがフワが中心になって、しかも同じポーズで一緒に技を出していて。
小松 フワの強キャラ感、すごいよね！
上坂 しかも自分の身体よりも何十倍も大きい敵に向かって放つという。玩具の収録の段階で、フワと一緒の技があるのは知っていたんですけど、「こんなふうになるんだ！」って感動しました。あとコスモ的には、初めて合体技に加われたのも嬉しかったです。
小松 サザンクロス・ショットは4人だったから。
上坂 ずっと独りでレインボー・スプラッシュしてたので、「合体技いいなぁ」ってうらやましく思っていました！
成瀬 それと第32話は、ガルオウガがめちゃくちゃ強くて、久しぶりに「負けちゃうんじゃないか？」って窮地に陥りました。その時にフワが「守るフワ」って言ってくれたのが心強かったです。「今まで育ててきた子がこんなに大きくなって！」という気持ちが湧きました。
小松 その反動か、次の第33話はすごくワガママになってたけどね（笑）。
小原 たて髪をドヤ顔でなびかせていましたよね。
安野 「二人で食べられるフワ」とか。
小松 （第35話では）「家でも全然遊んでくれないし、つまんないフワ！」って。
成瀬 まぁ宿題を残していた、ひかるも悪いんだけど（笑）。

えれなは転んでももう一回立ち上がろうとする強い女の子
安野希世乃

やすの・きよの　7月9日生まれ／エイベックス・ピクチャーズ所属／主な出演作は『冴えない彼女の育てかた』（加藤 恵）、『マクロスΔ』（カナメ・バッカニア）ほか

えれながもてなしたサボテン型宇宙人（第34話）

AI役 伊藤美紀　気持ちはいつもララ様と一緒に

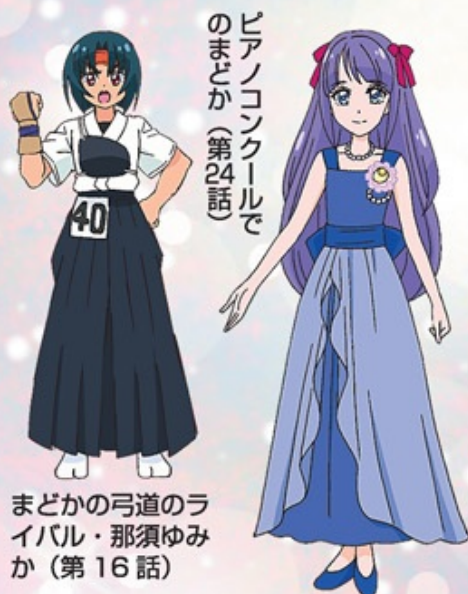
――『プリキュア』シリーズへの出演は、『ふたりはプリキュア』のほのかのお母さん役以来ですが、AI役はオファーだったのでしょうか？
伊藤 指名オーディションの形で、AI役の声のサンプルを録らせていただきました。久しぶりの『プリキュア』に、心が浮き立ちました！　楽しみ～、嬉しい～という気持ちでした。
――ちょっと変わった役柄ですが、話を初めて聞いた時にどのように思いましたか？
伊藤 Siriのような声を出すのかしら？　声はたぶん加工されて、誰の声か分からなくなってしまうのではないかしらん？　と思いました。
――アフレコで最初に演じた際に、宮元監督からお願いされたことは？
伊藤 機械的な声になりすぎないように、かと言って、やはりコンピュータ音になるので、人間的にはならないように、と言われた気がします。ただ、せっかく私がAIを演じることになったので、密かに私、伊藤美紀らしさというか、ただのコンピュータ音にならないようにしたいと思いました。
――ほか、全体的に演じる上で意識していることをお聞かせください。
伊藤 AIは、ララちゃんにとって頼れるべき、身内のような存在だと思っていますので、たとえコンピュータであっても、ララちゃんに寄り添いたいという気持ちを持って演じています。ただし、感情が出すぎないように！　あくまでも抑えて！
――AIのONセリフ（ララとのグローブを介しての通信以外）では、シリーズの途中からロケットの天井の照明が明滅するカットが入るようになりましたね。
伊藤 ララちゃんのグローブを介している時は、基本ララちゃんとのやりとり、ロケットの天井からの時は、仲間みんなとのやりとり、という思いで演じています。
――ロケットを修理する第7話で、AIは最初はひかるの存在を非合理的と捉えていたのが、考えを改めるという流れでした。
伊藤 ひかるちゃん始め、プリキュアメンバーに愛情を感じすぎないように気をつけました（笑）。かわいくて頑張ってる子たちはすぐに好きになっちゃうんで、伊藤美紀の個人的感情が入らないようにと。
――第29話、30話の惑星サマーンのマザーAIも演じていましたが、マザーのほうはより抑揚のない平板な口調でした。ララのロケットのAIのほうが「感情」を獲得しているようなニュアンスでしょうか？
伊藤 そうですね、宮元さんとも相談しましたが、マザーとAIに少し違いを出したいと思いました。同じコンピュータではありますが、いつもプリキュアのそばにいるAIは、マザーとは何か違っていてもいいのではないかということで。
――第29話で、マザーと同期すると初期化されてしまうため、データの同期をためらう描写が伏線的で、「自我」を感じさせるところでしたが。
伊藤 はい、もちろんそこは意識しました。今までのAIの存在価値がどうなってしまうのか？　ララちゃんやプリキュアとの今までの交流がゼロになってしまうのか？　かなり寂しい気持ちになりました。
――第30話は、シャットダウンしてしまう時の「キラやば～っ☆な日々でした」、再起動した時の「IDとは堅苦しいですね」といったセリフにぐっときました。
伊藤 そこにぐっときていただけたなら、大成功です!!　思いを汲んでいただき、ありがとうございます。
――AIはララのことは「ララ様」と呼んでいます。どことなく乳母のような雰囲気も感じるのですが。
伊藤 うわっ。乳母のような雰囲気、出ちゃってましたかー。漏れちゃってましたかー。正直言うと、そんな気持ちがあることを出さないように、でもいつでもそばにいて、守っていますよ、という気持ちで演じています。
――この第30話のアフレコに備え、伊藤さんは断酒して臨んだそうで。また、映画の収録日には、AIになりきったLINEを小原好美さん（ララ役）に送ったそうですね。
伊藤 毎晩浴びるほど呑んでるわけではありませんが（笑）、気持ちも体調も万全の態勢で臨みたかったんです。劇場版の収録は、私は1日目で終了してしまい、2日目の収録はララ様のそばにいられなかったので、「せめて気持ちはいつもララ様と一緒にいますよ！」という想いで当日の朝、メッセージを送らせていただきました。ララちゃん役の小原さんは事務所の後輩でもあり、とてもかわいい存在なので（もちろん他のプリキュアもみんなかわいい♥です）、AIとしても伊藤としても、作品を一緒に作り上げていこうという気持ちです。

――アフレコ現場では、伊藤さんはどなたの近くに座っていますか？　『プリキュア』ではチームごとに座席位置が固定化しやすいそうですが、伊藤さんはプリキュア陣と一緒なのか、それとも少し離れた位置で見守っているのか。
伊藤 それは秘密です。さぁ、想像してごらん～（笑）。
――『スタプリ』の「ここが熱い、ここが素敵」と思うところをお聞かせください。
伊藤 とにかく、みんな一生懸命なところ。「良い作品を作るために」という気持ちがしっかり伝わってきて、周りの大人たちも「みんなをサポートしなければ！」という気持ちにさせられます。とても良い雰囲気の現場だと思います。
――最後にファンの方へメッセージを。
伊藤 『スタプリ』を観てくださっている皆さま（大人も子どもも、年齢性別問わず）、「自分もプリキュアになりたい!!」と思っていただけるような作品になればと思っています。みんなで一緒に、イマジネーションの世界を楽しみましょう。残り話数もだいぶ少なくなってきましたが、私らしいAIを最後まで演じたいと思っていますので、応援よろしくお願いいたします。

まどかはライバル的な存在がいてくれることでようやく燃える

小松未可子

こまつ・みかこ　11月11日生まれ／ヒラタオフィス所属／最近の出演作は『マギアレコード 魔法少女まどか☆マギカ外伝』（十咎ももこ）、『映像研には手を出すな！』（さかき・ソワンデ）ほか

ピアノコンクールでのまどか（第24話）

まどかの弓道のライバル・那須ゆみか（第16話）

ユニは負の感情がモチベーションだった

—えれなの当番回といえば、第34話のサボロー回ですね。

安野　とてもいい話でした。サボローが喋らないっていうのが、また。

—アフレコでは、サボローとのやりとりは「一人芝居」みたいな感じだったのですか？

安野　サボローの画だけがあって、それに合わせて会話していく形でした。これまでいろいろな星に行って、いろいろな人とコミュニケーションしてきましたが、言葉が通じない異星人は初めてだったので、一番難しい相手だったかもしれません。えれながすごく大きなジェスチャーを交えてサボローと意思疎通しようとする姿が、ちょっと戦場カメラマンみたいにも見えて。えれなはお花屋さんの娘ですけど、そこがサボローの価値観とかち合って傷つけちゃって。そこはえれなとしても「どうしよう！」って悩んだところだったと思います。でも戦いのシーンで、ノットレイ化したサボローから一撃を食らうかどうかのところで、ソレイユが手で「ラブ」のジェスチャー!!

成瀬　ねー!!

安野　あんな攻撃に対して「手でハート」で返そうなんて、すごく勇気があるなと思ったし、相手を信じる心を持ち続けられたのが素敵だなと感じました。

—サボローに伝わるかどうか分からないのに、迷いはなかったですね。

安野　もうそこは「絶対届く！」って。

上坂　「ラブ！」ってね。

安野　あのソレイユは、本当にカッコ良かったです。

小原　これまでえれなさんはずっと完璧なイメージがあったから、こんなふうに悩むんだなって思った回でもありました。

安野　そうなんです。でも、お母さんの励まし方が良かったですよね。「珍しいわね、えれながため息なんて」って話を聞いてくれていて。母と娘って感じがして、とても素敵なシーンでした。

小原　劇場版のユーマも、いわば言葉が通じないキャラクターですよね。「えれなさんは、〝未知との遭遇〟で、こういうふうに相手と向き合うんだなあ」と、とても感動しました。

—第35話は、ひかるが生徒会長に立候補する回でした。これが、まどかを意識しすぎて自分を見失ってしまうという……。

成瀬　意外でしたよね。そもそも私は、こういう回が来るとは思っていなかったので、意表を突かれました。でもひかるの立場だったら、まどかさんから託されたなら「やってみよう！」となると思うんです。また、オチがすごく、ひかるらしいなって。なんと桜子さんを応援しちゃう！

小松　おかげで、桜子さんの評価が一気に覆るという！

成瀬　自分が競っている相手のことは、たとえ評価していても、あんなふうに誉めないと思うんです。でもひかるは、自分が好きなものは好きって言うし、素直に気持ちに従う子で、「競ってる相手だけど、いい人はいい人なんだ！」ってなる。私は自身も、わりとそういうタイプかもしれないなって、ちょっと思ってます。

上坂　桜子は、まどかを本当に尊敬してたんですね。

小松　しかも、学校や生徒のことを思っての行為をし続けていて。桜子メモもそうだけど、生徒会長としてあるべき姿だなって思いました！

安野　なんだか泣けたねぇ！

上坂　普段から普通にやっていればいいのに……。

他4人　（口々に）あはは！　そう、いい人なのに！（笑）

上坂　なにしろ金星キャラが……。

小松　そう、金星ポーズとかも強烈すぎて（笑）。でも、そこが桜子さんのいいところなんでしょうね。

—アン警部補が登場する第36話は、大義はあっても盗みという行為はよくないのではと、あらためて問われた回でした。

上坂　ユニが怪盗ブルーキャットを始めたのは、アイワーンへの憎しみという負の感情に突き動かされたからなんですね。ノットレイダーに潜入もしたし、宇宙アイドルマオとしての活動もそのためで。つまり、モチベーションは基本的にネガティブなところだったんです。そんな自分とあらためて向きあって、第38話でのアイワーンとの和解につながっていくんですけど。ただ第36話では、アン警部補とも不思議な絆が生まれました。「ブルーキャットは本官を助けてくれたであります！　だから今だけは助けるであります！」って。人は何事にも、理由のない行動はないということが語られた回でもありました。

安野　ユニはアン警部補から、罪の償いとしてボランティア活動に誘われてたね。

小松　「まずは10年ほど本官と一緒にボランティアするのは」って。

上坂　「あなたもやるんだ？」みたいな（笑）。

小松　寄り添ってくれてる（笑）。

成瀬　そこがイイ！

上坂　でもそこで「バイバイにゃん！」って去ってしまうのがユニらしくて。惑星レインボーの復活はまだ全然目処が立っていないですしね。ユニは怪盗をやりたくてやっているわけじゃないし、バケニャーンにもならざるをえなかったんですけど……ちょっと複雑な気持ちになりますね。この回の流れとしては一件落着したようですが、実はユニの心には葛藤が残ったままで。でも「みんなを悲しませることはしない」って、絆が一歩進展した感じはしますね。それとAパートのユニは、久々のイヤなヤツ感が（笑）。初期のツンケンしていた頃を思い出しました。あと、ドン・フワフワさんがかわいかった。

他4人　あ〜！　かわいかったぁ！

上坂　それからレインボーの指輪の演出もとても良かったです。つけた人の感情によって色が変わる設定で、ユニがつけると悲しみのブルーになるという。

安野　「ブルー」キャット！

上坂　そう。「君は悲しみの怪盗だったんだね！」って。ユニはそこが他の4人とは違うのかな。みんなはプラスのパワーを原動力にプリキュアになったけど、ユニは哀しい理由で……。でもちょっとずつでも、幸せの色に変わっていけるんだろうかと。

成瀬　きっと変わるよ！

二人だけで収録した第40話のハグのシーン

—テンジョウが英語教師としてやってくる第39話はどうでしたか？

小松　ジョー・テング先生！（笑）

成瀬　名前もすごすぎ！

安野　台本と画を見た時に、えれなはジョー・テング先生に自分にはない何かを感じて、憧れのような感情を抱いてるんだなって感じたんです。そんなえれなを見るのは私も初めてだったので、特にディレクションはされなかったんですけど、そういう気持ちを大切に演じてみようって。だからジョー・テング先生に懐いてました（笑）。

上坂　すっごく懐いてましたよね。

成瀬　そもそも、先生は普通にいいこと言うんですよ。もっと広い目で世界を見なさいとか。聞いてる人たちみんなが目をキラキラ輝かせるくらい。

小松　みんながハッとすることを言ってくれて。

上坂　「こんな小さな世界に縛られてちゃだめ」って。

安野　どこかカリスマ性があって、ララとひかるが「おお！」って感動してましたもんね（笑）。

小松　「なんてスケールが大きい人だ！」って。

安野　そもそもテンジョウは、えれなを憂鬱にさせようとして、笑顔になれなくなった経験はないのかと訊いてきたんです。実はえれなも国の違いで悩んだことがあって、でもそれは過ぎ去ったものとして、前向きに生きてきたんだと思うんです。ただ、敬愛するジョー・テング先生に心をさらけ出すよう言われ、おかげで「笑顔を大切にしたい」と思う自分自身を見つめ直せたんです。えれなだって悩むことはあるけど、そこから立ち上がることができる。転んでももう一回立ち上がろうとする、強い女の子なんだなって。このエピソードを通してそんなふうに思いました。

—第40話は、ついにララが宇宙人であることとやみんながプリキュアであることがバレる話でした。

成瀬　第40話ではひかるが思わず、ララに背中からギュッとしちゃうシーンがあって。ずっと仲良しだったけど、こんなの初めてだなと思って、ちょっとドキドキしながら演じました。感情が昂ぶってのことは

ひかる＆桜子の生徒会長選のポスター（第35話）

ユニの指輪も幸せの色に変わっていけるんだろうか

上坂すみれ

うえさか・すみれ　12月19日生まれ／スペースクラフト・エンタテインメント所属／最近の出演作は『異世界かるてっと』（シャルティア）、『キャロル&チューズデイ』（アンジェラ）ほか

惑星レインボーでのユニ（第20話）

アン警部補もプリキュアになれそう!?

成瀬　アン警部補はなんだかんだ、ユニとは仲よさそうな感じがしますよね。
上坂　そうなんです。どことなく、二人の間の暗黙のお約束がありつつの追いかけっこなのかも。観ていて楽しいですね。
小原　アン警部補の映画での再登場は、子どもたちも嬉しいんじゃないかな。本当にまっすぐでいい人で、友達になりたいなって思える人だなと感じました。
安野　知念里奈さん（アン警部補役）とは一緒にアフレコしたの？
上坂　映画は別々だったんですけど、TVのほうは、私だけ一緒に収録しました。だから、ユニとしてはアン警部補への思い入れはありますね。
小原　でもアン警部補としては複雑ですよね。「捕まえる！」って意気込んだ相手が、プリキュアだったわけで。
他４人　ああ、確かに！
小松　性格的に、ある意味プリキュアに通じるところもあるし。星空警察に入らなかったら、もしかしたらプリキュアになってたかもしれない？
安野　「フワを守るであります！」って？
小松　そう思うと、なんだか応援したくなるんです。ユニにとってはライバルキャラだと思うけど。
上坂　（クールに）ま、たいしたことない相手なので。
一同　（大爆笑）
小松　映画でも軽くあしらってたよね（笑）。
安野　「あなた、本当に私のファンね」って。
上坂　「しつこいニャン」って言いながらね。まあ楽勝です（笑）。
小原　これは、ユニ視点じゃないと出ない発言ですね！
安野　アン警部補とユニとの追いかけっこは、ずっと見ていたい感じですね。ユニとしても、追いかけられるのは満更でもない？
小松　ね！
上坂　こんなにブルーキャットをしつこく追い回してくる人は、それまでいなかったんだと思います（笑）。
安野　誰も捕まえられない感じだったもんね。
上坂　「なのに捕まえようとするなんて、あなたも変わってるわね」みたいな。それと一人称が「本官」なのもかわいいんです。
小松　ずっと星空警察に憧れてきたんだろうなあ！

いえ、私たちここまで距離感が近くなってたんだって。女の子同士の友情に、感動とときめきがありました。
小松　ハロウィン回（第37話）で、ララはクラスメイトとかなり打ち解けていたので、そこからの流れで、みんなから疑惑の目を向けられて動揺してしまうシーンが印象的です。「ララって宇宙人なの？」と態度が一変してしまって、ララもショックを受けるし。だからといって、ララも自分を地球人にしてほしいわけではなくて。友達とどう付き合っていくのかという、心の問題ですよね。
小原　ララの正体がみんなに知られる話は、いつかくるだろうと思っていました。今まで地球人の友達がこんなにたくさんできたという喜びがある中で、彼女にとって、衝撃的な一日だったのかなって。演じている時は、私自身も独りぼっちになった感覚があって、正直しんどかったんです。
成瀬　ひかるもつらかった……。
小原　ララが最後まで「もういい！」ってならなかったのは、独りぼっちにさせまいとする、ひかるの気持ちが伝わってきたからこそだと思います。そしてララのみんなを守りたい気持ちを受けて、ひかるたちも覚悟を決めてみんなの前でプリキュアになりましたよね。それが本当に嬉しくて。積み上げてきた絆が、ここでもまた見えました。
安野　駆けつけた3人も、すごく仲間感があったよね。「そういうことね！」って。
上坂　一瞬で、ツーカーで理解してたよね。
小原　この回は、より良いものを録ろうというスタッフさんの熱意もすごくて。ひかるに背中からハグされるシーンは、何度かリテイクもあったんですけど、実はブースの中で成瀬さんから実際にされたんですよ！
安野　えっ、そうなの!?
小原　一度演じた後、「他の人は待っていてください」って、二人だけ残ってそのシーンのセリフを読んでたら、急に後ろから「わぁ」って感じで。
成瀬　（小原さんの後ろにスッと立って優しくハグ）こうやったの。
小原　なるほど、こういう感じかーって。
安野　最後のテイク、すごく良かったよね。そうか実践してたんだ！
成瀬　だから、より気持ちが乗っているかなって思います。
小原　普通は「もう一回お願いします」と言われると少しへこむんですけど、ハグをされた後だったから「はい、全然できますよッ！」って（一同・笑）。……自分で演じてはいるものの、ララを保護者のように見守ってもいるので、ララがまた大人への一歩を進めて良かったねって思えました！

――いよいよシリーズも終盤4クール目に突入しました。

成瀬　アフレコ現場も楽しいし、物語も素敵なので、終わりに近づいているのが寂しいです。私には『プリキュア』の現場は非日常で、普段の仕事とはまったく違うスペシャルな場所なんです。この夢みたいな世界がもうすぐ終わっちゃうのかと思うと寂しくて……。みんな、これからも仲良くしてくださぁ～い！
上坂　そっか、この現場は異世界だったんだ。
成瀬　今でも、夢見てるみたいなの……。
安野　でも、えいちゃんがプリキュアなのは現実だよ！
小松　その意味では、私たちの日常にえいちゃんが来てくれた感じだね。
上坂　「異世界から来てくれて、ありがとう」な感じ？
成瀬　異世界召喚されてた！（笑）
小原　でも本当に、成瀬さんがここに来てくれてなかったら、私たちが出会うことはなかったと思うんです。
成瀬　（感激して）そうなんです！
小松・安野・上坂　（しみじみ）うんうん！
成瀬　みんなとの素敵な出会いと、そこで生まれた愛で作られている作品です！　観てくださっている『プリキュア』ファンの皆さんとも、これからもずっと仲良くしたいです。どうかよろしくお願いします！

撮影＝大山雅夫

宇宙妖精対談

星の力 みんなの力

フワ役 木野日菜
プルンス役 吉野裕行

宇宙の未来を託された妖精フワは、かわいく元気に成長中。フワを守るプルンスも一緒に、ひかるたちと宇宙を駆け巡る！

5人の合体技はまさかのフワ中心でびっくり

—フワ役とプルンス役はオーディションだったのですか？

木野 私はオーディションです。ひかる、ララ、フワの3キャラクターを受けました。気合いが入りすぎて、全身プルプル震えながらやりましたが（笑）、フワ役に決まったと連絡をいただいて、ホッとしたし嬉しかったです。1年間一つのキャラクターを演じる機会はそうないと思うので、私も成長しないといけないなぁと思いました。

吉野 プルンスもオーディションです。僕が受けたのはプルンスのテープオーディションだけでした。

—最初から宇宙妖精と聞いていたのですか？

吉野 どうだったかなぁ。サポート役だとは言われていた気はします。

木野 私は知らなかったです。オーディションの会場で初めてデザインを見たんですけど、女の子らしさがあったので、男の子じゃない高い声でいこうって決めました。やはり姿を見たら演じやすくなりましたね。赤ちゃんみたいなかわいい見た目で、大好きです！

—フワがワープする時の「フワッ～！」は、一段と高い声ですよね。

木野 あの高い声を長く続けるのは大変です。これほど長く伸ばし続けるとは思わなくて、第1話の収録の時にいざやってみたら、全然声が続かなくて。体の使い方から考え直さなきゃだめだ！　って思いました。今でも頑張って絞り出している感じです。

吉野 プルンスの第一印象は、まぁクラゲですよね（笑）。こういうマスコットキャラは、女性の方かもっとベテランの方がやるのがパターンだと思うので、僕でいいのか？　と思いつつやりました。

—オーディションの段階から、プルンスの軽めな雰囲気も意識していたのですか？

吉野 オーディションのセリフで、ちょっとメリハリをつけられるものがあったので、そこでキャラクターのベースになる部分と、オッサンぽい部分とを出してみました（笑）。最初は、こういう見た目だからかわいくやったほうがいいのかなと思ったんですが、「オッサンの妖精だから」みたいなことをマネージャーから聞きまして（一同・笑）。だから、必要以上にかわいい感じにはしませんでした。設定としても、若い男の子じゃなくて、いわば大人のお付きの人ですから。あとは説明文を読んで、自分なりに「こんな感じかな？」と。

—この他、演じる上で特に工夫していることはありますか？

木野 フワが小さかった頃は、本当に生まれたてホヤホヤみたいな状態だったので、無邪気さというか、何も分からない赤ちゃんのイメージでやりました。大きくなってからは結構喋るようになってきたので、2～3歳の子くらいのイメージです。ちょうど、いとこの子どもがそれくらいの年齢なんです。今のフワは「元気な子ども」って感じですよね。

—見た目がガラッと変わりましたよね。

木野 本当にビックリしました！　手足がこんなに伸びるとは！

—吉野さんは、プルンスなりの自然体という感じですか？

吉野 とはいえ、一応キャラは作ります。プルンスは基本的に小さいサイズで、地球人じゃないので、ちょっと特徴的な声にしたほうがいいだろうなって。それで僕の地声よりは高い声を使っていますけど、プリキュアを応援していると急にオッサンみたいな声になったり（笑）。やっていくうちに、プルンスの声の出し方は慣れていきましたね。

—プルンスは結構ノットレイ相手に戦いますよね。

吉野 あ、そう見えてます？　僕としてはサポート程度と思っていたんですが、確かに身体の形状が自在に変わるから、何かと便利に使われ気味ですね。身体が膨れてワーッと突撃して、その場を切り抜けたりもしています。ひょっとしたら、ノットレイがとんでもなく弱いだけかもしれないけど（一同・笑）。ただ、戦闘に関して言えば、今はよっぽどフワのほうが……。だってプリキュアと一緒に、しかも中心になって大技（プリキュア・スタートゥインクル・イマジネーション）をドーン！

木野 ですよね。プリキュアと掛け合いながらバーン！　まさかこんなふうに合体技に関わらせてもらえるとは思わず、初めて収録した時は本当に驚きました。

—第32話の未来予想図では、だいぶ低い声で「フワ～」と言っていましたね。

木野 「木野さんが一番低く出せる、フワっぽさのある声で」と言われました（笑）。なので、大人のウマを想像しながら、最大限に声を低くしました。結果的にフワ要素は飛んでいっちゃいましたけど（笑）。

プルンスのマオ推しはこれからも変わらず？

—第23話はフワが大量分裂しましたが、どうでしたか？

木野 またたびクッキー（マタークッキー）、すごいです（笑）。商店街の橋の上を大量のフワが「フワ～！」って飛んでいくところは、ほかの出演者の皆さんも一緒にやったんですよ。皆さん「やりたいやりたい！」って言ってくださって、とても光栄でした。貴重な経験でした。

吉野 重ね部分も、結構別で録って

きの・ひな／2月12日生まれ／埼玉県出身／アミュレート所属／最近の出演作は『アフリカのサラリーマン』（殺傷ハムスター）、『彼方のアストラ』（フニシア・ラファエリ）ほか

ひかるの温かい「ダメでしょ」にキュンとしました

フワ

綿毛のようなまん丸い姿から、手足が伸びてユニコーンのような姿に成長。言葉もいっぱい喋るようになって、少々おしゃまさんになった

成長前のフワ

プルンスはいいオジサンなんですよ、本当に！

たよね？

木野　はい。私だけで3回くらい同じセリフを言って、音を重ねました。フワって実はプルンスみたいなコミカルなシーンが意外となくて……なんというか。

吉野　プルンスはバラエティ班だからね。でもフワは、普段は観ている子どもたち目線で純粋なリアクションをするキャラクターだから、第23話は不思議でコミカルなところがクローズアップされた珍しい回で。

木野　そう、それが言いたかったんです！　ありがとうございます！

吉野　いえいえ、どういたしまして（笑）。

――プルンスは、マオの大ファンなのも面白ポイントですよね。マオ＝ブルーキャットと知り幻滅、でもマオの姿になるとデレデレ、みたいな。

吉野　自分の推しアイドルがお尋ね者だったら、まあショックですよね。プルンスは表情がくるくる変わりますが、そこは感情の流れとしてはつながるよう、気をつけています。やっぱりプルンスは、純粋にマオが好きなんでしょうね。第15話でも描かれた通り、心が折れそうだった時にマオの歌が勇気づけてくれて。そこはパブロフの犬のように、実際のマオを目の前にしちゃうと切り替わる感じで。絵面とセリフもそうなっているので、それに合う感じでオッサンの「うわぁ～！」という感激の声を乗せています。

――ところが第26話～28話では、ゲストキャラのヤンヤンに惹かれていましたね。

吉野　突然でしたよね。マオ推しはどうなったんだ？（一同・笑）話の作りとして、ヤンヤンを立たせるという意図もあったんでしょうね。だから僕としては「ヤンヤンに惹かれるようになるにはどういう気持ちで演じたらいいのか」と考えまして……。おそらくプルンスは、ヤンヤンの行動に不意を突かれて、思わずときめいたんでしょうね。と解釈しました。

――第28話で、ヤンヤンを守るために体を張るのも、男を見せた感じがしました。

吉野　それで言えば第8話のケンネル星でも、プルンスは最初、プリンセススターカラーペンを渡してほしいと強く出たけど、実はケンネル星人にとっても必要なもので、「お願い！　聖なる骨をとらないで！」と言われ……。そこでプルンスは意を決して、土下座してお願いし、さらに毛生え薬でフサフサになっちゃう。えれなさんが率先して友好的に行動したので、プルンスもそこに寄り添った感じでしたよね。そういうところで男を見せるというか、マジメというか。いいオジサンなんですよ、本当に！（笑）

――ヤンヤンの時はそこがちゃんと報われて、ほっペチューしてもらっていました。

吉野　プルンスとヤンヤンという、いかにも宇宙人なキャラだからこそのシーンですよね。これまでのプルンスは、あんまり報われたこともなかったでしょうから、よかったですよね（一同・笑）。

歌って変身するプリキュア 映画でも歌が感動的

――第32話は、成長したフワが「プリキュアを守るフワ！」と果敢にガルオウガの前に立ちはだかるのが感動的でした。

木野　プリキュアがピンチになって、フワも怖いながらも、一生懸命に前に立って「わ～！」って体を張ったんですね。フワがそんなふうに「プリキュアを守る！」と思えたのは、これまでずっとひかるたちに大切に育てて守ってもらっていて、その戦う姿を見ていたからだと思います。感動しました。

――続く第33話では、逆にフワは年相応なワガママ感で、ひかるを困らせてしまいました。

木野　ひかると言い合いになるのは初めてだったので、台本を読んだ時に「どういうふうになるんだろう？」と思ったんです。そしたら、成瀬（瑛美）さんは私が想像していたひかるの怒り方とは違ってて……。全然きつい感じじゃなくて、本当に小さい子に言いきかせるような、成瀬さんならではの柔らかさや温かみのある「ダメでしょ」で。聴いててキュンとしました♪

――第37話のハロウィン回では、仮装と称して、二人で変身していましたね。

吉野　プルンスは人間風になってましたね。アフレコ時点ではまだラフな絵だったので、まさか脚をぐるぐる束ねた感じになっているとは（笑）。

――面白いくらいマッチョになっていました。

吉野　ここまでマッチョな雰囲気だと思わなかったから、「妙に爽やかで相手との距離感を読めない感じ」のキャラクターにして、「プルンスでープルンスー!!」って声を張り上げてやりました。

――現在公開中の秋映画でのプルンスとフワの見どころは？

木野　中盤の戦闘シーンで、フワはみんなを守りたい一心で、宇宙ハンターのバーンに身を投げ出してぶつかっていくんです。本当に怖い敵で、しかもガシッとつかまれて投げられちゃうんですけど、それでも「プリキュアは負けないフワ！　頑張れプリキュア！」って一生懸命で、信じる力があふれていて。このシーンは、自分で観ても泣けちゃいます。

吉野　僕のほうは、ひかるたちとは別行動的に、追いかけてくるアンさんからユニと一緒に逃げ続けていた印象です（笑）。映画全体としては、ストーリーと音楽を前面に出していて、クライマックスではスターたちの歌をちゃんとお客さんに聴かせる作りになっていますね。

木野　TV本編でも毎回歌って変身するので、映画でも大事な場面で歌うのはいいなぁって思いました。

吉野　劇中歌の作詞は、僕にとっての「しょこたん」こと大森祥子さんで。大森さんは僕の楽曲の作詞もしてくださっているんですが、結構飛ばした歌詞を書かれる方なので、失礼ながら「こういうしっとりした歌詞も書けるんだ！」と感心しました（笑）。

――お二人にとって、『スタプリ』の魅力はどの辺りに感じますか？

木野　やっぱり多様性ですかね。宇宙人も地球人も、いろいろな人がいて。たくさんの旅をしてたくさんの人に出会って……映画のユーマもその一人ですけど。姿形は違ってもつながることができるって素敵だなと思います。私もコンプレックスだらけの人間ですけど、この作品を通して「全然気にしなくていいんだ！」って思えるようになりました。コンプレックスは個性でもあるのだからと。観た人も、きっとそう感じられる素敵な作品です。

吉野　このプリキュアは、歌で変身したり、秋映画も歌が重要な鍵になっていたりと、歌が印象的ですよね。あとは、ひかるたちがよく言っている、多様性やイマジネーション。『プリキュア』って、とてもまっとうな子ども向けアニメだなと思います。ものすごい種類の商品が出ていて、本編の外側にも、素敵なところがたくさんあるなぁと感じますし。そういうのを含めて、子どもたちのための作品なんだなって実感しています。

プルンス
12星座のプリンセスも全員復活して一安心。でもフワを保護する役目は変わらず。今でもマオの姿を見ると、即座に目がハートに

プルルン星でのクラゲ姿（第27話）

毛むくじゃらプルンス（第8話）

観星町でのハロウィン仮装（第37話）

オークション会場でドレスアップ（第15話）

よしの・ひろゆき／2月6日生まれ／千葉県出身／シグマ・セブン所属／最近の出演作は『あひるの空』（児島幸成）、『ポチっと発明 ピカちんキット』（ガッくん）ほか

Q お気に入りの星座フワは？

かに座　ふたご座　おうし座　おひつじ座
さそり座　てんびん座　おとめ座　しし座
うお座　みずがめ座　やぎ座　いて座

「私はふたご座が好きです。顔が3つあるのがかわいい！『星の輝き、戻るフワ～』も3回言う（3回録って重ねる）のかなと思ったら、スタッフさんに『1回で大丈夫です』と言われて、ちょっとだけ残念（笑）」（木野）

「この中だと、普通にかわいいのは、やぎ座ですよね。動物系の姿は、どれも自然でいいなって思います」（吉野）

空見遼太郎役・イエティ役
多田野曜平

みんなの良き理解者として

──『プリキュア』シリーズへの出演が決まった時はどう思いましたか？
多田野　一番最初のシリーズから娘と観ていたので、出演が決まって祝杯を挙げました。
──遼太郎の絵を最初に見た時の印象は？
多田野　髪の毛の薄い役は慣れてます（笑）。
──アフレコで最初に演じた際に、宮元監督からお願いされたことは？
多田野　優しさ、ですかね。
──全体的に演じる上で注意していることをお聞かせください。
多田野　喜劇専門の劇団育ちなもんで、そうならないように注意してます。
──シリーズ初期は、遼太郎だけがひかるの親しい友人のような関係だと匂わせていましたが、そこは多田野さんも意識していたのでしょうか？
多田野　そうですね……それしかなかったですね。ひかるやララの良き理解者だと思ってもらえるように努めました。
──初期話数の段階では、「遼太郎も実は星空界の人間なのでは？」と深読みしていたファンも多かったようですが、多田野さんも、周りの方からそのように言われませんでしたか？
多田野　言われた言われた！　だから私もその気になってました（笑）。
──ララやフワ、プルンスたちが宇宙人と知っても、大きく驚くこともなく「ありのままを受け入れる」のが遼太郎のスタンスのようですが。
多田野　イイですよねぇ～！　来る者は拒まず。遼太郎は常にそうです！
──第22話、遼太郎はひかるの祖父・春吉と幼なじみで「春ちゃん」「遼ちゃん」の間柄だと判明しました。二人並んでの会話シーンは、見た目のギャップ感も含め、いかがでしたか？
多田野　意識しすぎて、うまく演じられませんでしたね……。ツーショットはオンエアで観て笑いました！
──この他、遼太郎の人柄が出ていると感じたシーンは？
多田野　第6話の、ララとのプラネタリウムのシーンですかね。「これからどんな星座を作っていくのか、私は楽しみだよ」という……。
──イエティも演じられているそうですが、どういう流れで決まったのですか？
多田野　どうしてだかこっちが聞きたいです！

空見遼太郎
観星町の天文台に住む柔和な老人。幼い頃からのひかるの理解者で、ララの正体やフワ、プルンスの存在も早い段階から知っていた

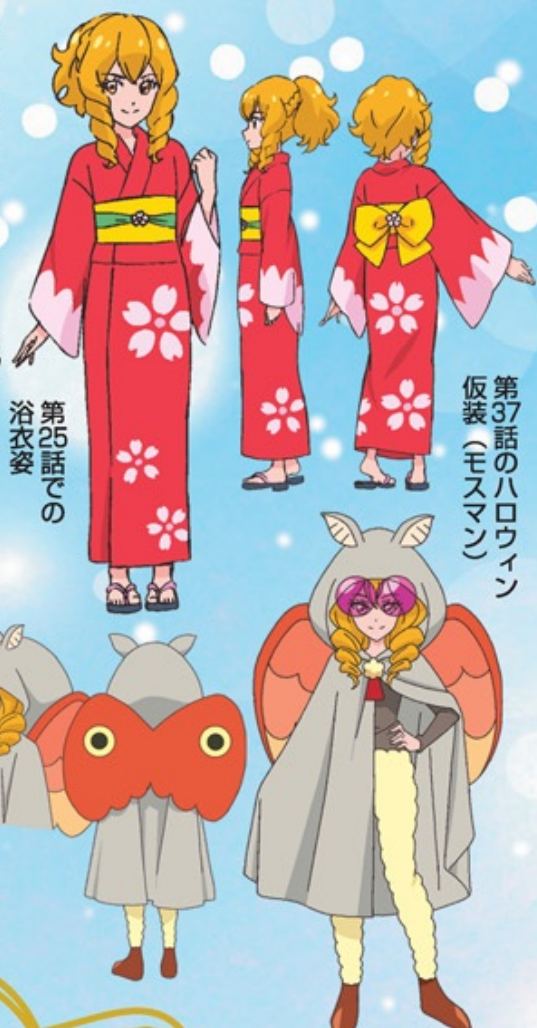
ひかるの愛犬・イエティ

でも、やってて一番楽しいし、自分らしく「ワンワン」吠えてます（笑）。ただ、老犬の表現は難しいです。
──第33話は、トゥインクルイマジネーションを探しに行きたくて仕方ないフワを、イエティが心配して追いかける展開でした。この回で印象に残っているシーンは？
多田野　後半、歪んだイマジネーションに飲み込まれたシーンで、鼻の部分が光って「音波」が出るのですが、テストでは「ワォーン パ オンパ オンパ」って言ったんですよ。却下されましたけどね（笑）。
──『スタプリ』の「ここが熱い、ここが素敵」と思うところをお聞かせください。
多田野　だんだんと、本役の遼太郎より、兼ね役のイエティの出番のほうが増えたところが素敵です！　そしてどちらも最近出ないことが熱い！　痛いほど熱いです!!
──最後にファンへのメッセージを。
多田野　これからも『スタプリ』を応援よろしくお願いします！　またお会いできますように!!

笑顔をつないで！ ひかるの仲間たち

姫ノ城桜子役
大地 葉

めでたく生徒会長に就任しました

──『プリキュア』シリーズへの出演が決まった時はどう思いましたか？
大地　『プリキュア』という歴史あるシリーズに、こうして名前のあるキャラクターとして関わらせていただけること、しかもこんなに刺激的で魅力満載の女の子を演じられるなんて本当に幸せだと思いました！　この職業に就いて『プリキュア』に出演することを一つの大きな目標にしている人ってたくさんいると思うので……かく言う私もそうだったので、お役をいただけたと連絡いただいた時は本当に嬉しかったです。
──桜子の絵を最初に見た時の印象は？
大地　金髪縦巻きロールに、高飛車な感じが伝わってくるキリリとした目元。彼女のように典型的な、昔ながらの“お嬢様”感あふれるキャラクターって、最近あまり見かけなくなった気がするので……ちょっと新鮮でした（笑）。
──アフレコで最初に演じた際に、宮元監督からお願いされたことは？
大地　大きく「こうしてほしいです！」という具体的なご指示は特になく、「楽しく盛り上げてください！」とおっしゃっていただいたので、自由に伸びやかに演じております。実は「監督たちが、桜子はすごく面白いキャラクターになったよね……と話していたよ！」とミルキー役の小原好美ちゃんから教えてもらったことがありまして……役者冥利に尽きるとはまさにこのことで、とても嬉しかったです。
──全体的に演じる上で注意していることをお聞かせください。
大地　とにかく強烈なインパクトを視聴者の皆さんに植え付けられるように、誰よりも大きな声で前へ、前へ……グイグイと！　という意識で演じております。この子が出てくるとすごくにぎやかで楽しくなるなあ……と思ってもらえるキャラクターにできていたら嬉しいです。あと、完璧には決まらない感……を大切にしています（笑）。高貴で誰かから憧れられるような完璧なお嬢様になってしまうと、それは桜子じゃないんです。どこか庶民感というか、親しみやすさを感じる部分を残しておくことは、常に念頭においているポイントです。
──桜子に共感できる部分や、見習いたいと思う部分は？
大地　自分に自信がなかったら、こんなに堂々と振る舞えないと思うんです。私はいつまで経っても自分に自信が持てないタイプの人間なので、彼女のような心持ちでいられたらいいなあ……といつも思いながら演じています。そして、彼女がこれだけ絶対的な自信を持てるのは、人に見えないところでたゆまぬ努力をしているから。本当に素敵な女の子ですよね……！
──桜子のようなコメディリリーフを演じる楽しさはどんなところにありますか？
大地　何をやってもある意味、正解になるところですね。「キャラが崩れない範囲で面白ければOK！」という基準で判断しているので、これくらいはどうだ！　とギリギリのところを攻めて、少しずつキャラクター性を膨らませていく作業がすごく楽しいです。演じているうちにどんどん進化していくという感覚は、1年という長期間に渡ってキャラクターに向き合える作品ならではだと思います。
──シリーズ前半の桜子は、生徒会長のまどかに憧れているのかライバル視しているのか微妙に曖昧でしたが。
大地　序盤のほうは、憧れとライバル心は3:7くらいの匙加減で演じました。基本的には対抗心バチバチのように見えますが、憧れの気持ちを持っていなかったら、これほど詳しくまどかさんのプロフィールをすらすらと述べることはできないと思いますからね！（笑）100%相手を敵視することはできない、絶妙なアンバランスさがかわいいですよね。
──「観星中の金星」という桜子のキャッチフレーズや、このフレーズが初めて出てきた第16話はいかがでしたか？
大地　「観星中の金星、姫ノ城桜子がライジング！」と高らかに宣言。夢中になって妄想している間に、気付いたら教室から人がいなくなっている……という。そもそも彼女、誰かから「観星中の金星」と呼ばれているシーンはまったく出てこないので……これはもしや自称なのでしょうか？（笑）このシーンは「思いっきりやってやるぞ！」と意気込んでアフレコに臨んだので、オンエアを確認して、気合いの入りっぷりに自分でも笑ってしまいましたし、絵がついたら衝撃が増していて最高でした。金星の顔にもなりましたね。また、まどかさんの弓道大会を観戦している時に、よく分かる解説をちょくちょく挟んでくれるシーンもお気に入りです。いつの間に応援席に!?　そして最後の最後で「敵ながら天晴れでしたわ」なんて言っちゃうところがすごく愛おしいんですよね。もう……桜子、やっぱりいい子じゃん！（笑）
──第35話の生徒会長選挙の話は、桜子のお当番回でしたね。
大地　いつも監督を始めとするスタッフの方々から、一言ご挨拶や補足の説明があってからアフレコが始まる現場なのですが、そのタイミングで「桜子にもスポットを当てたいと思って出来上がったお話なんです」とご説明いただいて、震えるほど嬉しかったです……！　印象的なシーンは、やっぱりラストの笑顔でしょうか。すべての場面に思い入れのあるお話です。
──第35話は、実は真摯で地に足がついている、桜子の「素顔」の部分が語られました。
大地　当初は作品をにぎやかにするための要員だったはずの桜子が、作品内で一人の人間としてしっかりと生を受けた感覚がしました。こんなにも彼女の人間性について触れていただけるお話を、丸ごと1話分作ってもらえるなんて夢にも思っていなかったので……。「このお話で桜子を好きになりました！」とファンの方から言っていただけて、とっても幸せでした！
──第40話では、ララが怪しい宇宙人かもと一度は疑い、避けてしまうものの、プリキュアに変身して戦うララたちをタツノリたちと応援しました。
大地　ララに対して疑いをかけてひかるを問い詰めるシーンでは、「決してひかるのことを責めるのではなく、彼女を本当に心配していることを前提に言葉をかけてほしい」という指示をいただき、ここでも桜子の心の成長を感じました。一時はどうなることかと思いましたが……このお話を乗り越えたことで、みんなとの絆が深まりましたよね！
──『スタプリ』の「ここが熱い、ここが素敵」と思うところをお聞かせください。
大地　決して「違い」をいとわないところですね。何かが他と違っていたり、飛び抜けていたり……あるいは劣っていたりすることって、コンプレックスにつながることが多いと思うのですが、『スタプリ』はすべてを受け入れて笑顔で認めてくれる、ひかるという存在がすごく大きいなあ……と思います。彼女のおかげで周囲の人たちもどんどん笑顔に変わっていくんです。こんな天真爛漫な優しい子と友達になりたいなあ！
──最後にファンへのメッセージを。
大地　『スタプリ』を応援してくださっている皆様、いつも本当にありがとうございます！　ついに桜子がめでたく生徒会長に就任することができました。でもそれは、彼女の見えない努力に気が付いてくれた人がいたから……なんですよね。演じている私もとても幸せで、優しい気持ちになれました。そんなハッピーにあふれた『スタプリ』を、最後まで応援してくださいませ！　おーっほほほ!!

観る人に考えてほしいという想い

カッパード役
細谷佳正

――カッパード役は、どのようにして決まりましたか？

細谷　オファーがあったので引き受けました。オーディションはなかったので、ボイスサンプルを聴いて、制作スタッフの方々が判断したのだと思います。

――カッパードの絵を最初に見た時の印象をお聞かせください。

細谷　キャラ絵は、色が入っていない状態のものを、アフレコの通し見の時に観ました。最初はこれといった印象はあまりなかったんですけど、色が入った状態を最初に見た時は、思ったより明るい色なんだなと思いました。

――アフレコで最初に演じた際に、宮元監督から特にお願いされたことはありますか？

細谷　『プリキュア』のアフレコは、アフレコ当日にVTRをみんなで観てからアフレコするんですね。普段、そのやり方でアフレコすることは、洋画のオーディションでのボイステストの短いシーンくらいしか経験がないし、4本のマイクのどれに入るか、みんなが一斉にやらなければいけないんです。どのマイクが空くのかにも神経を使うし、口パクを合わせなきゃいけないしで、個人的には「テストの意味はあまりないな、本番は修正していこう」と思っていたんですけど、テストが終わった後に、宮元監督に「君は焦ってる」とひたすらに言われた記憶があります。そりゃ（初めてだし）焦るよ、とは思いましたけど。この現場はそれが普通で、それでずっとやっているんだなと。……いろんなことをその時、理解しました（笑）。

――カッパードは、ナルシストなイケメンという面がありますが、セリフの口調なども意識されているのでしょうか？

細谷　特に何かを意識することはないです。セリフの口調はアドリブではなくて、台本に書かれてあることを忠実にやっています。絵に合わせて、自分の中で魅力的なキャラクターになるように毎回やっています。

――それ以外で演じる際に意識されていることがあれば、お教えください。

細谷　テストは遊んで。本番は、遊ぶと僕の場合必ず修正されるので、「たぶんこれが欲しいんだろうな」と思うものを出すようにしています。毎話数『プリキュア』は演出する人間が変わるので、「キャラクターをつかんだ」と思っても、すぐにその感覚は役に立たなくなります。なので毎回、直感とひらめきを、自分は大事にしているんだろうなと思います。

――第10話ではテンジョウやアイワーンと共同作戦、第11話では合体して怪物化する展開でした。普段は単独でプリキュアと戦う中で、協力してプリキュアを倒そうとする流れは、どのように感じましたか？

細谷　大変でした。3人でセリフのタイミングを合わせないといけなかったので。

――第10話、第11話と、かなり早い時期からカッパードは「ひかるたち（地球人）は恵まれている」と糾弾していましたが、細谷さんもその段階からノットレイダーたちが実は「虐げられた人々の集まり」という設定は知らされていたのでしょうか？

細谷　どの時点でその設定を伝えられていたかは覚えていないんですけど、前もって説明をされたと思います。

――そういった設定を知った時は、どういう印象を持たれましたか？

細谷　作り手側は「敵チーム」とノットレイダーを定義して、彼らの言葉に哀しみが宿らないようにこだわっているんだな、とアフレコしながら思いました。それは視聴者、主に子どもたちに対しての配慮なのかもしれないなと。分かりやすく、正義と悪の色分けはしないといけないんだなと思いました。でないと、子どもたちが「敵チーム」に同情した時にバランスが……とかいろいろ思いましたね。

――第37話のハロウィンの話で、観星町の人々からカッパの仮装と思われた上に、意外と受け入れられて戸惑うというシーンがありましたが。

細谷　今日はコメディーの日なんだな、と思いました。だから少し哀しく見えるように、抗いたいなと思っていたような気がします。

――またこの回で、カッパードの故郷の星とそこでの悲劇も語られたわけですが、どのように感じましたか？

細谷　キャラクターに対して深く何かを感じることはありませんでした。そこまでのアフレコで「何となくそれは分かっていた」からだと思います。僕は「なぜこういうシーンを作ったんだろう？」とか「このシーンで何を伝えたいのだろう？」とかを、この作品では考えています。僕はこのシーンを観て、「善悪の線引きは、印象としてハッキリ前に出しつつも、観る人に考えてほしい、という想いが作り手側にはあるんだな」と思いました。

――プリキュアの正体がクラスメイトに発覚する第40話は、クラスメイトのプリキュアへの応援にカッパードが驚くシーンがありましたが、演じてみての印象をお聞かせください。

細谷　変な言い方ですけど、「昭和」は「平成」を経て、「令和」になったな、というか。「違いから起こるイジメ」が起こっていた時代があったから、たぶんこのシーンはあるんだろうなと思っていました。最先端を自負するつもりはまったくないですけど、今の時代にそんなことをするのは、「時代に取り残されることを選ぶ」ということになるなと。なので、カッパードは「古い考え、悪しき風習の象徴」みたいに、このシーンでは視聴者には映るのだろうなと思っていました。

――第37話と第40話では「他の星の人間と分かり合えるかどうか？」について、ひかるとララ、カッパードの間で意見を戦わせる形になるのですが、演じていての印象をお聞かせください。

細谷　宇宙人と地球人でもいいですし、同じ地球人同士でも「国籍」や「見た目」の違いもそうですし、同じ国籍だとしても、それぞれの「考え方」が違って当たり前で、自分たちと違うから、仲間に入れないとか、攻撃するとかではなく、受け入れて、お互いが尊重し合えばいいと僕は思っています。なのでカッパードの声をアフレコしている時は、「何でこんな分かりきったことを言うんだろう？」と、とても恥ずかしくなります。

――2クール目からは、カッパードは歪んだイマジネーションを利用して毎回武器を変化させますが、細谷さんが特に記憶に残っているものがあれば、理由も含めてお聞かせください。

細谷　ザリガニのハサミみたいなヤツです。アフレコする時に、過去の話数と同じ絵が画面に貼り込まれていることがあって、カッパードのそのシーンは、ザリガニのハサミの絵であることが多いので、印象に残っています。

――『プリキュア』シリーズの大人の視聴者は敵側のファンも多いです。ノットレイダーあるいはカッパードのファンへ、メッセージをお願いします。

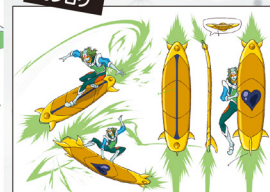
細谷　ノットレイダーの面々を、インターネットが爆発的に普及する前の日本人だと思って観てみると、面白いかもしれません。いつもご覧いただき、ありがとうございます。

闇のイマジネーション！ ノットレイダー★

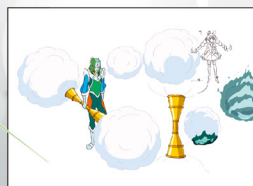
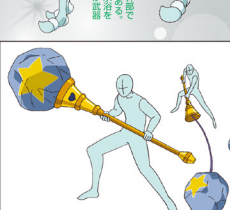
カッパード
最初にプリキュアと戦った幹部でナルシスト気味なところがある。水がきれいな星が故郷で、水浴を好む。ツイン刃のビーム剣が武器

3人合体ノットリガー。胸のハートの中にカッパード、テンジョウ、アイワーンが

変型武器カタログ

様々な人物のイマジネーションを使い、ブレードを変型させる！

第13話、タツノリのイマジネーションでサーフボード形態に。ボードの両端からビームが噴出

第23話、コピーフワによって綿飴形態に。右は、闇のオーラ色の火球バージョン

第26話、ヤンヤンによって高枝切りバサミのような槍に。ハサミ部分は可動式

第37話、口論していた観星町の住人によって、槍から隕石のような岩が飛び出す武器に変型

第35話、桜子によってトロフィー型に。槍の先から黒い桜吹雪が噴出する

第33話、イエティによって、剣とイエティの顔の形をした大きな盾が出現

ノットレイダーは会社としてはホワイトです

テンジョウ役
遠藤 綾

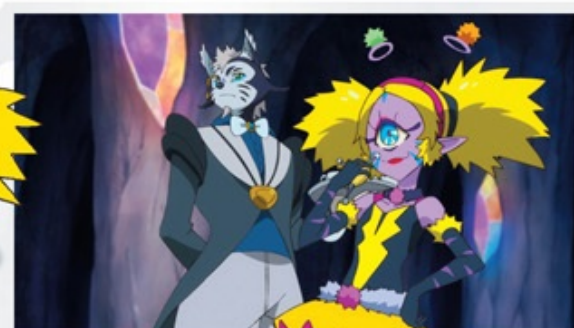
――『プリキュア』シリーズへの出演が決まった時はどう思いましたか？
遠藤　長く愛され続けている作品に声で参加できるのは、とても嬉しく思いました。プリキュアのグッズを身につけた子どもたちを街中で見つけると、頬が緩みます。
――テンジョウの絵を最初に見た時の印象は？
遠藤　一番最初に見たのは色付きではなかったので、「3人の敵の中ではお姉さんぽくて、結構肌が出てるんだな～」という印象でした。完成した絵を見て、なかなか衝撃的でした！
――アフレコで最初に演じた際に、宮元監督からお願いされたことは？
遠藤　「敵のほうにもいろいろな過去があります」ということだったので、明確には分かりませんでしたが、胸に何かを抱えるようにはしていました。
――テンジョウはいわゆる非情な美女といったキャラクターですが、どこか憎めない部分もチラホラ見えます。
遠藤　個人的には、「プリキュアがんばってー！」と応援しているお友達に嫌われるような敵になりたいですが、案外ノットレイたちに優しかったりと、いい上司な気がします。
――テンジョウの「ここがキュートだ」と感じる部分をお聞かせください。
遠藤　ノットレイの肩に乗ってるテンジョウのことを､密かに「肩乗りテンジョウさん」と思ってます。あと、神輿に乗って登場する手前を想像すると愛おしいです。「今日は神輿で登場したいな♥」とか言ってるんでしょうか（笑）。
――手下のノットレイがプリキュアに倒されると「私のかわいいコマちゃんたちを！」と怒ることも多いです。
遠藤　ちゃんと褒めるし、呼び捨てにしないので、会社としてはたぶんとてもホワイトです。
――第29話でアイワーンと共闘した時は、アイワーンを「裏切り者」とは捉えず、一緒に作戦を実行していました。ある種の仲間感も見える感じがしましたが。
遠藤　ただ、お互いの境遇もありますし、仲間意識というよりは、作戦を実行して成功させることが目的なのかな、と思います。テンジョウのことを「おばさん」と言ったので、そんなに好きではないと思います（笑）。
――第39話は、人間の英語教師ジョー・テングとなって、えれなのメンタルを揺さぶろうとする話でしたが。
遠藤　いつもギャグ寄りでもなく、色気を出す感じでもなく、真面目に戦っている印象のあるテンジョウなので、こういう登場の仕方は意外でしたが、とても楽しかったです。変装した姿を他にも見てみたいと思いました。「宇宙に目を向けなさい」と言うところは、いいこと言う～！　と思いましたし、ようやくテンジョウの過去も見えて、今後のセリフがより興味深くなりました。
――ノットレイダーたちが実は「虐げられた人々の集まり」だったと知った時は、どう思いましたか？
遠藤　それぞれに過去や望むものがあるので、プリキュアを敵視する理由はこれか、と思いました。
――テンジョウは秋映画の冒頭シーンにも登場しました。歴代の単独映画で、TVの幹部がセリフありで客演するのは極めてレアケースです。
遠藤　登場できて、純粋に「嬉しい！　やったー！」と思いました。
――ノットレイダーの他の幹部たちの印象などをお聞かせください。
遠藤　ダークネスト様はとても気になります！他が妖怪モチーフなので、どんな感じなのだろう？　と……。ガルオウガは、突然自分たちに上司がいると知って、「なんだ、私たちがトップじゃないのか」と思いましたが、いつも快く（？）行ってこいと送り出してくれるので、会社としてはたぶんとてもホワイトです。アイワーンは、噛み付いてくるけど、なんだかんだ歳をとっても連絡を取り合う仲になりそう。カッパードは最初「ちょっとそれは……」と思いましたが、今ではそのポーズと存在がうらやましいです。
――ノットレイダーの面々は、最終的にはプリキュアとどうなってほしいですか？
遠藤　もちろん、分かり合った後にみんなでキャッキャウフフしてほしい。けど、相変わらずどこかの星で暴れて、「あいつら本当懲りないんだから」とコスモあたりに言われていたい気もします。
――最後にファンへのメッセージを。
遠藤　今後どんなふうに敵側の理由や表情が描かれるのか楽しみです。ぜひ最後まで見届けてください。

テンジョウ
鼻の長いマスクが特徴の女幹部。多数のノットレイを従えており、彼らを「駒ちゃん」と呼んでいる。教師に化けてえれなに近づいたことも

ズの中でのオンリーワンになれたのなら嬉しいです！　偉業を達成したような気分です。
――後半のアイワーンは、黄色いパーカーを着ていますが、いかがですか？
村川　とっっっっっっっってもかわいいと思います!!!　フードも最高です。似合ってます。かわいいです。「フード被ってる～」と、はしゃいでしまいました。できれば、いろんな服を着たアイワーンを見たいです。
――第38話では、アイワーンの孤独だった幼い頃や、ガルオウガに拾われてノットレイダーという「我が家」ができたこと、バケニャーンへの思い入れなどが語られました。
村川　「アイワーンも過去につらい思いをしてノットレイダーにいる」ということはうかがっていたのですが、このようにしっかりと焦点を当てて描いていただけたことがとても嬉しかったです。アイワーンにとってノットレイダーという我が家の存在はなくてはならないもので､その中で仲間、絆というものをバケニャーンにも感じていたんだなぁと思って、台本を読んだ時は涙があふれました。胸がギュッと締め付けられたと同時に、アイワーンのことが愛おしいなぁと思いました。できればまた我が家に、難しいのでしたら新しい我が家となるような居場所が見つかってほしいと、願ってしまいます。
――第38話でキュアコスモは、バケニャーンになってスパイしていたことがアイワーンを傷つける結果になったことを認めた上で、アイワーンに手をさしのべましたが。
村川　「アイワーン、素直になってよ！」って思いました。そして「どうかそんな素直になれないアイワーンを引っ張り上げて!!」とプリキュアに期待しています。プリキュア！　アイワーンのことを救ってあげて!!
――ほか、村川さんから見て、アイワーンの「ここがかわいい！」というところを教えてください。
村川　「べーっだ！」ってしてたアイワーンはかわいかったです！　あとはダークペンバンクや、アイワーンロボを作っちゃうところとか、地道に試作に試作を重ねて13号とかまで作っちゃうところとかかわいいですし、それでダメだったからまた地道に試作に試作を重ねてアイワーンロボを再登場させるところもかわいいです！　あと、ちびアイワーンも最高です！　……どんどん出てきて止まらなくなってきたので、この辺りで一旦我慢します（笑）。
――ノットレイダーたちが実は「虐げられた人々の集まり」だったと知った時は、どうでしたか？
村川　『プリキュア』のすごいところだなぁと思いました。ただ壊したいからとか、腹が立ったからとかではなくて、深い心の傷があって、ノットレイダーたちにはノットレイダーたちの正義、目的があるというところが味噌だなぁと。ただの悪じゃないというところがさすがだと思いました。
――ノットレイダーの他の幹部たちの印象をお聞かせください。
村川　ダークネストの存在はずっと明らかにされていなくて、何が目的なのか、どうしてノットレイダーにいるのかなど、知らない部分が多くて。ダークネストをどなたが演じるのかも、遠藤綾さんに聞いて初めて知りました（笑）。他の幹部たちもかなり個性的で、みんなそれぞれに面白くて素敵だなぁと思います。もっと幹部の皆さんとアイワーンが話してるところも見たいです｡幹部キャストの皆さんとも、最近はアイワーンが別行動なのでなかなかお会いできずですが、またアイワーンがノットレイダーに帰ってこられるようになったら、その時はまたよろしくお願いします！
――ノットレイダーの面々は、最終的にはプリキュアとどうなってほしいですか？
村川　もちろん、和解してほしいですし、ノットレイダーのみんなが本当の家族のようになって、過去のそれぞれの傷が癒えて、前に進めるようになってほしいなぁと思います。アイワーンも、コスモと和解して､幸せに笑えるように。できれば、プリキュアのみんなにはアイワーンの友達になってあげてほしいです！
――最後にファンへのメッセージを。
村川　いつも応援していただき、誠にありがとうございます！　アイワーンに幸せになってほしいと願ってくれている方々もたくさんいると聞き、私まで心がぽかぽかになって嬉しくなっております。なので！　私もその一人として、アイワーンの幸せを願い続けます。共にアイワーンとノットレイダーみんなの幸せを願いましょう！　これからも､ノットレイダー（アイワーン含む）の応援、よろしくお願いいたします。

アイワーン
発明が得意な一つ目の少女幹部。信頼を寄せていたバケニャーンがユニと知り強いショックを受け、以後は私怨でユニをつけ狙った

アイワーンのパーカー姿

アイワーンの幼少期

アイワーンノットリガー

改良版アイワーンロボ

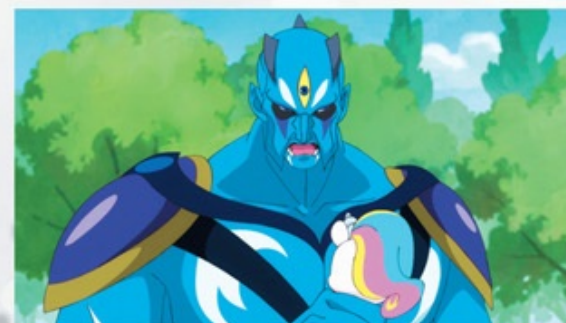
ガルオウガは拳で信念を打ち込んでいる

ガルオウガ役
鶴岡 聡

――ガルオウガ役はどのようにして決まりましたか？
鶴岡　オーディションでした。僕にとっては約10年ぶりの『プリキュア』。まさかプリキュアに立ちはだかる日がくるとは思いもしませんでしたので、起用していただき大変光栄でした。
――ガルオウガの絵を最初に見た時の印象は？
鶴岡　強そうだなと。その時点で、拳で戦ってほしいなと思っていましたので、実際の戦闘スタイルが素手で嬉しかったです。
――アフレコで最初に演じた際に、宮元監督からお願いされたことは？
鶴岡　常に「重み」を意識することをおっしゃっていました。そのため、芝居が軽くならないように心掛けました。皆さんご存じの通り、ガルオウガはなかなか動かない存在でしたので、明るくポップな空気を一気に変える効果的な演出だと思いました。
――ガルオウガは凶暴そうな見た目に反し、落ち着いている人物という印象も受けます。
鶴岡　ギャップのある役を演じるのは非常に楽しいものです。
――シリーズ前半はほとんどノットレイダーの星にいて、幹部に指図をするという立ち位置でしたが、どんなことを意識していましたか？
鶴岡　実際には違うかも知れませんが、「最後にぶつかる相手感」を、ご覧の方々にどれだけ持ってもらえるかが重要かなと常に考えていました。
――ダークネストが復活してからは、ガルオウガは特に忠誠心が強い雰囲気ですが、そこは意識している部分なのですか？
鶴岡　はい。このご質問が出るということは、その意識がしっかりと伝わっている証拠だと思いますので、今ホッとしています。
――プリキュアとの初めての直接対決が、第31話の月面でのキュアスターとの決闘でしたが、どのように感じましたか？
鶴岡　カッパード、テンジョウ、アイワーン、戦闘スタイルがそれぞれですので、やはり拳で戦えたのは嬉しかったです。まさしくぶつかり合い。ただ、備えが甘かったですね。
――この回は、プリキュアの前半の合体技を受け止めるパワフルさも発揮しました。「ヒーローの決め技を破る」という展開はいかがでしたか？
鶴岡　台本を読んでいて、思わず「おぉ……」と口走ってしまいました。初出陣でこの展開は、なかなかアツかったのではないでしょうか。それまで当たり前だったことが突然、通用しなくなる。でもだからこそ、成長につながるのかもしれません。
――続く第32話も、ガルオウガは雑兵のノットレイも連れず、歪んだイマジネーションも利用せず、単独でプリキュアと対峙して、豪腕で圧倒しました。
鶴岡　これぞガルオウガ。僕は、彼が打ち込んでいるのはただの拳ではなく、拳を使って信念を打ち込んでいると捉えています。最もダイレクトで、彼にふさわしいその手段に清々しさを感じます。
――第31話では「守るなど！　何も分からぬものどもが」というプリキュアへのセリフがあったり、第32話では、故郷の星を失った時の無力感や絶望感といった複雑な思いが明かされました。
鶴岡　自分ができなかったこと、さぞ悔しかったことでしょう。それでもなんとかしたかった。実は僕自身が生きてきた上でも、こういったことは経験があるので、このエピソードは沁みました。
――ガルオウガと意見を戦わせる中で出てくる「守る」は、今作のキーワードにもなっているようです。
鶴岡　失いたくないから守りたい。失ってしまったから、今度こそ守りたい。これは相反しているようで、実はループの考え方だと思うのです。いつの間にかその両方を持ってしまっている。だからこそ、僕は『スタートゥインクル』が好きなのです。
――ノットレイダーたちが実は「虐げられた人々の集まり」だったと知った時は、どう思いましたか？
鶴岡　「では、虐げられていなかった頃はどんなヤツで、どんな生活を送っていたのだろう？」と。そこに至るまでの詳細や心情、「もしも」が僕の中に生まれました。
――第41話では、ガルオウガはキュアセレーネと対決するようですが、見どころをお聞かせください。
鶴岡　「決意と信念」です。
――ノットレイダーの他の幹部たちの印象などをお聞かせください。
鶴岡　四者四様で個性的。
カッパード：サングラスとポーズと退場理由がイイ。細谷佳正様、その知識の豊富さ、その考え方にはいつも舌を巻きます。また焼肉行こうね。
テンジョウ：その仮面の下の表情を想像すると……イイ。遠藤綾様、テンジョウ先生回で、その魅惑的な声をきっかけに、楽しくリピートアフターミーしたのは僕です。また飲みに行きましょう。
アイワーン：その喋りとテンションがイイんだっつーの。村川梨衣様、いつも元気で小さな身体からあふれる大きな気力がすごいんだっつーの。みんなで行ったあの店の塩ラーメン、また食べたいね。
ダークネスト様：あなたのおかげで、中間管理職の何たるかを少しだけ知れました。
――ノットレイダーの面々は、最終的にはプリキュアとどうなってほしいですか？
鶴岡　あくまで理想ですが、和解とまでは言いませんが、認め合うようになってほしいです。しかしながら、少なくともガルオウガは最後の最後まで信念をぶつけるような気がしており、それは命がけになるのではないでしょうか。仮に彼が散ったとしても、何かを見つけてほしいです。
――最後にファンへのメッセージを。
鶴岡　いつもご覧くださりありがとうございます。物語はいよいよ大詰めで、我々ノットレイダーの宇宙支配作戦も最終段階。見届けてください。我々の活躍を。最後まで読んでくださりありがとうございました。

ガルオウガ
幹部のリーダー格。ダークネストが目覚めるまでは彼が他の幹部たちに命令を下していた。豪腕とワープによる瞬間移動を武器とする

ダークネスト
ノットレイダーを統べる謎の人物。フワを「トゥインクルイマジネーションの器」と呼んで、捕らえてくるよう幹部たちに命じている

バケニャーン
アイワーンに従っていた猫型宇宙人。アイワーン腹心の部下と思われたが、ノットレイダーをスパイするためユニが変化した姿だった

プリキュアにはアイワーンの友達になってほしい

アイワーン役
村川梨衣

――アイワーン役は、どのようにして決まりましたか？
村川　オファーをいただきました。『プリキュア』シリーズに出演するのは一つの夢でしたので、夢が叶ってとっても嬉しかったです！　今後も『プリキュア』シリーズに出演することが、今の新たな夢です。
――アイワーンの絵を最初に見た時の印象は？
村川　インパクト強い!!!（笑）妖怪がモチーフだということで「なるほど！」と思いました。観てくださる方がどんな感じに思うんだろうなぁと思ったら、SNSのトレンドにアイワーンが入っていたこともあったようで、大反響だった様子がうかがえました。嬉しかったです（笑）。
――アフレコで最初に演じた際に、宮元監督からお願いされたことは？
村川　「意地悪な感じ」や、アイワーンは頭が良いので「人を見下しているような感じで」というお話がありました。
――アイワーンは「だっつーの！」という語尾が特徴的で自信家な印象もあります。
村川　基本的にはちょっと人のことをばかにしてるような、ザラついた感じなどは意識しています。ただ、どこかまだ子どもっぽいというか、時折見せるコミカルな部分が本来のアイワーンのかわいさにつながったらいいなぁと思っています。
――第11話で、キュアスターに「想像力ないっつーの！」と憎々しく言って精神的に追い込むシーンが印象的でした。
村川　アイワーンにはアイワーンの抱えているものもあるので、複雑な気持ちにはなりましたが……ディレクションでも「とても嫌な感じでお願いします！」といった要望もあったので、私はアイワーンの気持ちに寄り添えたら、と思いました。
――第19話～21話でのキュアコスモ誕生編では、信用していたバケニャーンがユニの変装だったと知り、ショックを受けていました。アイワーンの人間的な部分が見えた感じもしましたが。
村川　このことについては、どう言えばいいのか……！　もちろん、アイワーンがしてしまったことも許されることではないのですが、でも……アイワーンがそこまでバケニャーンのことを信用して、信頼していたんだなぁと思ったら、胸が痛くなりました。自分自身をノットリガー化させてしまったのも、大切な存在に裏切られた悲しみが大きすぎた反動だと思うので。その意味では、「アイワーンを助けてくれて、プリキュアありがとう」という気持ちです。
――バケニャーンがユニの変装だったというのは、村川さんはどの段階で知ったのですか？
村川　記憶が定かではないのですが……収録が始まってしばらくしてのタイミングだったと思います。最初はまったく知りませんでした。そして、その時はアイワーンがバケニャーンのことをここまで信頼していたとは知らず、みんなで「えっ！上田燿司さん（バケニャーン役）収録からいなくなっちゃうの!?」って悲しんでいました。今では上田さんもバケニャーンも、どっちのことも寂しいです！
――その後、ノットレイダーから離れ、単独でプリキュアを狙うことになりましたが、この展開も知らされていましたか？　実は、明確に私怨だけでプリキュアと敵対する幹部は、シリーズ16年間の中でアイワーンくらいしかいません。
村川　私は台本を読むまでまったく知りませんでした。台本を読んで「あれ？　アイワーンどこ行くの？？」ってなりました。ノットレイダーの皆さんと一緒に戦いたかったので寂しいですが、この16年という歴史ある『プリキュア』シリー

シリーズディレクター
宮元宏彰
キャラクターデザイン
高橋 晃

TV

「自分はこうありたい」というドラマを

宇宙に平和をもたらす鍵は、プリキュアの「トゥインクルイマジネーション」。クライマックスに向かう今、5人の成長の形はどのように描かれる？

左手で打つスターパンチ
キュアスターらしさが詰まった、ぐるぐるパンチの「スターパンチ」。なぜ左手で打つ？ 「技って子どもたちが真似するでしょ。スターカラーペンはたいてい右手で持つだろうから、それを持ち替えると遊びにくいだろうなって。右手で星を描いて、左手でパンチしてくれたらいいかなと。ひかるは右利きですが、左でもパンチを打てますよと」

トゥインクルスタイルは菱形シルエットで

——まず宮元さんから見て、高橋さんのデザインの良さは？

宮元 そうですね……。

高橋 それは僕のいないところで訊いてほしいなぁ（笑）。でも聞きたい！ 今後の参考のために。

宮元 コンペでお願いした方の中で、高橋さんの絵が純粋にかわいいなと感じたんです。ただ、僕が求めていたのはもう少しポップな方向性だったので、高橋さんを含め何人かの方に絞って、再度提出してもらったんです。その中で、高橋さんのものが抜群に良かった！

高橋 そうだったんだ（笑）。

宮元 「5人の特徴を出すために、キャラのシルエットの差をはっきりつけたい」という話をしたんですが、そこを明確に汲み取って、かわいくまとめてくださいました。

高橋 よかった。ありがとうございます。

——シリーズ後半の第32話からは、5人のトゥインクルスタイル（P.8～12参照）も登場しましたが、デザインのポイントを教えてください。

宮元 「ティアラを絶対につけたい」という玩具側の要望がありまして。ただ、5人同一デザインのティアラなので、全体のシルエットの見え方でそれぞれのイメージをより強調する形で、高橋さんにお願いしました。

——少しずつ髪が長くなったり、スカートが長くなったりしています。

高橋 やっぱり、パワーアップフォームってそれが基本だなと。でも、普通にやるとゴテゴテしちゃうので、そこをいかに抑えてシンプルにするか考えました。これまでのプリキュアだと、もっとスカートが伸びて、もっとフリルが付いて、もっと髪がボリューミーになったと思うんですが。今回はあまりロングスカートにせず、菱形っぽいシルエットにしています。スラッとした脚の形がちゃんと分かるように。

宮元 コスモは、デザインが何回か変わりましたね。最初はもうちょっと長いスカートだったんですが、それだとコスモっぽくないなと。

高橋 そう、ソレイユのトゥインクルスタイルに近かったですね。

宮元 いったんロング方向に行きかけたんですが、どうもしっくりこなくて。全員がエレガントなロングドレスになるより、脚を出したほうが健康的なかわいさもあると思って。

——全員、髪に黄色い星が貼りついているのが面白いですね。

宮元 ティアラに星があるので、髪にもつけて統一感を出しています。

高橋 髪が星型に染まっているのではなく、バレッタ的な髪飾りのイメージです。ちょっと豪華さも出るし、あまり作画的な手間もないし、個人的にはとても気に入っています。

宮元 あまりディテールを増やしたくなかったんです。元々のデザイン自体、シンプルを目指して作っているし。シンプルなモチーフが増えていくのはいいなと思いました。

——フワも成長しましたが、デザインはどのように？

宮元 ユニコーン型になるというのは、最初から玩具会社さんからのオーダーとしてありました。幼いフワについても提案デザインがきていましたが、もう少し宇宙妖精っぽくさせてもらいました。高橋さんにはある程度の方向性が出てから「これをめちゃくちゃかわいくしてください！」という感じで、最終的にまとめてもらいました。

高橋 幼いフワのイメージの元になる大ラフをいただき、そこから考えていきました。

——成長前のフワの頭の丸は、スターの毛先と似た形ですが。

高橋 土星型モチーフは宇宙もので定番ですので。初めの頃は、フワには普通に獣耳がありましたよね。

宮元 そう、もっと小動物系だったんです。それを宇宙妖精っぽくしました。

高橋 ここまで不思議生物ではなかったですね（笑）。麻呂眉を作ったのは僕です。「これだ！」と思ったんです。なんとなく眉毛がないと表情がつけづらいと思って。ふとひらめいて、ちょこっとつけてみたら「お、いいじゃん！」って（笑）。これまでの妖精は、基本的に眉毛がなかったですし。

羽衣ララ 春服

羽衣ララ 秋服

宮元 プルンスも眉毛が最初なかったんですが、「絶対、極太の眉はかわいい！ これが特徴になるからつけないとダメだ！」と僕が言い張ったんです（笑）。プルンスは説明役だけでなく場をにぎやかす役割にもしたいと考えていたので、表情で遊べるような特徴が欲しくて。

高橋 プルンスに関しては、僕はまとめただけで、ほぼ宮元さんのデザインです。

宮元 高橋さんが描かれた決定稿を見て、改めて極太眉にしてよかったなぁと思いました。

——成長フワのデザインは？

高橋 玩具会社さんからの提案デザインがいろいろとあって、まずどれでいこうかというのがあったんですよね。

宮元 全体の方向性は「ユニコーンやペガサスっぽく」「頭に角」「虹色の髪の毛」というオーダーで。

高橋 耳の形なども含め、いくつかの提案パターンからのパーツを組み合わせて、コンセプトに沿った方向で膨らませた感じです。

宮元 最終的に高橋さんがまとめてくれたものを見て、「かわいいからOK」ってなりましたね。

宇宙人っぽさを追求しセーラー襟に行きついた

——初期の話にさかのぼりますが、変身前の5人は、ひかるとララから作り始めたんですか？

高橋 はい、そうです。

宮元 ララの「宇宙人っぽいかわいい服」が難しかったですね。地球にありそうな服にならないよう、何か一工夫欲しいのですが、やりすぎると単なる宇宙服になっちゃう。それだと女の子たちがかわいいと思ってくれないかも、と。それで「柳川プロデューサーと設定制作の女性が『かわいい』と言わなきゃOKしない！」と決めたんです。並行して、高橋さんともやり取りして……「もうちょっと原宿ポップっぽい感じにしたい」「その上で、ひかると差別化できるデザインで」と話しました。

高橋 そうでしたね。

宮元 セーラー服っぽい上着が出てきた瞬間、「これはいける！」と思いました。あと、宇宙人なので、頭にも宇宙モチーフのアクセサリーをつけたいという話をしたら、缶バッジみたいな案が出てきて、そこにハート型が入っていて。

高橋 「頭にも何か欲しい」って話でしたよね。グローブにもハートを入れるというのは、宮元さん発案で。

宮元 そう、「頭のパーツのハートが面白いので、グローブや靴にも入れましょう」とハート推しの方向に。

——セーラー襟の上着は？

高橋 僕の発案だったかな。宮元さん、「寒い時期には服の裾が伸びるんです」と言ってましたよね。肩口のアームホール（袖ぐり）部分が蛇腹になっていて、ここが伸びて長袖になるという。

宮元 そういうのが面白いかなと。実は秋服は春服と同じもので、それが変形したバージョンなんです。合理的なサマーン星人らしいかなって。

——ひかるはキュロットスタイルですね。

宮元 スカートじゃないほうがいいなと。

高橋 でも、いろいろ描いて出したんですが、なかなかうまくいかず……。ジャンパースカートについては、宮元さんからも提案してもらって。

宮元 最初からサロペットがいいなと思っていたんです。ただ、どうしてもボーイッシュな感じが強まるんです。オーバーオールのパンツも考えましたが、女性陣からも「かわいくない」と（笑）。やはり女の子っぽさも入っていないとダメだなと、雑誌とかを調べまくりました。そこから「肩周りはこういうのはどうですか」と高橋さんに提案させてもらったりして。

——サロペットがピンクではなくブルーなのが面白いです。

宮元 全身ピンク系だと、今までのピンク主人公のような印象になってしまって。別の色を入れようと試行錯誤した中で、「ブルーがいいね」となりました。でもヒップ部分の星マークには、ピンクを使っています。

——ひかるの秋服は、ダボダボパーカーですね。

宮元 ボトムは見えていませんが、実は春服と似たようなフォルムのショートパンツを履いています。

高橋 秋服は全部、宮元さんの案です。

宮元 案をこちらで考えて、高橋さんに確認をとった感じですね。「こんな感じでいきたいんですけど、大丈夫ですかね？」と。

高橋 で、僕は「すごくいいと思います！ かわいいです！」と返事をし、それを爲我井克美さんがまとめてくださってます。特にひかるの秋服、かわいいんだよなぁ。

——えれなの服についてもお聞きしますが、まず春服はどことなくメキシカンですね。

宮元 胸元のクロスしたパーツや、裾のジャギったラインは高橋さんが考えてくれました。

高橋 ちょっとエスニックな感じで。上着は麻でできているイメージです。靴下は履いていなくて、素足に靴です。サンダルも考えましたが、作画の負担になりそうかなと。

——秋服は、ちょっとトラッドな雰囲気で。

宮元 えれなのイメージはエスニック系と快活さですが、それだけに偏るのも何か違うかなと……。あと、春服よりももう少し大人っぽい感じもいいかなと。でも、パンツスタイルで快活さは残しています。

高橋 まどかさんの春服は、ひねりのないおしとやかな王道スタイルです。資料もいろいろと出してもらい、それを参考にしました。

宮元 清楚さと品の良さがポイントですね。親に「これを着なさい」と言われて着ているふうにしたいとも思っていて。

高橋 そんなイメージもあったんですね（笑）。

宮元 それで、ベルト等に香久矢のマークを入れてもらったんです。

——まどかの秋服は、春服よりもお嬢様的な感じもしますね。

宮元 カラータイツがかわいいポイントです。まどかは実はカラーリングが難しかったんです。過剰すぎない適度なお嬢様感と、かわいいだけじゃないところも欲しくて。それで、

香久矢まどか 春服
香久矢まどか 秋服

高橋さんならではの第27話

アイワーンロボ（第27話）

対談に出た第40話のほか、シリーズ後半でのもう一つの高橋さんの作監回が第27話。人魚の変身のかわいさもさることながら、アイワーンロボがカッコいい！「アイワーンロボの作画は頑張りました（笑）。サンライズ作品に参加して育った身としては、やはりロボにはこだわりがあります！」

グレーはあまり使っていない色ですが、あえて取り入れました。

周りの人と馴れ合わない性格の人も必ずいる

レインボーパフュームは星座ペンを借りて使う

—ユニはララと同じように、耳が尖っていますね。

高橋　そこは僕の案ですね。宇宙人といったら尖り耳かなと。でも、あまり派手に尖らせたくなかったので、普通の耳がちょっとだけ尖っている感じにしています。

—服装については？

高橋　ユニの春服は怪盗ブルーキャットの服、そのままですね。

宮元　先行していたブルーキャットのデザインがあまりにすばらしかったので。

高橋　僕としては、ユニの私服はブルーキャットとはまた変えるつもりだったんです。それで「こんなのどうか」とか描いてみたんですが、結局ボツになってしまい（笑）。

宮元　プリキュアの仲間になっても、怪盗はやめていないということで。そこが変わっちゃうと、ユニのアイデンティティが一つ消えちゃう気がしたんです。それに、すぐには人と馴れ合わない子なのに、地球に来た途端、服が変わったら「お前のスタンスはその程度か！」となるかなと（笑）。

高橋　なるほど、そういうことかぁ（笑）。

—ユニは仲間になった後もひかるたちと、あまりベタベタせずにいますね。

宮元　バックボーンも重いですしね。世の中にはそういう、周りの人と馴れ合わない性格の人も必ずいて、「それは良くない」と決めつけちゃうのがとても嫌なんです。そこが、ユニを作る上での大元にある発想です。ユニは何にでもなれる子ですが、だからこそ自分がどうありたいかをちゃんと持っていないと、迷うというかブレるというか。自分があるようでないキャラなので、ユニの物語としては「自分自身を見つけていく話」でもあります。

—ユニのアイデンティティとしては、やはりレインボー星人の姿なんですか？

宮元　外見的な「本来の姿」という意味合いではそうですね。ただ、彼女の中の本質……自分はどう生きていきたいかという部分は、この子の中ではまだ定まっていません。惑星レインボーを復活させたい一念で突き進んできましたが、ひかるたちと出会って外の世界を見て、そこで自分はどう生きていこうかと。だから、みんなともすぐには距離感が縮まらない。特に初期は「都合がいいからプリキュアをやっている」みたいなスタンスだったので、表情や言い回しなどについては、絵コンテでもアフレコでも「もうちょっと心に壁がある感じに」とお願いしてきました。

—ユニのレインボー星人姿のデザインはどのように？

高橋　宮元さんが描いたレインボー星人の案があったので、そのシルエット感に沿ってまとめました。脚が太いのと獣っぽさがポイントです。あちこちから毛がちょろっと出ているのも、宮元さんの指示です。

宮元　「肌っぽく見えないように」とお願いしたんです。

—彼女がレインボーパフュームを使う際には、誰かの星座ペンを借りて挿し入れる段取りがありますが、これによって他の4人とのつながり感が出ましたね。

宮元　玩具コンセプトとして「キュアコスモは12本の星座ペンが全部使える」というのがありました。ただ、他の4人が今まで頑張って集めてきたものをそのまま使う感じになるのはどうだろうと。そこで「全部使えはするけれど、自由には使えない形はどうか」と玩具会社さんに提案しました。ペンは常に誰かから借りて使う。そのためには相手との信頼関係が必要。ペンの貸し借りを通して、コスモがみんなのことをどう思って、どうつながっていくかも見せられるかなと思いました。

クラスメイトが宇宙人と知ったらどう反応する？

—目下プリキュアは「トゥインクルイマジネーション」を求めていますが、心の成長という形での発現ですね。

宮元　12星座の力を集めるだけでは宇宙は救えず、一人一人がプリキュアとしてもっと強くならないと大きなものには立ち向かえない、という流れです。そのための鍵になるのがトゥインクルイマジネーション。そこに、それぞれの「自分はこうありたい」というドラマが重なり、この先の大きなテーマにつながっていきます。

—第35話で予兆を見せた、ひかるのトゥインクルイマジネーションの発現が楽しみです。

第40話はとにかくララをちゃんと描きたくて

宮元　ひかるは最初から強いイマジネーションの力を持っている子なので、「その先のドラマ」をどう考えるかが、他の子と違う難しさでした。ただ、ひかるもちょっとずつ変化しています。とにかく純粋な子だったひかるですが、広い宇宙を知っていく中で、どう変化してどんな答えを出すのか。ひかるも少し悩んだりするのかもしれません。

—また、プリキュアはノットレイダーの幹部と1対1対応する感じになってきています。

宮元　「カッパードとひかる」「アイワーンとユニ」といった関係性を、他のキャラでも作れると分かりやすいかなと。当初は「ガルオウガとまどか」をライバル関係にするつもりはなかったのですが、だんだんこの二人が似ているのが見えてきて。まどかはお父さんから啓発を受けていて、ガルオウガはダークネストを崇拝している。これは対比になるじゃないかと。ガルオウガは扱いが難しいキャラだったのですが、いい流れができました。この二人の関係は、第41話でクローズアップされます。

—話が前後しますが、第40話は高橋さんの作画監督回でしたね。

高橋　ララのちょっといい話ですね。

宮元　めちゃめちゃいい回ですよ！　僕、脚本を読んだ段階で泣きました。

高橋　いい回を担当できてよかったです。第40話は（取材を受けている段階では）まだ作業中なのですが、やっぱり力を入れるところはララでしょうね。とにかくララをちゃんと描きたいなというのがあります！

—第40話で、宮元さんがこだわった点は？

宮元　ララが宇宙人だとみんなに知られる話は、どこかでやろうと思っていました。ひかるは心の壁がないし「宇宙人大好き」って子なので問題ないですが、普通の人はそれなりに警戒しますよね。宇宙人であることがもっと広く知られてしまう話も考えましたが、こういった閉じた空間（学校の友人たちに対して）の話のほうが、テーマがリアルに伝わるかなと。特に第13話、第37話など、クラスの中でのララの立ち位置を積み上げてきたので、みんなはどう反応するのかを気をつけて作りました。とにかく「その先に希望があるんだよ」という描き方にしたくて。クラスメイトは事実を受け入れて前に進もうとする。そこにララの「自分はこうなっていきたい」という気持ちが重なる。そこは脚本段階でも、特に練ったところです。

—最後にファンへメッセージをお願いします。

高橋　まだ道半ばなので……今は「応援よろしくお願いします」しか言えないですね。僕の作監回は、第45話と最終話のあと2回あります。ここからが盛り上がっていくところだと思います。1年間描いてきたひかるたちの物語はどういう結末を迎えるのか、最終話に向けて頑張っていきます。

宮元　現場的にはもう終盤の話数に来ていて、ちゃんと終わらせてあげたい気持ちが強いですね。イベント会場などで、子どもたちが偏りなく各キャラクターの服（プリチュームなど）を着てくれているのを見ると、僕らの想いが届いた気がして嬉しいです。それから、『スタプリ』はその話数だけじゃなくて、他の話数との連動で、より深みが増す作りになっています。これまで前振りしてきたことが今後どう決着するのか、皆さんが楽しめる形で作り上げられるよう、最後まで誠心誠意作っていきます。よろしくお願いします！

パワーアップ変身＆技バンク 絵コンテ（宮元宏彰）

5人同時変身＆合体技バンク

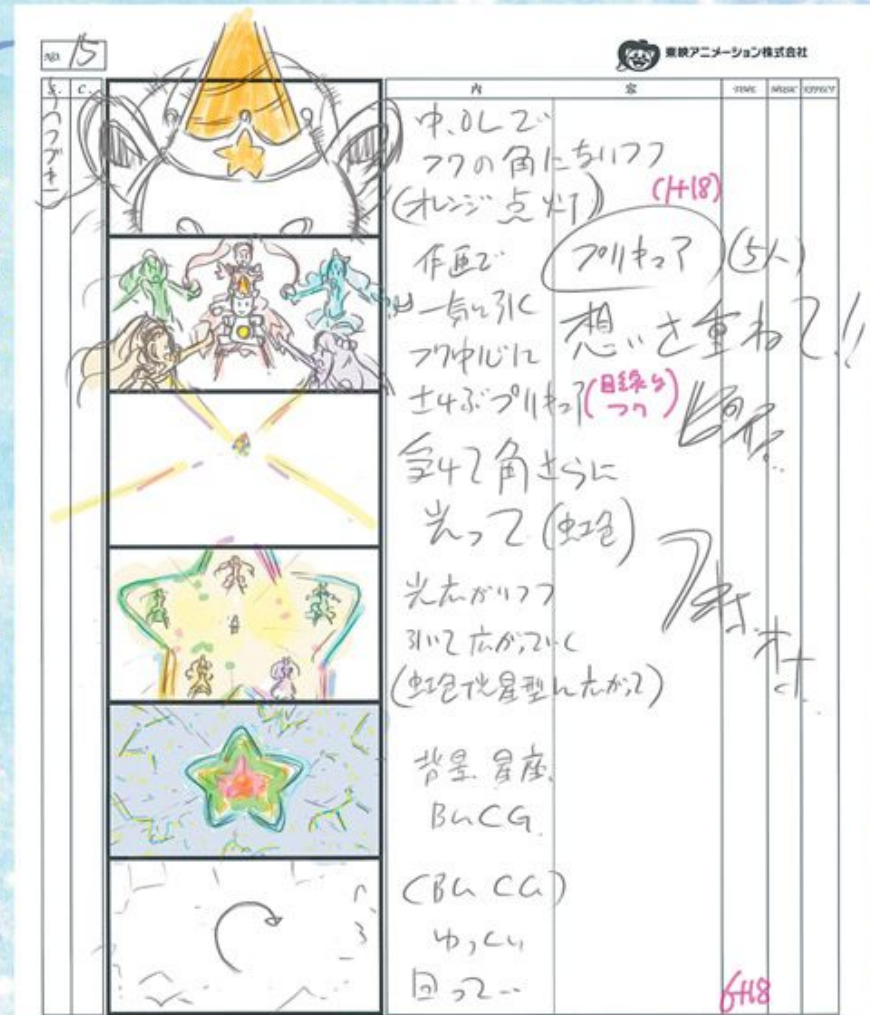
—変身バンクの絵コンテは5キャラとも宮元さんだそうで（P.8～12参照）。

宮元　そうですね、演出処理は高戸谷一歩さんです。最初の４人は僕のほうで原画もチェックしましたが、コスモは完全に高戸谷さんにお任せです。

—５人同時変身バンクの画面分割は、センターが星型なのがいいですね。

宮元　５分割って難しくて、どううまく画面に収めるかで悩んだんです。『スタプリ』らしさも欲しいと考えた末に、こうなりました。

—歌は前半がお当番のキャラのソロで、「スタートゥインクル～」から５人の合唱になる形も多いですね。

宮元　最初の頃は「みんなそろって」を大事にしていたんです。でも第11話を越えたところで、毎回同じパターンの編集だとせっかくの個々のバンクがもったいないなぁと。それで、個人回の時はその子の画を増やしてみようかな、いっそ歌も含めて細かく調整しようかな、と……。最近は絵コンテで「今回はこのパターンで」と僕から指定して、編集してもらっています。

—合体技「プリキュア・スタートゥインクル・イマジネーション」は、フワと掛け合いながらなのが面白いです。

宮元　原画は濱野裕一さんです。玩具の仕様で「声に反応してフワが喋る」というギミックがあるので、そこに意味を持たせたいと思いました。これまでの物語で、みんな「フワを守りたい」と思ってきたので、今度はそれに応えたフワが、「自分もみんなを守っていきたい」と思い、それらが重なって一つの形になるのがきれいだなと。そういう、お互いに高め合う流れを、合体技のバンクに入れ込んでみました。玩具会社さんからの提案では「フワから技が出る」というものもありましたが、フワを盾にしているように見えないよう、「フワと一緒に技を出す」感じにしてみました。

みやもと・ひろあき
1981年生まれ。東映アニメーション所属。代表作は『ONE PIECE』（シリーズディレクター）、『ONE PIECE FILM GOLD』（監督）

たかはし・あきら
1971年生まれ。スタジオダブ所属。キャラクターデザイン作品に『怪談レストラン』『スイートプリキュア♪』『ドキドキ！プリキュア』『美少女戦士セーラームーン Crystal』（デス・バスターズ編）

TV

プリキュアは家族ではなく隣人同士

シリーズ構成 **村山 功**

プロデューサー **柳川あかり**

これまでのシリーズに比べ、あまり家族的なベタベタ感のないプリキュア5人。それぞれの生き方を尊重しつつ協力し合う、素敵なチームが描かれている。

キャラクター身長対比表

ユニとアイワーンは「お互いさま」の関係

―4クール目に突入しましたが、手応えはいかがですか？

柳川 物語の終盤にかけて、これまで紡いできたメッセージが色濃く反映された、テーマ性の高いエピソードが続きます。

村山 ここからラストに向かうにつれて、敵側のドラマも盛り上がっていきます。

柳川 『スタプリ』は15周年イヤーが終わった「次の一歩」ということで、「子どもたちのために」「一話完結でカジュアルに観られるように」という全体の方針がありました。でも、実はストーリーの最初の頃から伏線を張っているところもあって、それが一気に爆発するのが11月以降なんです。ずっと見続けてきた方には「ここにつながっていたのか！」という驚きがあると思います。

―当初、村山さんは、「多様性」を作品テーマにしてしまうと『魔法つかいプリキュア！』とかぶるのではという懸念があったそうですが。

村山 そうですね。ただ、うまく書き分けられたのではと思います。『スタプリ』のシナリオチームの皆さんのおかげで、『まほプリ』とはまた違った、とても思い入れの強い作品になりました。

―多様性の最たるものはユニかもしれませんが、彼女は仲間になって地球に来た後も、どこでどういう暮らしをしているのか分からず、風来坊のままですね。

村山 4人との距離感を出している感じです。今回の「多様性」で重視しているのは、お互いに強要せず、それぞれを尊重するという部分なので。ひかるは誰かに対して「ああしろ、こうしろ」とは言わないし、ユニも何か言われたところで従わないタイプだし。そのため、自然と今の5人の関係性になったと思います。

柳川 本人たち同士は仲間だと分かっているし、距離があることを問題だと思っていません。ひかるも元々、一人行動を楽しむ子ですし、ユニみたいな子がいても不思議だとは思っていないはずです。

―ユニは、惑星レインボーの復活を目指していますが、それ以上に長であるオリーフィオへの想いが強い感じがします。

村山 惑星レインボーの復活は、オリーフィオの復活でもありますから。レインボー星人はオリーフィオから発生した単一の生命体なので、ある意味、みんながオリーフィオなんです。だから星そのものよりも「オリーフィオのため」という形になると思います。

―そんなユニに対抗するのがアイワーンです。ノットレイダーの目的とは無関係に、ただ「ユニ憎し」で敵対してきました。

村山 アイワーン自身は、宇宙を征服したい気持ちは元々ないんです。いろんな発明をしてきたのも、ガルオウガたちに存在を認められたいという自己肯定が第一目的でした。第38話で描かれたように、アイワーンはノットレイダーの中に自分の居場所を見つけており、いわば幹部は疑似家族みたいなもの。だからこそ、バケニャーンに裏切られたのは、とてもショックでした。

―アイワーンにとっては、バケニャーンはもっとも親しい人だったんですね。

村山 そうですね。集団の中で最も

むらやま・いさお
1975年生まれ。アニメ脚本家。『魔法つかいプリキュア！』のシリーズ構成や、『映画プリキュアミラクルユニバース』など、歴代クロスオーバー映画の脚本も数多く務める

やながわ・あかり
1990年生まれ。東映アニメーションに2013年入社。営業職を経て企画部門に。アシスタントプロデューサーとして『デジモンユニバースアプリモンスターズ』、過去のプロデューサー作品に『おしりたんてい』など

信頼していた人物に裏切られ、深く傷ついた。だから、ユニに怒っているわけです。そしてプリキュア側の人物を、そうとは知らずそばに置いてきたという失態を犯してしまった。「自分はもうノットレイダーには戻れない」とノットレーダーの星を出て、ユニに復讐心で向かうことになりました。

―バケニャーンはどのくらいの期間、アイワーンのところにいたんですか？

村山　そんなに長くないです。第1話が始まるまでの数ヵ月間ですが（P．84参照）、その中で密な関係を作っていたんです。

―敵幹部がプリキュアの一人に私怨だけで敵対するのは、なかなか捻ったドラマでした。

村山　そうですね。でも第38話でだいぶ仲直りはできたのかな？　アイワーンも素直になれない子ですが。

柳川　最後、プイって行っちゃいましたね（笑）。でも、確実に二人の関係性は変化しています。

村山　ユニはアイワーンによって家族を失い、ユニもアイワーンの家族を奪った。そういう「お互いさま」のドラマをやりたかったんです。

―ユニがそこに気がついて、反省するというのもポイントでした。

村山　そこはテーマとして連綿とあって。相手の立場に立って考える、つまり「相手の気持ちを想像する」というのをやりたかったんです。

柳川　「人の本質は簡単には変わらない、その上でどう折り合いをつけていくのか」を描こうとしました。多様な人が共生する社会では、単に共感や同情ではなく、自分と異なる思考を持つ人のことを想像し、理解する力が大切だと思っていて。それが第38話でした。

自分らしさへの迷いは ひかるの成長の証

―話数を追って、ほかのキャラのドラマについてもお聞きします。ひかるがこれまで、あまり友達付き合いをしてこなかったというのは第26話で明かされましたが、わりとサラッとしたカミングアウトでしたね。

村山　友達がいないことを引け目に感じてもいないし、悩んでもいないのでサラッと言えてしまうんです。『スタプリ』では、プリキュアがいわゆる闇堕ちする話……自分自身を内省するような話はやらないと決めたので。大人にはそういう心の重たい葛藤のドラマが面白いんですけど、子どもたちはついてこられないかもしれないし、せっかくの宇宙が舞台の作品ですから、明るい冒険物語にしようと。

―結局この5人は、みんな深い友達付き合いのなかったメンバーの集まりなんですね。

村山　そうですね。えれなもまどかも、学校では周りにたくさん人はいるけど、特定の誰かと深い付き合いはしてきませんでした。でも、5人ともそのことを悩んだりはしておらず。ひかるの周りにみんなが集まってきた形ですが、ひかる自身もそこを気にしていなかったというのがミソです。

柳川　そんなふうに、点と点が距離を持ったまま、つながっているのが、ひかるたちです。バラバラに存在している星たちが、一つの輝きの集団として見えるというのが、まさに空に輝く星座そのものなんです。

―ララは、家族に対して劣等感を抱えているというのが第29話で語られました。

ある程度の距離感を保ったまま お互いの意思を尊重する関係を

村山　双子の優秀な兄がいるという設定も含め、最初から決めていました。それと「いつもならピンクの子の両親になるような人たちを、ララの父母に」というのも。逆に、「ひかるの家庭は、ちょっとぶっ飛んだ人たちにしよう」というのも（笑）。また、惑星サマーンにいた頃のララは、基本的に自信がない子でした。「価値観の違いで、その人の善し悪しや才能も違って見える」というテーマに基づいています。

―とにかく「きちんとしよう」と、萎縮している感じですよね。

村山　普通は宇宙人が地球に来たら、地球の常識を無視してハッチャケて混乱させていくのが定石だと思うんですけど、ひかるとララは逆にしようと。宇宙人のほうがしっかり者で、地球人のほうがハッチャケてる（笑）。最初こそ、ララのたたずまいや語尾が際立ちましたが、実はララは普通の子なんです。そこは、ごく初期に提案したことでした。

柳川　私が書いた最初の企画書では、「地球にやってきていろいろなものに驚くヘンテコな宇宙人の子」と「常識人な優しい子」という設定でした。でも、その後の展開を考えると、その性格を入れ替えたほうが面白いし、目新しさも出るだろうという話になりました。

―ララと言えば、第1話でひかると出会った途端、吐いてしまうのもインパクトがありました。

村山　宇宙ものだと、出会った瞬間に「あ、宇宙人だ〜！」って驚くのがパターンなんですけど、そこも逆張りをしたくて、こういうギャグを入れてみました（笑）。

―ひかる回でいうと第35話の生徒会長選挙。まどかを意識しすぎて「自分らしさ」を見失う話でした。ひかるがブレるというのは珍しいですね。

村山　ひかるはずっと我一人でやってきた人だけど、プリキュアになって以降、みんなと交流していく中で、「人と比較する」ことを覚えちゃったんです。それまでは自分と他人を比較したことはほとんどなかったと思うのですが。裏を返せば、それはひかるが成長した証でもあります。ひかるの本質は変わらないけど、いろいろな価値観を吸収して、様々な見方ができるようになり、結果自分らしさがブレてしまったということです。

―選択肢が広がることで立ち往生に陥ることは、確かにあります。

村山　そこは観ている子どもたちにもありえる話だろうなと思って。ひかると一緒に、一年を通して徐々に周りが見えてきて、ものを考えるようになってくれたらいいなと。

―この回では、桜子もフィーチャーされました。実はマジメすぎるが

プリキュアもフワもパワーアップ

第31話でフワが成長姿に。これはペガサス？　ユニコーン？「どちらとも言えますね（笑）。今期はぬいぐるみが年末向けアイテムになるというのと、妖精の成長姿をペガサス型というかユニコーン型にしようと、営業的な観点から決めていました。だから第1話の段階で、フワの本名（スペガサッス・プララン・モフーピット・プリンセウィンク）をつけてもらったんです」（柳川）。続く第32話で、プリキュア5人もパワーアップした。この時に必要な新アイテムが、シャイニートゥインクルペンだ。「12本のプリンセススターカラーペンがそろったことで生まれるペンなので、なるべく12星座やプリンセスに紐付いたデザインがいいのではと。そのため、キャップの形をスターパレスのようなハート型にしたいと、アニメ側から玩具会社さんへお願いしました」（柳川）

シャイニートゥインクルペン

ララの兄・ロロ

ララの母・カカ

ララの父・トト

惑星レインボーの長・オリーフィオ

プルンスはプリンセスに仕える一族

12星座のプリンセスの元からやってきたという宇宙妖精プルンス。彼は元々、スターパレスの住人なのだろうか？　「プルンスの種族は、基本的にスターパレスの衛星で暮らしています。本星にいるプリンセスに仕えており、本星に行けるのは彼らだけです。たとえば星空連合に対し、何かプリンセスたちの言葉を伝える時は、彼らが代表して出てきます」（村山）。星空連合の代表・トッパーが「プルンス殿」と敬うような態度をとるのも納得だ。またプルンスは、歴代シリーズの妖精と比較して、戦闘シーンでもかなり活躍している。「そこは多様性というテーマから、プリキュア以外のキャラクターも活躍させたくて。スターロケットのAIも含めてそうですね」（村山）

点と点が距離を持ったままつながる
まさに空に輝く星座そのもの

ゆえの行動でもあったと。

村山　本当にマジメですよね（笑）。桜子にスポットを当てたのは、ララがトゥインクルイマジネーションに目覚める第40話からの逆算で、「学校の友達も描いていこう」という流れです。それで、生徒会長選挙の話がいいんじゃないかという話になりました。

——一方のまどかは文武両道で、弓道や茶道といった得意なこともたくさんある。それでも自信を持てず心が揺れ動くのが興味深いです。

村山　まどかも自分に自信がない子なんですよね。

柳川　確かに、試合やコンクールでもちゃんと賞は取れているのに。

村山　結局、まどかは言われたことをこなしているだけで、自分の意志でやっていなかったからでしょう。だから達成感も薄い。それに気がつくのが、まどかがトゥインクルイマジネーションを手に入れる回になると思います。これまでのモヤモヤはそこにあったのだと。父親に言われた通りに様々な経験を積んできて、それ自体には感謝しているけれども……というドラマですね。

「盗み」という行為になんらかの決着を

——第36話は秋映画との連動回で、アン警部補が登場しました。怪盗を追いかける三枚目刑事というシチュエーションは、TV側でも考えていたんですか？

村山　いえ、そのアイデアは完全に映画側から出たもので、第36話は連動回です。ただ、普通にアン警部補を出すだけではなく、「怪盗ブルーキャットを再び描きたい」「ただの映画連動回ではなく、ユニの成長のドラマも」「第15話で出た宇宙マフィアのドン・オクトーを出したい」などのアイデアを入れ込んだ感じです。

柳川　TV側では、刑事との追いかけっこは特に考えていませんでしたが、ユニの盗みという行為に対しての決着はどこかでつけたかったので、映画のアイデアを取り入れて形にしました。刑事と怪盗がお互いの正義をぶつけ合い、ユニが盗みという行為について考え直すという。

——第39話、テンジョウが英語教師に変身し、えれなを揺さぶるのはケッサクでした。

村山　テンジョウをえれなと近づけたくて、学校の先生になってもらいました。ただ、ジョー・テングという名前はどうなんだろう（笑）。でも、最初はもっと変わった名前だったと思います。

——ここで初めて、えれな自身もヒスパニック系であることに悩んだ過去が語られました。テンジョウはそこを抉ろうとしたけれど、えれなは前向きに解決してしまいました。

村山　実はこの後、えれなとテンジョウの関係性で話が進みますので、その端緒となる回でした。えれなの内面で言えば、サボロー回での悩みがあって、ジョー先生回があって、そして次へと進んでいく形です。テンジョウもここで初めて、プリキュアの中の一人ではなく、天宮えれなという個人として認識しました。ここからどんどん、各プリキュアと幹部たちの1対1のドラマに分岐していきます。

——「カッパードvsひかる」はどのようにして決めたんですか？

村山　初めからひかると因縁を持たせるというのは決めていました。カッパードが最初に出会ったのが、ひかるとララです。そこからひかるはどんどん成長していきましたが、カッパードは何も変わっていない。同じ場で出会ったのに、それぞれの道が違ってきてしまったというのを描きたくて。

柳川　ひかるは、最初にカッパードを見た瞬間、「カッチョイイ！」と感激していたんです。つまり、一度はなんのためらいもなく彼を受け入れようとしたんですね。

村山　それなのに、ボタンが掛け違ってしまったということです。

——宮元監督の話によると、作品キーワードとして「守る」というものもあるそうですが。

村山　第32話でフワが「プリキュアを守るフワ!」と言って技を発動するのも、そういう狙いからです。「プリキュア」も初期のシリーズでは、今ほどの世間的知名度はありませんでした。それまでの女の子向け作品に対してのカウンターで、女の子たちが懸命に「守る！」と言って、泥臭く戦う姿がぐっときたんだと思います。でも、それが今はこんなに華やかだし、もはや「プリキュア」はたくさんの方が知っている作品です。カウンターではなく、他作品に挑まれる側、追われる側になりました。その「プリキュア」の立ち位置、印象は少なからず作劇に影響していると思っています。すでにお客さんは「プリキュア＝強いヒーロー」というイメージを持っているわけで、たとえ劇中で、ごく普通の中学生の女の子として描いても、プリキュアと名がつくだけで、「どうせお強いんでしょ？」感が出てしまう。特に「守る」という言葉は、プリキュアの初期と今とでは、違って聞こえるのではないかと。挑む側と挑まれる側が言う「守る」の意味合いは、全然違いますから。今回は16年目の「新しい一歩」ということで、「プリキュアにとっての『守る』とは何か？」を一度解体してみたいと思ったんです。

——そこで、小さなフワも体を張って立ちはだかると。

村山　そうです。ガルオウガが「お前らが『守る』など、おこがましい」といったことを言い放ちますが、それによって「『プリキュア』での『守る』」をあらためて定義しようと。それから僕としては、今回は「絶対」という言葉はなるべく使わないと決めていました。よく、プリキュアは「絶対」という言葉を言い放ちますが、実を言うと、『プリキュア』シリーズに参加した当初から、作中で「絶対」という言葉が使われることにしっくりこなくて。初代の『プリキュア』の頃から、多様性は一つのテーマでした。「絶対」はテーマと相反するのではないかと。特に今回は「相対」という形での多様性を描くと、明確に方針として打ち出しています。そのため、「絶対」という言葉は使わないようにしようと。『まほプリ』の時には、「あらためて『プリキュア』という作品を、小さな子にも分かるように描いてくれ」という命題があったので、プリキュアの決めゼリフにもよく使われる「絶対」は封じませんでしたが、今回は満を持してという感じです。

——フワについて言うと、実はトゥインクルイマジネーションの器であると明かされ、第1話からノットレイダーがフワを奪おうとしていた理由がようやく分かる仕掛けでした。

村山　その辺のドラマも終盤に用意しています。「器の中に満たす物は何か？」という発想でトゥインクルイマジネーションを設定しました。

——では最後に、今後の見どころをお聞かせください。

柳川　冒頭も言いましたが、ここからはこれまでの積み重ねの回収ターンです。脚本も最終回まで完成しました！　気持ちとしては、まだまだキュアスターたちとさよならしたくはないのですが……制作スケジュールもあるので、とりあえず脚本が上がってよかったなと（笑）。

——最終クールの展開は、かなり綿密に作られていそうですね。

柳川　そうですね。これまで積み重ねて描いてきた感情や設定など、初期からの構想に向かって走っていきますので、どうか最後まで観てもらいたいです。

村山　ただですね……初期の頃に大まかに考えていた到達点に、キュアスターは4クール目の途中で行き着いちゃったんです（笑）。「キャラが動いた」と言えばカッコいいんですけど、流れ的には「ここまで成長しちゃうよね」という話になってしまって。

柳川　それで、そこから「もう一展開必要だ」となりました。

村山　僕らも想像してなかった「その先」の展開やテーマを、キュアスターから教えてもらいました。それはお楽しみにということで。

あえて様々な家族の形を描く

今作のプリキュアの家庭環境は、えれな以外は大なり小なり、問題を抱えているのが特徴だ。「実はえれなの家庭も、それなりに不安定な要素もあるということが今後見えてきます。何にせよ、いろいろな家族の形があるということです。えれなの家ではお父さんが花屋を切り盛りし、お母さんが外で働いているというのも、意識的に決めました。いわゆる普通の家庭とは違う感じにしたくて」と村山さん。ひかるの家も、父の話題が出ると祖父が嫌な顔をして空気が悪くなるというのは、なかなかに攻めた描写だ。「実はひかるの家は、当初は片親設定にしたかったんです。歴代シリーズでもピンク以外の家庭がそうだったりしましたが、今回はピンクをそうしたくて。最終的には、父親がずっと家を空けている形に落ち着きました」（村山）

ひかるたちは隣人同士 ノットレイダーは疑似家族

——ノットレイダーの幹部たちは、みんなつらい過去を背負っています。ダークネストは、そんな彼らにとっての救世主だったのですね。

村山　ノットレイダーの幹部って、本当は悪い人じゃないんです。「虐げられし同志」ということで、仲間意識も強い。ダークネストにしても、ガルオウガが失敗しても叱責しませんしね。迫害を受けてきた「他人同士」が、肩を寄せ合って一緒に暮らしている「疑似家族」なんです。逆にひかるたち5人は、家族的なつながりがなくても仲良くできる「隣人同士」です。『まほプリ』とは違う多様性として、こういう構図が作れるのではないかなと。僕の中でも明確になったのは、第10話くらいでしたが。

——それで、ひかるたちの関係は、「点と点」なんですね。

村山　ひかるも、ララやユニに「一緒に住もうよ」とは言いません。ある程度の距離感を保ったまま、お互いの意思を尊重する。でも、いざという時は協力し合う。『まほプリ』が終わってからのこの3年で、世の中の空気は少し変わりました。今や「同じ思想の持ち主同士だけで結びつこう」といった排外的な考え方が、世界中に広がりつつあります。そんな、きな臭さのある現代だからこそ、「それぞれの考え方は違っても、みんなで一緒にやっていこうよ」ということを描きたくて。イデオロギーの違いがあっても、純粋に隣人同士仲良くしていこうよと。子ども向け作品だからこそ、家族という名のナショナリズムでは括るべきではないと思ってのことです。

TV 設定資料 SELECTION

TVシリーズの主なキャラクター表（線画設定）を、他のページで未掲載のものを中心に、ご紹介。また、服装類だけでなく見た目の楽しい作画参考設定も掲載した。

キュアスター／星奈ひかる

キュアスターの三面図。ツインテールの先端の土星パーツは、初期案ではもっと小さかったが、「子どもたちにとって『スターはこれだ！』というパーツがあると描きやすいと思って」という宮元宏彰監督の要望から、巨大化されて目立つ形に

スカートの下はモフモフパニエ

第37話までのひかるの私服。星マークがどこかにあるのがひかるの服の共通項。「高橋晃さんの私服デザインがすばらしかったので、このイメージを強く残したくて」（宮元）とのことで、夏服はまどか以外作られなかった

観星中学指定の通学カバン。制服姿の5人は通学カバンで個性が出るよう考えられている。ひかるは肩掛け

観星中学の制服（夏と冬）。夏服は第33話のみに登場

第12話のアブラハム監督の映画撮影で着た、くノースタイル。ボトムは、ひかるらしくキュロット型

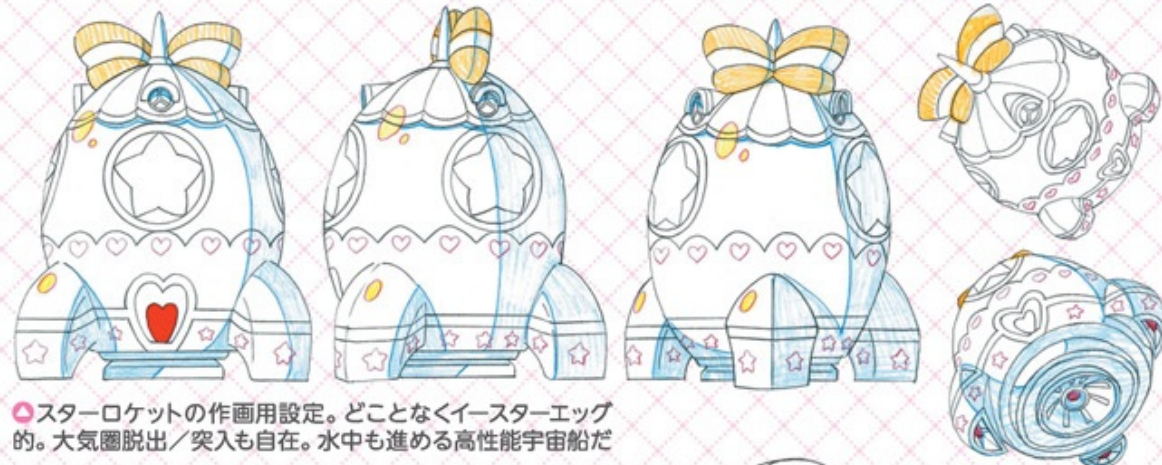
実は私服よりも先に本編に登場するルームウェア姿。パジャマとしても使っている

第15話、ゼニー星のオークション会場でのフォーマルドレス。発売中のドール玩具「プリキュアスタイル」の着せ替えドレスのデザインを基本的に用いているが、星型のブレスレットやアンクレットはアニメ独自のもの

観星中学の体操服。男子用もそれほど大きくは違わない。本編でのひかるの着用は第16話が最初

望遠鏡アイテム「リズムスコープ」。スターロケットの装備品で、ロケットの窓から星を観察する際に使用

10歳のひかる。現在よりも快活そうなオーバーオール姿だ。このキャラ表は第18話用で、第22話はこれとは若干服の細部が異なる

スターロケット／ララのロケット

スターロケットの作画用設定。どことなくイースターエッグ的。大気圏脱出／突入も自在。水中も進める高性能宇宙船だ

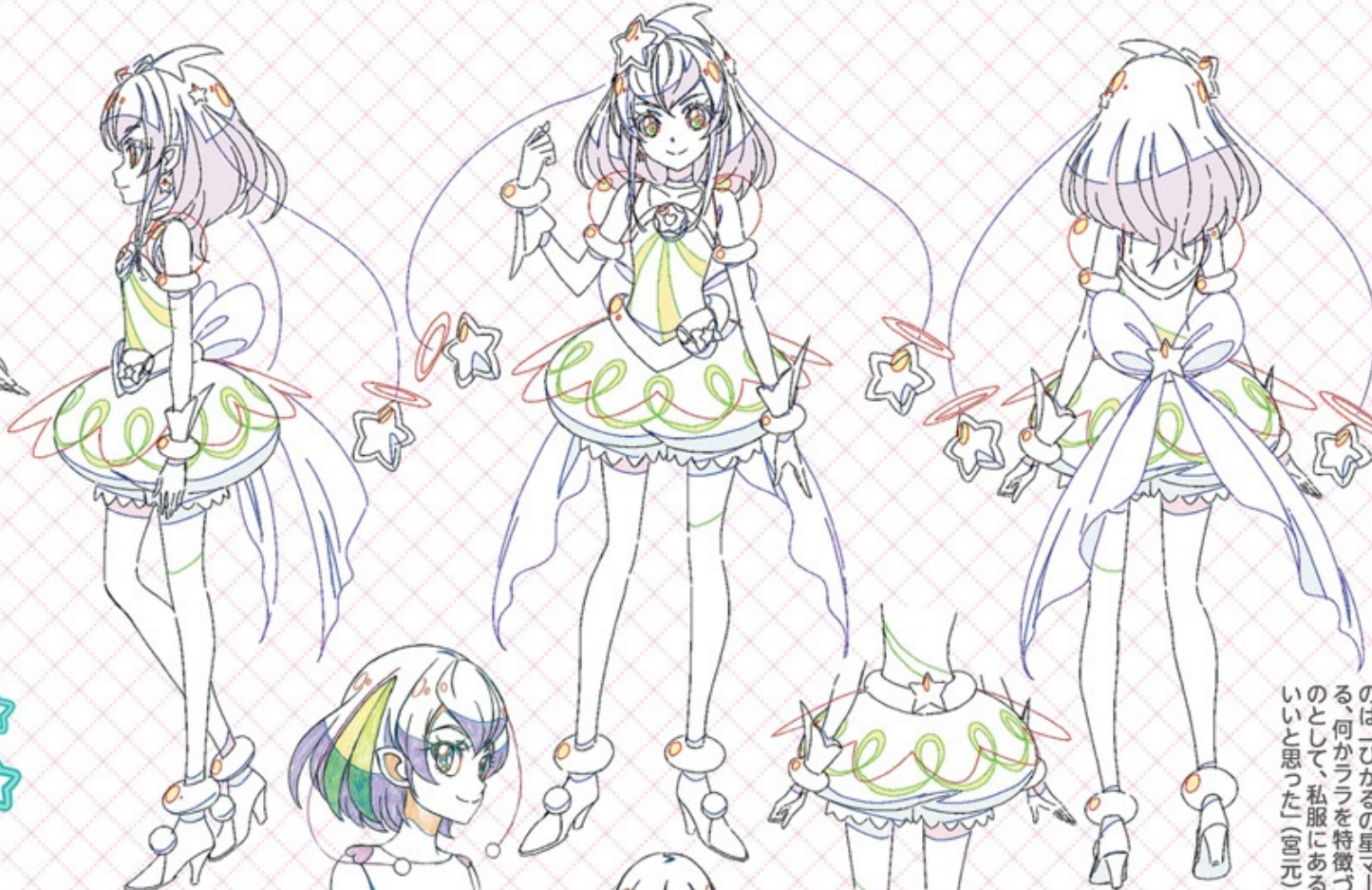
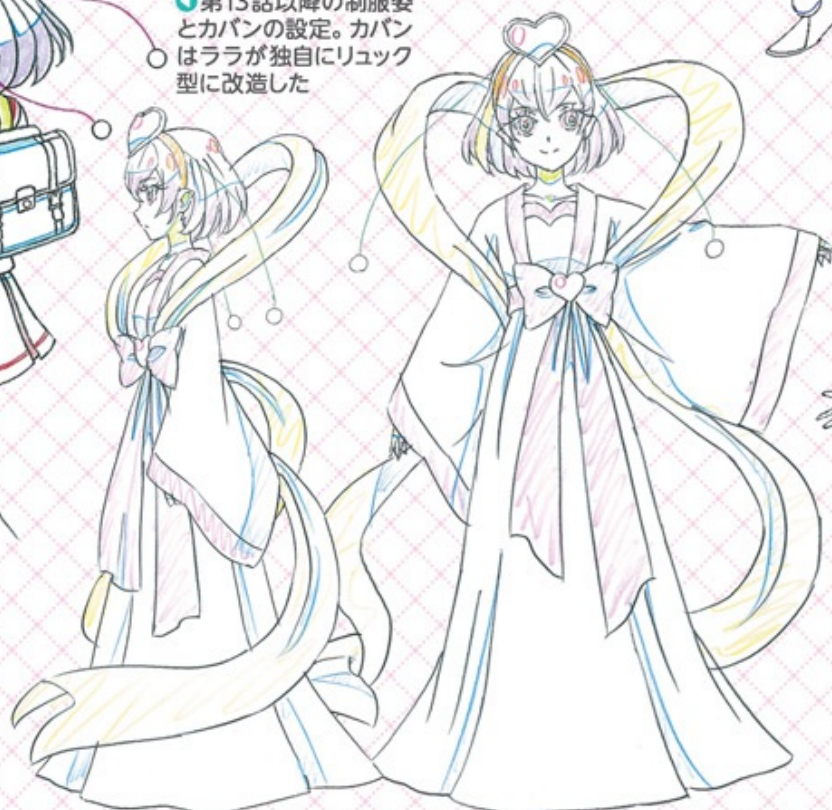
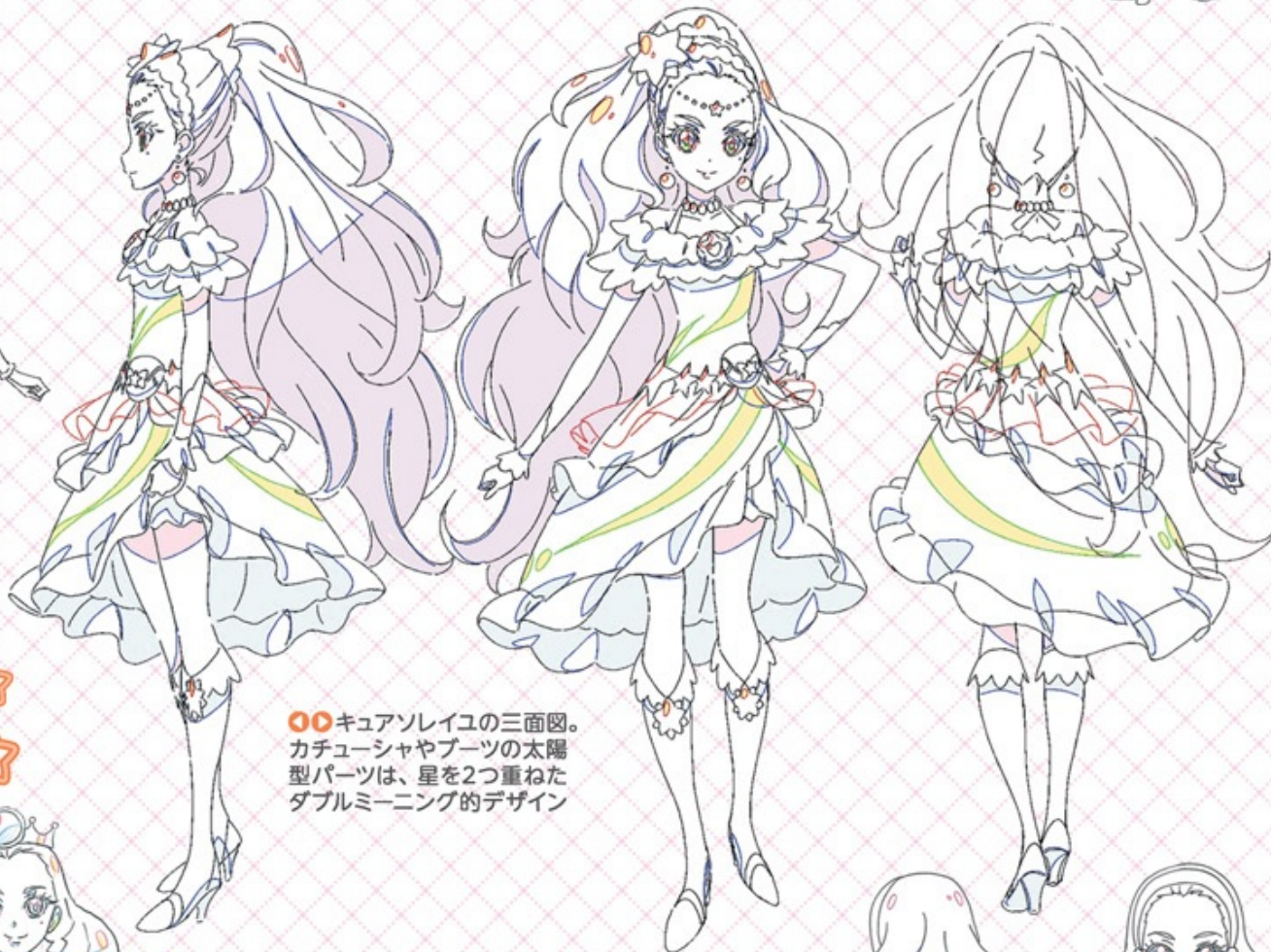
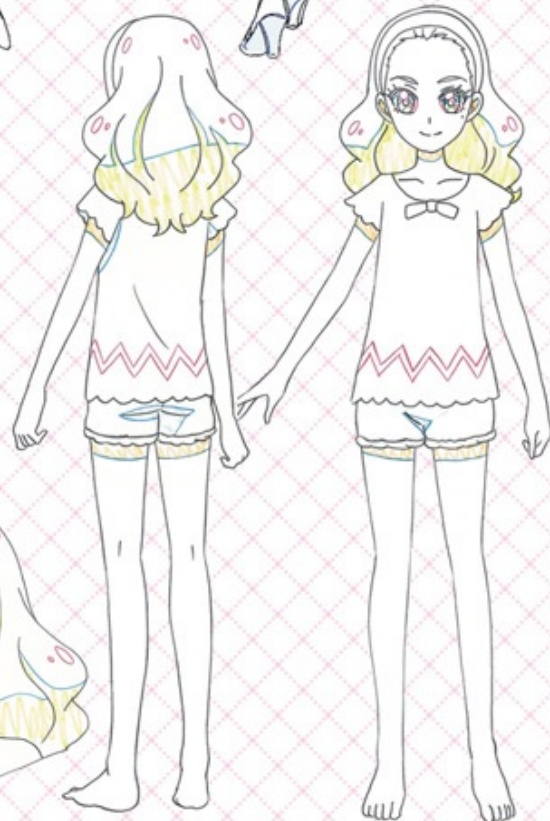
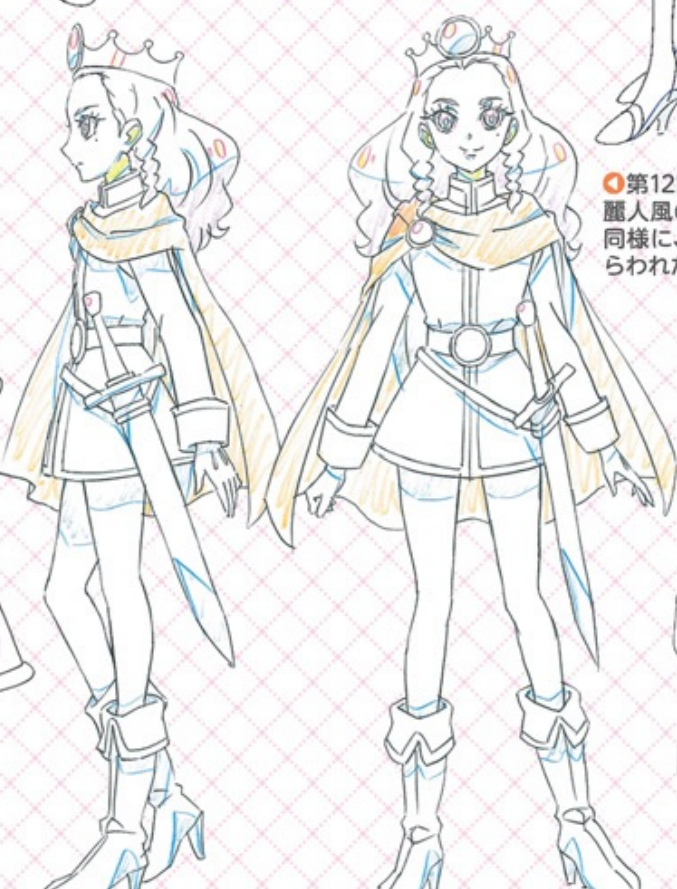
ララが乗ってきたロケット。船としての性能自体は改装後と同一。惑星サマーンでは一般的な機体だ

第27〜28話でのダメージ状態の推進装置

ひかるのノートが変化した「トゥインクルブック」。フワの寝床でもあり、星座ペンでフワの好物を実体化させてお世話する

第25話のお祭りシーンの参考設定。ヨーヨー釣りをテンション高く楽しむ姿がかわいい

第22話での6歳のひかると8歳のひかる。6歳のほうは探険姿なので長ズボン。8歳の時はスカートの下にレギンスをはいている

♥キュアミルキー／羽衣ララ
第37話までのララの私服。腰のポーチはコスモグミのケース。グローブはAIとのインターフェイスとしてデザインされた。「どうAIとつながっているか、面白く見せたくて。ちょっとレトロな見せ方ですが（笑）」（宮元）
キュアミルキーの三面図。変身時のシンボルサインがハート型なのは「ひかるの星マークと対になる、何かララを特徴づけられるものとして、私服にあるハート型がいいと思った」（宮元）ため
第13話以降の制服姿とカバンの設定。カバンはララが独自にリュック型に改造した
第13話でララが使ったモップの、遊び心ある対比参考設定。使い慣れていない表情がポイント
第12話の映画撮影で着た天女の衣装。この撮影が「羽衣」という地球での名字に結びつく作りも心憎い
第26話でのおやすみスタイル。実は私服のジャケットを脱いだ状態。ララの服は変形するという裏設定が活かされている
第15話のオークション会場でのドレス姿。キュアミルキーの服の意匠が用いられている
第25話のお祭りシーンの参考設定。あんず飴との対比参考だ
おョ…
キュアソレイユ／天宮えれな
第37話までのえれなの私服。ショートパンツは、「軽やかに動けるイメージが欲しかった」という宮元監督の要望によるもの
キュアソレイユの三面図。カチューシャやブーツの太陽型パーツは、星を2つ重ねたダブルミーニング的デザイン
第12話の映画撮影で着た、男装の麗人風の王子衣装。ひかるとララと同様に、頭に各自のモチーフがあしらわれたアクセサリーを着けている
第14話や第26話での寝間着姿。私服の雰囲気と共通させたデザイン
制服姿。えれなのみ学校指定のカバンではなく、ピンクのナップサックを通学カバンとして用いている。ララの改造カバンも含め、通学カバンについては自由のようだ
第15話のオークション会場でのドレス。頭のリングや一部シースルーのスカートなどが宇宙的
第25話のお祭りシーンの参考設定。輪投げで超絶テクニックを披露する得意げな顔がミソ

キュアセレーネ／香久矢まどか

◀キュアセレーネの三面図。基本属性の月と、ブーツ等の花型の雪の結晶パーツとで「雪月花」になっている

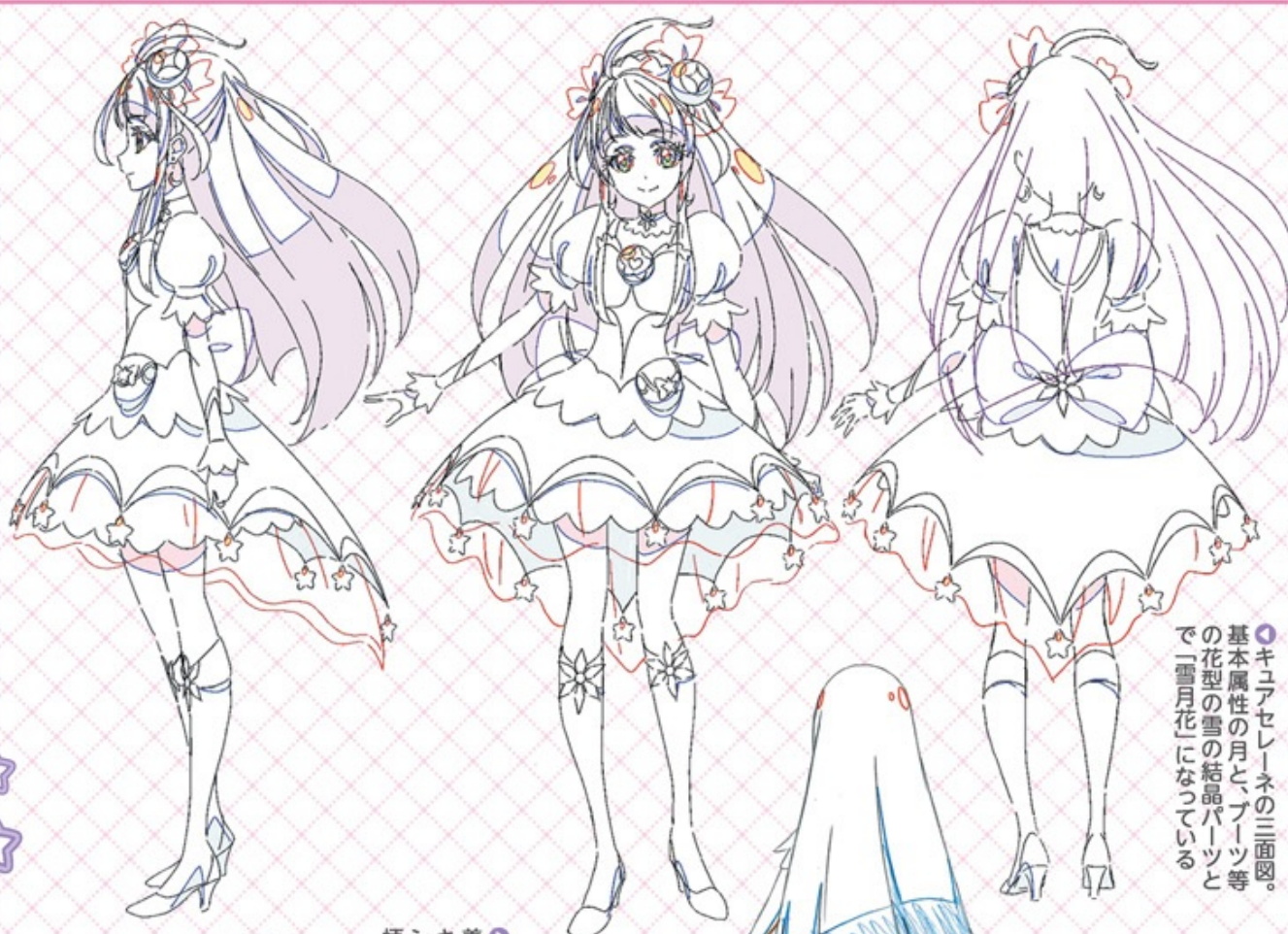
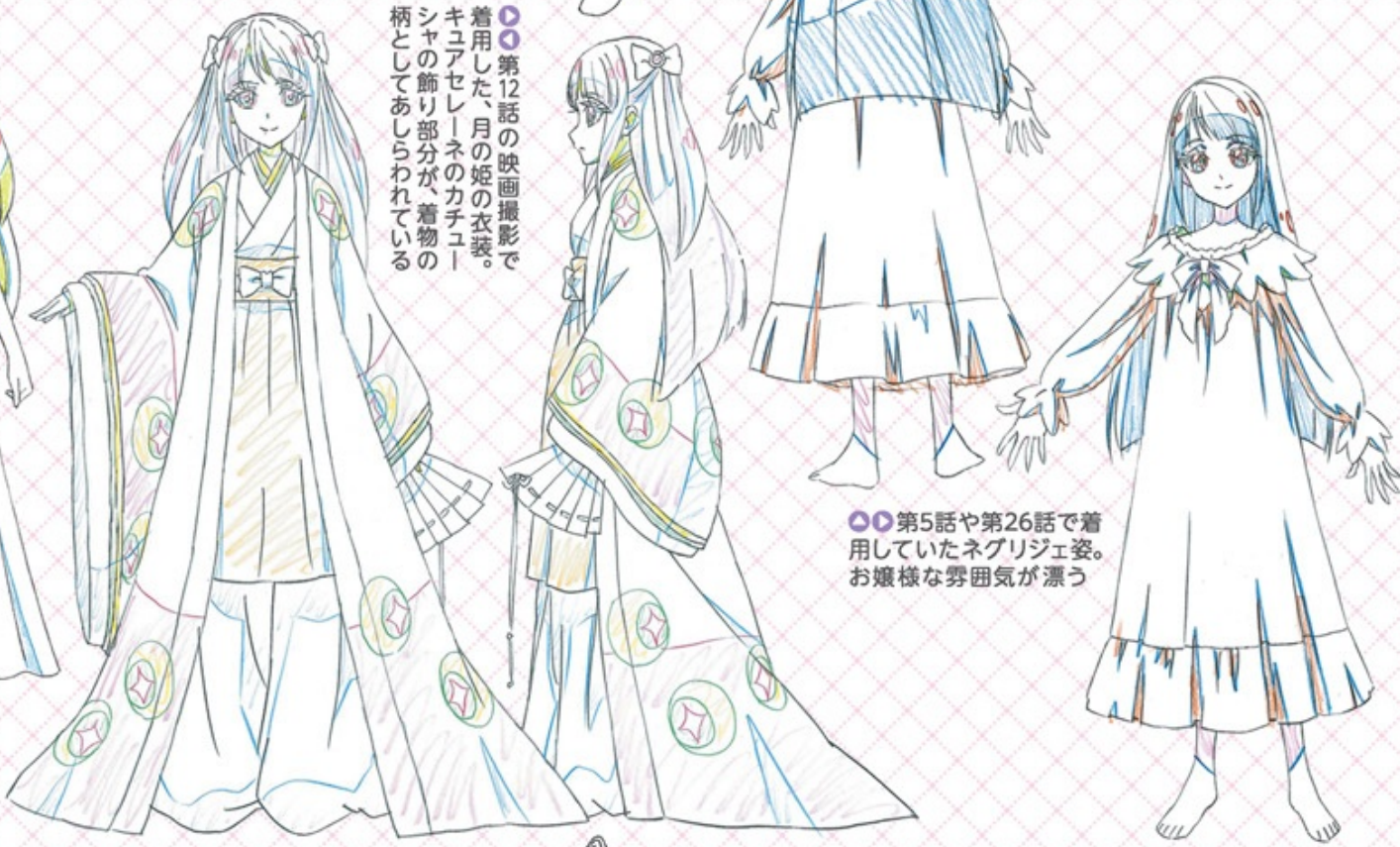
第37話までのまどかの私服。「きっと香久矢家御用達の特注デザインです」（宮元）とのことで、ベルトに香久矢家の家紋がある

▲制服と通学カバン。学校指定のカバンを手提げ型にして使っている

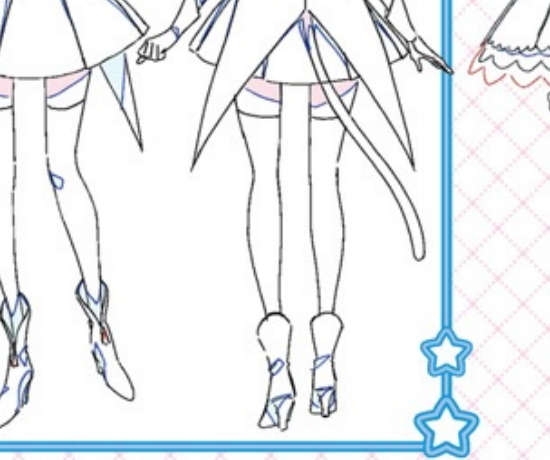
▲第22話～第33話で着用した夏服。「まどかだけはちょっと暑そうだったので、半袖に変えました」（宮元）

◀第25話のお祭りシーン用の参考設定。浴衣の袖をタスキでたくし上げた腕まくりの参考と、射的用ライフルとの対比設定だ

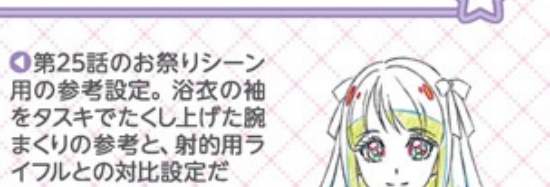
◀▼弓道シーンの弓矢の構え方等の参考設定。真剣な顔立ちが凛々しい

▶第24話の、ピアノコンクールに出場した時のフォーマルドレス

▶◀第12話の映画撮影で着用した、月の姫の衣装。キュアセレーネのカチューシャの飾り部分が、着物の柄としてあしらわれている

▲▶第5話や第26話で着用していたネグリジェ姿。お嬢様な雰囲気が漂う

キュアコスモ／ユニ

第37話までのユニの私服。ブルーキャットの姿から、シルクハットとサングラスを外した形だ

▲レインボー星人本来の姿

◀▶キュアコスモの三面図。シンボルマークの三角形は、高橋さんの発案によるもの

▼第23話では、専用（?）のハンディカラオケマイクも使った

▼第25話のお祭りシーンの参考設定。金魚すくいのポイが破けてショックなギャグ顔が愉快

◀第26話のルームウェア姿。ひかるの服を借りたためロケット柄だ

◀▲ユニが変化に使う香水瓶。キュアコスモのアイテムが香水瓶型（レインボーパフューム）に決まり、それに連動させる形でユニも香水瓶を用いることになった

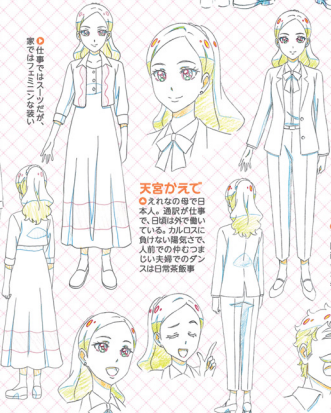
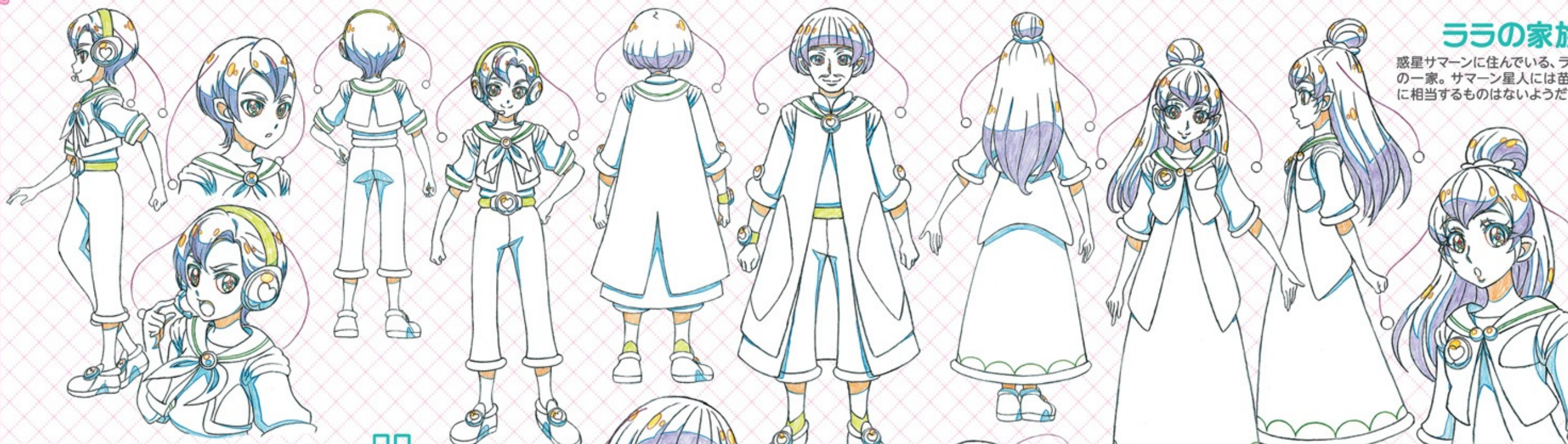
▲ブルーキャットが使うカード

◀ユニの単座の宇宙ジェット。惑星レインボー脱出時からの愛機だったが、第21話でアイワーンに奪われる

◀怪盗ブルーキャット。ネーミングの由来は『猫だから『キャット』、キャラカラーが青ベース、闇夜に映える怪盗として『ブルー』がカッコいい』（宮元）というもの

▶ユニの変装である、宇宙アイドルマオ

フワ
トゥインクルブックから出す食事類。フワが嬉しそう!
第31話ラストからの成長後のフワ。フォルム自体、大幅に変わったが、尻尾の先端の星型は、幼い時と共通パーツになっている
幼い時のフワ。「成長後にペガサス型になるため、幼い段階から背中に羽をつけておきました」(宮元)
プルンス
円盤に乗って移動するのが基本。「スライム型の頭にタコ足というのは当初から決めており、そこに作品モチーフの星を付けました」(宮元)
第37話のハロウィン仮装イベントでのプルンスとフワ。脚本では「ゼリー人間と犬」と書かれている
第36話でドン・オクトーのパーティ会場へ潜入する際の変装姿。「宇宙マフィアのボス=ドン・フワフワ」という即席設定も愉快
ひかるたちの人魚姿
第27話、へんしんじゅで人魚姿に。プリキュアの変身バンク的な変身シーンは、絵コンテ段階での工夫。高橋さんが第27話の作画監督でもあったため、変身シーンも作監を入れている
イメージした姿に変化させる「へんしんじゅ」。ひかるが人魚より先に半魚人を思い浮かべるギャグは絵コンテでのアドリブ
アブラハム監督の正体であるミニチュラ星人。第12話以降、いろいろとひかるたちに便宜を図ってくれる
ミニチュラ星人は、ロボ(監督のボディ)の腹部で操縦している形だ
アブラハム監督
ひかるが大好きなSF映画を撮り続けてきた、ハリウッドの超大御所監督。宇宙星空連合の調査員で、100年前から地球を監視してきたが、映画に魅入られ今に至る
姫ノ城桜子
第4話から登場の、ひかるのクラスメイト。第16話初出の「観星中の金星」の自称は脚本段階からあるが、金星が顔になるインパクト満点の絵面は、絵コンテ段階で加えられたギャグ
空見遼太郎
観星町の天文台のおじいさん。ひかるの理解者で、ララやプルンス、フワが宇宙人と知っても、柔軟に応対し受け入れる。また、ひかるの祖父とは幼なじみで、「はるちゃん」「りょうちゃん」で呼び合う仲
第25話での甚平姿。桜子の浴衣姿は脚本段階で指定。タツノリの甚平姿は演出段階で決められた
軽部タツノリ
第13話から登場のひかるのクラスメイト。人懐こい性格だが、ちょっと軽薄なノリなので、「カルノリ」と呼ばれている。ワイシャツは裾出し
第25話での浴衣姿。名前に合わせた桜柄だ

星奈家
ひかるの家族。普段は祖父母と母親の4人暮らしだ
星奈陽子
ひかるの祖母。柔和でフランクな性格。息子の陽一の生き方に対しても理解を示している
星奈春吉
ひかるの祖父で陽一の実父。家庭を顧みない息子に批判的で、ひかるの不思議好きも快く思ってはいない
星奈陽一
第22話に登場した、ひかるの父。職業は大学教授だが、フィールドワーク好きで、世界の不思議スポットを巡り研究調査をしている。「キラやば〜っ☆」は元は陽一の口癖というのは、脚本段階から決められていた
星奈輝美
マンガ家の卵であるひかるの母。明るい性格
4年前の輝美と陽一。当時の陽一は、大学で普通に教鞭を執る日々であった。4年前の陽一は第22話に、輝美は第18話と第22話に登場（この服装は第18話のもの）
天宮家
えれなの家族。観星町の商店街でフラワーショップ「ソンリッサ」を営む
天宮とうま
えれなの弟（天宮家の長男）、9歳。家族の陽気な気質に、年相応の恥ずかしさを感じている
仕事ではスーツだが、家ではフェミニンな装い
天宮かえで
えれなの母で日本人。通訳が仕事で、日頃は外で働いている。カルロスに負けない陽気さで、人前での仲むつまじい夫婦でのダンスは日常茶飯事
カルロス
えれなの父でメキシコ人。ラテン系の陽気な男性で、初対面の人にすぐさまハグするフレンドリーな性格。日本語が達者でギターも得意
天宮れいな
えれなの妹（天宮家の次女）、7歳。フワを「動くぬいぐるみ」と思っている
天宮あんな
えれなの妹（天宮家の三女）、3歳。両親がダンスをし始めると一緒になって踊り出す無邪気な子
天宮たくと・天宮いくと
えれなの双子の弟（天宮家の次男・三男）、5歳。Tの字のシャツがたくとで、Iの字のシャツがいくと。イタズラ盛りな年頃
香久矢家
まどかの家族。先祖代々、国家の要職に就いてきた名家。大きな屋敷での家族3人暮らしだが、メイドや執事も多く仕えている
香久矢満佳
まどかの母。ピアニストでおっとりした性格。家庭での冬貴との会話はあまり多くはないが、気持ちは通じ合っている
香久矢冬貴
まどかの父。あまり感情を表に出さない厳格な男性だが、内心は娘想い。政府の要職にあり、宇宙人調査を行ってきた

ララの家族

惑星サマーンに住んでいる、ララの一家。サマーン星人には苗字に相当するものはないようだ

ロロ

ララの双子の兄で、ランク1の調査員。プリンセスの力を発見し、表彰を受ける。AIのインターフェイスはインカム型。両親同様、ララをちょっと子ども扱いしている

トト

ララの父親で、有能なAI研究員。AIのインターフェイスは腕時計型。マッシュルームカットが特徴

カカ

ララの母親で優秀なロケット技師。AIのインターフェイスは胸のバッジ。地球人だとお姉さんに見える、若い見た目。釣り目気味だが、ララより目尻はやや下がり気味の優しい目をしている

サマーン人

惑星サマーンの住人たち。全員瞳孔は星型で、語尾は「ルン」。ほとんどの人は、いわゆる徒歩ではなくホバーボードに乗って「歩く」

第29話のサマーン人のモブ参考設定。5歳児から30歳までの男女

サマーン人のホバーボード。ララとの対比参考が愉快。「第1話のララの宇宙酔いは、単純なギャグシーンですが、ホバーボードに乗れないという第29話の設定につながりました」(シリーズ構成・村山 功)

クク

ランクSの調査員である、ララの直属の上司。ひかるたちを星座ペン強奪犯と勘違い

星空界の人々

各話のゲスト宇宙人たち。「多様性という作品テーマなので、不思議な感じの姿がいいだろうなと」(村山)のことで、意識的に非ヒューマノイド型が多くしている

第27話、へんしんじゅの力で人魚姿になったヤンヤン

ドラムス

第15話、第17話に登場の、ゼニー星に住む大富豪のボンボン

フレア

第28話に登場した、プラズマ星(火の星)からプルルン星(水の星)に来た鍛冶職人。機械修理の名人で知られ「親方」と呼ばれている

クム

第10話の惑星クマリンの住人。クマムシ型やズーズー弁口調は、脚本段階で考えられたキャラづけ

ヤンヤン

第26〜28話に登場の、プルルン星の女の子。関西弁風の口調は脚本での指定

ドン・オクトー

第15話、第36話に登場の、星空界のマフィアのボス。怒ると茹でダコのようになる

友好的感情の発露でマンボ服風になったサボテン星人。下はラストシーンをイメージした対比参考だ。「サボローと本当に理解し合えたかは誰にも分かりませんが、未来がちょっと見えた感じで終われたかなと思います」(宮元)

ハッケニャーン

ウラナイン星に暮らす、全盲の星読み師。ユニに深い啓示を与える。「バケニャーンのキャラも良かったし、バケニャーン役の上田燿司さんだけが第21話で番組卒業なのはちょっと寂しいというのもあり、生み出されました」(村山)

サボテン星人

第34話に登場した、さすらいの植物型宇宙人。言葉を発さず、ジェスチャーで意思疎通する。「『完全にボイスなし』は挑戦でした。『リアクションの声くらいはあったほうがいいのでは』とも言われたんですが、声がないからこそ意味があるキャラクターですからね」(宮元)

トッパー

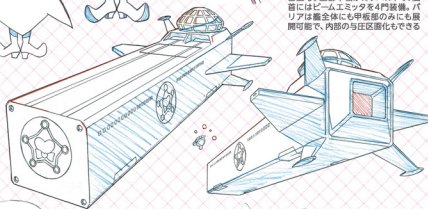
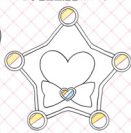
第29話～32話に登場。宇宙星空連合のリーダー。背の低い中年男性という外見や、「～でアル」という語尾は脚本での指定

宇宙星空連合

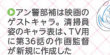
惑星サマーンなど、星空界の多くの星が加盟している共同体組織。宇宙における様々な共通ルールを策定している

宇宙星空連合のマーク

トッパーが乗る宇宙星空連合の宇宙空母。上部甲板がカタパルトで、艦首にはビームエミッタを4門装備。バリアは艦全体にも甲板部のみにも展開可能で、内部の与圧区画化もできる

アン警部補

星空警察所属の新米警部補。第36話、ドン・オクトーのパーティに清掃員として潜入捜査。本人的にはもっと派手な任務をこなしたかった模様

アン警部補は映画のゲストキャラ。清掃員姿のキャラ表は、TV用に第36話の作画監督が新規に作成した

オリーフィオ

惑星レインボーのリーダーで、不老不死に近い存在。意図的に中性的な雰囲気でデザインされている。「レインボー星人は、もともと他の種族から気味悪がられ虐げられてきた人たちで、荒れた惑星に行かざるをえませんでした。そのため、他の星の人たちとの交流もなく、信用もしていませんでした」（村山）。ユニが他人に対して距離感があるのは、そうした環境にも起因している

観星町（地球）の人々

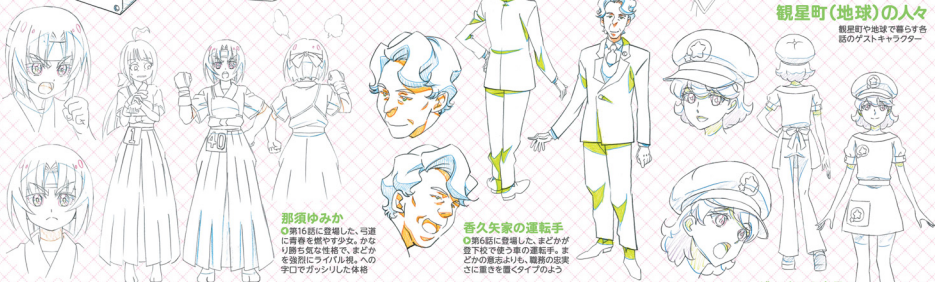
観星町や地球で暮らす各話のゲストキャラクター

那須ゆみか

第16話に登場した、弓道に青春を燃やす少女。かなり勝ち気な性格で、まどかを強烈にライバル視。への字口でガッシリした体格

香久矢家の運転手

第6話に登場した、まどかが登下校で使う車の運転手。まどかの意志よりも、職務の忠実さに重きを置くタイプのよう

スタードーナツの店長

第3話から登場の、観星町商店街のドーナツ屋の主人。ひかるとは顔なじみ。脚本では中年女性が想定されていたが、本編では若いお姉さんに変更

2年3組のクラスメイト

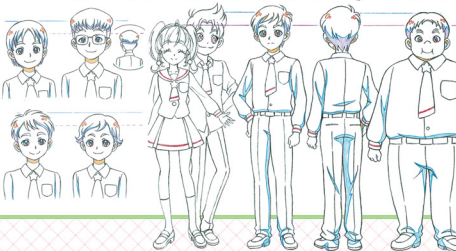
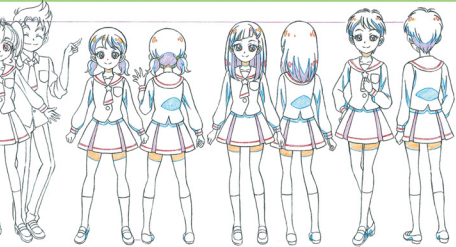
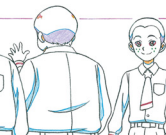
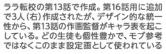
ララ転校の第13話で作成。第16話用に追加で3人（右）作成されたが、デザイン的な統一性から、第13話の作画監督がキャラ表を起こしている。どの生徒も個性豊かで、モブ参考ではなくこのまま設定画として使われている

追川夢男

第18話に登場した、輝美の担当編集者。やる気充分の熱血青年だが、少々日和見気味で、輝美の個性を活かした内容より、流行や売れ筋路線を求めてしまう

ノットレイダー

星空界で侵略行為を続ける集団。宮元監督の「敵も味方も実は似ている」という考えもあり、プリキュア同様にキャラカラーが設定されている

カッパード

▶河童モチーフで、キャラカラーは緑。「頭の皿をスタイリッシュにしようと思ったら、月代（さかやき）みたいになってしまいました（笑）」と高橋さん。敵幹部は身体特徴にコンプレックスがなく、カッパード自身は頭の皿をカッコいいと思っている。そのキャラ性に高橋さんは衝撃を受け、「敵キャラの造形の考え方がガラッと変わりました！」と語る

ガルオウガ

▶幹部のリーダー格。鬼モチーフでキャラカラーは青。本編上での額のマークは単なる飾りだが、「僕としては、額にもう一つ目がある三ツ目キャラで、『額の目が本当の目』というつもりで描きました」（高橋）

ダークネスト

▼ノットレイダーを統べる謎の人物。爬虫類がモチーフ。「強くて怖そうな感じを出すため、ヘビにもトカゲにも見えるキャラです。闇感から、イメージカラーは黒緑。顔がディスプレイなのは、表情を読み取りづらくするためです」（宮元）。謎性を強めるため、声は加工されており、担当キャストも伏せられている

ノットレイダーの戦闘UFO。操縦は雑兵であるノットレイが行う

テンジョウ

▶天狗モチーフの美女でキャラカラーは赤。天狗の鼻を身体的な特徴にはせず、黒い仮面として表現しているのがポイント。「僕としてはできれば、きれいな女性がいいなと思って」（高橋）とのこと。服装は全体に露出度高めのボンデージ系ファッションで、天狗の高下駄を厚底ブーツに置き換えるなどのセンスも絶妙。高橋さん自身もお気に入り

◀アイワーンが開発した、プリンセススターカラーペン探知用のヒットレーダー

バケニャーン

▲化け猫モチーフでキャラカラーはグレー。ユニの変装だが、外見的な関連性は意識されていない。「メインクーンという種類の大きな猫がモチーフです。初期案はもっと猫っぽかったんですが、宮元監督から『若干着ぐるみっぽく』というオーダーがあり、ツルリとしたラインにしました」（高橋）

▲▶テンジョウが出陣する際に乗るみこし。キャラ表の説明によると、担いでいるノットレイは実は手を添えているだけ

▲アイワーンが、ユニの宇宙ジェットを改造した宇宙艇。恨みと怒りのイマジネーションを蓄えた電池を装着すると、アイワーンロボに変形する

アイワーン

▶一つ目小僧モチーフでイメージカラーは黄色。「僕のイメージでは、金平糖です。星っぽいですしね。だから服も含めて、トゲトゲしています（笑）」（高橋）。第27話以降はこの黄色いパーカー姿で登場。「失態をさらしてチームに迷惑を掛けたため、もう戻れないと思っているんです。そこから、外界をシャットアウトした『フードで顔を隠すイメージ』が出てきました」（宮元）

第39話、テンジョウがへんしんじゅの力で地球人姿に変化。英語教師のジョー・テング

▲第38話でのアイワーンロボ23号。第27話の16号を強化改造して、突撃用ブースターが追加された。なお、アイワーンロボがガウォーク型なのは、第27話の担当演出のアイデアによるもの

▶第37話の幼い頃のアイワーン。当時から孤独だった。「この時に着ていた服は大人用なので、ブカブカなんです。つまり、一緒にいたはずの大人はどうなったのか……想像してみてください」（宮元）

祝福の歌 旅立ちの歌

MOVIE

『映画スター☆トゥインクルプリキュア 星のうたに想いをこめて』

ある日、ひかるとララは金平糖サイズの不思議な「星」と出会う。その星は、ひかるやララと過ごすうちに、生き物っぽい姿に変わっていった。

ユーマと名付けられたその生き物は、最初はララの言うことを聞いてくれなかったが、ぶつかり合いを経て、強く心を寄せ合ってゆく。しかしユーマは、実はスタードロップと呼ばれる宇宙でも稀少な存在だった。ユーマを我が物にしようと、恐ろしい宇宙ハンターたちが訪れ、プリキュアたちの前に立ちはだかった！

ひかるとララのドラマを軸に据えた本作は、従来の「プリキュア」映画とは異なり、強大な敵とのバトルが物語のピークではない。混乱したユーマをプリキュアが歌でいさめ、美しい星への誕生へと誘う、感動的な一大ページェントが待っているのだ。また、ララがユーマに思い入れていく中で見せる感情の機微が、その壮大なクライマックスをさらに味わい深いものにしている。

ユーマは小さな星の姿に戻り、宇宙の彼方へと帰っていく。別離の切なさはありつつも、その旅立ちを祝う、希望に満ちた余韻が心地よい。

監督 田中裕太 プロデューサー 村瀬亜季

クライマックスは拳のバトルではなく、ドラマチックな歌とダンス！　子どもたちの伸びやかな成長を想う、作り手たちの優しいまなざしが伝わる感動作だ。

1 ノットレイダー登場

OP は地球の周回軌道上での、プリキュア vs テンジョウのバトル。「OP の作画監督は松浦仁美さんですが、アクションの大半は志田直俊さんの担当です。非常になめらかに動くので、すぐに『志田さんだ！』と分かる作画ですね（笑）」（総作画監督・小松こずえ）。「『開幕バトルなので派手に』とお願いしました」（監督・田中裕太）。５人が個人技を披露しながら、その決めカットでキャラ名テロップが入るヒーローものの OP っぽい趣向だ。途中、小さな星が降り注いだり、アン警部補が登場したりと、映画本編への振りもある。アンがビームを撃つトリプルショットもカッコいい。

2 星の子との出会い

ロケットをユニに貸す恰好になり、ララはしばらくひかるの家にお泊りすることに。二人の日常を楽しく見せながら、星の子とのファーストコンタクトを描いていく。グミと間違えて食べようとしたものが UMA（未確認動物）だと直感して、「キラやば〜っ☆」と叫んだりと、ひかるの破天荒さが愉快。

シンセサイザーの音と高木洋さんの声を重ねて

―村瀬さんのプロデューサー初仕事として、『プリキュア』映画を担当することになり、最初に考えたことを教えてください。

村瀬　『スタプリ』の単独映画ということで、５人の活躍を丁寧に描きたいと思いました。ＴＶの柳川プロデューサーから、今シリーズは「キラキラな世界観」と聞いたので、そこから、ロマンチックな星空みたいな映画にしたくて、素敵な音楽や歌を作りたいと思いました。あとは、地球人と宇宙人の二人をメインにした話にしたいと。

田中裕太（以下、裕太）　とにかく村瀬が「ロマンチック……ロマンチック……ダブルヒロイン……ダブルヒロイン……」とうわごとのように（笑）。

村瀬　そんな、ちゃんとストーリーの提案もしましたよ！（笑）

裕太　そのうち、「小さい星がプリキュアとの交流を通して一つの惑星になる」話を田中仁さん（脚本）が考えてくれて。それなら『スタプリ』らしいスケール感のある物語になるかなと。最初僕は、宇宙を巡って変な宇宙人が山ほど出てきてイエーイ！　みたいなハイテンションな映画を考えたんですが（笑）。

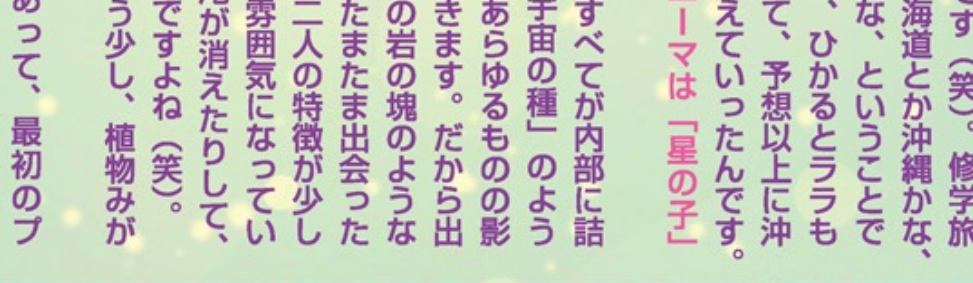
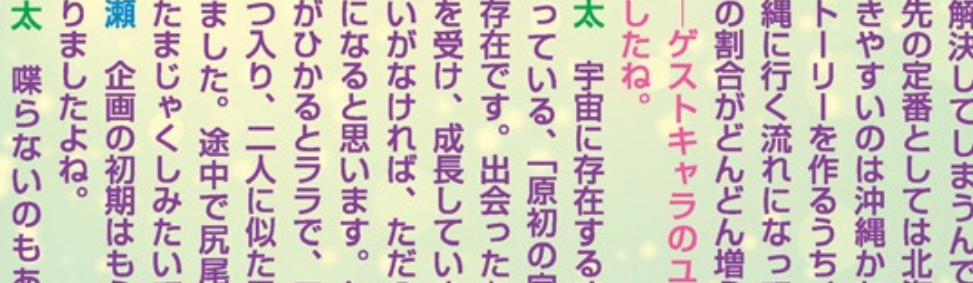
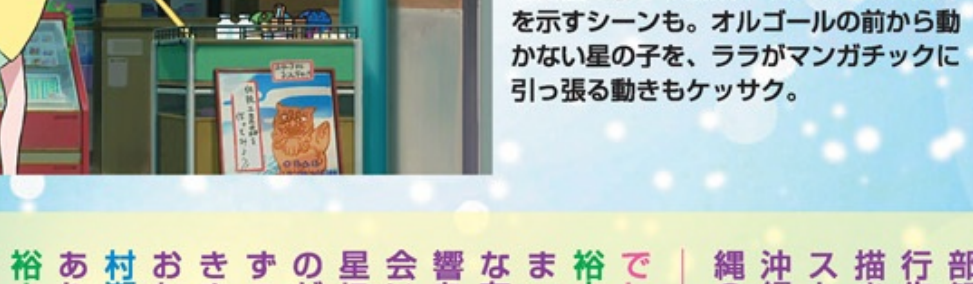
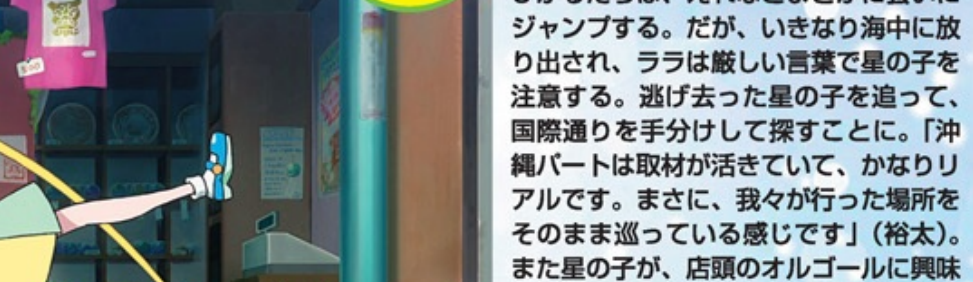
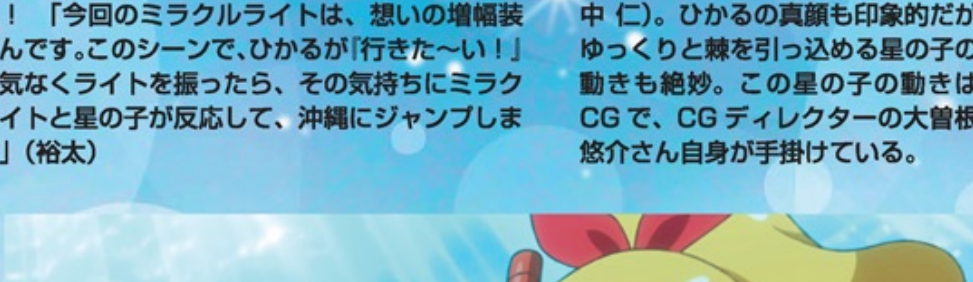
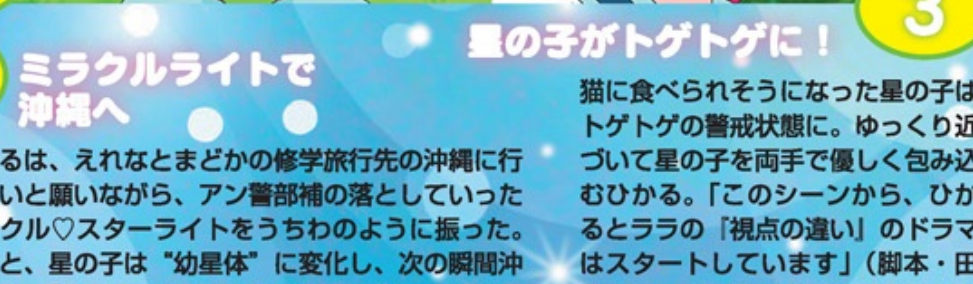
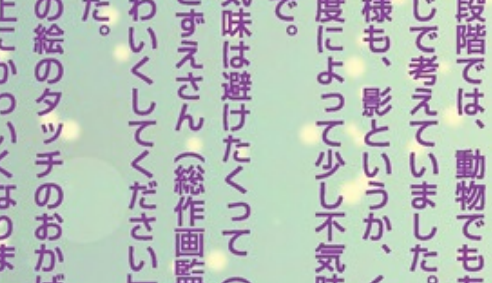
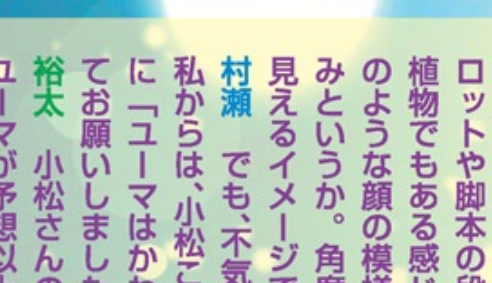
―それはロマンチックじゃないですね（笑）。沖縄を舞台にすることは、早くから決まっていたんですか？

裕太　そうでもないです。まず、ひかるとララとユーマを話の中心に置くために、他のキャラに舞台から外れてもらう必要がありました。それでユニは宇宙へ、えれなとまどかには修学旅行に行ってもらおうと。謎の生物と仲良くなる過程で、ひかるとララの対比を描こうと思っていたのですが、特に小さな子と接し慣れてるえれながいると、二人の間に入って全

5 マイペースな星の子

沖縄・備瀬のフクギ並木で、今度はララがミラクルライトに想いを込めてみるが、星の子は知らんぷり！「幼児は、まず自分を肯定してくれる相手じゃないと、言うことを聞いてくれないですから」（仁）。星の子は、ララが若干警戒心を抱いていることを敏感に感じとっているのだ。ちなみに、ラストの「ユーマの星」に蝶の羽根があるのは、ここで蝶を見ていたから？

4 ミラクルライトで沖縄へ

ひかるは、えれなとまどかの修学旅行先の沖縄に行きたいと願いながら、アン警部補の落としていったミラクル♡スターライトをうちわのように振った。すると、星の子は"幼星体"に変化し、次の瞬間沖縄に！「今回のミラクルライトは、想いの増幅装置なんです。このシーンで、ひかるが『行きた〜い！』と何気なくライトを振ったら、その気持ちにミラクルライトと星の子が反応して、沖縄にジャンプしました」（裕太）

3 星の子がトゲトゲに！

猫に食べられそうになった星の子は、トゲトゲの警戒状態に。ゆっくり近づいて星の子を両手で優しく包み込むひかる。「このシーンから、ひかるとララの『視点の違い』のドラマはスタートしています」（脚本・田中 仁）。ひかるの真顔も印象的だが、ゆっくりと棘を引っ込める星の子の動きも絶妙。この星の子の動きはCGで、CGディレクターの大曽根悠介さん自身が手掛けている。

ミラクル♡スターライト

7 ララの気持ちがあふれ出す

前半の重要シーンである、クワンソウ畑でのやりとり。星の子がララをペチペチするのは、幼児の癇癪そのもの。「実は攻撃的なのですが、あまりそう見えないのは作り手の親目線があるからだと思います」（仁）。ララは星の子のことが心底心配なので、どうしても厳しい態度をとってしまう。その気持ちが爆発する、「怖い目にあったら、どうするルン!!」での身体の動きと、直後のハッとして涙を浮かべる表情が出色。なお、この花畑は架空の場所だ。「沖縄で10～11月頃に咲く花としてクワンソウを選びました。自生はしますが花畑にまでなるのは珍しいようです。でも、とてもきれいで画になるので、イメージ優先で作りました」（裕太）

6 星の子を探して街中へ

ひかるたちは、えれなとまどかに会いにジャンプする。だが、いきなり海中に放り出され、ララは厳しい言葉で星の子を注意する。逃げ去った星の子を追って、国際通りを手分けして探すことに。「沖縄パートは取材が活きていて、かなりリアルです。まさに、我々が行った場所をそのまま巡っている感じです」（裕太）。また星の子が、店頭のオルゴールに興味を示すシーンも。オルゴールの前から動かない星の子を、ララがマンガチックに引っ張る動きもケッサク。

部解決してしまうんです（笑）。修学旅行先の定番としては北海道とか沖縄かな、描きやすいのは沖縄かな、ということでストーリーを作るうち、ひかるとララも沖縄に行く流れになって、予想以上に沖縄の割合がどんどん増えていったんです。

――ゲストキャラのユーマは「星の子」でしたね。

裕太　宇宙に存在するすべてが内部に詰まっている、「原初の宇宙の種」のような存在です。出会ったあらゆるものの影響を受け、成長していきます。だから出会いがなければ、ただの岩の塊のような星になると思います。たまたま出会ったのがひかるとララで、二人の特徴が少しずつ入り、二人に似た雰囲気になっていきました。途中で尻尾が消えたりして、おたまじゃくしみたいですよね（笑）。

村瀬　企画の初期はもう少し、植物みがありましたよね。

裕太　喋らないのもあって、最初のプロットや脚本の段階では、動物でもあり植物でもある感じで考えていました。目のような顔の模様も、影というか、くぼみというか。角度によって少し不気味に見えるイメージで。

村瀬　でも、不気味は避けたくって（笑）。私からは、小松こずえさん（総作画監督）に「ユーマはかわいくしてください」ってお願いしました。

裕太　小松さんの絵のタッチのおかげで、ユーマが予想以上にかわいくなりましたね。僕としても愛着のあるデザインです。

――歌をユーマとのコミュニケーションにするアイデアは？

裕太　「言葉ではないコミュニケーション」にチャレンジしたくて。音に反応する生き物がいて、次第に音から曲、そして歌につながるといいなと。また、SF＝「少し不思議」という企画意図もあったので、映画『未知との遭遇』の「5つの交信音」のような音かな？　とか。そういった不思議生物とのドラマを描ければ、『プリキュア』では今までやってないことができるかなと思いました。

――ユーマの「声」は、本当に特徴的です。

裕太　最初、ユーマの声は楽器のテルミンをイメージしていて、主題歌の発注の際に、高木洋さん（「Twinkle Stars」作・編曲）に「テルミンみたいな音波を、ちょっと寄りそうように入れてほしい」とお願いして、近い感じの音をシンセサイザーで作ってもらいました。その音を不思議生物風に加工して使ったんで

ララと仲良しになった星の子は“星長体”に変化し、公園でひかるたちと合流。ひかるに「ユーマ」と命名され、えれなやまどかとも親しくなる。二人から、お近づきの印としてオルゴールがプレゼントされ、大はしゃぎするユーマがかわいい。そしてシーサーの前での記念撮影。尺は短いが、楽しいひとときを強く印象付ける。

9 星の子をユーマと命名

8 気持ちが通じ合った

沈んだ面持ちでユーマを置いて去ろうとするララ。トボトボついてくる星の子は今にも泣き出しそう。それに気づいたララは、星の子をなだめるため、オルゴールのメロディ「ながれぼしのうた」をハミング。二人は手をつないで歩き始める。「ララを見上げている星の子がかわいいですよね！　ちょっと笑っているような表情も見せますが、『顔のマークを、ハートではないけどハートっぽく』という助監督さんの指示があって、難しかったです」（小松）。このクワンソウ畑の一連の流れは、小松さんも力が入ったという。ララと星の子の心が通じ合った、微笑ましい名場面だ。

10 夜空を見て語り合う

波照間島の砂浜から満天の星を見て語り合う、ひかるとララ。ティザービジュアルの一つ（目次参照）に近いシーンで、村瀬亜季プロデューサーの言う「ロマンチックな二人の物語」のコンセプトが強く出ている。TV第11話のキーワードである南十字星が出てくるのもポイント。「波照間島なら、かろうじて南十字星が見えるのも、舞台を沖縄にした理由です」（裕太）。ここでひかるが歌う「ながれぼしのうた」は、ララのハミング同様、アフレコ時に収録された。

11 秘境巡りへと繰り出す

ユーマの不思議な能力で、世界の不思議スポットへと旅立つひかるたち。場所は、オカルト趣味的な古代遺跡が中心だ。「ひかるの嗜好も意識はしつつ、TVチームにも確認したら、『ひかるは不思議なもの全般が好きなので、秘境に対する興味も当然あると思います』とのことだったので、やることにしました」（仁）。「予告で先行したカット以外は、すべて藤原舞さんにお願いしています。細やかな芝居を描いてくれる方なので、キャラだけでなくマグマの動きや動物など、とても良くなりました」（裕太）。クリスタルの洞窟のような、生身では行けない場所にも立ち入っている点が、いい意味でファンタジー的。

す。「なんだったら、僕が声も作りもやりますよ」という、高木さんのお言葉に甘え、文字通りユーマを演じてもらいました。ボコーダー（人間の声を変調加工するシンセ）で高木さんの声をうっすら重ねています。

村瀬　喜怒哀楽で音素材を数種類出してもらって、使い分けていけば大丈夫かなって思っていたんですけど、ユーマがすごく感情豊かな子になったので、一つ一つ声として欲しい、となったんです。

裕太　高木さんとはセリフの打ち合わせもやり、必要な「セリフ」とその場所、尺のリストをこちらで作りました。で、実際に映像を高木さんと観ながら「ここは嬉しい感じで」といった指示を出して……それが結局、都合50ヵ所以上になりました。ユーマのキャストクレジットはありませんが、高木さんのお名前をどこかに載せたい思い、「Special Thanks 高木 洋」としてもらいました。

幼い娘のいる父親たちがメインスタッフに

――二人がメインとの話でしたが、より、ララの心情変化や、ララとユーマとの関係性に重きが置かれていますね。

裕太　僕のイメージとしても、半歩ぐらいララが前に出ているバランスです。まず、どの二人に絞るか考えた時に、「やっぱり主人公のひかると誰かのペアでしょ」となって。でもひかるは、むしろ宇宙人っぽい不思議なキャラで、一番普通の子であるララがバランスとしていいかなと。小さい女の子向けの作品ではありつつ、老若男女に刺さるドラマを目指していたので、ならば常識人のララの視点に主眼を置いたほうが分かりやすい。ひかるとの視点の違いで互いの考え方を出しつつ、二人で影響し合いながら進んでいくのがダブルヒロインらしいんじゃないかなと。

村瀬　ひかるはとても個性が強いんですよね。成瀬さんの声を含めて。だから、映画の話のウエイトをひかるとララで半分ずつにしても、ひかるの主人公感は薄れないだろうなって。なので、安心して配分をお任せしました。

――ユーマとのやりとりは子育て感があふれていますが、裕太監督に娘さんが生まれたことも影響しているんですか？

裕太　親子感だけでなく、姉妹や親友など、いろいろな見え方ができるようにし

12 ユニとアンのドタバタ

場面は太陽系の小惑星に切り替わり、ユニとアンの追いかけっこの顛末がコミカルに描かれる。「松浦仁美さんの作監パートです。ミラクルライトをなくしたのに気がつく涙目とか、ギャグ顔が面白かったです（笑）」（小松）。クールに傍観しているユニとの対比もケッサク。その上空を、宇宙ハンターたちのUFO群が飛び去り、事態はシリアスに急転する。

13 プリキュアvsハンター

実はユーマはスタードロップという貴重な存在だった。５人のハンターはユーマ捕獲のため、観星町に出現。えれな、まどか、ユニが駆けつけ、５人のプリキュアとのバトルが始まる。「ラストバトルがない分、派手なアクションはここにギュッと固めました。ここまでは優しい雰囲気でしたが、このハンター戦でピリッと空気を締める。そういうメリハリも意図しています」（裕太）。「ソレイユがダイブの相手をするのは、光と影の対比です。ミルキーとハイドロは雷と水。セレーネとジャイロⅢは射撃対決です。コスモは星座ペンを４本借りた分、戦闘力があるので、巨大なチョップと戦う。メッセージ的に強い言葉を放つバーンは、主人公のスターと近接戦で対決です」（仁）

14 星座ドレスにチェンジ！

高い戦闘能力と巧みな戦術で、プリキュアを圧倒するハンターたち。そこにフワの勇気と懸命の応援でミラクルライトが光り、12本の星座ペンが呼応。プリキュアは星座ドレスにフォームチェンジして大反撃が始まる。そこで挿入歌「星座のチカラ」が流れる高揚感！　「星座ドレスに変身して、一人ずつ決めポーズをとりますが、（絵コンテで）ポーズも考えるだけでも大変だったはず」（小松）。「アニメーターさんたちがバトル作画を頑張ってくれて、想像以上にカッコよくなりました！」（裕太）

15 捕らえられたユーマ

ハンターの身柄はアン警部補が確保した。しかし、アンの本当の任務はユーマの保護だった。それは、ひかるたちとユーマとの別れを意味する。動揺を隠せないララに、ユーマのことを想うなら離れたほうがいいと、ユニは冷静に助言する。もの悲しい夕闇の中、ララの呆然とした表情が切ない。その間隙を突いて、バーンが拘束具を破壊し、ユーマを連れ去る。「連れてかないで！」とララは悲痛に叫びを上げる。

ていますが、無意識的に親の視点も結構入っているのではと思います。仁さんとABCアニメーションの田中昂プロデューサーも、みんな2～3歳の娘を持つ父親なので（笑）。僕自身は、別に意図はしていないんです。ただ、子どもが生まれる前の自分だったら、違う感じに仕上がっていたかもしれない。ユーマを自分の娘と重ねたわけではないですが、今現在の自分が思う、ベストの見せ方がこれだったということです。

――アン警部補もゲストキャラですが、童謡の「犬のおまわりさん」から？

村瀬　ユニを追いかける刑事役なので、「猫の怪盗なら、警察は犬かな」と言ったら、「ああ、『犬のおまわりさん』ね」みたいに決まりました（笑）。

裕太　あとユーマの事情を知っている説明係も欲しかったので、警察官になったというのもあります。知念里奈さんの声もとてもハマっていました。個人的に、獣人系キャラの話をやりたいとずっと思っていたんです。『名探偵ホームズ』みたいなのが好きなので。今回は、そういうキャラクターを作れるチャンスだって思って。アンの原案ラフは僕が作って小松さんに清書してもらったんですが、かわいいキャラになってよかったです。

――12星座のドレスが登場するのも見どころですね。

裕太　「映画の限定フォームとして12星座ドレスを作る」というのは企画段階からありました。とにかくプリキュアのデザインは、一人作るだけでも相当大変なのが分かっていたので、「12体も新作とか絶対嫌だ！」と思ったんですが、村瀬が「絶対やる！」って（笑）。

村瀬　はい（笑）。こういうのは企画段階で言っておかないと実現しませんから。小松さんの馬力のおかげですね。

裕太　それと、色彩設計の竹澤聡さんの力も。華やかできれいでかわいいデザインになりました！

村瀬　12星座を平等に扱うことにも、気をつけました。どれもが強くかわいく見えるように。

裕太　最初にフォームチェンジした星座は、TV本編で最初に手にした星座ペン（おうし座、しし座、てんびん座、やぎ座、おとめ座）に合わせています。

村瀬　コスモのおとめ座は、彼女が初めて借りた星座ペンですね。

裕太　最初の5パターンを宇宙ハンター戦に使うというのは決まったんですが、

16 落ち込むミルキーを励ますスター

ハンターの攻撃を受けたユーマは、暗黒化した星になってしまう。宇宙に出たプリキュアは、アンと協力して、群がるハンターと戦う。その最中、スターは自己嫌悪するミルキーに優しく声をかける。小惑星で会話する二人と、奥の宇宙空間で展開するバトル、静と動の対比画面も見事。ミルキーの手を取るスターの微笑みも印象深い。「二人のシリアスな会話シーンは、表情芝居に気をつけました。スターはキリッと、ミルキーも心の動きが分かるように」（小松）

18 ミラクルライトを手に変身

暗黒のユーマの星に突入したスターとミルキーは、星の内部の不安定な環境に弄ばれ、変身が解けてしまう。深い闇の底へと沈んでいくララだが、ひかるの歌を思い出し、意識を取り戻す。イマジネーションの光の中、二人がミラクルライトを手に、歌いながら変身して行く描写は感動的。「ミラクルライトで変身するというよりは、二人の想いが広がっているのを、ミラクルライトの光で表現しているイメージです」（村瀬）

19 ユーマの星でダンス

映画のクライマックスである、CG ダンスシーン。そのステージは、ユーマお気に入りのオルゴールだ。「ユーマの星には、ユーマ自身が体験したものが心象風景的に広がっていて、その中心にあるのがオルゴールだったんです」（裕太）。映画公開前に TV の ED サイズでも流れた CG パートは、独立した PV にも見えるようにも作られている。ユーマの星は、美術監督の今井美紀さんのイメージで作られており、蝶の羽根も今井さんのアイデアだ。

17 星座ドレス第２陣

ソレイユ、セレーネ、コスモは、スターとミルキーをユーマの星へと送り届ける。みずがめ座コスモの放つ水流に、うお座スター＆かに座ミルキーが乗って突入していく「水」合わせの使い方が心憎い。「ドレスチェンジから惑星突入までは、舘直樹さんの原画です」（裕太）。なおこの宇宙でのバトルは、7パターンの星座ドレスが次々に登場する。各星座の特徴的なアクションも見どころだ。

あとの7パターンをどこで出そうか悩みました。「誰がどの星座に変身するのか？」「誰がどの星座ペンをコスモに渡すのか？」など、脚本段階で練り上げました。

――ハンター戦の反撃のタイミングで、挿入歌「星座のチカラ」が流れます。

裕太　今回は、主題歌以外の挿入歌を作らないという話だったんですが、かなり後になって「作れますよ」となって。じゃあ、やっぱりバトルシーンに合う曲かなと。いつもは進行的に、挿入歌を先に発注して、その曲がはまるように絵コンテを作るんですね。でも今回は逆なので、シーンにすごくリンクしています。吉武千颯さんも、かわいい声でカッコよく歌ってくれました。

村瀬　ＴＶのＥＤ歌手の吉武さんに歌ってもらえたのは、『スタプリ』の映画としては本当に嬉しいことでした。星座ドレスも、より華やかに登場させることができましたね。

不思議な力で生まれたユーマからのギフト

――挿入歌「ながればしのうた」は、主題歌「Twinkle Stars」の前段という作りですね。

裕太　最初から「Twinkle Stars」につなげる歌にする狙いがありました。「音楽でユーマとコミュニケーションを」と決めた時に、劇中世界における「有名な童謡」をまず設定しようと。その歌をオルゴールの音色として映画冒頭で登場させ、さらに「Twinkle Stars」の曲の中で、その旋律が何度も聞こえてくるように作ってほしいとお願いしました。それぞれ別個ではなく、まとめて一つの曲としてお願いしていて、冒頭の童謡部分だけを「ながればしのうた」として切り分けた形です。

――それで「Twinkle Stars」の間奏やアウトロで「ながればしのうた」の旋律が流れるんですね。

裕太　ユーマは喋らないから「私の夢はこうなんです」と言葉で語らせることができないんです。でも、それが映画のクライマックスなので、歌と映像にすべてを込めて、観客に感じ取ってもらうしか

ユーマの夢を体現したような歌のシーンをロマンチックな星空みたいな映画に

ない。そこで、ユーマの夢を体現したような、高木さんの曲と大森祥子さんの詞による壮大な歌と、その楽曲と一体化した映像で、観る人の感性に訴えかけて謎の感動を呼び起こす。「なんだかよく分からないけどすごいものを観た」というインパクトで切り抜けるしかない。あとは、観ている子どもたちのイマジネーションに託すしかない。そういう作戦でした。

――歌パートの舞台は、実はオルゴールの中だったという仕掛けが面白いですね。

裕太　そこはコンテ段階から考えていました。ユーマの星が「今まで見てきたものの集まり」というのはプロットの段階で決まっていたので、そこを活かしつつ。

村瀬　なにせ、あのオルゴールは、裕太さんご自身の思い入れがあったから。

裕太　沖縄ロケに行った時に、手作りオルゴールを作れるお店に行って、デザイン用に自分で作ったんです（笑）。オルゴールをキーアイテムにするのは決まっていたので（P．50参照）。

――今回は、プリキュアのバトルではなく歌で締める、これまでにない形ですね。

裕太　あえてラストバトルをしない方向でやってみたくて。ＡＢＣアニメーションの昴さんも賛同してくれてよかったです。ユーマを喋らないキャラに決めた時点で、ドラマを歌に集約できるように作っていきました。

――ユーマの星は、新しいスターカラーペンを残して去ってきました。

裕太　映画ペン自体は発売が決まっていたのですが、（玩具名は「スターカラーペン～星のうたver.～」）、どう出すかの縛りはなくて。ラストシーンで触覚同士の『E.T.』みたいな触れ合いをさせたかったんですが、そこで新しいペンがギフトのように生まれると美しいかなと。出会いの証として、手元に残る何かが欲しかったので、玩具アイテムがうまくはまってくれました。そういう「使うだけじゃないアイテム」というのも、ロマンがあるなぁって。

村瀬　今回の映画にピッタリですよね。色もユーマのような黄色にしてもらいました。

――今回の映画に参加して、達成感のようなものはありますか？

村瀬　多くの人の力が合わさって、当初の私のイメージをとてつもなく広げてもらえました。歌の力とアニメーションのすばらしさをまとめてお届けできたこと

美術監督 今井美紀 沖縄ロケによるイマジネーション

那覇近郊をイメージした海岸（美術ボード）

波照間島をイメージした海岸（美術ボード）

――「ユーマの星」のビジュアルは、田中裕太監督の初期のテキストメモから今井さんが考えたそうですが。

今井　まず、ユーマが悪影響を受けたことによる、最初の“暗黒の星”はとても苦労しました。「ブラックホールのイメージの惑星で」と言われて「真っ暗闇」しか思い浮かばず、でも怖くならないように、とのことで、形になるまで時間がかかりました。最後の“きれいな星”も、大枠をひねり出すまでに数日はあーだこーだこねくり回しました。でも、「あ、私が作っちゃっていいんだ」「常識とか考えなくていい」と割り切ってからは案外さっくりできました。その後、バランスだなんだで悩んだりもしましたが……。ちなみに、監督のアイデアで、ラストカット（左下コラム 22）は少しだけ成長したユーマの星になっています。

――クワンソウの花畑は現実の沖縄にはない風景だそうですが、デザインを作成する際に心がけたことは？

今井　沖縄ロケに行った際、確かにクワンソウ畑は咲いていませんでしたが、中心地にある国際通りの裏を奥まで入っていくと、公園のような場所が随所にあり、緑も多くありました。そのため、「ここに広い空間と花畑がある」と想像することはできました。ドラマ性のあるシーンでもあるので、沖縄の空の下で、花畑がきれいに見えるといいなと思いました。

――花畑はユーマの星にも出てきますが、沖縄の花畑との差はどんなところを意識しましたか？

今井　沖縄の花畑は、季節は秋頃ですが、日差しがあってコントラストを強めに、実際の沖縄感が出ればと思って作りました。ユーマの星に出てくる花畑はイメージ空間なので、周りが宇宙だったり、花が光ったりと、映像としてきれいなイメージに仕上げました。

――沖縄のシーンだと、波照間の砂浜で星空を見上げるところも印象的です。

今井　監督陣から「空をメインで」と言われていたので、子どもの頃に見た満天の星を思い出しながら描きました。沖縄ロケでは、願いもむなしく曇りだったので、満天の星空を見に、あらためて沖縄に行きたいと思います。

――ユーマの星の水面で歌うシーンもとても美しく、ファンタジックですね。

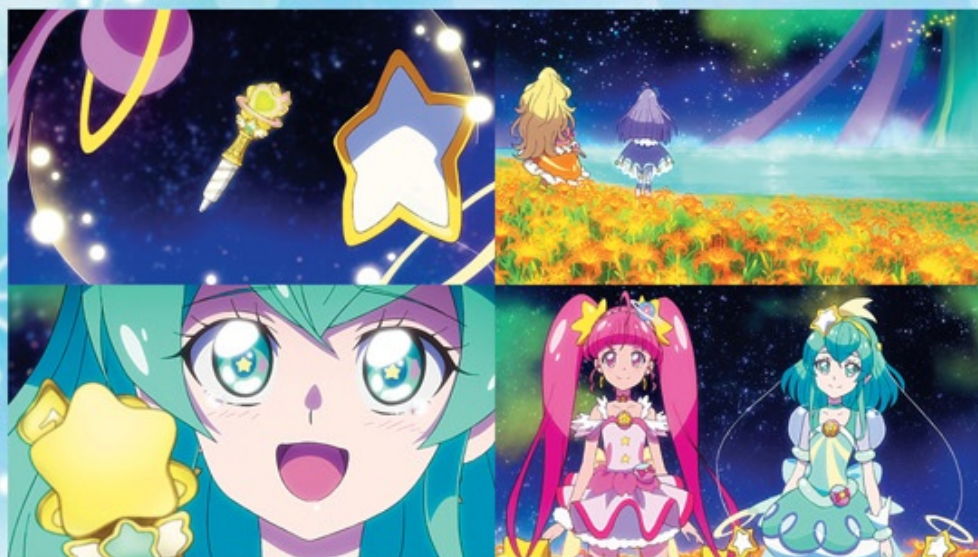
今井　監督の要望である「夜明け感」を、ウユニ塩湖をベースにした空間に足して、「とにかくきれいに」を意識して作りました。肝になるシーンだと思うので、そう印象を持ってもらえたなら良かったです。

ユーマの星（美術ボード）

――今回の映画に参加して、いかがでしたか？

今井　全体的に、背景の見映えが画面を左右するシーンが多く、限られた尺の中での見せ方を考えました。“描けるスタッフ”の早めの確保と、監督陣の熱意とで、良いものに仕上がったのではないでしょうか。撮影様にも感謝です。美術をまとめる立場としては、全体の絵をまとめるに際して、もっとやるべき余地があったと反省点もありますが、今回の作品に加われて本当によかったと思います。

星の誕生をお祝い

ED 映像で「新銀河誕生おめでとう」のケーキの画が挿入される。「“星の誕生”と言ってもお子様には分かりにくいかなと思い、パッと見て“嬉しいこと、お祝いごと”と分かるように、誕生日ケーキを出しました」（村瀬）。この“お祝い”と、カメラ目線のひかるの破顔、そして切り返しで星空を明るく見上げるララで締めることで、ポジティブな余韻が強まった。夜空の星は果てしなく広がり、その遠い彼方で、小さな星の歌声が響く――。

20 ユーマとの別れ…

美しい姿へと生まれ変わったユーマの星。クワンソウの咲き乱れる幻想的な丘に佇む５人のプリキュア。そしてスターとミルキーの前にやって来る影……それは、二人に似た姿になったユーマだった。「ユーマが、ひかるとララに近い姿になるのは、最初から決めていました」（裕太）。「かわいらしく無邪気に、神秘的な感じを目指して描きました」（小松）。ユーマが宇宙へ帰っていく際の「一音」も、かなりテイクを重ねたそうだ。

21 涙混じりの「キラやば……」

宇宙の彼方へ帰って行くユーマを見送る二人。ここでスターが「キラやば……」と涙声で呟く。実は台本上は、ただの感嘆の呟きだった。「ひかるって、そんなに泣く子ではないと思ったんです。でも、頑張って泣くのを耐えている成瀬瑛美さんの芝居がすばらしかったので、そのまま採用しました」（裕太）。その演技に合わせ、スターの顔に涙が足された。

が、本当に嬉しいです。裕太さんや製作スタッフさんたちの人柄もあって、とても優しくてあたたかい現場でした。みんなの優しさとか愛が詰まってできた、このメンバーでしか作れない映画です。ぜひ、末永く愛してもらえたらと思います。

裕太　実を言うと、依頼を受けた時は「どうしようかなぁ」って感じだったんです（苦笑）。去年の『HUGっと！プリキュア』のオールスターズ回（第37話）の演出で、僕の中では『プリキュア』はもう結構やり尽くした感があって……しばらく『プリキュア』はいいかな、みたいな（苦笑）。でも、今はやって良かったと思っています。自分の力が届かないところの、みんなの頑張りを感じられたのも大きいです。作監さんたちの力もすごかったし、美術や撮影もきれいで。

――絵コンテも、今回は４人で分担されていますね。

裕太　８割ぐらいは自分で描いていますが、前説パートは古家陽子さん、ＯＰのバトルからハンターのチラ見せシーンまで志田直俊さん、中盤でのユニとアンの小惑星のシーンから、プリキュアを前にしたハンターたちが戦うために散っていくところまでが平池綾子さんです。僕も子どもができて、自分の人生の１００パーセントを仕事に充てることは難しくなりました。でも、その部分を本当にいろんな方がサポートしてくれて……特に助監督の平池さんと古家さん、二人には全体の半分くらいの演出をそれぞれお任せしたのですが、本当に熱量がものすごく、おかげで、自分一人で全部やるよりもずっと良い仕上がりになりました。あと、二人はスタッフルームのムードメーカーでもあり、どんなにキツい時でも明るい雰囲気を作ってくれて、最後まで楽しく仕事をすることができました。さらに終盤は、たくさんヘルプのスタッフにも入ってもらいましたが、本当にみんな丁寧に仕事をしてくれて……そういう多くの人の力があっての、仕上がりになっていると思います。

たなか・ゆうた
たなかゆうた／1981 年生まれ。東映アニメーション所属。代表作は『Go! プリンセスプリキュア』（シリーズディレクター）、『映画魔法つかいプリキュア！ 奇跡の変身！キュアモフルン！』（監督）

むらせ・あき
東映アニメーション所属。『映画キラキラ☆プリキュアアラモード パリッと！想い出のミルフィーユ！』、TV『ＨＵＧっと！プリキュア』、『映画プリキュアミラクルユニバース』（いずれもアシスタントプロデューサー）。今回が初の単独プロデューサー作品

細やかな手の動き

耳を傾けたり、指でリングを作ったり（「∞」無限を表現）など、手の動きが重要ポイント。モーションキャプチャしたものを、手付けで細かく修正して整えられた。「CGは物同士の接触表現が難しいので、アニメーターは大変だったと思います！」（大曽根）

美術ボード

完成画面

オルゴールの外観

美術ボードの段階から、箱の周囲にピンクのラインが。これは無数のミラクルライトの光の軌跡だ。

浜辺のステージ

俯瞰で見ると三日月型なのは、現物のオルゴール（P.50参照）にはない要素。「ステージのCGモデルは、美術さんのイメージボードを元に作りました」（大曽根）。造り物っぽい質感・形状で作成されたが、「完成画面では少し美術に寄せてなじませています」（野島）。浜辺にある巻き貝や、作画で宙を舞うクラゲ（内部のパーティクルのみCG）も、実物のオルゴールにある飾りだ。

美術ボード

CGモデル

完成画面

ミラクルライト出現

歌のサビで、スターとミルキーが両手で大きな☆を描き、ミラクルライトが出現。「身体が横に揺れるので、星を描く指先が極力画面から出ず、描いた星もちゃんと画面に収まるようこだわりました。ミラクルライト出現のエフェクトもCGサイドで提案しました」（大曽根）。この☆の動きは、振り付けオーディションの段階からあり、採用の決め手になったそうだ。

キュアスターのCGモデル

MOVIE

CGディレクター
大曽根悠介

CGプロデューサー
野島淳志

ユーマと過ごした思い出がCGシーンにギュッと濃縮。見事な5人の歌とダンスで、新星が美しく生まれ変わる！

愛の光あふれる

EDダンスにはない豊かな感情表現を

—今回はCGダンスが本編に組み込まれる形ですが、打ち合わせでは田中裕太監督とはどんな話を？

大曽根　監督からテーマや美術資料をいただいて、その上で「CG的にはどうするか？」といった話し合いを時間をかけて行いました。

野島　たとえば、いつものEDダンスみたいな方向性か、手描きのアニメのようにセルルックな方向性か。結局、シーンによってそれらの質感を分けることになりました。

—オルゴールの内部が、ダンスのステージというのが面白いですね。

大曽根　「オルゴールの中身であることを意識した作りに」との話がありました。そのため、「リアルな風景」と「玩具っぽさ」の中間あたりを目指しました。

野島　雲は瀬戸物のような質感で、木もブロッコリーみたいな塊の形状に。硬質なハイライトを入れて、ツルンとプラスチックっぽくしました。

大曽根　もちろん、作画パートの美術とのバランスも考慮しています。

—ダンスの振り付けは？

野島　今回、初めて振り付けのオーディションをやったんです。僕や村瀬P、監督たちで選考したんですが、満場一致で石川由佳さん(オフィスワイルド)に決定しました。歌詞のイメージに沿った、ジェスチャーっぽい振りが入っていたのが良かったです。

—「自由にね描ける」では、コスモの指の動きに合わせて虹色のラインが出ますね。

野島　裕太監督、この振りを気に入ったみたいです。一つ一つの動きに意味を持たせている振り付けで、僕らもそれらを全部確認しました。

大曽根　虹色にしたのは、コスモのスカートの色を意識して、僕のほうで提案しました。CGパート全体のリードアニメーターは竹中佑城さんです。主にボディのモーション、手などをきれいに動かすカットを作ってもらいました。「身体をきれいに見せる」というのはダンサーさんからも出ていた要望でしたので。また、表情芝居も重要なので、そこは中村有希恵さんに専任で見てもらいました。キャラクターの性格や物語の流れを考慮し、シーンに沿った感情を描かないといけませんので。

—プリキュアのCGモデルは、TVのEDと同じですか？

大曽根　同じですが、質感は少し変えています。

野島　前半はセルルックに近く、後半は従来のEDに近い感じです。それぞれ今作用にカスタマイズしています。

大曽根　前半は「地球の内部」の雰囲気を目指したのと、直前の作画パートからのつながりもあり、作画っぽい方向でまとめました。オルゴールが出た辺りからは「地球の外」という宇宙っぽさを意識しました。

—この映画に携わって良かったことをお聞かせください。

大曽根　『映画プリキュアミラクルユニバース』ではEDディレクターでしたが、今回は本編のCGディレクターということで、CGスタッフみんなの熱量をまとめ上げるのは楽しかったです。また、映画の盛り上がりのシーンに参加できて非常に光栄でした。作画パートとCGパートがきれいにまとまって、ちゃんと一つの物語に見えたところも良かったと思います。

野島　今回は「ダンスシーンに本編の要素を入れる」という、新しい挑戦でした。また、美術で描いた木々や、作画で描いた動物たちも画面の中で大量に動かし、ハイブリッドな見ごたえある画面になったと思います。田中監督は「CGでできること、できないこと」をきちんと理解されている人なので、明確なビジョンがあるんです。そんな監督の元で仕事ができたのが、CGチームとしても貴重な経験になりました。

おおぞね・ゆうすけ
1986年生まれ、OLMデジタルを経て東映アニメーション所属。『ドラゴンボール超 ブロリー』(CGシーケンスディレクター)、『映画プリキュアミラクルユニバース』(EDディレクター)など

のじま・あつし
東映アニメーション所属。『プリキュアとレフィのワンダーナイト！』『Petit☆ドリームスターズ！レッツ・ラ・クッキン？ショータイム！』など『プリキュア』映画でのCG作品や、各TVシリーズのEDダンスなどを担当

星型ワイプ風の空間

背景が途中から、虹色の宇宙空間にチェンジ。さらにカメラが引くと、そこは大きな星型の中だと分かる。「田中監督から、画面をもたせる意味合いで『星型の何かを出したい』と言われ、『5人みんなの色を入れたら物語的にもつながるのでは』と僕から提案しました」（大曽根）

あふれる音符の花びら

空を飛んでいく音符がミルキーの瞳に映ったり、コスモがミラクルライトを手前にかざすと画面下から大量の音符が湧き上がったりと、緑の音符（絵コンテでは「音符の花びら」と表現）が印象的。もちろん、ユーマの顔のマークを意図したものだ。

ドラマ感ある表情

「本編に紐づいたダンス」ならではの表情芝居に注目。「特にスターとミルキーは物語の軸なので、PV的でない素の真面目な顔もしています」（大曽根）

MOVIE

生命の輝き

W田中コンビ3度目の作品は、互いの共通項として「幼い娘を持つ親」の視点があったという。子どもの健やかな成長を願う気持ちは、フィルムのそこかしこにあふれている。

脚本 田中 仁

超新星爆発で誕生した「星の子」の物語に

——『Go!プリンセスプリキュア』以降、これで田中裕太監督とメインで組むのは3回目ですが。

田中 仁(以下、仁) 『ゴープリ』の企画初期に、裕太さんと二人で「こういう作品にしようね」といった話をした際、すでにお互いが見ている方向が一緒だなと思えました。ライターとしては、腕の立つ演出さんと組めるのは本当に幸せなことです。それは今でもずっとそうで。毎回、裕太さんは、僕の信じる気持ちに応えてくださり、もう信頼しかないですね。

——今回のお仕事の話は、お二人同時期にきたのでしょうか?

仁 そうですね。ただ、悩みました。僕らがアニメ業界に入ってからそれまで抱いていた想いは、『ゴープリ』の時にかなり出していて……。そこから『映画魔法つかいプリキュア!奇跡の変身!キュアモフルン!』を経て、今回はあらためて「どんな想い」を描くべきなのかと。ただ、僕も裕太さんもほぼ同時期に娘が生まれるという、新しく何かを考えられるきっかけもありまして。そこで、我々の「親としての気持ち」をなんとか映画の題材として活かせないかなと話したんです。

——画面からにじみ出る「子育て感」は、作品の軸の一つに考えられていたんですね。

仁 でも「出会いと別れ」を短い尺の中で描いていく中において、本格的な子育て要素を入れるとブレてしまう。だから、そこはプロット段階で外したんです。ただ、完成した映画を観たら、ユーマがとても赤ちゃんっぽくて、触れ合って育てていく感じが、想像していた以上に出ていましたね。結局、裕太さんも僕も、そういう気持ちはお互いにあったのかなって。

——裕太さんは「そこまで意識しなかった」と言っていましたが(笑)。

仁 えっ、そうなんですか(笑)。それは照れ隠しかもしれませんよ。だって、沖縄でのユーマとララのシーンなんてあんなに……まぁ、基本的には脚本通りではありますし、僕はわりと、親目線を入れて脚本を書いていましたが。でも、ユーマが身体を引っ張られても興味を持ったものから離れない動きは、親としての実体験からくる演出に見えましたよ。ダダをこねている子を、引き離そうとしている姿にしか見えない(笑)。

——今回の映画を「お星さま誕生物語」にするというアイデアは?

仁 それも子育て的な部分です。生まれてきた小さなものとコンタクトをとって育てていく発想からですね。そういう対象になりえる宇宙的なものを調べていたら、超新星爆発にいきついて。それで、SF作品も参考にしながら裕太さんたちと考えていく中で、「超新星爆発で誕生した『星の子』の話にしたら成立するかな」と。

——EDの「新銀河誕生おめでとう」というケーキも、明確にそこを出していますよね。

仁 実はそのシーンは、予想外に議論が紛糾したところでした。初期プロットで「星として成長したユーマに、またいつか会いに行きたい」というのはありましたが、その中に「おめでとう」の要素はなくて。でも、村瀬プロデューサーから「絶対に入れたい! 入れてほしい!」とさんざん粘られまして(笑)。うまくはまるか分からなかったんですけど、なんとか入れ込みました。結果、さみしさのない終わり方にはなったと思います。

ひかるとララの立場が時を経て逆転していく

——物語はひかるとララに絞って展開していきましたが、この二人のドラマで気をつけたことは?

仁 ひかるは主人公なので、当然ひかると誰かの話になるわけですが、裕太さんと話をしたら、二人とも「ララかな」って。ララが常識人というのもあるし、もっとも我々の感覚・性格に近い子だというところも多分にありました。僕もララみたいな真面目なタイプだけど、自分が優秀とはまったく思えないですし。

——つまり、それなりにコンプレックスを抱えて?

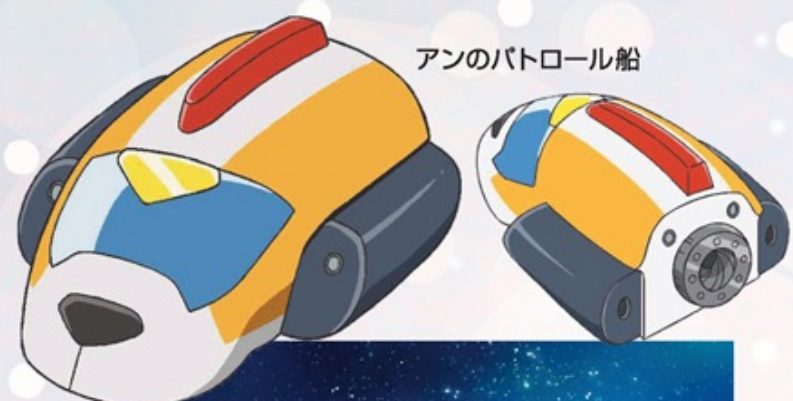
仁 ええ、アニメ業界を目指した人間としては、そこは当然あるわけで。劣等感もありつつ、でも真面目にしかやれない、という……。ララは宇宙人ですけど、かなり自分自身と近いなと。「この子の気持ちなら書ける!」という予感がありました。

——ララの気持ちとしては、時間を追うにつれユーマへ想いが強くなっていきます。

仁 そこはもう、何度も言うように親目線です(笑)。でも親目線は、ひかるもですよね。ただそこは明確

脚本の流れに沿った主題歌

クライマックスが歌のシーンになっている今回の映画。楽曲の発注は、脚本を踏まえてのものだったという。「まず『こういうメッセージを、こういうやりとりで』といった大枠を考えて、そこから、Aメロではひかるとララが歌って、Bメロから他の3人が合流すると。歌の前半はユーマに対して語りかけ、後半でその答えとして、ユーマが理想とする星の夢についてみんなに語ってくれる……というふうに、裕太さんと相談しながら歌の流れを書きました。脚本納品以降の、音楽発注や映像を作り上げる過程はノータッチですが、そこは裕太さんやプロデューサーを完全に信頼していましたから。本当に素敵な楽曲になっていますよね」(田中 仁)

に、ひかるから見たユーマと、ララから見たユーマ、二人それぞれの視点で分けていて。ひかるは性格的なところもあって、最初からユーマの本質を理解し、信じる。でも真面目なララは、最初ユーマに対して疑ってかかってしまう。ひかるのほうが、考え方としては進んでいるんですね。それがだんだん遅ればせながら、ララもユーマへの理解を深めていく。その頃、ひかるはユーマの「この先（将来）」を実は考え始めている。でもララはもうユーマに対して想い入れすぎちゃって、すれ違いが起こる。二人ともユーマを大切に想っているんだけど、その想い方の違いでぶつかり、けれど最終的には一緒に進んでいく……という展開を意識しました。

——最初はひかるが子どもっぽく突っ走るけど、後半では大人っぽい目線でララをたしなめましたね。

仁　そういった逆転構図も構想していました。脚本を書き始める前、村山功さん（シリーズ構成）に「TV本編でやらないこと、入りそうにないことってない？」と訊いたところ、「ひかるとララの立場が時を経て逆転していくというのは起こりえるし、いつかそうなっていくと思う。けれど、それを明確に示す回は、TV本編ではないかもしれない」と。その言葉もヒントになりました。

——「ユーマとのコミュニケーションが音楽」というのは、歌がクライマックスになるところからの逆算でしょうか？

仁　早い段階で、歌をクライマックスのドラマの帰結として持っていくと、みんなで決めたんです。であれば、最初から言葉ではなく音的な何かで会話するのがいいということで。

——ユーマは独特の「声」を発しますね。

仁　実際の音声としては、音波にするのか、楽器の音にするのか、演者の声を加工するのかという選択肢がありました。僕は楽器だろうなと思っていたんですが、とはいえ、地球文明を感じさせる楽器の音ではダメなわけです。別の銀河系から来たユーマが、それを知っているのはおかしいので。その上で、セリフっぽさも表現できる楽器の音……と考え、僕と裕太さんの間では、テルミンで一致しました。どこか地球文明的なところから離れている音色なので、一番いいかなって。そこから、テルミン風の音を作り、それにちょっと人の声を乗せて加工してもらったわけですが。

——音としては、オルゴールの音色も重要ですよね。

仁　オルゴールを出すことも早い段階で決めていました。これは子育ての考え方からで、赤ちゃんが最初に触れるものとして、サークルメリーとかのオルゴール的なものがありますよね。子守歌と合う音色だからだと思うんですが、オルゴールって、寝付けなかったりして泣いている子をあやすために使われます。挿入歌の「ながれぼしのうた」は、「きらきら星」をイメージとして作られたので、もう完全に子守歌の発想です。

——それでユーマが興味を示したオルゴールの曲は、「劇中ではよく知られている童謡」という設定なんですね。

仁　既存の童謡の使用はいろいろあって難しいので、「ひかるたちの世界には星を歌った子守歌的な童謡が存在し、それがたまたまオルゴールの音色として、沖縄で流れてきた」という流れにしたわけです。ですから、童謡ありきのオルゴールの音色という感じです。

ユーマにとっては地球全体も一つの生命

——ユーマとの秘境巡りの場所は、どういう話し合いで決まったんですか？

仁　僕から出し、細かい調整を経て、さらに裕太さんが追加した感じです。ひかるとララは、ユーマと人間的な関わり方をし、それがユーマの経験として蓄積されていきますが、星として育つにはそういった人間的な感情だけではダメなんです。ユーマは星なので、この地球全体のことも自分と同じ生命だと思っている。それくらい宇宙規模の生命なんです。そんなスケールの大きい存在なので、「地球との交流、関わり」も描かないと、本当の意味での成長をうながせない。そこで、地球の自然を強く感じさせてくれる場所を巡っていく必要があるだろうと。

——それで、危険な火山もあえて巡るんですね。

仁　ええ。マグマの下には地球のコアがある。ユーマ自身も実は星のコアなので「同じ属性のものが直接触れ合える場所」という意味も込めてセッティングしました。

——ユーマを狙う宇宙ハンターは、やはりプリキュアとの1対1バトルを見せるところから5人にしたんですよね？

仁　クライマックスは歌のシーンなので、優先順位を今までと逆転させています。その中での効果的な敵の存在として、宇宙ハンターを設定しました。彼らが奪おうとするもの、すなわちひかるたちが守ろうとするものは、「星」という、個人の感情を超越した存在で。つまりハンターはプリキュア側とはまったく別の価値観でユーマを見ている連中なんですね。

——ひかるたちはユーマを「意志のある生き物」と見ているけれど、ハンターたちは星のコアという「物体」と捉えているという？

仁　ハンターにとって、ユーマは対話できる小さな生命ではなく、モノなんです。同じものを、異なる次元で捉えている視点を入れたかったんですね。それと1対1の戦いにして、各星座ドレスの個性も見せるためです。集団戦だと、個々のドレスの特性が見せにくいですから。

——そんなハンターたちを捕らえようとするのがアン警部補ですが、まず前半のブルーキャットとの追いかけっこは、最初から考えていたんですか？

仁　宇宙刑事を出したいというのが最初の頃にあって。ララとひかるの話がメインですが、まどかやえれな、ユニにもそれぞれ面白いサブストーリーを用意してあげたくて、宇宙刑事を出したら捕り物編のような形でユニの活躍も入れられるかなって。そういう配分で脚本を作っていったのですが、どうにも70分の尺に収まらず。それでTVの連動回の第36話で……（苦笑）。

——ああ、それで第36話は刑事ドラマっぽいわけですね。

仁　そうです。TV班からも「ブルーキャットの怪盗行為について、一段落つけてほしい」というオーダーがあったので。アンの一人称の「本官」や語尾の「あります」は、真面目な性格と、ドジで愉快な感じを両立させるためのものですね。

——ミラクル♡スターライトを探査ツールとしてアンの装備品にしたアイデアは？

仁　今回の映画はSFなので、そういう側面もミラクルライトに持たせたかったんです。話の出発点としては「星の子を見つけるための装置」ですが、ひかるとララがたまたまミラクルライトを手にしている時に、ユーマが成長する。彼女たちの気持ちが、実はミラクルライトで伝わっていたと。「応援する想いをミラクルライトが力に変えていく」というこれまでの概念はそのままに、それがユーマにも良い影響を与えていく。そういう装置として考えてみました。

——制作を終えての満足感や充足感はありますか？

仁　『ゴープリ』や『キュアモフルン』を経て、自分たちがどういう意識を持って今回の作品に取りかかるかで、とにかく「『映画』を作ろう」という意識がありました。仮にTVの『スタプリ』を観たことがない人でも、一つの作品として楽しめるものを作りたい。そこは一番最初に、裕太さん・村瀬さんとも話をしました。完成したものを観た時には、まさしくその通りになっていたと、強く感じることができました。メインスタッフだけじゃなくて、本当に各セクションの皆さんの想いが込められていて。そこは『ゴープリ』も『モフルン』もそうなんですけど、さらなる新しいステージに到達できたかなと感じました。僕自身としても、この作品を作ることができて本当に感謝しています。

「親としての気持ち」を映画の題材として活かせないかなと

たなか・じん
東映アニメーションを経てフリー。『Go!プリンセスプリキュア』『キラキラ☆プリキュアアラモード』『ゆるキャン△』『八月のシンデレラナイン』(シリーズ構成)、『映画魔法つかいプリキュア！ 奇跡の変身！キュアモフルン！』（脚本）ほか

アンのパトロール船

アンは優秀なキャリア組

——アンは新人なのに、なぜ巡査でなく警部補なんですか？　すでに現場責任者ってことですよね？

仁　新人でもキャリア組だったら警部補からのスタートなんです。まあ、地球の警察の階級に厳密に合わせる必要はないんですけどね。

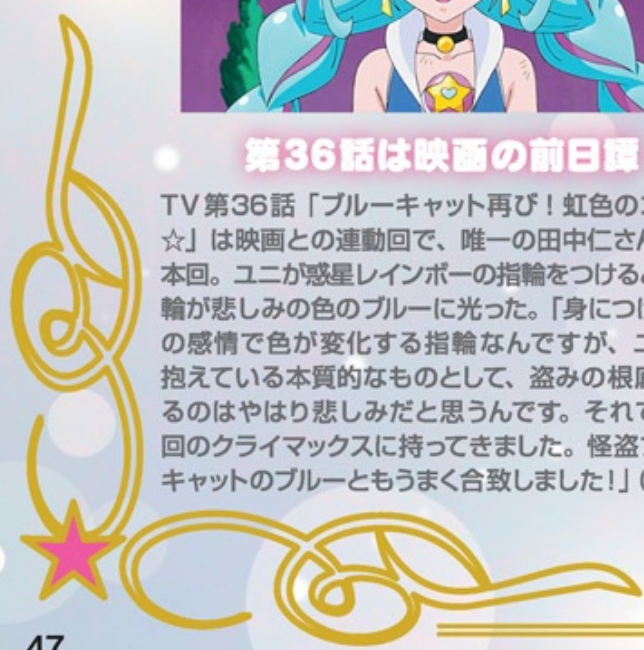
——アンはキャリア組なんですね！

仁　そうです。実は勉強はできるんですよ。ドジなだけで（笑）。彼女は犬型というのもあるんですが、ちゃんと匂いのデータベース化ができるんですね。そういう非常に高いスキルも持っている優秀な人なんです。ドジなだけで（笑）。

第36話は映画の前日譚

TV第36話「ブルーキャット再び！虹色のココロ☆」は映画との連動回で、唯一の田中仁さんの脚本回。ユニが惑星レインボーの指輪をつけると、指輪が悲しみの色のブルーに光った。「身につけた者の感情で色が変化する指輪なんですが、ユニが抱えている本質的なものとして、盗みの根底にあるのはやはり悲しみだと思うんです。それでこの回のクライマックスに持ってきました。怪盗ブルーキャットのブルーともうまく合致しました！」（田中）

MOVIE

想いをのせて

総作画監督
小松こずえ

プロデューサー
村瀬亜季

描く時はキャラクターと同じ表情で、ぐっと気持ちをこめる小松さん。一つ一つのシーンを、美しくエモーショナルな画でまとめられました！

映画スタプリ 楽しんで下さい!!

KOMATSU.

Illustrated by Kozue Komatsu

『プリキュア』は女の子のかわいさが重要！

――小松さんに総作画監督のオファーがきた時の感想は？

村瀬 裕太監督が、小松さんをご指名されたんですよね。

小松 ご指名されたからには、より力を入れて頑張ろうと思いました。やはり『プリキュア』は、女の子のかわいさが重要だと思っているので、「よりかわいく描かなきゃ！」という気持ちが乗っかるし、その分、結構プレッシャーがありますね。

――小松さんはパート作監にも入っていたとのこと、松浦仁美さん・中谷友紀子さんとの分担を教えてください。

小松 大まかに言うと、私のパートはひかるとララとユーマのシーンを一通り。冒頭の学校のシーン、クワンソウの花畑のユーマとララのシーン、夜の砂浜で歌うシーン、そこから飛び越えて、後半の「ユーマの星」の火口に落ちたところからCGパートを挟んでラストまでです。松浦さんはOPのバトル、秘境巡りや中盤のハンター戦がメイン。中谷さんは主に沖縄のシーンと、アン警部補がユーマのことを説明するシリアスな辺り、後半の宇宙でのバトル辺りです。割り振りは私が決めたわけじゃないですけど、結果として3人それぞれの良さが活きるシーンで、うまく分担されたかなと思います。私は総作画監なので、自分の作監パート以外も目を通してはいます。

――アン警部補のデザインについてお聞かせください。

小松 『スタプリ』のキャラと違和感が出ないように意識しつつ、監督と相談しながら作りました。工夫としては「犬っぽさ」でしょうか。かわいくしたくて、顔や尻尾にツートンの塗り分けを入れてみました。いわゆる「犬人間」で、鼻と口が前に飛び出ているんです。でも、描く人によっては「人間が犬顔になった感じ」で、鼻だけが飛び出ていたり。シンプルなデザインにしたつもりですが、意外とつかみにくかったみたいですね。あと、途中で「ゴーグルを装着する」と聞いて、少し手直ししました。

村瀬 アンは、必要な小道具はいろいろと身体に身につけていますよね。

小松 そうそう。ただ、ほとんどのシーンで宇宙用マスクをつけていたから、最初からマスクつきのデザインにしておけばよかったかな。あと、なんとなく下っ端っぽさ、ドジな感じも意識しました。

村瀬 獣人といえばユニですが、アン警部補の設定は、ユニの獣人姿の設定がまだない時点でお願いしました。

小松 そうですね。獣人のユニを見て、「めっちゃ猫人間だ！」って驚きました（笑）。バケニャーンみたいな猫もいたし、バラエティ豊かな世界なんだなと。

少しずつ近づいてるよ、という感じを出しています

こまつ・こずえ
東映アニメーション所属。チーフアニメーターとして『ねぎぼうずのあさたろう』、作画監督として『映画スマイルプリキュア！絵本の中はみんなチグハグ！』『ドキドキ！プリキュア』『映画プリキュアスーパースターズ！』『ゲゲゲの鬼太郎（第6期）』など

ユーマの3形態

ユーマは金平糖状態から、幼星体、星長体と段階的に変化していく。「幼星体は、星長体と最初の星型の間を考えてデザインしました。頭が尖っているのは星型の名残です。二頭身なのも星長体と差をつけたからで、身体は小さいです」（小松）。幼星体の頭のトゲトゲが、星長体になると小さな尖りになる。「いきなりツルツルになるのは寂しいなと思って残してみました」（小松）。なお、段階的に成長するごとに、ユーマの「声質」も変化している。

星型（第1形態）

幼星体（第2形態）

星長体（第3形態）

ユーマの表情集

ユーマは興味のあるものに影響されて、目の辺りの形が変化する。この田中裕太監督の案を元に、小松さんが表情参考としてまとめた。音楽を聴けば音符マークに、猫と戯れれば肉球に、疑問に感じればくるくる回転したりと、このパーツでバラエティに富んだ「表情」を披露した。それらは基本的に絵コンテで設計されたものだ。また、怒りや怖れを感じると、身体全体からトゲを出した状態になるが、それもコンテの絵に沿ったもの。

――ユーマのデザインで気をつけたことを教えてください。

小松　どの段階も、ほぼ監督の案通りです。幼星体の段階から、ひかるとララの要素を色やパーツで入れています。たとえばユーマの「手」は、ひかるのツインテールをイメージしていて。幼星体は、頭の真横からぴょこっと「手」が生えているんだけど、星長体になるともっと上から生えて、さらにひかるっぽくなる。少しずつ二人に近づいているよ、という感じを出しています。

村瀬　でも、最終的なユーマの姿は、ララの要素が大きいですよね。

小松　そう、ほとんどララ。というかミルキーですよね。ただ、最終形のデザインは、ギリギリまで決まらなくて。監督の中で固まるまで時間がかかったみたいで、一旦決まってからも、模様の位置を少し変えたりしました。あと、ユーマといえば、暗黒のエネルギーに取り込まれた時の凶悪な感じ、すごかったですよね。ユーマは言葉を話さないから表現が難しいかなと思っていたんですが、各アニメーターさんが工夫して、怒っている時や悲しそうな時などを分かりやすく描いてくれました。表情のバリエーションも多くて、言葉よりも伝わったかもしれません。

――ユーマのカットは、どのあたりに気をつけましたか？

小松　特に意識したのはバランスです。シンプルなキャラクターほど、バランスが難しくて。顔の中の緑のちょっとした位置の差や、微妙な顔の丸さ加減、脚の形などを意識して統一しました。線が少ないと情報量が少ないので、ほんのちょっとのズレでイメージが変わってくるんです。監督も気にしていましたが、全体的にあまりシャープにしない方向性でしたね。

メリー・アン

映画でのもう一人の味方側ゲスト。「全体的にカラフルで、髪の毛もピンクっぽい紫で、かわいくできたと思います」（小松）。冒頭で見せる特撮ヒーローっぽい名乗りポーズは、絵コンテで考えられたもの。ブラスターのビームエフェクトが犬の肉球型なのは、ノットレイの放つ光線との差別化を狙った演出だ。

アンのパトロール船

デザインは小松さんだが、裕太監督の原案に基づいている。バイザー風の部分はコクピットのキャノピーで、ここからも出入り可能。機体側面のサブブースターは、緊急加速用のもの。TV第36話にも登場したが、星空警察の一般的なパトロール船でもあり、警察本部の外観カットでは同型機が多数行き交っていた。

映画限定の私服

ひかるのパーカーは、例によって星マークがアクセント。ララはSFアニメっぽいデザインのワンピース。ベレーの飾りはクラゲマークだ。えれなのウエスタン調のポンチョの中は、長袖シャツとショートパンツ。まどかは大人っぽいジャンパースカート。三日月のネックレスもおしゃれ。ユニはスタジャンにノースリーブのインナー。ベルトやブーツの飾りがクールなイメージだ。

星座ドレス12体！デザインに四苦八苦

――ひかるたちの映画限定私服も、小松さんのデザインですよね。

小松　TVの服のイメージが強いので、新作するのは大変でしたね。参考資料をいっぱいもらって描きましたが、二転三転して。

村瀬　打ち合わせのその場で描いてもらったこともありました。

小松　そうそう（笑）。みんなで話しながら、ああでもないこうでもないって、その場でラフに手を加えて。

村瀬　えれなのポンチョとか、その場でPCで調べてデザインにしてもらって。

小松　そうですね。あと、「ララは地球の服を着ないんじゃないか」という意見が出たり……。ララの服のイメージがつかめず、最初は普通のお嬢様スタイルになってしまって、でも少し変わった感じにしたくて、「いっそレトロな感じにしよう」と。ただ、結構思いつきで作ってしまったので、実際動かしてみると、スカートの形状が地味に複雑で大変でした。

村瀬　ひかるも大変でしたね。最初はパンツスタイルでしたっけ。

小松　そうそう。動き回るから、七分丈のパンツを履かせていたんですが、いろいろな意見を受けてスカートになりました。トップスも最初はもっと短めのパーカーでしたが、あまりスカートを主張させたくなくて、パーカーの裾から「ちょい見え」みたいな感じにしたら、かなりのミニスカになっちゃった（笑）。まぁ、「元気に脚を出していこう」という感じになりました。えれなとユニは、初めに描いたもの、ほぼそのままだと思います。まどかさんは、ちょっと手を入れました。

村瀬　まどかは年齢感を少し下げてもらいましたね。

――そしてこの映画の大きなポイントが、12星座ドレスですが（付録ポスター裏面参照）。

小松　一番最初に言われたんですよ、12体デザインしてほしいって。「嘘でしょ！」って（笑）。

村瀬　すみません（苦笑）。

小松　とにかくデザインに時間がかかりました。スタープリンセスのキャラ表を見ながら、どのパーツが使えるかなと考えて。キャラクター同士の相性もあるんですが、コスモは三つ編みが特徴的なので、それはなるべく活かそうと思いました。それから、みんな上半身のフォルムは、通常フォームからあまり変えないって決めていたので、スカートのバリエーションで差をつけました。

村瀬　スタープリンセスが全員ロングドレスだから、簡単にはいきませんでしたよね。

小松　みんな同じシルエットじゃ面白くないし。あと、彩色の手間を考えて上半身のパーツの色も変えないつもりでしたが、竹澤聡さん（色彩設計）が「変えても大丈夫」って言うから……「えっ、いいんですか!?」って仰天しました（笑）。

――特に苦労したものや、印象深いものは？

小松　私の中で最後まで悩んだのは、ふたご座コスモです。もうちょっとほかの髪型のアイデアはないかなと、試行錯誤しましたが……。

――左右でツインテールの形状が違いますね。さらに、本編では途中で二人に分離しました。

小松　本当は、ショートヘアとロングヘアくらいに差をつけたかったんです。ただ、元のプリンセスに合わせるならロングヘアじゃないとダメだから、「パーマとストレートで分けようか？」とかいろいろ考えて。結果、「片方は縦ロールにしてしまえ！」と（笑）。スカートも、同じキャラだけど違う感じにしたくて、色で分ける案も考えましたが、結局デザインを分けました。私の中では、「ボーイッシュで元気な子」と「お嬢様っぽい子」の二人です。ふたご座のプリンセスたちも、髪型が少し違うので、そういったニュアンスを汲んでいます。

村瀬　すばらしい。スタープリンセスのことをしっかり見てくださっていたんですね。

小松　もちろんずっと見てましたよ（笑）。私はうお座なんですけど……。

村瀬　うお座スターはかわいくしました？

小松　そうかもしれない（笑）。

村瀬　一緒に出てくる、かに座ミルキーも？

小松　かに座ミルキーは、かに座のプリンセスの、大きい2つ分けの髪型がすごくかわいらしくて、自然にかわいくなっちゃった（笑）。かわいいと言えば、てんびん座のプリンセスは幼い感じですよね。でも、ソレイユはお姉さんっぽいから「どうまとめたら？」って、悩みましたね。

村瀬　髪型は一番似ているんですけどね。

小松　なので、髪型はそのままいただきました（笑）。作った順としては、おうし座スターとしし座ミルキーが

夏の制服

沖縄ということで夏服だが、10～11月頃の朝夕は涼しい季候のため、まどかはカーディガンを羽織っている。これも裕太監督の発案で、「たぶん、まどかは冷え性かなと思って（笑）」。TVの長袖の制服設定が映画用に半袖にアレンジされ、それがTV第33話に逆輸入されたという経緯も。

最初でしたね。
村瀬　おうし座も三つ編みなので、コスモっぽくならないように？
小松　そうですね、おうし座スターの三つ編みは、コスモと差をつけるために大げさに太くしたんです。そういえば、なぜかソレイユの星座ドレスは、色も含めてスムーズに決まりましたね。
村瀬　ソレイユはおでこが出ていて、髪型のアレンジをしやすかったかもしれないですね。
小松　確かに。さそり座とソレイユも、とても相性が良かった。
村瀬　おとめ座コスモも、とてもうまくデザインしてくださいました。
小松　なかなか苦労しましたよ、コスモさんは！　レインボーのスカートは絶対に残さなきゃって思ったんですが、どこに使おうかと。しかも、星座ドレスのコスモは4体もいる。ただ、最初は大変だったけど、途中からだんだん面白くなってきちゃって（笑）。たとえば、「みずがめ座のスカートはレインボーの傘みたいにしちゃおうかな」とか。
村瀬　これは上手いと思いました！　どれも12星座のプリンセスをモチーフにしつつ、小松さんのアイデアが詰まっていますよね。
小松　もう頑張って、ない引き出しから出しました（笑）。

――宇宙ハンターのデザインは？
小松　これも監督のイメージがありつつ、私からも出しつつ。バーンに関しては、監督のラフ案があって、「マッチ棒みたいな感じ」と言われました。
村瀬　ハイドロについては、シャチ姿のラフ案を後からもらいましたね。
小松　そう、後からシャチ姿にも変わるという話になって。頭部が元々、魚の形なので、これがデカくなれば……という感じでまとめました。それ以外のハンターは、私がいっぱい描いたバリエーションの中から、監督が「これが好き」というものをベースにしました。チョップは、村瀬さんと監督の希望の間をとって作ったら、OKになりましたね。村瀬さんの「かわいくしたい！」という熱い想いがあって、面白くなったと思います。
村瀬　チョップは、小松さんが手の形をどうするか悩んでいたので、「丸いグローブにしましょうよ」って言ったんです。
小松　そうだ、村瀬さんが言ったんだ。どれもわりとシンプルな形だし、キャラごとの個性も強いから、もう誰もが描きやすい手にしようと。

口元の作画が難しかったクライマックスの歌

――表情芝居についても教えてください。今回は、ララの感情の動きがポイントだと思いますが。
小松　とにかく絶妙なニュアンスの演出指示が多くて。たとえば、ミリ単位での眉毛の位置とか。ララとユーマがケンカしているところなどは、「もっと泥臭く」って助監督さんの指示があったりして。
村瀬　感情を出すってことですか？
小松　そう、「ちょっと歪んでるぐらいの顔で」と。私にはそういう崩し方が難しくて、少し悩みましたが……。結果、いい表情をつけられたかなって。シリアスなシーンで大変だったのは、たとえばララが怒っているカットを描く時は、私も無意識に怒り顔をしているんです。眉間にシワを寄せながら（笑）。だから同じシーンを描き続けると顔が疲れちゃって。笑っているシーンは、私もニコニコしながら。……とても人には見せられません。
村瀬　キャラに憑依するんですね。
小松　集中すると、そうなるみたいです。今回のララは、感情の起伏が激しいシーンが多くて大変でしたけど、私も気持ちが入ったかなと思います。

――クライマックスの歌シーン、作画パートはいかがでしたか？
小松　ここは板岡錦さんが原画で、原画枚数がとにかく多くて、とてもなめらかに動いているんですね！　だから私も、より丁寧な作業を心がけ、歌詞の雰囲気に合わせて表情を微調整しました。基本は板岡さんのすばらしい原画のおかげで成り立っているシーンです。原画の動きがいいと、作監作業も楽しくなるんです。「これ、どんな映像に仕上がるかな？」って思いながら。

――歌っているカットなので、口元の作画が大変だったのでは？
小松　確かに難しかったですね。元気いっぱい大声で歌っている感じではないので、口を開けすぎると良くないし。切ない気持ちもありつつ、でも絶望感はなく。「笑顔ではないけど、微笑んでいるような絶妙な感じ」を出したくて。
村瀬　歌は、普通のセリフとは違う口パクですよね。
小松　作画枚数は多くなりますね。「あ」の口とか、「い」の口とか、歌詞に合わせて形が決まっているので。そこは演出さんの調整によって、細かく修正しました。それに、心を込めて歌っていると分かるように、表情は特に気を配りました。あまりこういうシーンを描く機会もないから、やりがいがありましたね。あと、手の動きなどの細かいところにも神経を使いました。きれいなシーンになるだろうなと思ったので。

――今回の映画に参加して良かったことは？
小松　スタッフの皆さんがすばらしい人たちなので、「総作監、私でいいの？」というのはありませんでした。それくらい、本当にぜいたくな時間でした。村瀬さんも含め、関わっている人たちがみんな接しやすい人たちばかりで。まぁ、逆にみんな、私に気を遣ってくれたのかも（笑）。
村瀬　全然そんなことは！（笑）
小松　素敵な作品に参加できて、本当によかったです。出来上がった映画を観て、素直に感動しています。自分が関わっているのが逆に不思議ですね。私も観客の一人として楽しみますので、ぜひ皆さんも何度でも観ていただきたいです！

オルゴール
物語のキーアイテム。田中裕太監督の自作のオルゴールを作画用にアレンジ。「現物ほぼそのままのデザインです。現物は結構大きいので、かわいく手のひらサイズにしました。工夫したのはフタの裏。虹の部分にプリキュア5人の色を入れてもらったんだけど、気づいてもらえたかな？」（小松）

田中裕太監督お手製のオルゴール

宇宙ハンター
ユーマを捕獲する目的で現れた宇宙のならず者たち。ドラマに深く絡まない、純粋な「敵」として登場する。「なるべく人型から離れたデザインにしました。バーンだけはハンター戦の後も役割があるので、比較的ベーシックな人型に近い敵として作り、他はとにかくバラエティ優先です」（裕太）

宇宙ハンターのUFO
バーンたち5人のハンターが駆るUFO。「完全に監督の案です。私だと、よくあるUFOになっちゃう（笑）。監督は「何これ!?」という、変な形にしたかったみたいです」（小松）

ミラクル♡スターライト
劇中では、星空警察のスタードロップ探索アイテム。持った相手の想いをユーマに伝えたり、ユーマのいる方向に反応し光ったりする。

MOVIE

私も子離れは寂しい

元気なドジっ子警部補とEDでの伸びやかな歌声。感動の映画に花を添える！

メリー・アン役　主題歌「Twinkle Stars」歌唱　知念里奈

ちねん・りな
1981年2月9日生まれ／沖縄県出身／歌手、女優で2児の母。近年は『レ・ミゼラブル』などミュージカルでの活躍が中心

—声を務めた、アン警部補の第一印象は？

知念　単純に「かわいい！」って思いました。ただ、台本のセリフを読むと、かなりおっちょこちょいなキャラでしたね（笑）。

—一人称が「本官」で、語尾が「〜であります」なのも愉快です。

知念　「〜であります！」は、何回も何通りも言いました！（笑）上坂すみれさん（キュアコスモ役）とは、TV第36話の掛け合いシーンは一緒にアフレコさせてもらいました。とってもかわいくて素敵なコスモちゃんと、楽しく追いかけっこしました。コスモちゃんは猫ちゃんなので、「だからアンは犬か、なるほど！」って思いつつ。

—アンを演じる際に意識したことや、監督からお願いされたことは？

知念　ドジでおっちょこちょいな子なので、面白キャラらしいところを求められまして。とにかく手探り状態でしたね。最初は、私の持っている声＋アンのイメージで演じてみようと思ったんですが、「テンションをもっと高く」と言われて、声がどんどん高くなっていったんです。でも、そうすると「もっとダメな感じがあってもいい」って（笑）。

—「多少は大人っぽさも」ではなく、「ダメさ」推しだったんですね（笑）。

知念　そうなんですよ！　そこでまた、必死で「ダメな感じになるよう」演じました（笑）。あと、TVのほうは、映画よりもアンらしさ全開というか、ドジなところがたくさん盛り込まれていて、最後までボケまくっていた感じですね。そこをチャーミングに演じられればと思いました。失敗して泣いているシーンでは、ちょっとやんちゃな方向にと言われました。

—今回の映画でのミラクルライトは「ユーマの探査道具としてアン警部補が持ってきたもの」という設定になっています。

知念　嬉しかったです。子どもたちが映画館で振って応援してくれるアイテムですもんね。アンは腰にミラクル♡スターライトを着けていたんですが、こんな大事なものを落としちゃうなんて！　リアルに考えたら始末書ものです！（笑）

—クライマックスでユーマが暴走しますが、アンによるララの説得はその遠因でもありますね。

知念　そこは大事なシーンなので、何度も録り直しました。ララに「ユーマを宇宙へ帰してあげないといけない」と説明するところは、監督も大事に思われていたし、私も一生懸命演じました。お説教みたいにならないよう、ララの気持ちも汲みとりつつで、とても難しかったです。子どもたちにとっては、たとえばすごく仲の良いお友達が転校して離れちゃうみたいな感じなのかな……。親子の別れのようにも見えるシーンで、私だったら、息子が子離れしたら寂しいなと感じました。

—この他、映画で印象に残っているところは？

知念　沖縄が舞台になっているのが嬉しかったです。私にとってなじみ深い風景が描かれたし、シーサーも出てきたりして。まさに「沖縄！」って感じで。

—主題歌を歌ってみて、いかがでしたか？

知念　『プリキュア』ですから、私が普段舞台で歌っているような歌い方ではなくて、「子どもたちに聴かせる表現」を用意する必要があるのかなと。ただ、楽曲を聴いてみたら、ごく自然に自分の中に入ってきたので、本当にナチュラルに歌わせてもらいました。レコーディングでは「映画が終わった後に、お客さんが内容を思い返して、しみじみと物語を噛みしめるよう、包むような歌声で」というオーダーでした。歌詞がとても素敵なので、言葉を一つ一つ大事に、聴いてくれる人に届くよう努めました。

—好きなフレーズはどこですか？

知念　「一所懸命 一瞬に 一生に 生命（いのち）を燃やす」というところです。最初に歌詞を見た時から、ここが大好きで。子どもたちにこのワードを伝えられることが嬉しいなと思いました。

—『スタプリ』や『プリキュア』の素敵なところはどこだと感じましたか？

知念　こんなに楽しくかわいく、夢いっぱいに、大切なテーマを子どもたちに伝えていけるところです。それってすごいことだなと。子育てをしていると、どうしても親の想いが伝わらないこともあって……。でも「こういう方法もあるんだ！」って。エンターテイメントの力って大きいですね。『プリキュア』という作品を通して、子どもたちはきっと、楽しく夢を見ながらメッセージを受け取れるはずだと思います！

アン警部補の追う「宇宙の神秘」ユーマ

超新星爆発で誕生したスタードロップが、変化した姿。不思議な音を発する。何かを感じたり興味を持ったりすると、顔の緑色のゴーグル風の模様が変化する。幼児のような仕草や行動がかわいらしい

メリー・アン

星空警察の新米刑事。正義感が強くてやる気満々だが、とにかくドジで空回り気味。スタードロップの保護の任務で地球にやってきた

異星人図鑑

アン警部補が追う宇宙ハンターの戦いを一挙紹介！

ニトロ星人　バーン

火焔攻撃と格闘戦が得意。細身だが瞬発力のあるパンチとキックの連続で、敵を圧倒するパワーファイター。腕から多数の火焔弾を放つ中距離技も持つ。必殺技は、パンチと共に火焔技を至近距離で放つマグマパンチ。「本当は技名もなければ、腕を回す必要もありません。スターのスターパンチを真似て、おちょくってます」（田中裕太監督）

声／咲野俊介

シャドー星人　ダイブ

不気味な「布状の体」を鋭く変化させる。影から影への瞬間移動を利用した分身技も併用して、狙った相手を貫く。また、渦巻くことで自身のボディを竜巻化させることも可能。影に潜んで相手を煽り、精神面からも翻弄する

声／片桐 仁

ウォーター星人　ハイドロ

腕を流体化させて剣にしたり、下半身を魚化して強烈な打撃技を放ったり。身体をシャチ型に変化させて、敵に体当たりして押しつぶす攻撃も得意だ。シャチ状態では身体が液状化しており、地中でも泳げる。京言葉風の口調も特徴

声／石川由依

メカ星人　ジャイロⅢ（スリー）

内蔵型マイクロロケットの一斉発射や、伸縮自在のムチ状の腕での攻撃、そして「奥の手」から放たれるビーム、ボディ自体を大出力ビーム砲にするキャノンモードなど、全身が攻撃メカの塊。短い多脚は極めて俊敏。3眼センサーの感度も抜群だ

声／濱津隆之

ジャイアント星人　チョップ

宇宙怪獣のような外見の巨人で、敵を倒すためなら自分のUFOの破損もいとわない。巨体に似合わず俊敏で、パンチの破壊力は苛烈を極める。頭部の2本の角は、破壊光線を発射するだけでなく、強靭なバリアを展開することもできる

声／駒木根隆介

SPECIAL COLUMN

01 届け！ワタシたちの歌

恒例となった『プリキュア』ライブが開催。華やかなコスチュームで、全17曲を披露した！

スター☆トゥインクルプリキュア LIVE2019 KIRA☆YABA!イマジネーションライブ

HP★https://www.marv.jp/special/precure_live/
★2019年9月28日（土）昼夜2公演
★昭和女子大・人見記念講堂

『スタプリ』声優陣と、『プリキュア』主題歌シンガーが集った「イマジネーションライブ」、その第一部（昼の部）の模様をレポートしよう。

成瀬さんたちの「スターカラーペンダント！ カラーチャージ！」のかけ声でライブスタート。それぞれのシンボルマークを描くジェスチャーもバッチリだ。

名乗りを決めてそのままOP主題歌「キラリ☆彡スター☆トゥインクルプリキュア」を5人で歌唱し、2番でシンガー3人と交代。リフレインから声優5人も加わり、8人全員バージョンという粋なアレンジだ。そして、ひかる、ララ、マオのソロ曲へと続いていく。小休止的MCコーナーでは、それぞれのキャラクターがにじむトークぶりに場内もほっこり。

ライブ中盤は五條さん、宮本さん、吉武さんが再び登場。アルバム「イメージソングファイル」からの楽曲や、『映画プリキュアミラクルユニバース』のOP・ED主題歌「プリキュア！カナYell☆ミラクル」「W・I・Nくる！ミラクルユニバース」などが歌われた。

ライブ後半は、えれな、まどか、ユニのソロ曲を立て続けに披露していく。ラストは後期ED主題歌「教えて…！トゥインクル☆」で、2番のリフレインから全員での歌唱だ。アンコール曲は『映画スター☆トゥインクルプリキュア 星のうたに想いをこめて』の挿入歌「Twinkle Stars」。両サイドの袖から出てきて歌い始める成瀬さんと小原さん。そこに他の3人が加わる流れや、安野さん・小松さん・上坂さんがメインで歌う際に成瀬さんと小原さんが手をつないでステージを小走りで巡る演出は、映画シーンの再現のようで、ただただ感涙！

オーラスは前期ED主題歌「パペピプ☆ロマンチック」。1番は吉武さんをメインに他の面々がコーラスを入れる形で、2番を出演者全員でリレーしていく一体感ある歌い分けにも感動。最後は成瀬さんをセンターに全員で手をつなぎ、客席の三方向へそれぞれ挨拶。他のメンバーが全員はけた後も成瀬さんが一人残り、「ひかるとして」ファンへのメッセージを送った！

成瀬瑛美

元から「ひかるそのまま」な成瀬さんだが、ステージ上の仕草は、劇中のひかるが取りそうなポーズをふんだんに取り入れ、もはや完全にひかる！ 元気いっぱいな本物のひかるが歌って踊っているようだった

小原好美

こうしたライブへの出演は初というが、客席に積極的にマイクを向けて「コール＆レスポンス」。感極まりすぎて「吐きそうルン」と第1話オマージュの言葉も。ララの触覚を意識した緑のサイドリボンもかわいい

宇宙アイドルをみんなで応援

マオの曲「コズミック☆ミステリー☆ガール」では、途中から声優4人がペンライトを持って現れ、上坂さんを囲んでバックダンスやオタ芸を披露（笑）。ステージが宇宙アイドルマオのライブ会場となった！

安野希世乃

えれなの曲「キミのソンリッサ」を熱く歌う安野さん。スパニッシュ感ある振付もベストマッチ。ライブ慣れしているメンバーが多い中でも、安野さんは率先して客席に声をかけるなどステージを楽しんでいた

上坂すみれ

ハードタイト系のユニの曲「Prism Rainbow Heart」を歌う上坂さん。その振付も、アイドルっぽいキュートなマオの曲から一転して、クールな雰囲気満点。アニメ本編同様の、2つの顔のギャップ感も印象的だった

小松未可子

まどかの曲「Moonlight Signal」の途中で、「セレーネ・アロー」のような矢を射る振付が入り、会場を大いに沸かせた。さらに、歌い終わってステージからはける際には、カーテシーでお辞儀もする優雅さ！

吉武千颯　宮本佳那子

宮本さんと吉武さんがデュオで歌ったイメージソング「TO BE LOVE ～扉～」では、イントロ部分などで来場者たちも一緒に振りをして大盛り上がり。二人でハートマークを作る動きも、とってもキュート♥

五條真由美

初代「プリキュア」シンガーの五條さんは、「DANZEN! ふたりはプリキュア Ver. MaxHeart」もカッコよく熱唱。メロディは昨年の秋映画の主題歌でもあるので、会場のちびっ子たちにも耳なじみがあったようだ

NEXT LIVE

1年間のありがとうを込めて…

「スター☆トゥインクルプリキュア感謝祭」

2020年2月に東京・大阪で開催決定！

VISUAL POINT
放映開始時に発表された番宣ポスター。背景の星が惑星レインボーであることは、当初は伏せられていた。増田竜太郎さんがコンペ用に描いたこの星が、宮元宏彰監督のイメージしていたユニの故郷とうまく合致。その結果、作品の象徴として番宣ポスターやOPラストカットにも組み込まれ、物語の伏線めいた形となった。
STAR☆TWINKLE PRECURE
×Animage
ここからは「アニメージュ」2019年3月号～9月号の記事を再録！『スター☆トゥインクルプリキュア』チームも大活躍した『映画プリキュアミラクルユニバース』の記事もあわせて掲載します！
※各再録ページの扉の右側に初出の月号が表記されています。
※再録されていないページもあります。

灯せ！ミラクルライト

毎年新しい『プリキュア』のスタートとともにやってくる春の劇場版。今回は『スター☆トゥインクルプリキュア』を中心にした3世代によるスペースアドベンチャーだ。

ある晩、天体観測していたひかるたちは、不思議な力で見知らぬ宇宙にワープ！　そこで惑星ミラクルから逃げてきたピトンと出会い、さらに『HUGっと！プリキュア』や『キラキラ☆プリキュアアラモード』のメンバーとも対面！　闇に染まっていく惑星ミラクルを救いに行こうとするが、なんとそこは「ミラクルライト」を作っている星だった！

プリキュアを応援するアイテムとして、劇場版では欠かせないミラクルライト。今回はミラクルライト自体が映画のテーマになっており、いつも以上に劇中で振って応援するシーンも多そうだ。

内藤圭祐プロデューサーは、娯楽色の強い方向性を意識しているとのこと。「全体に楽しい画の多い映画です。去年の秋の『映画HUGっと！プリキュア♡ふたりはプリキュア オールスターズメモリーズ』は“キュア泣き”の映画でしたが、この映画では“キュア笑い”してもらえたらと思います！」（内藤）

映画プリキュアミラクルユニバース

3月16日（土）ロードショー
HP http://www.precure-miracleuniverse.com/

STAFF　監督／貝澤幸男　脚本／村山 功　音楽／林ゆうき、橘 麻美　総作画監督・キャラクターデザイン／松浦仁美　美術設定／升井秀光　美術監督／高木佑梨、渡辺佳人　CGディレクター／高橋友彦　色彩設計／竹澤 聡　撮影監督／髙橋賢司　アニメーション制作／東映アニメーション

20周年への新たな第一歩

プロデューサー 内藤圭祐（東映アニメーション）

――今回の春映画はミラクルライトがテーマですね。

内藤　春映画の見せ場は、やはり「複数世代のプリキュアのコラボ」だと思うんですよ。ところが去年の秋映画が現状でこれ以上ないオールスターズだったので、別方向からのアプローチも必要だなと。そこで、観てくれる子どもたちがより楽しめるアトラクション的な参加型映画にしたいと考えました。それと、ミラクルライトは観に来てくれた子どもたちが全員もらえるアイテムなので、なるべく劇中で丁寧な形で登場させたいと思いました。単なる応援の道具ではなく、ドラマの展開上の鍵を握るキーアイテムにしたら、より没入感を高められるし、ライトを振った子どもたちの良い思い出になるだろうなと。

――脚本が村山功さんなのは、『スタプリ』との兼ね合いもあってですか？

内藤　実は春映画の脚本をお願いした後に、TVの『スタプリ』のシリーズ構成もされることが決まったんです。『スタプリ』のキャラクターを一番よく知っている方に書いてもらえてよかったです。物語の舞台も『スタプリ』に合わせて宇宙にしました。

――「ミラクルライトの製造工場」という舞台設定には驚きました。

内藤　最初はミラクルライトを「どこかの星におけるコア的な存在」という位置づけで考えていたんです。でも、設定周りばかり膨らんでいったので、「もうシンプルに、ライトを作っている星にしましょう」って。ミラクルライトは観に来てくれた子どもたちとプリキュアをつなぐものなので、大事なのは設定ではなく気持ちだろうと思ったわけです。

――惑星ミラクルの住人はみんな鳥の姿ですね。

内藤　貝澤幸男監督のアイデアです。村山さんの脚本をもとに打ち合わせを進めていく中で、ある時突然、貝澤監督が「ゲストのキャラクターはみんな鳥にしましょう」とおっしゃって。貝澤監督は独特のセンスをお持ちの方なんですが、貝澤監督の並外れた感性の片鱗を味わった最初の瞬間でした。なぜそういうひらめきに至ったのかは分かりませんが、キャラの見た目が人間とはまるきり違うので、プリキュアがすごく立つんですよ。また、ゲストキャラのピトンは性格的に少し難があるので（笑）、かわいい鳥の見た目のおかげで憎みきれないバランスになりました。

――ピトンがロケットを背負っているのも楽しいですね。

ミラクルライトとは

『プリキュア』の映画を特徴づけるアイテム・ミラクルライト。映画館で子どもたちが飽きないよう、「物語に参加してもらいたい」というアトラクション的発想からきたもので、『映画Yes!プリキュア5 鏡の国のミラクル大冒険！』で梅澤淳稔プロデューサーが導入した。

多くの場合は、劇中での「プリキュア最大のピンチ」に際してライトを振るシーンが設定され、そのライトによる応援の力を受けてプリキュアがパワーアップし、敵をやっつける流れになっている（また、変身シーンで独自に振って、プリキュアを応援する子どもたちも多い）。観ている子どもたちとしては「自分たちの力でプリキュアが強くなった！」という高揚感が得られ、大人目線では、真っ暗な場内に子どもたちの美しいライトのきらめきが見えてジンとくる瞬間だ。クライマックスの盛り上げに、打ってつけの仕掛けなのだ。

近年では、クライマックス以外でもライトを使うシーンが用意されることが多い。定番化したからこそ、ストーリーにより深く組み込む形になっているようだ。

2008年秋 ミラクルライト2

2009年春 レインボーミラクルライト

2009年秋 ミラクルハートライト

2010年秋 ミラクルフラワーライト

2011年春 プリズムスターミラクルライト

2011年秋 ミラクルライトーン

2012年春 ミラクルデコルライト

2012年秋 ミラクルつばさライト

2013年春 ミラクルダブルハートライト

2013年秋 ミラクルブーケライト

2014年春 ミラクルドリームライト

2014年秋 ミラクルドレスライト

2015年秋 ミラクルプリンセスライト

2016年秋 ミラクルモフルンライト

2018年春 ミラクルクローバーライト

2018年秋 ミラクル♡メモリーズライト

編集部選！心に残ったミラクルライト

2007年秋
『映画Yes!プリキュア5 鏡の国のミラクル大冒険！』
ミラクルライト

ゲスト妖精のミギリン＆ヒダリンの一種の万能ライトとして登場。ライトでバリアを張るなど意外と多彩に使われた。ライトの光と妖精キャラたちの応援で、プリキュアが蝶の羽をつけた映画専用フォームに変身する。

2010年春
『映画プリキュアオールスターズDX2 希望の光☆レインボージュエルを守れ！』
クリスタルミラクルライト

プリキュア遊園地ともいうべきフェアリーパークの来場者グッズとして登場。歴代シリーズの味方キャラが現れ（いつき＆ゆりも）、ライトを手にする展開が熱い。クライマックスでは、その全員でプリキュアを応援！

2016年春
『映画プリキュアオールスターズ みんなで歌う♪奇跡の魔法！』
ミラクルステッキライト

『魔法つかいプリキュア！』の設定とリンクさせ、ライトは「魔法の杖」という位置づけだ。妖精キャラたちが偶然手にしたライトの光を浴びて敵が怯むという『DX2』と同様のシーンに、より説得性が生まれた。

2017年春
『映画プリキュアドリームスターズ！』
ミラクルサクライト

ゲストキャラのさくらが、現実世界へ脱出した際に手にしたアイテムとして登場。ライトはドア同士をつなげて別の場所にワープする「鍵」の力を持つ。その光で、劇場の子どもたちにプリキュア探しの手伝いをお願いした。

2017年秋
『映画キラキラ☆プリキュアアラモード パリッと！想い出のミルフィーユ！』
ミラクル☆キラキラルライト

奇人的天才パティシエ、ジャン＝ピエールが蒐集した器具の一つで小型泡立て器として登場。興味を持ったペコリンにあっさり譲る。ペコリンが手にしたことで、ライト本来の力が引き出されたような描かれ方だった。

今年のライトはこれ！ ミラクル☆ユニバースライト

柄は近年女児に人気のラベンダー色で差別化。ヘッドにラメ加工もされている。「子どもたちが手に取って、『きれい、かわいい』と感じてもらえるようにと。また宇宙なので、『光を灯すことが闇に星を瞬かせるような感じ』になればと考えました」（内藤）。ライトを振るシーンも多く、貝澤監督が楽しくユニークな見せ方を仕込んでいるそうだ。

内藤 それも貝澤監督がやはり突然「ロケットを背負わせましょう」って（笑）。ピトンという名も貝澤監督がつけました。最初は仮でリトルと呼んでいたんですが、いつの間にか貝澤監督の絵コンテでピトンに変わっていて（笑）。語感がかわいいので、そのまま正式にピトンに決まりました。

――ゲスト声優は、爆笑問題の田中裕二さん、そして梶裕貴さんと小桜エツ子さんですね。

内藤 まず小桜さんは、ピトンをマイルドに感じさせたいという狙いからです。田中さんは、大統領が内包している優しさを感じさせる方ということでお願いしました。洋画のアニメ作品での吹き替えでも達者なお芝居を拝見していましたので。梶さんが演じるヤンゴは、惑星ミラクルの住人としては二枚目タイプです。

――今回もEDダンスがあるようですが、コンセプトは？

内藤 基本に立ち返って、「シンプルにしっかり振り付けを見せて、その場で子どもたちが一緒に踊れるもの」という方向性です。曲もサビが耳に残りやすいキャッチーなもので、分かりやすいフレーズが繰り返す感じを重視しました。

――内藤さんがミラクルライトを劇中で出す上で気をつけていることは？

内藤 シチュエーションにもよるとは思いますが、基本的には「ライトを使ってパワーをください」とプリキュアから言いすがるのは違うと思うんです。やはり、自力で立ち上がってこそプリキュアなので。そこは気をつけているところですね。

――この映画で感じてもらいたいことは何ですか？

内藤 今回目指しているのは「プリキュア15周年で一区切りからの、20周年への新たな第一歩」です。それは最初に村山さんと貝澤監督にもお伝えしました。タイトルもその新しさを出せたらと思って、「○○スターズ」の名前は踏襲せず、『スタプリ』の宇宙のテーマも鑑みて「ユニバース」を入れました。ユニバースは、宇宙よりもさらに広い、この世界全体の意味合いもあるんです。最終的には、村山さんが脚本に書いてきた「プリキュアミラクルユニバース」の語感が良かったので正式タイトルに決まりました。また、はぐプリ組やプリアラ組がそれぞれ一年間かけて大事にしてきたものを、新人プリキュアのスタプリ組が受け継ぎ、一つ成長する。その姿を観てもらいたいです。そしてピトンも一緒に成長する。『HUGっと！プリキュア』ロスの方も、3月にもう一度はなたちと映画館で会うことができます。どうぞよろしくお願いします！

集合撮影＝江藤はんな（P.56・59）
キュアセレーネ・香久矢まどか役
小松未可子
アニメージュ2019年4月号再録
キュアソレイユ・天宮えれな役
安野希世乃
キュアスター・星奈ひかる役
成瀬瑛美
キュアミルキー・羽衣ララ役
小原好美
みんなを照らすキラキラ星
毎春恒例のクロスオーバー映画、今年はついに宇宙へ進出！
キュアスターたちが歴代プリキュアと一緒にハチャメチャな大冒険を繰り広げる！

女の子だけどヒーローだぞ！って気持ちで

いよいよ『映画プリキュアミラクルユニバース』の公開が目前に迫ってきた。メインを張るのは、最新シリーズ『スター☆トゥインクルプリキュア』の4人だ。突然宇宙にワープしたひかるたちは、ミラクルライトの見習い職人・ピトンと接近遭遇！ ピトンがいた惑星ミラクルが謎の闇に覆われ、彼は単身逃げ出してきたという。

やがて『HUGっと！プリキュア』『キラキラ☆プリキュアアラモード』チームも合流し、一旦は闇を退けることに成功。ピトンが作ったミラクルライトが効果を発揮したのかも？ しかし、彼女たちは衝撃でバラバラになり、あちこちの星に飛ばされてしまう。また同じ頃、惑星ミラクルの大統領は、ピトンとプリキュアを騒動の犯人として指名手配する！

スタプリ組とピトンの成長がメインとなる物語だが、はぐプリ組、プリアラ組もシャッフルされて宇宙の各地で大奮闘。そこでどんなコラボを見せてくれるのか注目したい。また、ちょっとヒネた性格のピトンが、プリキュアとの行動を通してどう変化していくのかもドラマ的な見どころだ！

なるせ・えいみ
2月16日生まれ／ディアステージ所属／でんぱ組.inc メンバー。アニメへの出演は『アイカツ！』（星宮りんご／歌唱担当）、『まめねこ』（マジカルMAJIKO）ほか

ひかるは元気印で思いやりもある子

――まずは、担当キャラクターの第一印象からお願いします。

成瀬　キュアスターを見た時は、とにかく「かわいい！」の一言でした。見た目からして、とても明るくて元気な女の子という雰囲気を醸し出していて。私はもともと星のモチーフが好きなので、たくさんの星飾りもあって、本当に一瞬で好きになりました。自分の好きなことにまっすぐな性格も魅力的だし、みんなへの思いやりもある子です。元気がなさそうな子がいたら、元気が出そうな場所に連れて行ってあげたり。そういうところも素敵だなと思います。

――第1話で、フワにドーナツを半分こしてあげるのも優しかったですね。

成瀬　あそこ、かわいかったですよね～！ 不思議な出来事が大好きな子なので、フワみたいな妖精さんや宇宙人さんが目の前に現れても怖がったりせずに、すぐにお友達になろうとするところも好きです。

小原　私は、「初の宇宙人プリキュア」というキュアミルキーの設定にまず驚いたのと、語尾に「ルン」が付くのが特徴的だなあと思いました。だから言葉遣いもかわいいんですが、やっぱり宇宙人なので警戒心も持っていて。でも、地球で触れることがすべて初めての体験で、ひかるに負けないくらい好奇心旺盛なところもあります。だから演じながら、ミルキーと一緒にいろいろなことを一つ一つ吸収していけたらと思っています。

――頭の触覚が面白いですよね。

小原　そうなんです。触覚を使って、宇宙船を操縦したり修理したり。それと、触覚を前に出して相手の指とくっつけることが挨拶だったり。バトルシーンでは、触覚の先端から電撃攻撃（＝ミルキーショック）を放つんです。だから彼女にとっては大事な戦闘アイテムでもあるんだと思います。

安野　私は、キュアソレイユの絵を初めて見た時、これまであまり演じないような役だなって思ったんですよ。

――雰囲気的には、キュアソレイユが小松さんで、キュアセレーネが安野さんという感じですよね。

小松　そうなんですよ！

安野　スタッフさんにもそう言われました。でも、「今回はあえて逆のイメージのキャラを演じるのがいいよね！」とも言っていただいて（一同・笑）。

小松　「あえて裏をかく」ってね（笑）。

安野　そんなソレイユのデザインで、私がすごく好きなのが脚です。とっても健康的に描かれていて。身軽にピョンピョン飛び跳ねて、足技で敵を一掃する戦い方なんです。技も、足に炎をまとわせてボォ～ッ！ という。

成瀬・小原・小松　カッコいい！

――サッカーのシュートみたいな感じですよね。

安野　そう、技名も「ソレイユシュート」。カッコいい技が似合う子なんです。ひかるたちより1学年上の先輩で、えれなが「観星中の太陽」、まどかが「観星中の月」と呼ばれているんですが、私たちのコンビでの活躍にも注目してほしいです。それと、えれなは意外にもかわいいものが好きで、フワを初めて見た時に「かわいいねぇ！」ってモフモフしちゃったり（笑）。そういうところもいいなって思います。

――褐色系でハーフ（ダブル）なのも魅力ですよね。

安野　そうなんです。お父さんが中南米出身という設定ですが、ふんわりと「メキシコかも？」くらいに聞いています。

――メキシコは、お父さんの母国語と言われているスペイン語圏ですし、サッカーも強いですからね。

小松　じゃあ、やっぱりメキシコなのかも。

スター☆トゥインクルプリキュア

キュアスター　星奈ひかる
みんなで望遠鏡を覗いていたら、なぜか突然宇宙へ！ ピトンをはじめとする宇宙人との未知との遭遇に「キラやば～っ☆」な状態に

キュアミルキー　羽衣ララ
鳥型宇宙人たちの「緑の星」にプリアラ中学生組と共に投げ出される。住人たちのためにスイーツを作るいちかたちの姿に心打たれる

キュアセレーネ　香久矢まどか
「マシェリ＆アムール」「マカロン＆ショコラ」の連携プレーを目の当たりに。彼女もソレイユと息を合わせることができるだろうか

キュアソレイユ　天宮えれな
まどか、えみる、ルールー、プリアラ高校生組と「火山の星」へ。その灼熱に難儀するが、ルールーの機能が作動してホッと一息？

ピトン
声／小桜エツコ
惑星ミラクルでミラクルライトの職人を目指してきた。唯一残ったミラクルライトを手に、プリキュアと行動する。語尾の「～ピト」が特徴

『スター☆トゥインクルプリキュア』は毎週日曜日、朝8時30分より、ABCテレビ・テレビ朝日系にて放映中　©ABC-A・東映アニメーション

映画プリキュアミラクルユニバース

3月16日（土）ロードショー
HP http://www.precure-miracleuniverse.com

STAFF　監督／貝澤幸男　脚本／村山 功　音楽／林ゆうき、橘 麻美　総作画監督・キャラクターデザイン／松浦仁美　美術設定／升井秀光　美術監督／高木佑梨、渡辺佳人　CGディレクター／高橋友彦　色彩設計／竹澤 聡　撮影監督／髙橋賢司　アニメーション制作／東映アニメーション

ララはひかるに負けないくらい好奇心旺盛

こはら・このみ
6月28日生まれ／大沢事務所所属／最近の出演作は『かぐや様は告らせたい～天才たちの恋愛頭脳戦～』（藤原千花）、『ドメスティックな彼女』（葦原美雨）ほか

小原 「ソレイユシュート」だし？

安野 じゃあ、そういうことなのかな！（笑）

――小松さんはいかがですか？

小松 セレーネはとても清楚でお上品な子だなと思います。最初は「私にそんな気品あるお芝居ができるのだろうか？」と戸惑いました。

成瀬 そんなことないです！

小松 実際の私は上流階級のお嬢様でもなく、むしろ兄と弟がいて騒がしく育ってきたので……。ただ、彼女の内面の部分で、私自身とシンクロする部分もあるのではないかなと、探しながら演じていこうと思いました。その一つとして、まどかには、学校で生徒たちをまとめている自分と、家の中での自分があるんです。そういうふうに、接する人によって自分を変えてしまうというのは、私も分かるなあと思いました。そんなまどかが今後どう変化していくのか、気になっている部分でもありますね。

――早くも第5話で、宇宙人を探索しているお父さんに本当のことを隠さなきゃいけないジレンマが……。

小松 そうなんですよ。もう心苦しい！ お父さんもすごく厳しそうですからね。今後、家族の問題が出てくるのかなと思っています。

最初はキツめのララもどんどんかわいく!?

――演じる上で、宮元宏彰監督から特にお願いされたことは？

成瀬 ひかるは「ちょっとボーイッシュなイメージでやってほしい」と言われました。特に戦闘シーンでは、女の子だけど「私はヒーローだぞ！」って気持ちを強く持って、少年マンガくらいの勢いで戦えるようにって。キュアスターは肉弾戦が多くて、パンチを主力としているので。でも声は高いんですけどね（笑）。

――「スターパンチ」は、文字通りパンチ一発という感じですしね。

成瀬 そうなんです！ まさにストレートですよね。スターの強さを意識しています。

小原 最初に絵を見た時、ひかるがかわいい系の性格で、ララはちょっとキツめの子なのかなと思ったんです。そうしたら「最初はキツい印象もあるけど、打ち解けた後は4人の中ではたぶん一番かわいい系の女の子です」と監督からうかがいました。第5話の段階で、もう完全にみんなのことを、特にひかるのことを信頼していて。今までの警戒心がだいぶ薄れて、かわいらしくなりました。だから監督のおっしゃることを信じて、あまり考えすぎず、「ララはひかるを信じて突き進む女の子」と意識して演じています。

――ララは「オヨ～」というリアクションがかわいいです。

小原 そうなんですよ。「オヨ」って言ったり、びっくりした時「ルン!?」って言ったりも。

成瀬・安野・小松 かわいい！

成瀬 私、第2話でひかるが作ったおにぎりを、美味しそうにむしゃむしゃ食べてくれたシーンが大好きなんです！

小原 えへへ。

安野 回を重ねるごとに、だんだんみんなに懐いていきましたよね（笑）。

小松 なんだか餌付けされてるみたい？（笑）

小原 「いくらでも食べられるルン！」って。

成瀬 「いくらでも食べて！」って気持ちになっちゃいます！

小松 でも「食べられるルン」が言いにくそう？

小原 そう、「るルン」って言いにくいです（笑）。

――では、安野さんと小松さんは？

安野 本編収録が始まる前にも、玩具の収録で技名の叫びや決めゼリフを言ってきたんですが、私はバトルものの作品の経験がまだあまりないので、「もっとカッコよく、もっと力強く」と指示されてきました。ソレイユも肉弾戦担当ですが、スターのパンチに対して、こちらはキックなんですね。今後、接近戦も増えると思うんですけど、バトルでの声の出し方が課題です。攻撃はもっとキレよく、技名はもっとカッコよく、どんどん上手になっていきたいです。それと、第4話での弟や妹たちとのシーンでは、「もっと肝っ玉母さんっぽくしてください」と言われました。「一番上のお姉ちゃん」という気持ちでは演じていたんですが、「むしろ『お母ちゃん』くらいの気持ちで。弟妹がワーワー騒いでいても困った感じにならず、慣れたいつもの日常として『はいはい』って流せるくらいに受けとめてください」と。だから今後は「肝っ玉」も課題だなと（笑）。

小松 私は、学校と家とでまどかの印象を変えてほしいと言われました。たとえば生徒会でのシーンでは柔らかく、みんなから慕われて敬意を表されている感じで。逆に家ではそれとは違う、クールでおとなしい雰囲気で。家庭内のパワーバランスでは、父親がとにかく強い存在で、母親は少し天然系でクッション的な存在なんです。家庭内が冷めていたり父親が嫌いだったりということはないんですが、まどかは父親の言うことが一番だと思って、背中を見ている状態です。そこを今、気をつけて演じているポイントですね。そして、技の時は「優雅にお願いします」とディレクションをいただきました。

成瀬・小原・安野 ほぉ～！

小松 それを聞いて、「そうか、上品なだけじゃなく、優雅なんだ！」って（苦笑）。

仲間のすばらしさを4人の掛け合いで痛感

――いよいよ3月16日（土）に公開する『映画プリキュアミラクルユニバース』は、ミラクルライトがテーマですが。

成瀬 今までの映画でもお客さんがミラクルライトを振ってプリキュアを応援するシーンはありましたが、今回は特に参加型になっていて、「ここが応援シーンだよ」と明確に表現されてるんです。プリキュアとして演じつつも、私も観客の一人としてミラクルライトを振りたいなぁって気持ちにさせられました！ あと、ミラクルライトの工場という設定は、「そうきたか！」って思いました（笑）。

小原 ミラクルライトは、これまでのシリーズでも重要なアイテムですよね。特にこの映画は、子どもたちが応援してくれることで初めて成り立つ形になっているので、その意味でもミラクルライトは大事です。映画館で子どもたちが一生懸命応援している姿を見たら、保護者の皆さんは泣いてしまうんじゃないかなって。物語でも感動しますし、お子さんたちの姿にも感動するでしょうし。素敵なものがたくさん詰まった映画だと思います。

安野 実際に劇場で子どもたちに配られるライトを手にしたら、意外とちっちゃいんですよね。お子さんたちのちっちゃい手に、このかわいいライトが収まって、劇場でプリキュアのことをみんなが応援してくれるんだ！ と思いました。ライトの小ささから、子どもたちのかわいい姿が想像できて、ハートにズキュンときてしまいました。

小松 私も子どもたちが灯す明かりを、映画館で観たいですね。生の反応ってその場に行かないと得られないですし、自分もアトラクションとして感じにいきたいと思える映画になっています。それと、『プリキュア』ってキャラクターショーもありますよね。それも組み込まれている感覚もあって。アトラクションとショーの要素も合わさった映画という感じがします。公開されたら、こっそり後ろの席から観てみます。

成瀬 みんなで行こうよ！

安野 応援しにね！

小原 うん！

えれなの「肝っ玉母さんっぽく」が課題です

やすの・きよの
7月9日生まれ／エイベックス・ピクチャーズ所属／最近の出演作は『ブラッククローバー』（チャーミー・パピットソン）、『デスマーチからはじまる異世界狂想曲』（ナナ）ほか

小松 行こう！

――1月26・27日に行われた映画のアフレコはいかがでしたか？

成瀬 憧れの先輩たちとキャラクター同士で絡めるのが嬉しくもあり、緊張もしました。当日は胸がずっとバクバクで、途中でいっぱいいっぱいになっちゃったりもしたんです。その時に『スタプリ』の仲間たちが「一緒に頑張ろう！」って背中を叩いてくれて。私だけ録り直しになったシーンでも、「みんなでやったほうが気持ちが乗るんじゃない？ 一緒にやるよ」って、『スタプリ』のメンバーも一緒にブースに入ってきてくれたり！

安野 うんうん。

成瀬 それで乗り越えられた部分があるので、絆が深まった収録でした。仲間ってすばらしい！ 皆さんには本当に感謝しています！

小原 これまでいろいろなアフレコ現場を経験して、掛け合いって大事だなと思ってきたんですが、『プリキュア』の現場では特にそう感じることが多くて。監督さん（貝澤幸男監督）は並々ならぬ熱量で、「もっともっと！」とこだわって録ってくださいましたが、やっぱり一人で録るシーンは私たちも緊張したし、特にまだアフレコ経験が少ない成瀬さんは、座長でもあるし、誰よりも緊張していたと思うんです。でも4人で掛け合いをした時、私もすごく「仲間と一緒！」って感じがして……。

成瀬 そうなんです！

小原 私としては、ちゃんとミルキーになりきって演じていたつもりでしたが、やりながらマイク前で涙が出そうになってしまって……。

成瀬 そう！ 思い出して今も泣きそう！

小原 仲間ってなんて大事なんだろうと思いました！ この物語は、新人プリキュアの私たちが先輩プリキュアと一緒に頑張ることで成長するドラマで、人と人とのつながりがとても色濃く描かれているんです。2日間かけて録りましたが、ものすごい達成感があって、想いの詰まった作品に仕上がったと思います。

――安野さんは、『キラキラ☆プリキュアアラモード』のメンバーとの再会もあったかと思いますが。

安野 そうなんです。私が『プリアラ』（ルミエル役）に出演したのは数話程度でしたが、皆さんが『プリアラ』の時はありがとう！ おめでとう！」ってお祝いしてくださって、すごく嬉しかったです。次世代のプリキュアの名に恥じないように演じようと思いま

まどかは学校と家で自分を変えてしまう子

こまつ・みかこ
11月11日生まれ／ヒラタオフィス所属／最近の出演作は『ケムリクサ』（りん）、『revisions』（ミロ）ほか

した。それから、この映画に登場する15人のプリキュアの変身シーンを見ていると、今までプリキュアとして活躍してきた先輩たちの歴史があって、その先端の「今」に私たち4人がいるんだなって実感しました。アフレコ前にリハVをチェックしている段階で、胸が熱くなってしまって。本番でも、それぞれの名乗りを聴いて感動しました。

成瀬・小原・小松　うんうん！

安野　後継というか、今のプリキュアとして、もっと成長したいしもっと頑張りたいなと思いました。全員の変身シーンは見ものですので、そこもぜひ！

小松　歴代の先輩プリキュアとの掛け合いは本当に面白いです。「このシリーズのキャラとあのシリーズのキャラが掛け合うとこうなるんだ！」って。私たちスタプリ組が先輩プリキュアの前に現れて、先輩たちは「この子たちもプリキュアなんだね！」って受け入れてくれるんです。これまで観てきてくれた方はすごく楽しめると思うし、そうでない方も「前のシリーズも観てみたいな」って思えるはずです。それから、私たち4人そろっての変身シーンは、実は何度も録り直したんです。4人が一つになるシーンを、時間をかけて作り上げました。声を一言合わせるにしても、スターがリードしてやらないと、このチームは完成しない。スター中心でやることに意味があるんだなとすごく感じました。

小原　そうそう！

小松　ただ技術的に声がそろえばいいのではなくて、「誰がこの4人を引っ張ってまとめているのか」という意味をすごく感じました。

――では最後に、代表して成瀬さんに意気込みをお願いします。

成瀬　『映画プリキュアミラクルユニバース』はストーリーも面白いし、キャスト陣の熱い思いもある、スペシャルでミラクルな作品です。『プリキュア』を知っている人も知らない人もみんなが楽しめる、体験型の映画になっています！　ぜひ劇場へ観にきてね！　あと、TVの『スター☆トゥインクルプリキュア』もよろしくお願いします☆

ひかるとララ、初めてのケンカ（第3話）

成瀬　私から見たら、ひかるもララもかわいいなぁって。どちらも間違ったことは言ってないのにすれ違っちゃうのがもどかしくもあり。でもこのケンカを経て仲良くなれましたよね。大人の目線で温かく見守りながら、でもひかるを演じる時は彼女の素敵な主張を尊重しながら演じました。

小原　ララは、結構頑固な子なんです。それに宇宙船のAIの言葉に頼りがちで、そのせいで第3話ではひかると衝突してしまって。お互い「ふん！」ってなっていましたよね。

成瀬　うんうん。

小原　でも、観てくれている小さい子どもたちにも、日常で同じようなことがあるだろうなと思います。ケンカしていてもお互いのことを気にし合っていたりとか。その意味ではとても微笑ましいし、最後にはちゃんとお互いを認め合って仲直りする流れが、とてもきれいでした。私も子どもの頃にこういった経験をしたのを思い出して、なんだかララたちの親になったような気分になりました（笑）。もちろん、演じている時は私も100％ララに気持ちを注いで、ひかるの言うことに「意味が分からない！（怒）」って返していたんですけど……なんだか第3話を通して、すごく温かい気持ちになりました。

成瀬　第3話のラストシーンは本当にお気に入りです。ララが呼び捨てで呼んでくれて、「そのほうが効率的ルン」って言うんですけど、めちゃめちゃキュンとしました。かわいい♪

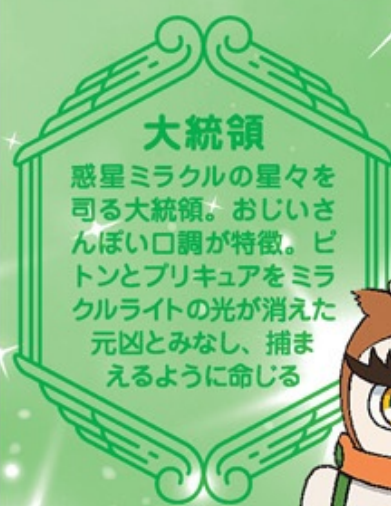
安野　二人のコンビ感も、回を重ねるごとに育ってますよね。

小松　うんうん！

成瀬・小原　やったぁ。ありがとう☆

①宇宙へ飛び出したキュアスターたち。ミラクルライトを持ったピトンと出会う

②ピトンは、工場でミラクルライトを作る見習いの日々にうんざり?

③3世代のプリキュアは様々な星へ。火山の星では、あまりの暑さに四苦八苦!

大統領
惑星ミラクルの星々を司る大統領。おじいさんぽい口調が特徴。ピトンとプリキュアをミラクルライトの光が消えた元凶とみなし、捕まえるように命じる

たなか・ゆうじ
1月10日生まれ/タイタン所属/お笑いコンビ「爆笑問題」として活動/声の出演では『ドラえもん のび太の宇宙英雄記』(ハイド)、『よなよなペンギン』(ブッカ・ブー)ほか

仲間と協力する大切さ

大統領役 田中裕二

—『映画プリキュアミラクルユニバース』への出演オファーを受けた時のお気持ちは?

田中 まず「僕でいいの!?」という意外さがありました(笑)。『プリキュア』シリーズはもちろん知っていましたが、番組をリアルタイムで観ていた世代でもないし、かわいい女の子たちが活躍する世界だし、そういう中におじさんの僕が入っていける自信がまったくなくて。でも「うちの子どもたちは喜んでくれるかな?」という思いもあったんですよね。実際、11歳の長女はとても感激してくれました。

—アフレコは、普段のお仕事での喋りとは、また違った緊張感があるものなんですか?

田中 もう全然違います! 実写のドラマでの芝居なら、僕の見た目で僕がそのまま喋る感じに近いですけど、声の仕事はキャラクターありきですからね。これまでもいくつかアニメの声のお仕事をさせてもらいましたが、役柄をイメージしても、それが合っているかどうかがいつも不安なんです。特に今回は、フクロウの姿をした宇宙人という、ゼロから頑張らないといけないようなキャラクターですし。せっかくキャスティングしてもらったのに、「全然合ってなかった」ってみんなにガッカリされたらどうしようかと。それに技術的にも、声の仕事は難しいですしね。

—田中さんが演じる大統領は、見た目は小さなフクロウですね。

田中 それで余計混乱しました(笑)。『プリキュア』の世界観になじめるかなと思っていたら、フクロウだと。これは、もうあれこれ考え込まず、収録当日に「どういう感じでやったらいいんでしょう?」って監督さんに直接訊くしかないなと。そういう半ば開き直った感覚で収録に臨んだところ、「特に声を作らずに演じてください」とお願いされたので、ちょっとホッとしました(笑)。

—すると、演技の方向としてはわりとナチュラルに?

田中 そうですね。ただ、「~じゃ」という語尾なので、長老っぽいです。「~じゃ」ってセリフを見たら、誰でも自然に年寄りっぽい調子で言っちゃうでしょ。その感じで、素直にやらせてもらいました。あと特徴的なのは「ホウ」というセリフ。第一声からして「ホウ」なんです。やっぱりフクロウですからね(笑)。我々が感心する時の、日本語の「ほう」とも違うんです。とはいえ、セリフのベースは普通の日本語なんですが。

—「ホウ」に始まり「ホウ」に終わる感じ?

田中 まさにそうです。でも、見た目がフクロウに似ているだけで宇宙人ですから、動物っぽい鳴き声も違うと思うし。監督さんからテストの時に「いろいろ『ホウ』って言ってみてください」と言われて、甲高く言ってみたり低く言ってみたり、あれこれやって聴いてもらったんですよ。その中で「あ、今のがいいですね。本番はそれでお願いします」と言われたテイクがあったんですけど……本番ではうまく再現できなかった気がします(苦笑)。

—「ホウ」に苦労されたんですね。

田中 難しかったです。怒り気味の「ホウ」、疑問形の「ホウ」など、いろいろとやらせていただきました! こんなお仕事ってなかなかないですよね。というか、まずフクロウの役自体、あまりないですからね(笑)。

—今回の映画を観て、特に感じてもらいたいところは何ですか?

田中 「仲間と協力すること」が大きなテーマとしてあるのかなと。プリキュアがピトンを助けて、みんなで頑張るお話になっていますので。僕も子育てしていて思うんですが、小さい子って「自分のやりたいこと」をまずやろうとするんです。だから「みんなと協力して何かをする」というところになかなかいかない。でも協力って子どもたちが社会の中で生きていく上で本当に大切なこと。どうか映画を通して伝わってほしいなと思います。

PRECURE 2019 SPRING

まっすぐに思い続けること

ヤンゴ役 梶 裕貴

かじ・ゆうき
9月3日生まれ／ヴィムス所属／最近の出演作は『進撃の巨人』（エレン・イェーガー）、『MIX』（立花投馬）、『逆転裁判 〜その「真実」、異議あり！〜』（成歩堂龍一）ほか

ヤンゴ
大統領の側近として、宇宙の平和を守る任務に励む。大統領の命で、ミラクルライトの光が消えた元凶と見なしたピトンとプリキュアを追う

——『プリキュア』初出演だそうですが、これまで『プリキュア』シリーズにどういう印象をお持ちでしたか？

梶　昔、初代シリーズの『ふたりはプリキュア』を9つ下の妹と一緒に観ていました。どちらかというと、熱中している妹を横で見守っている感が強かったかもしれませんが（笑）。日曜朝8時半枠だと、『夢のクレヨン王国』や『おジャ魔女どれみ』なども妹と観ていたんです。それが『ふたりはプリキュア』から少し雰囲気や方向性が変わって「女の子だけど、ヒロインではなくヒーローとして描かれる作品が誕生したんだな」と感じたのを覚えています。

——今回演じるヤンゴの印象は？

梶　ヤンゴのビジュアルについては、役どころをお聞きした後に知りまして、「鳥なんだ!?」って思いました（笑）。ただ、僕らの仕事は、どんな姿のキャラクターでも「気持ちを丁寧に表現する」という、その一点が何より大事ですから、そこはいつもと変わらずの心構えですかね。実は彼には、とある〝秘密〟がありまして……そのあたりも楽しみにしていてほしいです。

——ヤンゴは大統領の命令を忠実に実行するキャラクターだそうで。

梶　大統領の側近であり警備隊員である彼は、キチッとしていて自分の仕事にプライドを持っている印象です。そこを汲む方向で演じました。彼はプロフェッショナルな人ですから、大統領とそれ以外の人との対応の差ははっきり出す感じで、プリキュアには「追う立場」として厳しく接する態度を意識しました。

それにしても、こんなにかわいいプリキュアが指名手配されるだなんて、すごくキャッチーで興味をそそられますよね（笑）。なぜそんな事態になってしまうのか、映画を観ていただけたらと思います。

——プリキュアと共にヤンゴから逃げることになる、ピトンの印象は？

梶　天真爛漫で未熟なところもあるけど、熱いものをちゃんと持っている子です。ピトン役の小桜エツコさんとはアフレコが別日になってしまったので、まだピトンの声は聴けていませんが、もう台本を最初に読んだ段階で小桜さんのかわいらしいお声が自然と脳内に再生されました（笑）。物語におけるギャグ面もシリアス面も中心になって引っ張っていく存在なので、小桜さんのお芝居でその魅力が120％引き出されているはずです！

——この映画に出演して、嬉しく感じたことは？

梶　やっぱり、お子さんにも観てもらえる作品って素敵だなと思います。他作品の劇場版などの機会に、舞台挨拶等のイベントでステージに立たせていただくこともありますが、いつも小さいお子さんたちのキラキラした目が印象的なんです。そういう子どもたちの姿を見ると、声優って「作品やキャラクターを通して、みんなに夢を与えられる仕事なんだな」とあらためて嬉しく思うんです。普段スタジオにこもって仕事をしていると、なかなか実感するチャンスはなかったりもするのですが……（笑）。思い返してみれば、僕自身も子どもの頃はアニメのキャラクターに憧れて「あんなふうになりたい！」と思ったり、その声を聴くだけで「あのキャラクターだ！」と高揚したりしていました。大人になった今、送り手の立場で子どもたちにそんな感動を伝えられるというのは、役者冥利に尽きます。特に『プリキュア』はたくさんの人たちに長く愛されている作品で、今や小さい女の子たちが絶対に通る道ですから、本当に光栄です！　……ただ、ヤンゴに関して言えば、どうなんでしょう……（苦笑）。プリキュアを悪人扱いして追いかける役でもありますし……。でも、そんな憎まれ役を精一杯演じました！

——今回の映画を観て、特に感じてもらいたいところは何ですか？

梶　やっぱり、「純粋な気持ち」って大切だなと僕自身も感じました。うまくいかないこともあるけれど、それでもまっすぐに思い続けることが重要なんだということが、特にピトンを通して伝わる内容だと思います。映画オリジナルのダンスシーンもありますし、ドラマ以外の部分もとっても楽しい映画です。ぜひミラクルライトを振って、映画館で応援していただけたら嬉しいです。そして願わくばヤンゴも、なるべく子どもたちに嫌われないといいなあと思います（笑）。

④ピトンとプリキュアは、ヤンゴたち惑星ミラクルの警備隊に追われ続ける！

⑤闇に染まってしまったミラクルライト工場。プリキュアの力で元に戻せるか？

⑥妖精たちはミラクルライトを振ってプリキュアを応援！

キラキラ☆プリキュアアラモード

キュアホイップ・宇佐美いちか役 美山加恋

キュアホイップ
宇佐美いちか
「緑の星」でレッツ・ラ・クッキング。宇宙でも「スイーツでみんなを笑顔にしたい」という気持ちは変わらない。さてその成果は!?

――今回の映画は『キラキラ☆プリキュアアラモード』のシリーズディレクターだった貝澤幸男さんが監督を務めますが。

美山 貝澤さんが今回の監督をなさることは実は少し前にうかがっていて、その時『プリアラ』みんなの個性を大切にしているというようなことをおっしゃっていました。実際、台本をいただいたら、こんなに盛りだくさんな展開のストーリーの中にしっかり私たちならではのクッキングシーンや、みんなの技もあったりと、貝澤さんのシリーズへの愛を感じました! なのでアフレコが本当に楽しくて。まるでTVシリーズの時のようなわいわいしたアットホームな雰囲気で、2日間があっという間でした!

――この映画のオススメシーンを教えてください。

美山 プリアラ組の活躍シーンはやっぱりクッキングシーン!! あと、細かいところですが、長老が最初から最後まで、はぐたんにいじられててかわいいです。今回長老大活躍!! プリアラ組以外で言うと、ピトンにはずーっときゅんきゅんしてました。アフレコでは、プリアラ組はピトンが出るたびに「ピトンかわいいよ〜〜(泣)」とピトンを愛でるシーンが必ずあって、アフレコが終わるまでそんな感じでした(笑)。

――ララと一緒にスイーツ作りをするシーンもあるようですが。

美山 尺の都合上、カット候補にもなっていたシーンだったけど、「ここは残したい!!」と貝澤さんが守ってくださった、私たちにとって大事なシーンです。クッキングタイムがまたできたのがすごく嬉しかったです!! いつもスイーツの名前が楽しみだったし、言うのをドキドキしてたなぁなんて思いながら、楽しくできました! あらためて、お菓子作りはみんなをつなげる大切な時間であってほしいし、おかげで、いちかたちもピトンやララちゃんと仲良くなれたし、想いがピトンにも届いて力となりました!

クッキングタイムが嬉しい!

――そして、「古のプリキュア」だったルミエル役の安野希世乃さんが、今回「プリキュアの仲間」になりましたね。

美山 発表された時、すごく嬉しかったです!! 現場でも「おめでとうございます!!」とお伝えしました! 古のプリキュアが現役のプリキュアになるってすごく強そう!! (笑) ヤパパ役だった引坂さんも次の世代でキュアエールになって、また次の世代ではルミエルさんだった安野さんがキュアソレイユになって……。偶然ですが、プリアラファミリーからどんどん世界が広がっているような気持ちになれて、すごく嬉しいです!!

HUGっと!プリキュア

キュアエール・野乃はな役 引坂理絵

キュアエール
野乃はな
さあや、ほまれ、ひかると一緒に、雲だらけの「青の星」へ。スタプリ組の未熟さを悔やむひかるに、心からのエールを送って励ます

――貝澤幸男監督との再会はいかがでしたか?

引坂 『プリアラ』に参加させていただいた時と今回の映画では、また雰囲気が違う空間でしたが、貝澤さんは以前お会いした時のままで、その優しい雰囲気にリラックスさせていただきました。今回はかわいい鳥がたくさん出てくるのですが、『プリアラ』本編でもかわいい妖精がたくさん出ていて、リンクするところがありましたし、あらためて『プリアラ』時代を思い出しました。

――キュアエールも今回初めて「歴代プリキュア」の一員となりましたが。

引坂 「歴代」と言われると恐れ多く感じます。『はぐプリ』の映画・本編を合わせて、歴代のプリキュアの皆さんの姿を見てきて、「一年後こうなれるんだろうか」という気持ちは常にありました。次の代に引き継がれて、あらためて身が引き締まる思いがあるのはもちろんですが、一年過ごしてきた『はぐプリ』の一員としてその場にいることで、「『スタプリ』の皆さんの支えになれればいいな」と思いながら収録に参加していました。

――この映画のオススメシーンは?

引坂 中盤に出てくる、えみるの暑がっている姿はとても愉快でした。現場でも真似したりして(笑)。また、同じシーンで、ルールーに抱きつこうとした人間ハリーには「何をする気だ!?」と思ってびっくりしました。「青の星」での、ひかるちゃんとの会話はぐっときましたし、はな、さあや、ほまれの先輩姿も、一年経ってそうなったんだなと思うと感慨深かったです。また、チームを超えてのお菓子作りもキラキラルがあふれていて、『プリアラ』本編を思い出すような気持ちになりました。ララちゃんとピトンの心が通じ合った会話がかわいくて印象に残っています。終盤の敵との対峙は、ピトンとスターの心が成長し合って、最後まで必死に頑張る姿に力をもらいました。

これからもキュアエールが 何度も力をくれるんだろうな

――青の星でのひかるとのやりとりは、はならしいシーンだそうで。

引坂 先輩感があって、ちょっぴり恥ずかしかったです。今までのはなは、「フレー! フレー!」と相手を応援しつつ、その言葉で自分を応援して、成長していく姿が描かれているようなところがありました。この映画では、ひかるちゃんを見て、自分も乗り越えてきた経験があるからこそ、本当の意味で応援していてカッコよかったです。はなの成長した姿に感動しました。

――映画のアフレコ2日目はちょうど『HUGっと!プリキュア』最終回の放送日でした。スタッフ・キャスト有志で一緒に放送を観たそうですが。

引坂 最終回はリアルタイムで観て、その後、映画の収録があるメンバーは一緒にご飯を食べて収録に向かいました。収録前に最終回で大泣きをしていたので、若干の喪失感はありました。ですが、収録現場についた時には、「一年走り抜いたんだ! 映画も全力投球しよう!」と気持ちを切り替えて臨むことができました。

――最後に、一年間演じてきたキュアエールへの思いや、はなむけの言葉、ファンへのメッセージをお願いします。

引坂 エールは、かけがえのない存在です。キャラクターにこんなにも励まされるものなのかと思いました。今後の人生においても、きっといろんな壁があって、そんな時にエールの存在や言葉は自分に何度も力をくれるんだろうなと感じています。エールには、感謝しきれないです。本当にありがとう。でも、今後もずっとそばにいてね! そして『はぐプリ』を応援してくださった皆さん、本当にありがとうございます。小さいお友達は、大きくなってまた見返してほしいですし、大きいお友達は壁にぶつかった時、またDVDを観て『はぐプリ』のことを思い出して、一歩踏み出してほしいですね。輝く未来を抱きしめて、フレフレわたし! いっくよ〜!

PRECURE 2019 SPRING

1月20日夜公演レポート

夢と、勇気と、絆を胸に

プリキュア15周年の集大成の一つといえるスペシャルライブが開催。2Daysの最後となる3ステージ目、1月20日の夜公演は、歴代主題歌歌手とプリキュア声優がずらりそろった、まさに歌のプリキュアオールスターズ！

プリキュア15周年Anniversaryライブ ～15☆DREAMS COME TRUE!～

HP♥https://www.marv.jp/special/precure_live/
♥1月19日（夜）、20日（昼・夜）の計3回公演　♥中野サンプラザ

宮本佳那子さんの「We can!! HUGっと!プリキュア」で元気よく幕を開けたスペシャルライブ。そのまま、シリーズをさかのぼる歴代OP曲（一部ED曲もあり）のメドレーとなり、一番キャッチーなサビ部分をつないでいく。

続いて、歴代声優を中心に（一部の楽曲ではシンガーも加わり）、キャラソンやED曲を立て続けに披露していった。本名陽子さんとゆかなさんが「ありったけの笑顔で」で互いに背中を預け合う立ち位置は、まさになぎさとほのか！

また、主題歌シンガーは複数のシリーズを担当する人も多く、自然と生まれるクロスオーバー感も楽しい。

曲の合間のMCもにぎやかで、歴代キャストによる「特徴的なセリフを使って何か一言」のコーナーでは、中島愛さんがめぐみの「こころの歌」で表現したのが傑作！『スイートプリキュア♪』の前後のMCでは、工藤真由さんがフェアリートーンの声を披露したり、小清水亜美さんが初代シリーズの偽プリキュアや、同じ放送枠の『明日のナージャ』でナージャを演じていたことを持ち出して、「出演者の中で一番先輩！」と主張したり。会場は大いに盛り上がった。

中盤での五條真由美さんと宮本さん、声優15人全員による「リワインドメモリー」は圧巻の一言！そして北川理恵さんが『スター☆トゥインクルプリキュア』のプリキュアと一緒に、一足早くTVシリーズのOP曲と『映画プリキュアミラクルユニバース』のED曲を初披露するサプライズも！

終盤は、各シリーズのシンガーと声優が一緒になって、ほぼTVサイズのEDメドレー。これまた聴き応えありすぎて感涙の嵐！

アンコール曲は、全員での「DANZEN！ふたりはプリキュア～唯一無二の光たち～」で、熱く濃厚な夢のステージを締めくくる。挨拶後も何度も緞帳が上がり、客席も出演者も名残を惜しむ姿が印象的だった。

出演

本名陽子、ゆかな、樹元オリエ、榎本温子、三瓶由布子、沖佳苗、水沢史絵、小清水亜美、福圓美里、生天目仁美、中島愛、嶋村侑、高橋李依、美山加恋、引坂理絵、五條真由美、うちやえゆか、工藤真由、茂家瑞季、林ももこ、池田彩、吉田仁美、黒沢ともよ、仲谷明香、礒部花凜、北川理恵、駒形友梨、宮本佳那子

未知の世界へ

4人は友情を深めながら、プリンセススターカラーペンを探しにゆく！

かわいく改造したロケットで、宇宙へと繰り出すひかるたち。

BEFORE

AFTER

キュアスター 星奈ひかる
プリンセススターカラーペンを探しに、ロケットでみんなと一緒に星空界へ！ 訪れた星々での宇宙人との接近遭遇にキラやば～っ☆

スター☆トゥインクルプリキュア
★毎週日曜日★朝8時30分★ABCテレビ・テレビ朝日系
HP★http://www.toei-anim.co.jp/tv/precure/

ララのロケットをみんなで修理して、ついに宇宙へブラストオフ！ 試験飛行のはずが、フワの力でケンネル星に着陸した。そこで子犬のような宇宙人・ケンネル星人と出会い、なんとか気持ちを通じ合わせ、てんびん座のプリンセススターカラーペンを譲ってもらえた。

以後、4人は週末などに集まって宇宙探険に繰り出すようになるが、次に行った惑星クマリンで早くも苦戦。強化されたノットレイダーの幹部たちの連係攻撃を受けてしまう。また、ララのロケットの光跡を何度も目撃するまどかの父・冬貴も、どんどん宇宙人調査の手を進めており、地球に戻っても大ピンチだ。

シビアな状況に陥ったひかるたちだが、どうやってこの事態を乗り越える？ 4人はスタープリンセスたちを救い出し、宇宙を守ることができるのか？

4人の変身シーン
絵コンテはすべて宮元監督が担当。「当初は歌がメインになる予定でしたが、子どもたちがより遊びやすいようにダンスも入れることになり、結果ちょっと大変な作業になりました（苦笑）。玩具会社さんからは『ポーズをとりながらペンでラインをクルッと描いてほしい』と要望されました」（宮元）。キュアスターについてはバンダイ公式チャンネルで「変身ダンスレッスン」が動画配信されており、そのCGも宮元監督の変身バンクコンテを元に作成された。

口癖は表情とセットで

ひかるの口癖「キラやば～っ☆」は、瞳が星マークになるギャグ調の表情も愉快。口癖と表情でワンセットなのだ。「テンションが上がった時に瞳が星になってキラキラ輝くというのは、高橋晃さん（キャラクターデザイン）も最初からイメージされていて、キャラ表もそういう表情があったかと。それを分かりやすく伝えよう！ と思って第1話のコンテでより強調して表情を作りました（笑）。これ一発で、『ひかるはこういう子』と分かるようにしたくて」（宮元）

えれなはヒスパニック系

えれなの父はメキシコ人だという。そこに特別な狙いはないそうだが、「僕はもともとメキシコが好きなんです。それにメキシコって太陽（キュアソレイユのモチーフ）のイメージもあるでしょ？ メキシコにはいろんな人種の人たちが暮らしているので、『様々な人種の代表』みたいなキャラクターに見えるといいかなと思いました」（宮元）

「プリキュアになった上でどうするか?」を大事にしたい

シリーズディレクター
宮元宏彰

──『スター☆トゥインクルプリキュア』のシリーズディレクターのオファーを受けた時の感想は?

宮元　『プリキュア』はがっつり取り組めるアニメオリジナル作品ですし、僕は初代の『ふたりはプリキュア』には立ち上げ時期から演出助手で関わっていたので、いずれ監督ができたらと思っていました。その意味では、やっとチャンスが来たかなと思いましたね。もちろんプレッシャーも半端なかったんですが、柳川あかりプロデューサーに会って企画書を見たら、「テーマは宇宙・星座」「多様性を持ったチーム」「宇宙人のプリキュアも登場」と書いてあって「めっちゃ面白そう!」って(笑)。キュアミルキーのミントカラーも、柳川さんからの要望です。僕はスターとミルキーを対になる関係性にしたいと最初から考えていて、ピンクとミントはその関係を見せていくのに合う色だなと感じ、僕も推しました。

──ひかるたち4人それぞれについて紹介してください。

宮元　ひかるはみんなが思う「プリキュアのピンク像」から少しだけ外したかったんです。そしてどこか一つ突き抜けたところがあって、それが魅力でもあり欠点でもあるキャラクターを描きたいと思いました。もちろん、ひかるに限らず、どのキャラクターも欠点も含めて好きになってほしいなと思いながら作り込んでいるんですけどね。

──ひかるは、日常芝居では男の子っぽい仕草も多いですよね。

宮元　ひかるは少しボーイッシュなところがあるんです。これも「女の子はこうあるべき」というところから少し外したかった部分ですね。でも女の子っぽい仕草も共存しているのが、ひかるの面白いところかなと思います。

──口癖の「キラやば〜っ☆」も印象深いです。

宮元　『ふたりはプリキュア』のなぎさの「ぶっちゃけありえな〜い!」がすごくキャッチーだったので、そういう何かキャラを象徴する……何かにつけて思わず口に出ちゃうものが欲しくて。「好きなものに対して前のめりになる子が、思わず発する言葉ってどんなのだろう」というところから自然と出てきました(笑)。

──ララは長い触覚が特徴的ですね。

宮元　地球人とは少し見た目を変えたくて、最初から触手を付けることにしていました。ミルキーのデザインを作っていく中で高橋晃さん(キャラクターデザイン)が、先端に大きなモチーフのパーツがついている細い触覚を描いてくださり、この形に決まりました。

──口癖の「オヨ」や語尾の「ルン」がかわいいです。

宮元　僕が長く携わっていた『ワンピース』では変な口癖のキャラがいっぱい出てきますから(笑)、語尾は全然違和感がなかったんです。それで「ルン」とか「オヨ」はどうですか?」と提案したら、みんなから「え?」って顔をされちゃいました(笑)。でも、語尾を付ければ、宇宙から来た人という印象も出しやすくなるし、単純にかわいいだろうと思うので。それとララのいた星空界は、いわば妖精の世界みたいな感じでもあるので、これまでのシリーズの妖精寄りのニュアンスで付けてみた言葉でもあります。

──逆にララやプルンスは「宇宙の辺境のこの地球では、なんで特徴的な語尾がないの?」と思っているかもしれないと(笑)。

宮元　そういうことですよね(笑)。この作品では「広い宇宙の彼方の人から見たら、地球人のほうが変かもしれないよ?」というのを描きたいんです。それによって世界の多様性を見せられるんじゃないかなと。テーマとしては「多様性」を「イマジネーション」につなげているんですが、「相手を受け入れていく上で、どう相手に対しての想像力を働かせていくか?」という話なんです。

──イマジネーションは「他者への思い」にも結びつくということですね。

宮元　最初の頃に、多様性をどう描いていくかの話し合いをしていた時に、シリーズ構成の村山功さんがイマジネーションというキーワードを提案してくれました。ひかるはあふれるイマジネーションでオリジナルの星座を描いたりもするし、さらに誰のことも受け入れ、誰のところへも違和感や先入観を持たずに入っていける。それによってイマジネーションがみんなに広がっていくというお話です。

──多様性で言うと、えれなはプリキュア初の褐色系で、魅力的ですね。

宮元　僕としては以前から「なぜ褐色の肌の子がレギュラーキャラにいないんだろう?」と思っていて。キャラクターが魅力的に見えることが一番大事なので、その意味でも十分いけると思って、僕のほうから入れたいと要望しました。特に今回のシリーズは多様性を謳っているので、プリキュアの肌の色もそれぞれ大きく変えたくて。『プリキュア』を観ている子たちの中には褐色系の子もいるはずで、ソレイユに憧れてなりきり遊びをしてもらえたら素敵だなぁと思っているんです。逆にララはこの中で一番色白ですね。

──まどかは、清楚でみんなから慕われている生徒会長です。

宮元　今回は4人とも最初の見た目で抱く印象と、実際に本編を観ての印象がちょっと違う感じにしたいなと。まどかは一見、優雅なお嬢様だけど、そうじゃない部分がこの子の本当の魅力になっていくのではと思っています。今はプリキュアになったことで父親に対して複雑な感情を持ち、ちょっと悩みが深い子になっています。

──プリキュアの変身は、ペンで服やモチーフを描く見せ方ですね。

宮元　ペンダントとペンが変身アイテムだというのは最初から決まっていたので、「なりたい自分を描いて変身する」というコンセプトを早い段階で考えました。そうすることで、子どもたちも楽しんで遊んでくれるかなって。また、宇宙空間に飛び出して光のラインを描いていけば、変身画面も映えそうだなと思いました。

──4人とも初変身の際に、「フワを守りたい」といった言葉を発していましたが。

宮元　プリキュアになることのきっかけとして「フワを守りたい」という気持ちをはっきりと出したかったんです。つまり4人はみんな「思いの強さ」でプリキュアになったわけですね。ただ、プリキュアとして一人前になれるのかは今後の成長次第です。それがプリンセススターカラーペンを集めることにもつながればと考えています。というのも、去年の『HUGっと!プリキュア』で「誰でもプリキュアになれる」と言い切っていたので、それを受けてこのシリーズでは「プリキュアになった上でどうするか?」を大事にしたいかなと。スターたちは1年かけて、だんだん本物のプリキュアになっていく感じです。

──今後の意気込みをお願いします。

宮元　宇宙では、地球人の常識は必ずしも普通ではありません。地球の常識を知らない人たちと出会い、ひかるたちがどんなイマジネーションをもらうのか。その中でバラバラの個性の4人がどんなふうにまとまって、どんな可能性を見せていくのか。そこを意識しながら、1年間作っていきたいと思います。どうかよろしくお願いします!

前シリーズのBlu-ray発売中!

HUGっと!プリキュア
Blu-ray vol.1〜3発売中
Blu-ray vol.4　5月15日発売
各巻12話収録　各23,000円+税
発売元：マーベラス

プルンスはクラゲ型宇宙人

プルンス

プルンスはクラゲがモチーフ。クラゲ型宇宙人が妖精キャラとして登場することは、番組企画書の段階であったという。「僕もクラゲ型宇宙人って面白いと思いました。プリキュア側のレギュラーの中では保護者というか年長者目線のキャラとして置いていますが、あんなにズバリ男性声になるとは、柳川Pは思ってなかったようです(笑)」(宮元)

フワとひかるは似た者同士?

フワ

プルンスとは逆に、正攻法でかわいいのが小動物系妖精のフワ。「玩具の仕様で『お世話』がテーマなので、みんなが守ってあげたくなる、育てたくなるキャラにしたいなと。だから無垢な赤ちゃんのイメージを持たせています。でもこの子はちょっとひかるに近いところがあって、おてんばで興味あるものを見たらすぐそっちに飛んでっちゃうんです」(宮元)。そんなコメディリリーフ的な部分にも注目だ。

キュアセレーネ
香久矢まどか

まどかの悩みとジレンマ

まどかの父は政府高官で、宇宙人を危険な存在として調査している。優等生のまどかは父の期待に応えたいと思いつつ、一方で宇宙人のララやプルンスたちと交流を深めており、後ろめたさやジレンマを抱えている。これらは村山功さん(シリーズ構成)のアイデアで、父にララたちの存在が知られてしまわないかが日常ドラマ内でのサスペンスとしても機能している。

繊細な(?)ララの触手

ララの触手はロケットの修理をしたり、触れ合うことで挨拶をしたりなど、地球人の腕や手に近い。こうした使い方は、高橋さんの起こしたデザインから発想された。「せっかく触手があるので、宇宙人らしさを印象付けたいなと。触手を感情に合わせて動かすなど、各話の演出さんも遊んでくれています。サマーン人は、この触覚をどう有効に使うかで進化してきたんだと思います。脳波でコントロールして、手よりも細かい作業が得意だったり?」と宮元監督。

ライト伝説

ミラクルライトに焦点を当てた、キュートでコミカルな大冒険！

絶賛公開中の春映画は、『スター☆トゥインクルプリキュア』『HUGっと！プリキュア』『キラキラ☆プリキュアアラモード』の3世代のプリキュアと、ミラクルライト職人見習いのピトンが宇宙で繰り広げるファンタジックなアドベンチャー。最初はみんなのことを否定していたピトンが、徐々にプリキュアと気持ちをシンクロさせ、一緒に危機を乗り越えるのがドラマ的な見どころだ。

最大のポイントはミラクルライトでの応援シーン。ゲーム画面風だったり、ライトで星のラインを描く振り方をしたりと、様々な工夫が凝らされている。加えて、敵である宇宙大魔王が、ダークライトの応援で力を増す展開はまさにセンス・オブ・ワンダー！

また、エピローグは冒頭の天体観測シーンとかぶせ、ちょっと不思議な余韻を出しているのもいい感じ。「遼太郎さんがお茶を煎れて戻ってくると、なぜかひかるの友達の数が増えている。そういうのって面白いですよねと、美術設定の升井秀光さんが提案してくれました。3つの星で助け合った人同士が集まっていますので、それぞれの仲の良さも見てもらえたらなと思います」（貝澤幸男監督）

あきらめずに頑張れば大切なものがつかめる

監督　貝澤幸男

—今回の映画は「ミラクルライト」がテーマですね。

貝澤　まず「ミラクルライトでの応援シーンを多くしたい」というオーダーでした。脚本の村山功さんから出てきたストーリーが「どこかの星で、プリキュアがゲストキャラの冤罪を晴らす」という追いかけっこで、そこに、もう1アイデア加えることになったんです。ミラクルライトを作る惑星が出てくれば応援に結びつけられそうだし、宇宙がテーマの『スタプリ』らしい題材になるかなって。また、「コミカル度を高めてほしい」とも言われていたので、村山さんが書かれた脚本のコミカルさを芯にした映画でもあります。

—ピトンや惑星ミラクルの住人が鳥型なのは、貝澤監督の発案だったそうですね。

貝澤　『スタプリ』の宮元宏彰監督から「星空界はファンタジー宇宙です」と聞きまして、ファンタジックな鳥の姿がいいだろうと思ったんです。いつも『プリキュア』の春映画は、その年の新人プリキュアが先輩プリキュアから何かを学ぶわけですけど、「新人」を「ひよっこ」と言いますよね。その引っ掛けから、ピトンはひよこになりました（笑）。ピトンという名前は僕がつけました。鳥が地面を跳ねて移動するのがピトンピトンって感じかなと。村山さんが「面白い名前ですね」と使ってくれました（笑）。ヤンゴという名前は村山さんがつけたものです。

—ピトンは最初スタプリチームを「うそっこでダメダメ」とののしります。

貝澤　最初はプリキュアにブーブー文句を言っていたけれど、だんだん思い入れていくという変化を分かりやすく見せるためです。ピトンはいわば観客に寄りそう「案内役」です。まだ成り立てホヤホヤのスタプリチームを、映画を通して大好きになってもらう入り口としての役割なんです。ピトンが緑の星でケーキをもらってララちゃんを好意的に見られるようになったり、火山の星で奮闘する面々を見て応援したくなったりして、ピトンと一緒にスタプリチームを大好きになってもらえればと思いました。

—お話の中盤で、3世代のプリキュアがシャッフルされて3つの星に落下しますね。

貝澤　村山さんと内藤圭祐プロデューサーから「異なる世代のキャラ同士が一緒に行動したら面白いんじゃないか」と言われまして。それでみんなで一番面白い取り合わせを考えました。それぞれの星で、先輩プリキュアがスタプリチームに何かを教えたり伝えたりする形です。そこはキャラの見せ方も含めて、うまく構成できたんじゃないかと思います。

—応援シーンは、フレーム演出で妖精がライトを振る仕草を見せています。

貝澤　子どもたちがみんなで応援する、お祭り的な映画にしたかったんです。画面の周りのフレームに妖精を出し、「物語」と「劇場の子どもたち」の中間位置に立たせる形にして、両者

ロケットを背負うピトン

貝澤監督のラフを元に松浦仁美さんがデザインしたピトン。「宇宙が舞台なので、日常が宇宙であれば、普段着も宇宙服なんだろうなって」（貝澤）。ロケットを背負って移動する様子もラフで描かれている。スタプリチームは宇宙での活動は慣れており、そこを感じさせるため、ピトンは自力ではなくロケットで飛ぶアイデアが出てきた。

ピトン（貝澤監督ラフ）

「ブッブー」の口癖

ピトンが不満を表す時に見せる表情も貝澤監督のアイデア。「ピトンのかわいらしさを出せればと考えました。実際にやるとツバが飛ぶので、あんまり真似してもらっては困るんですけど、子どもってこういうのが好きだろうなって」（貝澤）。最後にはスターもこの表情の真似をして互いに笑い、気持ちを通じ合わせていた。

ララのキラパティ服とスイーツ

緑の星でいちかたちとスイーツ作りをした時には、ララもキラパティの制服姿に。キラパティの制服はキャラによって胸のリボンの形が異なるのだが、ララもそれに準じて松浦さんがデザイン。このシーンで振る舞う「小鳥のフルーツアラモード」は、宣伝スチール（下）の中にある鳥モチーフのスイーツを元に作られた。

▶ララの色指定（モデルはいちか）

ヤンゴ（貝澤監督ラフ）

大統領（貝澤監督ラフ）

宇宙警備隊（貝澤監督ラフ）

ヤンゴ、大統領、宇宙警備隊

ヤンゴは闇感から黒い鳥がイメージされ、カラスがモチーフに。大統領がフクロウなのは、長老的な立ち位置というところから。そして宇宙警備隊はハトがモチーフだ。「ハトって、集団でワーッと移動する性質があるので警備隊らしいかなと。ただし作画では大変なのでCGにしました」（貝澤）。いずれも貝澤監督のラフから松浦さんがデザインを起こした。

新たなミラクル

宇宙を舞台にした初の『プリキュア』映画がただいま絶賛上映中。

をしっかりとリンクさせました。

——妖精たちは、いわゆる第四の壁を取り払うメタ的な位置づけなんですね。

貝澤 そうです。ミラクルライトは「思いをつなぐ／心をつなぐ」というイメージもありますので、子どもたちをつなぐ役割にしました。

——宇宙大魔王はどういう存在なのですか？

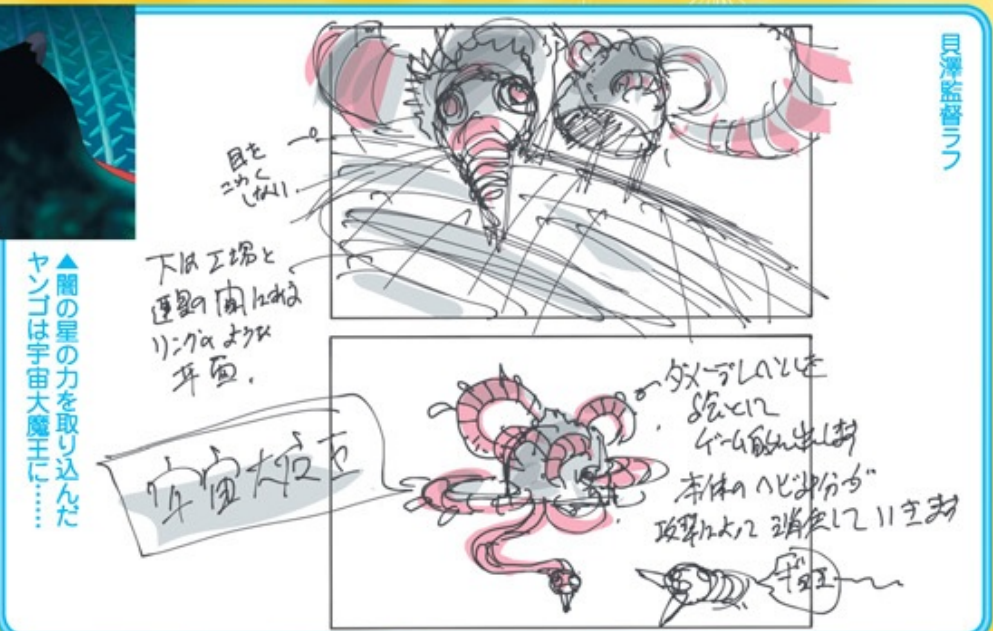
貝澤 惑星ミラクルの惑星群の中には「闇の星」と「光の星」もあって、かつて闇の星が光の星をさえぎってしまった暗黒時代があったんです。その時にプリキュアが現れ、鳥たちは星々に眠っていた鉱石を集めて懸命に応援、そして願いは叶い、闇の力は打ち払われて光を取り戻した——というのがプリキュアの伝説なんですが、そういう説明は尺の都合とかいろいろあって省いてしまったんです（苦笑）。今回の物語では、「自分も応援されたい」というヤンゴの心を、闇の星の力が増幅させ、彼は巨大な魔王になったんです。

——ダークライトのアイデアはどこからきましたか？

貝澤 たとえばプロ野球でも、ひいきのチームの攻撃ではすごく応援するじゃないですか。そういう感じで、光と闇の「応援合戦」を画にしてドラマに入れたら面白いだろうなって。闇の側も応援されると、何かが伝わって強くなるんです。ただ、子どもたちが闇の応援でミラクルライトを振らないよう、劇中でダークライトを持つ鳥たちは単にライトを掲げるだけにしています。ダークライトの光る部分はCGで、ヤンゴの胸にある丸い構造物や、魔王の身体に付いている闇の星と同じ形状です。柄の部分は、松浦仁美さん（総作画監督）がねじ曲がった感じのデザインにしてくれました。

——キュアスターが絶望しつつも必死にもがく、イメージカットの「抗う」感じがプリキュアらしかったです。

貝澤 体は動かず沈んでいくけれど、そこから出た涙、つまり心だけはあきらめずにもがく。そして、ピトンの心とつながるという見せ方です。あきらめずに頑張れば大切なものがつかめるんだよというのを、子どもたちにも分かりやすく伝わるよう、スターの心の世界で描いた感じです。実際につかんだのはピトンなのかスターなのかは、観た人次第で捉えてもらえたらと思います。

——ピトンの純粋な涙でミラクルライトを完成させる展開は、「仕上げ液」の成分を示唆していますよね。

貝澤 ピトンの任務は、作業自体は単純なものでしたが、想いをしっかり込めないといけない大切な仕事だったんです。ミラクルライト工場はそれを学ぶ場でもあって、ちゃんとそれができるようになったら一人前になれるわけです。これまでの自分はダメだったんだと、ピトン自身が気がつき、「プリキュアを応援したい」という気持ちの象徴として「涙」を振りかけることで、ミラクルライトが完成したんです。

——工場にある「伝説のプリキュア」のステンドグラスも印象に残ります。

貝澤 一生懸命にミラクルライトを作っている惑星ミラクルの人々のための「プリキュアの伝説」を表すものです。光の星に手を伸ばしている6人のプリキュアの姿になっています。6という数に特別な意味はないのですが、升井さんが美しくデザインしてくれました。

——この映画を2度3度楽しむポイントは？

貝澤 今回は、みんなで一緒になって応援するお祭り的に楽しめる映画です。大きく3つある応援ポイント以外にも、様々な応援ポイントがあります。観方それぞれに自由に応援してもらいたいので、話の流れを分かった上で2度3度と観て応援して楽しんでもらえたらありがたいですね。

▲闇の星の力を取り込んだヤンゴは宇宙大魔王に……

貝澤監督ラフ

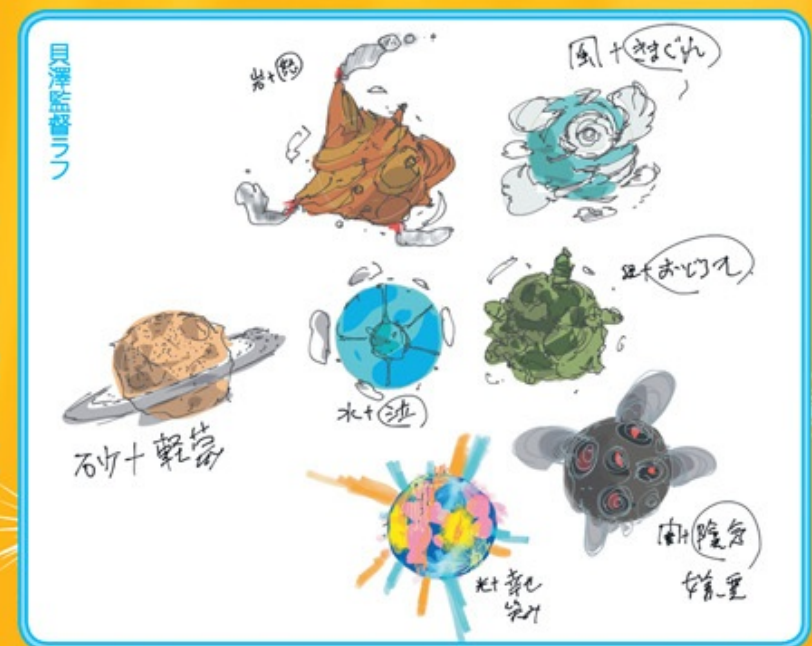
宇宙大魔王のデザイン

初期案は魔神的な怪物だったが、最終的にヘビ（鳥の卵を食べる天敵）がモチーフになった宇宙大魔王。「子どもたちはあまりヘビが好きでないと思うので、それを怪物化したら怖がられるかなと悩んだんですが、松浦さんが竹ヘビ（尻尾側に棒が付いて、関節状の体を動かして遊ぶ竹細工のヘビ）みたいなデザインにしてくれました。ボディもカラフルにすれば、怖くないし面白いかなと」（貝澤）。それを元にCGモデルが作成された。映画の前半でプリキュアと戦う鳥形の魔物の胴体が細長いのは、ヘビの意匠を取り入れたためだ。

これが「スーパープリキュア」

スタプリチームを先頭に15人のプリキュアが宇宙大魔王に突撃。３世代によるドレス型の合体技だ。「映画の前半、プリアラチームはパワーを集めてケーキの形に、はぐプリチームは花の形のバリアになりましたが、スタプリチームはうまく連係ができませんでした。でも、最後はみんなのパワーをドレスの形にして敵を打ち砕くことに成功。CG進行の門傳大地さんの提案の絵を元に、CGで作りました」（貝澤）。この姿が、いわば今回のスーパープリキュア（映画専用パワーアップ形態）なのだ。

カラフルな惑星群

惑星ミラクルを含む星系には、プリキュアが落下した３つの星など計７つの惑星がある。３チームに分かれるシチュエーションを元に貝澤さんがラフを作り、そこから美術設定の升井さんがイメージを膨らませてデザインした。たとえば緑の星の住人の住処がトーテムポール型なのも、升井さんのアイデアだそうだ。

プリキュアのガウン姿とピトンの正装

一件落着して、プリキュアとピトンが人々から感謝されるシーンで、プリキュアはガウン姿に、ピトンは職人の正装になる。どちらも松浦さんのデザインで、ガウンのラメ処理も松浦さんの案。「ガウンはとてもゴージャスな雰囲気になりましたね。ピトンの正装は、『早く職人になりたいピト』と不満を漏らすピトンが思う、一人前の職人のイメージを、僕が絵コンテでちょっと警官っぽく描いたのが元になりました」（貝澤）

映画プリキュア ミラクルユニバース

全国上映中

HP http://www.precure-miracleuniverse.com

4人の新生活!

4人の気持ちが一つになってトゥインクルステッキが誕生☆
ララも観星中の生徒になり、みんなの新生活はますます楽しくにぎやかに!

みんなに南十字星を見せたいという、ひかるの軽いノリで宇宙に出たのがきっかけで大ピンチになった一行。一時は落ち込んでしまったひかるだが、遼じいやララ、えれな、まどかの温かい気持ちに励まされ、すっかり元気を取り戻した。

そして、まどかの父・冬貴のUFO捜索問題も、突然現れたP・アブラハム監督（正体はミニチュラ星人!）によってひとまず誤魔化すことに成功した。監督の計らいで、ララの宇宙法違反問題もなんとかクリアし、観星中学校に通うこともできるように。かくして、ひかるたち4人の地球での日常が本格的に始まった!

しかし、ノットレイダーも侵攻の手を緩めることはない。カッパードやテンジョウも、アイワーンと同じように、人のネガティブな心を利用して戦うようになり、さらに手強くなってきた。また、彼らの言動からは、単なる破壊欲や征服欲とは違う何かも感じられる。プリンセススターカラーペンを狙う裏には、実は複雑な事情があるのか?

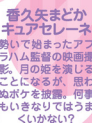
また、第15話からは、宇宙怪盗ブルーキャットという新キャラクターが登場する。ノットレイダーではない一匹狼のようだが、プリキュアの敵か味方か!?

観星中学校制服

ララも中学生の仲間入り

第13話からはララも観星中学校に通うことになった。宇宙人の自分が周囲と違うことにナーバスになってしまうエピソードにも、「多様性」を意識する今作らしさが出ている。なお4人の制服姿は他の生徒とはタイの色が異なる。ソックスの色やスカート丈で各々の個性を出すデザインになっている。

香久矢まどか キュアセレーネ
勢いで始まったアブラハム監督の映画撮影。月の姫を演じることになるが、思わぬボケを披露。何事もいきなりではうまくいかない?

羽衣ララ キュアミルキー
観星中に転入するが「地球人と違う」ことに悩む。でもクラスメイトたちは「ルン」をかわいい個性と捉え、友達として迎えてくれた

星奈ひかる キュアスター
大好きなSF映画の大監督が、実は宇宙人だと知って「キラやば〜っ☆」状態。さらに、なりゆきで映画にも出演できて大興奮!

天宮えれな キュアソレイユ
弟が「うちは他の家と違っている」と気にし始めて困惑。だが、ララを通して違いが良さだと分かってもらえた。ララの友情に感謝!

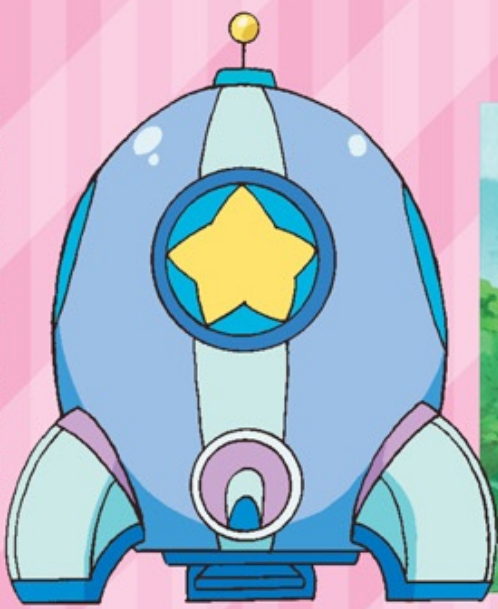
スター☆トゥインクルプリキュア

★毎週日曜日★朝8時30分★ABCテレビ・テレビ朝日系
HP★http://www.toei-anim.co.jp/tv/precure/

▲改装前のララのロケット（作画用設定）

▲トゥインクルステッキ（作画用設定）

4人の心から生まれた新アイテム

第11話から登場した合体技「サザンクロスショット」を放つ際に用いる「トゥインクルステッキ」は、4人の気持ちの高まりに呼応するように出現した。村山功さんの脚本によると「光る胸の星に触れ、何かを感じ取り、自然と台詞が出る感じ」で「宇宙に輝け！ イマジネーションの力！」と叫ぶという。「光が流れ星のように落ちてくる」ところから、「光がパッと散るとトゥインクルステッキに」と説明されている。

▲改装後のスターロケット（作画用設定）

ロケットもかわいく！

美術の増田竜太郎さんのデザインを元に、作画用デザインが作成された。古き良きスペースオペラに出てきそうな卵や涙滴を思わせるフォルムだ。「昔のSFのデザインって、シンプルだけどセンスがいいんですよね」（宮元）。スターロケットのデザインが先に作られ、そこから逆算的に第7話までの改装前のデザインが作られた。

キュアスター＝春

キュアミルキー＝夏

キュアソレイユ＝秋

キュアセレーネ＝冬

春夏秋冬も4人のモチーフ

実はプリキュアそれぞれに、四季もモチーフに取り入れられている。4人が持つプリンセススターカラーペンが、スター＝春、ミルキー＝夏、ソレイユ＝秋、セレーネ＝冬に対応しているのはそのためだ。「星座には季節もあるので、春夏秋冬感も出したほうがキャラのイメージがよりはっきり出せるのではないかと、最初の頃から考えていました。ただ、それを押し出しすぎても作品のコンセプトがブレるので、あくまで隠し要素なんですけどね」（宮元）

弓道で精神を修養

まどかは弓道部員ではないが、自宅に弓道場が設けられている。弓道場で父からかけられている言葉からは、弓道は香久矢家の人間としての精神修養のように感じられる。なお、まどかが矢を射る際に取る一連の動作は、「射法八節」という弓道の基本。

バラバラの4人が集まって一つのチームに

シリーズディレクター
宮元宏彰

☆星空界はおもちゃ箱をひっくり返したよう

――「宇宙」や「星座」という作品モチーフに関して、宮元さんが意識したことは？

宮元　「星座」と聞いて僕がちょっと懸念したのは、ギリシア神話とかの方向に行きすぎると、子どもたちにはとっつきにくいだろうということ。まず自分自身があまりそっちに詳しくないし（笑）。実際、企画の初期段階では、星座やその神話をベースにした、おごそかな世界観になりそうだったんです。でもそれよりも、カラフルでファンタジックな方向が面白いんじゃないかなと直感的に思いました。

――結果、星占いテイストになった感じですか？

宮元　そう、『スタプリ』を通して12星座を覚えてね」くらいのノリですね。星座を初めて知る小さい子たちを意識して、ビジュアル面で面白くしたほうがいいだろうと。それで早い段階で、カラフルでファンタジックな宇宙＝「星空界」をイメージしました。女の子が観て喜びそうなキラキラした、宝石箱というよりおもちゃ箱をひっくり返したような宇宙です。それを見て「どんな星があるんだろう？　どんな宇宙人が住んでいるんだろう？」とわくわく想像してもらえたらいいなと思いました。

――プリキュア4人の星や太陽といったモチーフは？

宮元　星座という大前提があって、そこから各プリキュアをどういうモチーフにしていくかを、みんなで話し合いながら詰めていきました。本当にたくさんの案が出ましたが、変身シーンで「変身ペンでそれぞれのモチーフを空に描く」というのは早くから考えていたので「子どもが描きやすいもの」という観点も入れ、「星」「ハート」「太陽」「月」になりました。分かりやすさも含めて、ピンクの子（スター）は絶対「星」にしたいと最初から決めていましたが、ミントの子（ミルキー）は最後まで悩みました。「天の川」にしようとしましたが、形にしにくくて（笑）。「川だから波線かな？」とかいろいろ考えましたが。

――ESPカードの「波」や、地図記号の「温泉」みたいになります（笑）。

宮元　そう（笑）。なんだかイマイチ伝わりにくいなぁって。最終的に「ハート」にしたのは、変身前の姿のデザインに結構ハートモチーフが入っていて、かわいかったからです。キャラデザインと4人のモチーフの選定は並行で進めていましたので。ララ自身の雰囲気とも、ハートが合いそうな感じがしたんです。

――先月号で、スターとミルキーを対の関係で描いていきたいとのお話でしたが、「スター&ミルキー」「ソレイユ&セレーネ」でペア感があるデザインになっていますね。

宮元　年下組ペアと年上組ペアというのは、キャラの性格などを考える時から決めていました。今回のシリーズは「相手をどう受け入れていくか？」というテーマもあるので、どちらも対照的なペアです。キャラクターデザインの高橋晃さんはオーディションで決まったのですが、まずスターとミルキーの2キャラを固めてもらいました。

――ソレイユとセレーネは？

宮元　オーディション段階では、「黄色と紫系のお姉さんコンビ」くらいの構想はありましたが、ソレイユが褐色系というのもまだ決まってなかった気がします。年下組のデザインが固まった頃には、太陽と月というモチーフも決まっていたので、それらも取り入れて年上組もデザインしてもらいました。

――4人の個人技についてお聞きしま

ガルオウガ

カッパード

テンジョウ

ノットレイ

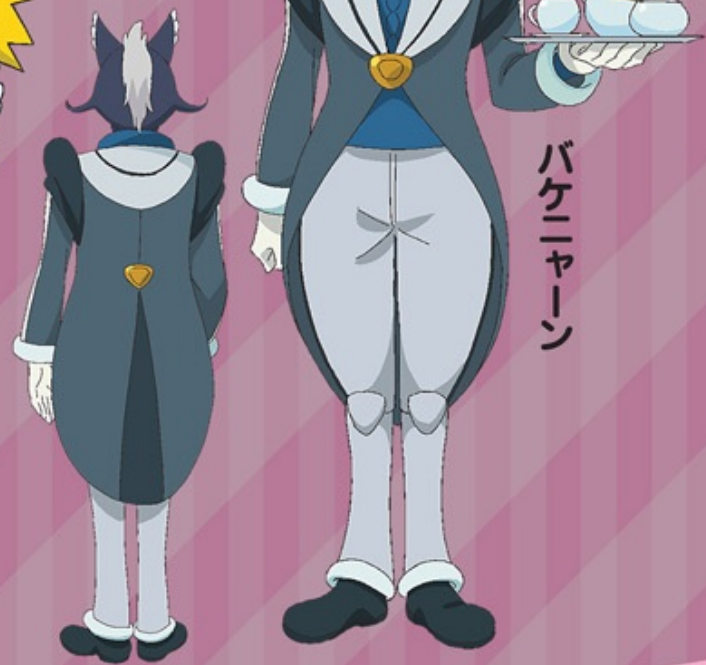
アイワーン

バケニャーン

謎めいたノットレイダー

ノットレイダーの幹部は日本の妖怪がモチーフ。「敵も多様性のあるチームにしたかったので、人間離れしたヤツがいてもいいと思いました。妖怪というモチーフを挟めば、見た目が奇妙でも違和感がないのではないかなと。ちょうど『ゲゲゲの鬼太郎』（第6期）が放映中ですし、『スターウォーズ』に出てくる異星人にも和のイメージが入っていたりしますよね」（宮元）。雑兵のノットレイは昔の特撮作品の戦闘員のイメージで、意識的にコミカルな方向でデザインされている。

宇宙怪盗、現る！

WANTED!

OPにシルエットでチラリと出ていた謎の少女の正体がついに明らかに！　星空界の様々なお宝を頂戴している「宇宙怪盗ブルーキャット」だ。狙いはプリンセススターカラーペンなのか？

すが、まずスターパンチの「腕グルグルからのパンチ一発！」がとても分かりやすいです。

宮元　スターにはビーム技のイメージはあまりなかったというか、初代プリキュアの「拳で戦う感じ」が欲しかったんです。スターはぐいぐいと行くタイプだから、戦いでもどんどん勢いで突っ込んでいきます。誰よりも先に最前線へ飛び出していく子なら、ビームじゃなくてパンチで戦うほうがらしいよねって。とはいえ、今回のテイストはポップでかわいいほうが合うとも感じていたので、あのスターパンチのビジュアルが出てきたんです（笑）。

——それで、星型のオーラが出るんですね。盾にしたりそれをバネにして突撃したりと、臨機応変な使い方をしています。

宮元　スターだけの特殊技能です。星型のオーラを駆使したスターのアクションを考えると、すごく楽しいキャラになるなと思いました。バラバラの4人が集まって一つのチームになっていることを強調したいので、一人一人いろんな戦い方を見せて、そこで性格を反映できるといいのかなと思っています。

——ミルキーの技は電撃ですね。

宮元　ミルキーは逆に最前線からは少し距離を置く戦い方です。分析が得意でサポート的な能力が強いほうが彼女の良さが引き立つと思い、それならばビーム技が有効だろうと。それとやっぱり、ミントグリーンの髪の宇宙人の女の子って、電撃のイメージがあるわけですよ（笑）。

——（笑）。ミルキーショックを受けたノットレイの体が透けてガイコツが見える感電表現も、昭和のギャグマンガ的で愉快です。

宮元　楽しいでしょ。自分は昭和な人間なので（笑）。

——ソレイユとセレーネも、スターとミルキー同様に近接戦型と中長距離戦型ですね。ソレイユの戦い方は、脚本には「パルクール系の華麗な動き」と書かれています。

宮元　ざっくり分けると、スターとソレイユが王道のプリキュア的な力強い戦い方で、ミルキーとセレーネがちょっとかわいい戦い方ですね。ソレイユは足技でどれだけ見せられるか考えました。スターとはまた違った近接戦の見せ方ができるといいなあと。

——そこからのパルクールなんですね。セレーネは三日月が弓になるのが面白いです。

宮元　セレーネというのはギリシア神話の月の女神の名前です。弓矢を持っている女神なので、キュアセレーネの技も弓にして、まどかには弓道をさせようかなと。

——4人の個人技はどの話数も、技バンクを使わずに戦いの流れの中で放つことも多いですね。

宮元　そこは各話の演出さんにお任せしていて、僕から「こういう見せ方にしてください」とお願いしているわけではないです。個人技のバンクも、戦闘中に挟んで使えるようにも作っていますので、バンクをそのまま使うのもいいし、ちょっと変化をつけたい時は、流れの中で見せてもいいし。そこは効果的に見せられるやり方をしてもらえれば、それでいいと思います。

——4人ともノットレイをバッタバッタと倒していくのが特徴です。

宮元　プリキュアが華麗に戦ってかわいく敵を倒していく感じにしたくて、ノットレイを作りました。いろいろな戦い方を見せるために、彼らに花を添えてもらいたいなぁって（笑）。逆に人の心から生み出されるノットリガーは、戦いの見せ方も含めて重めにして、「プリキュアの脅威」のイメージで描いています。

スターロケットは憧れの秘密基地！

——4人で作り上げた「スターロケット」ですが、作品を象徴する乗り物があるというのが今シリーズならではですね。

宮元　まず、『キラキラ☆プリキュアアラモード』のキラパティのようなお店屋さん遊びができるカフェみたいなものを出したいという要望が、玩具会社さんからありまして。でも作品のテーマとしては宇宙や星座なので、カフェをどう結びつけるかが難しくて。ロケットは出したいと最初から思っていたので、それらをくっつけた感じです（笑）。

——プルンスがドーナツ製造器を作ってショップ展開するのは、お店屋さんコンセプトの流れからなのですね。

宮元　ええ。それで、みんなで集まれるカフェっぽいスペースを作ることにしました。そこから、「だったらロケットも、カフェっぽくかわいくしたら面白そうだな」って。そんなふうに、お店屋さんのコンセプトもうまく作用してできあがったものなんです。

——各自の個室を作るのもいいですね。

宮元　自分は秘密基地への憧れがありまして（笑）。子どもたちだけでロケットに乗り込んだり、それぞれの部屋も作れたりするといいなあ、という（笑）。また、4人がそれぞれの部屋に持ち込んだモノで各キャラ性が表現できるという意味でも、個室はぜひ作りたいという話になりました。

——宮元さんは『ワンピース』でキャリアを積まれてきたわけですが、『プリキュア』に携わるにあたりスタンスの違いなどは？

宮元　やっぱり、対象年齢にはすごく気をつけています。「誰に向けて作っているか？」を明確に意識して作っていきたいので。僕がやってきた『ワンピース』はもっと上の年齢層がメインですが、『プリキュア』はもっと小さい女の子が観るものなんです。そういう子たちが観ていて楽しくないとダメだろうというのがあって。でもキャラクターのドラマや伝えたいテーマを分かりやすく見せていこうというのは変わりません。それはきっと、どの作品でも同じなんじゃないかなと思います。

SPECIAL COLUMN

フワが人間の女の子に

今年も『ドリームステージ♪』が絶賛上演中。もこもこパンツのフワがとにかくキュート♥

02 スター☆トゥインクルプリキュア ドリームステージ♪

HP★http://www.toei-anim.co.jp/precure-dreamstage/
★2019年7月～2020年2月、全国で上演
※詳細はHPをチェック

ミュージカルと、みんなで歌って踊れるショーが一つになった『プリキュアドリームステージ♪』。これは大型劇場の舞台で上演されるステージショーで、毎年7月から番組終了時期まで全国で上演されている。

実尺も劇場版と同等の約70分で、ホールならではの舞台装置や、スクリーンを利用した凝った演出も見どころだ。また、アクロバティックな戦闘アクションも迫力満点。特に変身シーンでの一瞬での変身は、絶対に驚くこと請け合いだ！

今年の『スター☆トゥインクルプリキュア ドリームステージ♪』は、フワが人間の女の子になるという、劇場版ばりのスペシャル感あるシチュエーション。

ある夜、観星町に不思議な星が降り注いだ。その小さな星に、フワが「ひかるたちと一緒に、明日限定スタードーナツを買いに行きたい」と願うと、なんと人間の姿になってしまった。その星は、イマージジュエルというどんな願いでも3つ叶えてくれる宇宙の宝石だったのだ。

ひかるたちは驚きつつも、フワと白昼堂々と遊べて大喜び。そこへ、ジュエルの力欲しさに、宇宙伯爵ドラクールと名乗る宇宙人が現れる。ジュエルを奪い去ったドラクールを、ひかるたちはスターロケットで追いかける！

とてもフワらしい動き！

フワ役（声の出演）**木野日菜**

声の収録の時、台本に「女の子フワ」という役名があって驚きました。絵を見せてもらったら、人間体のフワがとってもかわいくて！ フワがこんなに喋って、こんなに大きく取り上げていただけるなんて！ 実際に観に行ったのですが、キャラクターがものすごくフワらしい動きをしていて、演出もすごかったです！ もう「すごい」しか言えないですね（笑）。背景もシーンごとに変わります。宇宙に行く時にはプリキュアのみんなでスターロケットに乗り込む（背景パネルの裏に消える）んですけど、パーッと天井に向けて発進すると、もう誰もいなくて、「どういうこと!?」って。変身シーンも、大人の観客たちも驚くくらいの一瞬の早変わりで、私も「おお！」ってなりました。また、最後には熱い展開が待っています。人間のフワが「元の姿に戻してフワ！」と叫ぶところは、めちゃめちゃ感動的です。自分で言ったセリフなのに……観ていて泣きそうになっちゃいました。

女の子として楽しむフワ

人間になったフワは、従来の力（飛行能力やワープホールを開く力）を失ってしまう。だがそれよりも、みんなと人間として遊べることに心を躍らせ、ひかるたちもその気持ちを大事にする。「宇宙妖精としての力」と「人間の女の子として過ごす楽しさ」がトレードオフの関係になっており、クライマックスでそこを突きつけられたフワの決断には胸を打つ。

味わい深い敵ドラクール

このショーのオリジナルの敵・ドラクールは、かつてノットレイダーの一員だったという設定だ。冷酷そうな面構えだが、ダジャレが大好き。それを「超クール！」とドヤ顔で決めた上に、自分でその寒いギャグの解説までしてしまうという結構トボけたキャラでもある。このドラクールが、ひかるたちとの戦いを経て、どういう結末を迎えるかも注目点だ。

劇場版のような雰囲気を

シリーズ構成 **村山 功**
プロデューサー **柳川あかり**

——フワが人間の女の子になるアイデアは、どういうところから出てきたんですか？

村山 公演は7月から始まるので、ショーの音声収録は夏前には終わるんです。でもフワは9月には成長姿になるので、それ以降はTV本編と喋り方が違ってしまう。その問題をどうクリアするか考えた時、「フワを人間にしてしまえば、喋り方の差をなくせるのでは？」と言ったところ、柳川さんが「いいですね！」って（笑）。

柳川 その通りです（笑）。

村山 それと、遊園地やショッピングモールなどでの観覧無料のショーと違って、『ドリームステージ♪』はチケットを購入しないとならないので、それに見合うスペシャル感も欲しかったんです。

柳川 女の子姿のフワは、このショーだけのオリジナルデザインです。かわいくできたと思います。

村山 いかに人間姿のデザインがかわいくなるかが重要だったので、うまくいって良かったです。

——スカートではなく、かぼちゃパンツなのが、またかわいいです。

柳川 性別を特定する感じをなるべく避けるためです。もちろん、一応キャラづけとして女の子にはしていますけど、宇宙妖精は性別という概念があるかどうかは分からない存在なので。それでかぼちゃパンツにしたいと宮元監督が言っていました。

——脚本は小林雄次さんですが、村山さんからお願いしたことは？

村山 僕はプロット執筆でしたが、ショーの打ち合わせにも参加して、細かい要望を盛り込んでもらいました。大まかには「とにかく楽しくしてほしい」ってことですね。

——敵であるドラクールが、自分の寒いギャグを自分で説明しちゃうのも愉快です。

村山 そういうのも、脚本に入れてもらいました（笑）。「超クール！」みたいな大仰なセリフは、小林さんがうまく膨らませてくれました。

——ラストも含め、まるで秋の劇場版のような見ごたえでした。

村山 やはり有料のステージなので、それなりの内容が必要ですよね。ストーリーとしても、劇場版くらいの雰囲気を目指そうという意識はありました。

スター☆トゥインクルプリキュア
★毎週日曜日★朝8時30分★ABCテレビ・テレビ朝日系
HP★http://www.toei-anim.co.jp/tv/precure/
©ABC-A・東映アニメーション
キュアミルキー
羽衣ララ
声／小原好美
弓道大会でまどかの勝負の行方にドキドキしたり、ひかるのお母さんのマンガを手伝ったり。地球での生活は興味深いことばかり！
フワ
声／木野日菜
プルンスが12星座のプリンセスから託された無邪気な赤ちゃん妖精。ブルーキャットの香水の香りを即座にかぎ分けるという特技も！

宇宙の果てで
ガール☆ミーツ☆ガール

いよいよ5人目が加わる『スター☆トゥインクルプリキュア』チーム。その物語のスタート地点でありチームの核となっている、ひかるとララの友情をあらためて振り返ろう！

地球人のひかると惑星サマーン出身のララが出会って、はや数ヵ月。最初からララに興味津々のひかるに対して、当初のララは未知の環境に用心深く身構えていた。おかげで、ひかるからのおにぎりの差し入れを拒否したり、ロケットも一人で修理しようとしたりと、ちょっとツンツン気味だったかも？　でも、今ではおにぎりが大好物だし、ロケットもみんなでかわいくリノベーションするなど、ララもひかるたちとすっかり打ち解けた。

その後、二人はそれぞれ落ち込む出来事にも遭遇したけれど、最初にお互いを支える言葉をかけるのは、ひかるでありララだった。敵と戦う時も二人で連係攻撃を見せてくれるし、今やなかなかの名コンビといえるだろう！

そんな中、宇宙怪盗ブルーキャットの出自が明かされ、物語は新たな局面へ。ブルーキャットは第15話ではまどか、第17話ではえれなとの感情面での接点があったけど、ひかるやララとの関係はどんな形で描かれるのか、注目だ！

ひかる&ララ エピソードSELECTION

第7話
「ワクワク！ロケット修理大作戦☆」

ララのロケット修理を手伝う回。ひかるが描いたロケットをデコった絵をもとに、みんなのアイデアも盛り込んでスターロケットを完成させる。その際、ひかるがまずララに同意を求めたのがポイント。AIによる効率計算を重視していたララも、ひかるの案を快諾する。

「ララのロケットをみんなで修理（改装）したこの回は、すごく秘密基地を作っている感覚がありました。ロケットの修理を通して、夢や希望を見せてもらった気持ちです。私も子どもの頃にこういう経験をしてみたかった！　それぞれの好きなものを持ち寄ったりしてみんなが楽しくなれた、とにかくハッピーな回だったなって思います」（成瀬）

第11話
「輝け☆サザンクロスの力！」

自分の軽率な行動からみんなが敵に襲われピンチになり、自己嫌悪のひかる。それを象徴するようにこの回はいつもの「キラやば～っ☆」がない。さらに追撃してきた敵からの辛らつな言葉が、スターの心を追い詰める。だがミルキーが真っ先に敵に反論してくれた。

「自分が変な行動力を発揮した結果、みんなに迷惑を掛けてしまったので、さすがのひかるちゃんも落ち込みます。演じていて私もつらい気持ちでいっぱいで、今も思い出すだけで泣きそうになるんです。戦闘シーンは、仲間たちからの励ましの言葉が私自身の心に直に届いて、『みんなありがとう！　頑張る！』という思いで演じました」（成瀬）

キュアスター 星奈ひかる
声／成瀬瑛美
プリンセススターカラーペンを探しに惑星レインボーへ。石化した人々と荒涼とした風景にショックを受ける。ここからどうする？

第12話
「さよならララ!? 映画監督は宇宙人☆」

ひかるたちがアブラハム監督の撮影する映画に出演。その出来次第で、ララは地球に残れることに。ドタバタと進行し、やがてひかるとララが扮する役の「別れのシーン」の撮影に。互いにお別れしたくない気持ちがそのまま出た、心に染みる名場面となった。

「第12話の予告を見たお子さんから、『ララ、帰っちゃヤダ！』という手紙が東映アニメーションさんに届いたそうです。最終回がどうなるのかは分かりませんが、劇中劇の忍者（ひかる）と天女（ララ）の別れのシーンは、『もしかしたら、いつかひかるとララも同じ感じになるの？』って、私たちもちょっと泣いてしまいそうになりました」（小原）

第13話
「ララのドキドキ初登校☆」

観星中に通うことになったララ。集団生活でサマーン星人と地球人の違いを初めて強く意識し、無理やり地球人っぽく振る舞おうとする。語尾の「ルン」を使わず、窮屈そうな姿が切ない。そんなララをひかるは心配して優しく諭し、ララも自分らしさに気がついた。

「Bパート、ララは学校ではあえて語尾の「ルン」を封じました。でもそうすると、彼女の良さがなくなっちゃうんですよね。それでも必死になって、窮屈な思いをしつつ自分を抑えるララを、一番近くで見てくれていたのはやっぱりひかるで。『そんなの本当のララじゃないよ』というひかるの言葉で、ララも一つ成長できた気がします」（小原）

出会えた奇跡

撮影＝江藤はんな

キュアスター・星奈ひかる役 成瀬瑛美

キュアミルキー・羽衣ララ役 小原好美

ララの語尾の「ルン」がアフレコ現場でも大流行

——放送は第19話までできましたが、今作でレギュラー声優に初挑戦する成瀬さんも、アフレコには慣れましたか？

成瀬 自分としては「もっとこうできたら！」って気持ちがいっぱいなので、まだまだですね……。でも以前と比べれば、たぶん少しは……？（笑）とにかく、自分自身がめちゃくちゃ楽しめているという実感はあります！

小原 最初はお互い手探りだったところから一緒にやってきて、今はみんな本当にはまり役だなと思います。キュアスター役は成瀬さんしかいないなって、強く思いますし。

——やはり4人のプリキュアキャストは各キャラに似ているんですか？

小原 似てると思います！ 特に成瀬さんは、本当にスターそのままです！ 見た目からしてもそうだし、舞台挨拶とかでちっちゃい子たちが見ても「あの人、キュアスターの人だ！」って分かるはず。ソレイユ役の安野希世乃さん、セレーネ役の小松未可子さんも私たちのお姉さんポジションとして現場で支えてくださり、「もうそのまんまの人たちがそろった！」って感じです。プルンス役の吉野裕行さんも、愉快なツッコミをすかさず入れてくる感じがもうそのまんまです（笑）。

成瀬 好美ちゃんもララっぽいよね。普段の会話の中でも、語尾の「ルン」がナチュラルに出てきちゃうことがあるし。もはや私たちも気にせず、そのまま話し続けています（笑）。

小原 別にカワイコぶっているわけじゃなくて、つい「ルン」が出ちゃうんです。たとえばスタッフさんからお菓子を差し入れしてもらうと、私が「差し入れいただいたルン！」ってみんなに呼びかけたり。するとみんなも「本当だルン」「食べようルン」とか。

成瀬 使い勝手がいいので、現場で大流行してますね。

小原 こんなに浸透するとは思わなかったです（笑）。とにかく話数を重ねていくごとに、私たち自身にキャラクターが浸透していっているのも感じます。

——では、ここまで演じてきて、キャラの意外な一面を感じたことはありましたか？

成瀬 ひかるちゃんは、ぶっ飛んだ感性の子というだけでなく、実は観察眼が鋭くて周りに気を使える子だなって思いましたね。そこから人間らしい深みが見えてきて、演じれば演じるほどひかるちゃんのことが好きになっています。かわいくてカッコいい彼女に寄り添えるよう、私も頑張ってます！

小原 ララは宇宙人ですけど、普段生活している上ではどこにでもいる女の子だなと思うようになりました。彼女自身は「私の星サマーンでは、13歳で大人ルン！」と言っていましたが、ちょっと抜けていたりして、実際はまだ大人になりきれていない感じですよね。そういうところも愛されポイントだと思います。

成瀬 うんうん。

小原 それと最初の頃は結構ツンツンしていました。やっぱり宇宙人というのもあって、周囲に対して構えてしまっていたんですが、「ひかるを信じていいんだ」となってからは……特に4人がプリキュアになったくらいからは、ララにも柔らかさが出てきたと感じます。それと、ララは誰よりも好奇心旺盛なんです。仲間たちの地球での生活を見て、それをどんどん吸収して、ララも人間らしくなってるなぁって感じます。演じている側から見ても、とても微笑ましいです！

泣きながら台本を読んだ ひかるが落ち込む第11話

——『スタプリ』は、全体的にとても楽しさにあふれていますよね。

成瀬 印象深い楽しいシーンとしては、やっぱり宇宙旅行です。最初のケンネル星からして、とってもヘンテコな星で！（笑）骨がたくさん降ってくるのも楽しいし、宇宙人もかわいかったし。

小原 毎週のアフレコで次の回の台本をいただいて、「次に行く星の宇宙人は、どんな感じなのかな？」って想像するんですけど、翌週のアフ

7月7日はララの誕生日

誕生日には、ララはたくさんの視聴者の方からお祝いしてもらえそう。ララも喜ぶと思います。この星にやってきて、人としてどんどん成長しているララ。14歳になって、さらに魅力的な子になっていけるよう私も見守っています。ララ、これからも頑張ろうね♡（小原）

ララがひかるの相方で本当に良かった！ ひかるが作ったおにぎりをむしゃむしゃ美味しそうに楽しそうに食べてくれるところも、めちゃくちゃ嬉しくて。あと一緒に戦えるのも嬉しいし。きっとこれからも二人の絆が強まっていくと思います。お誕生日、おめでとう☆（成瀬）

第12話、アブラハム監督による映画撮影時の衣装。4人はそれぞれ、くノ一星影（ひかる）、羽衣天女（ララ）、太陽の王子(えれな)、月の姫(まどか）に扮装した

キュアミルキーの言葉のおかげでスターは浮上できた 成瀬瑛美

キュアスターは人として大切なものを持っている 小原好美

レコで実際の映像を観ると「こんな姿だったんだ！　全然イメージと違ってた！」っていうことが多くて（笑）。

成瀬　そうそう！　第10話の惑星クマリンの住人はどう見てもクマムシで。びっくりしたよね（笑）。

小原　そこは視聴者の方と一緒で、毎回新鮮な気持ちで演じています。

それから、アブラハム監督とみんなで映画を撮る、第12話も楽しかったです。

成瀬　台本にも「セリフは棒読み」って書いてあったんですよね。

小原　ひかるが「私も負けてられない。えい！」（手裏剣を投げる仕草）とかシュールなギャグの連続（笑）。

成瀬　で、投げた手裏剣が、アブラハム監督の額に命中（笑）。めちゃめちゃ面白かった！

小原　そんなドタバタを陰から見ているプルンスのツッコミは、完全に素の吉野さんでした（笑）。ララはガチガチに緊張するし、まどかさんは生真面目にト書きまでセリフとして読んでしまうし。えれなさんだけはうまくやっていました。それぞれの個性がはっきり見えたなぁって。私はこの回を観ていて、幼稚園や小学校での学芸会を思い出しました。観ているお子さんたちも「プリキュアもこうだから、私たちも失敗しても大丈夫なんだ」「みんなバラバラでもいいんだ」と、共感してもらえたかもしれません。

成瀬　大人目線では、パロディの小ネタも楽しめる回でしたよね。カメラを止めるな！（笑）

――ひかるは、第10話から第11話にかけてピンチを招いて落ち込んでいたのも、とても印象深いです。

成瀬　そうなんです、普段との落差が！　長く「プリキュア」シリーズを観てきた私としては、「毎年この時期に最初の攻撃アイテムが出るから、今年もそれに合わせて主人公は何かしらピンチになるだろう」と予想していたんです（笑）。

小原　「そろそろピンチの話がくるに違いない」って言ってましたね（笑）。

成瀬　でも、ひかるちゃんのいつもの雰囲気からして、これほどヘコむとは思っていませんでした！　もう「ひかるちゃん、その気持ち分かるよ！」って、家で泣きながらじっくり台本を読みました。

小原　ひかるは第1話からずっと明るかったから、第11話を観て驚いた人は多いと思います。この回、私はひかると成瀬さんを重ねて見ていたんです。

成瀬　そうだったんだ！

小原　私は声優になって初めてアフレコ現場に行った時、とてつもなく緊張したんです。だから、普段はアイドルで声優のお仕事はほぼ初めての成瀬さんも、あの頃の私と同じに違いないと思っていて。でも、全然

なるせ・えいみ
2月16日生まれ／ディアステージ所属／でんぱ組.incメンバー。アニメへの出演は「まめねこ」（マジカルMAJIKO）ほか

こはら・このみ
6月28日生まれ／大沢事務所所属／最近の出演作は「かぐや様は告らせたい～天才たちの恋愛頭脳戦～」（藤原千花）、「ひとりぼっちの○○生活」（八原かい）ほか

ひかるのクラスメイト・軽部タツノリ。ララとも打ち解けたようだ

ひかるの母・星奈輝美。マンガ家として奮闘中

えれなの弟・天宮とうま。ララとの対話で家族を見つめ直す

そんな感じは見せていなくて、「本当にひかるだ!」って思ったんです。
成瀬　……実は緊張していたんじゃよ、ふふふ(笑)。
小原　『映画プリキュアミラクルユニバース』の収録の時に、成瀬さんが「実はTVのアフレコが始まった時からすごく不安で、映画はひかるのセリフがいっぱいで……」と気持ちを打ち明けてくれて。だからこそ、第11話の落ち込んだひかるは、成瀬さん自身を見ているような気がしたんです。
成瀬　ひゃあ(照れ)。
小原　しかも敵チームから、ものすごく批判的なことも言われましたよね。
成瀬　アイワーンから「実は想像力ないっつーの!」って憎たらしく言われて。私、本当に泣きそうになっちゃって。
小原　そこで「そんなことないルン!」ってミルキーが言い返すんですけど、あれは私の心からの言葉でした。すごく悔しかったんです。「本当のひかるのこと、何も知らないくせに!」って。
成瀬　(ウルッとしながら)本当に、そういう感じだった! ミルキーの言葉のおかげで、スターは浮上できたんです!
小原　ただ、ついタンカを切る感じで語気を荒げてしまって、スタッフさんから「ちょっと強く言いすぎです」と指摘されてしまいましたが(笑)。第11話は高ぶる気持ちが乗ってしまって、自分の中で調整するのが難しかったです。
成瀬　第11話のアフレコのことは、今も思い出すだけでゾクッと震えがきます。「仲間って、すばらしい!」ってあらためて思いました。だから、早く一人の声優としてみんなの力になりたい!
小原　もう十分なってます! 座長としても、なくてはならない存在です!

自分は自分でいいのだと ララも学んで成長した

——第13話はララが自分は周りと違うと気にして悩んでしまい、そこをひかるが支えるお話でした。
小原　ララにとっての「〜ルン」は、彼女の星では当たり前の語尾で、「〜です」「〜だよ」みたいな感覚だと思うんです。だから私も「ララの中では普通」という感覚で発しているんです。返事も「はい」じゃなく「ルン」だったり、頷く時も「ルンルン」って言ったり。だからララを演じる上では、いかにも語尾っぽく強調するのではなく、その一つ一つに自然な感情を乗せていたんです。それがあの回で、ララが地球の学校に行って語尾がみんなと違うことに直面して、動揺して……私も同じように動揺しました。ララの中で、語尾がちょっと恥ずかしい気持ちも出てきました。他にも掃除や2桁の計算ができないとか。
成瀬　2桁の計算ができないのは、確かにびっくりしたね。
小原　でも、それぞれ違う個性を持っているのは当たり前だから、おかしいことは何一つないんだって分かる回でしたよね。知らないことを学ぼうとするのは大事だけど、「無理に自分を変えなくていいんだ」と感じて、またララが人間的になったなぁって。そういう人間性をくれるきっかけが仲間なんですよね。それと「オヨ」っていう言葉は、心を許した相手と一緒の時に使っている気がします。それを学校の友達の前でも使うようになって、みんなになじんでいってるなぁと感じる回でした!
——それを経ての第14話では、ララはえれなの弟のとうまに、みんな違っていていいのだと励ましていましたね。
小原　そうなんですよ!
成瀬　本当に、素敵な流れ!
小原　ララ、成長したなぁ! きっと観ている小さい子たちも「そうか、私は私、違っていていいんだ」って心強くなったと思います。『プリキュア』は家族のドラマもいいですよね!
——ひかるのお母さんがマンガ家だということも、第18話で分かりましたね。
成瀬　実は、私の母もマンガを描くんです!
——そうなんですね。
成瀬　プロではないですが、マンガ用の原稿用紙を使って本格的にマンガを描いていました。お母さんが描いたマンガを、小さい頃に私も読んでいて、大好きだったんです。そこもまた私とリンクしていて、とてもびっくりしました。
小原　うちの母も、マンガ家を目指してたんですよ(笑)。
成瀬　ええ〜!? じゃあ、私たち、お母さん同士も仲良くなれるかも知れないね!
——この作品に参加して、全体的に意識していることはありますか?
小原　『プリキュア』は子どもたちに向けた温かいメッセージを込めた作品です。一見単純なようでとても奥が深いので、どのシーンも「楽しい」「苦しい」「悔しい」と表面的に演じても成立しないんだなって、強く感じます。
成瀬　そうなんです。だから難しい!
小原　微妙で繊細な部分も含めて、子どもたちはしっかり受けとめていると思うんです。だからこそ、私たちも真剣に取り組まないと……どのシーンのどのセリフも、心から演じないといけないんです。
成瀬　『プリキュア』は観てくれる子どもたちの人格形成に関わる作品ですからね。子どもたちのこの先の未来や、ひいては世界や宇宙にも関わるんじゃないかって思うので。だから私たちは毎回考えながら、一言一言責任を感じつつセリフを言っているつもりです!
——最後にファンへのメッセージをお願いします。
成瀬　私たちは命を削る勢いで、本当に全力で取り組んでいます。でもそれ以上に楽しみながら、この作品に参加しつつ、一視聴者として観ています。愛が深すぎて気の利いた言葉が言えないのですが、『スタプリ』は本当に素敵な作品なので、たくさんの方に観てほしいし、ずっと応援してくださっている方も、引き続き楽しんでほしいです。これから先も面白いことがいっぱい待っているはずです!
小原　キュアコスモも加わって、ここからまた盛り上がっていくと思います。自信を持って言えるのは、それぞれのキャラクターは、私たちが世界で一番愛しているってこと! キャストの愛やスタッフさんの愛、そういう「愛の空間」で作り上げられている物語が、毎週子どもたちに届いていると思うと本当に嬉しいです。プリキュアは、観てくださる方から愛されて初めて「生きられる」ので、今後も見守っていただきつつ、一緒に楽しんでもらえたら嬉しいです。この先さらにルンルンな物語になっていくと思うので、よろしくお願いします!(笑)
成瀬　おっ、うまいこと言った!(笑)

頼れるお姉さん えれな&まどか

成瀬　えれなさんは見た目のカッコよさだけでなく、とにかく人間ができてる!　まどかさんはクールなようで、意外とかわいいボケを見せることもあるんです。靴下の左右をはき間違えちゃったりとか!(笑)
小原　お姉さんキャラの二人ですが、また立ち位置が違うんですよね。
成瀬　えれなさんはちょっと「ママ」っぽい?
小原　そう!　母性みたいなものを感じます。中学生でこんなにしっかりしているって、すごいですよね。その上、普段からアクロバティックな動きもできて。第4話の……。
成瀬・小原　(声をそろえて)跳び箱のシーン!
小原　世界大会に出場できちゃうんじゃない!?
成瀬　もはや変身しなくても、戦えちゃうんじゃないかな!?(笑)そしてまどかさんは、すごく頑張り屋ですよね。生徒会や弓道や、たくさんの習いごととか、やることがたくさんあるのに、しっかりこなしていて偉いなぁ。

ひかる&ララに ここが似ている!

小原　成瀬さんもひかるも、どんな人に対しても壁がないんです。
成瀬　言われてみたら、あまりないかも?(笑)
小原　いつも元気で明るくて、誰にでも分け隔てなく接してくださる。そこはスタッフさんに対してもそうだし。声質がどうとか以前に、人として大切なものを持っている方だと思います。
成瀬　ありがとう。もう聞いていて、泣きそうになるんだけど!　好美ちゃんも気遣いができるところがララっぽいと思う。みんなで休憩時間にカップ麺を食べる時にお湯が足りないと、「持って来るルン!」ってポットに熱湯を入れてきてくれたり。そういうことがサッとできるのは、さすが大人だルン!
小原　スタジオにいつもミニサイズのカップ麺があって、AパートとBパートの間の休憩時間に、プリキュアの4人で一緒に食べるんですよね。それで力を蓄えて、Bパートの戦闘シーンに挑むのが恒例になってきています。
成瀬　いまや休憩中のラーメンも、アフレコの楽しみの一つ(笑)。
小原　そうやって、4人の気持ちを一つにして戦ってます!　ほかにもお茶やコーヒーを飲む方もいらっしゃるので、お湯が減っちゃうんですね。だから合間を見て足しに行かないと。
成瀬　本当に気が回るなぁ。好美ちゃんが相方で良かった!
小原　私も成瀬さんがスターで良かったです!

アイドル&怪盗がプリキュアに

成瀬　キュアコスモは、まず「宇宙アイドル」というのがわくわくする設定ですよね。第15話のライブシーンも、立体映像をたくさん映し出して、歌って踊ったりしていて。それに「宇宙怪盗」でもあり、プリキュアにも変身するということで、惹かれる設定が盛り盛り。大人から見ても子どもから見ても、かなりインパクトの強いキャラだと思います。
小原　今の4人と違った、さらに濃いキャラが出てきたなぁ!　という印象です。複数の顔を持っていて、観ている子どもたちもびっくりしたでしょうね。今後の予想がつかなくなって、私もここからが楽しみです。素の上坂すみれさんはもっとふわっとした方で、普段の声はマオよりもかわいいんですけど、マイクの前に立つとガラッと変わるんです。
成瀬　カッコいいの!
小原　そういうところがブルーキャットっぽいなぁって!
成瀬　ブルーキャットが敵か味方か分からなかったのも面白かった。敵幹部から仲間になるパターンも好きですけど、また全然違うこの展開もニクイな!
小原　いろいろと美味しいキャラですよね!

マオ=ブルーキャットと遭遇した第15話、4人はオークション会場でドレスアップ

それぞれの価値観がアップデート

シリーズ構成
村山 功

プロデューサー
柳川あかり

むらやま・いさお
1975年生まれ。アニメ脚本家。「魔法つかいプリキュア!」のシリーズ構成や、「映画プリキュアミラクルユニバース」など、歴代クロスオーバー映画の脚本も数多く手がける

やながわ・あかり
1990年生まれ。東映アニメーションに2013年入社。営業職を経て企画部門に。アシスタントプロデューサーとして「デジモンユニバース アプリモンスターズ」、過去のプロデューサー作品に「おしりたんてい」など

仲間内だけでなく外へ向かった「多様性」

——『プリキュア』シリーズのプロデューサーを担当することになった感想は?

柳川　嬉しかったです! 私は男児向けの作品を担当することが多かったので、『プリキュア』なら、女性である自分の視点をより活かした「かわいい」や「きれい」を盛り込めるかなと、モチベーション高く入っていきました。

——タイトルの『スター☆トゥインクルプリキュア』は、どういう話し合いで決まったのですか?

柳川　私が書いた企画書の仮タイトルは『トゥインクルプリキュア』でした。その後、メインスタッフが加わって話し合う中で、「星」というコンセプトがより伝わりやすくしたい」ということになり、ずばり「スター」という言葉を足し、「トゥインクル」も言葉の響きがかわいいので活かしました。また、メインターゲットの3~6歳のお子さんに「星」を推していく意味でも、タイトルに「☆」は入れようということになりました。今回のプリキュアが変身ペンで変身するので、ロゴはペンで筆記したような細めの字体にし、全体としてもレトロでファンシーな雰囲気にしようと思いました。宮元宏彰監督のイメージを元に、私が発注用のラフ案を大量に描いて、最終的には色や配置を商標が取得できるデザインに調整しました。

——全体として、今作は80年代っぽいレトロ感が漂っていますね。

柳川　まさに「80年代」というのが最初から決めていたキーワードです。私が生まれる前の時代で、自分が体験していないからこそ、ファッションとしての憧れ感がとても強くて。それに、その頃に子どもも時代を過ごしていた方が、今は保護者の年齢になっているので、お子さんと一緒に観る際に何かしらのフックになればというのもあります。

——シリーズディレクターを宮元さん、シリーズ構成を村山功さんにお願いした理由は?

柳川　順番としては先に宮元監督にお声がけしましたが、きっかけは『ONE PIECE FILM GOLD』でした。宮元監督はキャラクターを立てるのがお上手で、ビジュアルに対するこだわりも強い方です。『プリキュア』はお話ももちろん大事ですが、グッズなどから入る人もいるため、最初に目に飛び込んでくるビジュアルのカッコかわいさも求められます。版権イラスト(キービジュアルなど)も一枚絵で世界観を想像させるものにしたかったので、そこにこだわりがある方がいいなと思いました。

——キービジュアル類のラフ(大まかな構図)は、シリーズディレクターが考えることが多いですからね。

柳川　それに宮元監督はコンセプトアートも描いてくださったりしました。ただ、私も宮元監督も『プリキュア』にメインで携わるのは初めてなので、どうしても二人で話すと「プリキュア」とはなんぞや?」みたいなところで考え込んでしまって(笑)。しかも二人とも新しいことをやりたがるタイプなので、「『プリキュア』はこういうことを大事にしてきた」というベースを分かっている方がいると心強いな、と。そこで、長年『プリキュア』に携わっている村山さんにシリーズ構成をお願いしました。

——では村山さんが、シリーズ構成として最初に考えられたことは何ですか?

村山　最初に「地球人と宇宙人の交流の中で多様性というテーマを描く」と聞いて。多様性というテーマは、人

スタッフ入魂の番組ロゴ。羽ペンで書いた感じのおしゃれなデザイン

間界と魔法界の交流を描く『魔法つかいプリキュア！』（2016年）ですでにやったので、「僕には無理です」と、まず柳川さんにお伝えしました。でも、『まほプリ』ではあえてやらなかった、プリキュアの「敵側も含めての多様性」だったら、やれる余地があるかも知れないと考え直しまして。「それでもいいですか？」と柳川さんに確認した上で、お引き受けしました。

――今回の敵は、第10話でカッパードやテンジョウが「恵まれている環境で暮らすお前たちに何が分かる」といった内容を語っていたりして、何となく〝訳あり感〟を匂わせていますね。

展望台の管理人・遼じいこと空見遼太郎。ひかるたちのよき理解者

まどかの父・香久矢冬貴。内閣府の職員として宇宙人を調査する

村山 『まほプリ』の敵は「災害・大いなる自然の驚異」のような存在で、根本的には交流ができない存在として考えていました。でも今回は、多様性が意図するところは仲間内だけではありませんので、ノットレイダー側とのやりとりは今後も描いていきます。ただ、子どもたちが観るものなので、ノットレイダーに比重を置きすぎてもいけない。そこは注意しながらやっています。

――『魔法つかいプリキュア！』とどう差別化するかという点は、常に念頭にあるわけですね。

村山 正直、僕が参加したことで、柳川さんや宮元さんたちの選択肢の幅を狭めてしまったんじゃないかなという申し訳なさはあります。打ち合わせで、皆さんから「こんな話はどう？」というアイデアが出ても、「それ『まほプリ』でやっちゃってるんで……すみません」ってことがあったりして。でも、『まほプリ』とは違う『スタプリ』シナリオメンバーの皆さんの個性が出てきて、また違った多様性が描けていると思います。『まほプリ』で初めて『プリキュア』に触れた子たちは今、7歳前後になっているので、その子たちが『スタプリ』を観て「こういう多様性もあるんだ」と感じてくれたらいいなと思います。

デザインのポイントは背中

「スターとミルキーの姿は、キャラクターデザインのオーディション段階からそれほど大きく変わっていません。高橋晃さんのデザインは、特にスターの後ろ姿が印象的でした。肩から背中にかけて大きく開いて、華奢な肩甲骨が見えている感じと、腰に付いた大きなリボン。見た目では力強さを感じさせない女の子が、実は強くて大奮闘するという。そこにドラマ性を感じました」（柳川）

マイペースなひかると周囲の目を気にするララ

――各キャラクターについてお聞きしますが、ひかるの宇宙への興味は、科学よりもオカルト的な方向に寄っているのが特徴ですね。宇宙人を素直に受け入れる素地という意味合いもあると思うのですが。

村山 ひかるは興味のあることに対する知識は豊富な子なので、実はちゃんと宇宙に詳しいんです。

柳川 劇中では、あえて描いていないというのもあります。

村山 主人公があまり賢すぎると、子どもたちが自身を投影しにくい気がするんです。だから、観ている子どもたちより「少しだけ知識量が上」くらいの見せ方で、一緒に学んでいく形にしています。

――ひかるのお母さんがマンガ家という設定も異色ですね。

村山 「イマジネーション」もテーマになっているので、ひかるの母親も想像力のある職業にしたいという話になりました。ひかるがオリジナル星座を描くのが好きなのも、母親の影響が大きいです。

――遼じいによると、ひかるが天文台に友達を連れてくるのは珍しいようですが……。

村山 そこに関しては、今後の話数で語られる予定ですが、おそらく皆さんのご想像の通りかと思います。

合体技は南十字星モチーフ

「『サザンクロス・ショット』は実は見栄え先行での発案でした。春の新アイテムを考えるにあたり、『4月の段階ではプリキュアは4人だから、合体技は十字フォーメーションで。ならば南十字星モチーフに』と決まりまして。そこから、第6話の小林雄次さんの脚本で、遼じいが南十字星は人と人とのつながりのようだと語ったり、第10、11話では、南十字星は日本から見られない星でイマジネーションの象徴だと語ったり。そうやって脚本チームの皆さんが肉付けしてくださいました」（柳川）

――ひかるが落ち込む第11話は村山さんの脚本回ですが、書いてみていかがでしたか？

村山 「ひかるがピンチになって負けるとしたら？」と考えた時に、「調子に乗って負ける」シチュエーションが違和感なく出てきたというか。自然に流れていった感じです。過去シリーズの主人公のように、「敵が強すぎる」とか「気持ちが動揺していた」とかではなく、「調子に乗りすぎて負けてしまった」。なんか、ひかるならではって感じで良かったなぁと思います。

――ララが転校してくる第13話は、ララ自身が「周囲と違う」ことにナーバスになりました。これまでだと、『魔法つかいプリキュア！』が好例ですが、異世界から来たプリキュアが人間世界の学校に編入すると、周囲との違いが長所になって人気者になる展開が多いのですが。

村山 ララは「周囲の物差し」に頑張って自分を合わせようとするタイプなんです。そうでないやり方もあるはずですが、「不得意なことであっても、無理してでもやる」という感じになりがちな子なんですね。最初の頃に「自分は大人」と言っていたのも、「サマーン星人の大人はこうあるべき」という考えに囚われていた感じで。逆にひかるは、自分の好きなことしかやらない。「マイペースなひかる」に対して「周りからどう見られているか気にするララ」。そういう対比にしています。

ララは最初から「触覚＋緑系」

「企画書の段階から、地球人と宇宙人の女の子の『ガール・ミーツ・ガール』の物語にしたいと考えていました。ビジュアル面を含めて二人を対比で見せたくて、企画書には自分でラフ絵も描いて私なりにイメージを固めました。たとえば『宇宙人の女の子には触覚を付けたい。色は緑系にしたい』とか。最近の他の女児向け作品にも緑系の子が出てきているので、この色で今っぽいおしゃれさが出るかなと思いました。それにせっかくの宇宙人なので、プリキュアの定番とは違う色で表現できたらなと」（柳川）

――年長組のえれなとまどかは、「商店を営む大家族」と「高級官僚家庭のひとりっ子」という家庭環境が、対比的です。

村山 太陽と月のモチーフに沿ったキャラクターで考えたら、自然とそう収まりました。初期には、まどかではなくえれなが生徒会長の案もあったんです。ただ、ビジネス的にはピンクと紫の人気が高くなることが多いため、「ピンクと紫は、できるだけ鉄板要素で固めてほしい」という要望がありまして（笑）。「その分、あとの二人はかなり自由度を高くして大丈夫」ということで。結果、まどかを「生徒会長でお嬢様」という王道パターンにして、えれなは「パパが外国人の大家族」にさせてもらいました。

柳川 自由度の高いララとえれなが、作品テーマ的なものを背負っている部分も大きいです。

村山 また、ララは『まほプリ』で

愉快なセミレギュラー・姫ノ城桜子

「こういうお嬢様キャラがいたら面白いかなと（笑）。『スタプリ』は惑星旅行の話が多いので、学園ドラマ要素がどうしても薄くなりがち。そのため、生徒会活動を描く上で、まどかに憧れていて彼女を語れるキャラがいたらいいなと思いました。今の桜子はコメディリリーフですが、少しずつ変わっていくところもあると思います」（村山）

いえば魔法界のリコの立場。「異星人」という特別感から、子どもたちにある程度は支持されるだろうなぁと予想できました。その意味では、えれななんです。

最もチャレンジだったのは、えれななんです。

柳川　回を追うごとに、えれなの人気も上がってきているらしくて。

村山　そう。それが僕らもすごく嬉しくて！

——まどかについては、お父さんが宇宙人を危険視して探索していると いう点がサスペンス要素として機能しています。

村山　まどかは父親の冬貴に対してはっきりとものが言えない子で、冬貴は我が子がプリキュアだとは知らずに宇宙人調査する。その関係が面白いんじゃないかなと思いまして。

——冬貴がプリキュアを追う展開は、今後も続くのですか？

村山　しばらく続きます。ただ、冬貴自身は「プリキュア＝敵」と思っているわけではないです。「怪しい未確認飛行物体や宇宙人がいるらしいから探す」という職務を、全うしているだけなんです。政府はノットレイダーのことがあり、異星人全体を「危険」と判断しています。

5人が合わさり新たな化学変化が！

——ひかるとララは対比的な存在とのことでしたが、影響し合って成長していくことになるのでしょうか？

柳川　相手に影響されて完全に変わってしまうのではなく、出会ったことで価値観がアップデートされる形です。もちろん、第1話と最終回を比べれば、変化しているとは思います。でも、彼女たちの価値観自体は変わらず、新しいものを取り込んで少し溶け合うといいますか。「変わらないけどつながっている」感じを出せればと思っています。なんだか抽象的な言い方ですみません（笑）。

村山　「人と出会うことで、主人公の考えや想いがAからBに変化した」という描き方を物語ではよくすると思うんですけど、『スタプリ』ではしません。『スタプリ』では、Aという考え方を持つひかるの元に、Bを持つララがやって来て、影響はされても、本来ひかるが持っているものは変化しません。ひかるの中でA＋Bとララの考え方、価値観が付いていく。出会いを重ねるごとにA＋B＋C＋……と考え方、価値観がひかるに足されていくイメージです。

柳川　そう、それです！

村山　ララも同じで、ひかるの考え方、ものの見方がララの中にも備わってきた。初登校の第13話もそういうお話でした。「個々の本質は変わらない」というのは、気をつけているところです。

柳川　AからBに変化する成長の描き方をすると、「Aの価値観よりBの価値観のほうが優れている」という印象になってしまいそうなので、そこは避けたいと思っています。

村山　成長という点では、『スタプリ』では回を重ねることで喜びだけではなく、つらさや悲しみも抱えていくところを描ければと思っています。第1話でのひかるは、好奇心旺盛で純粋無垢ゆえの「怖いもの知らず」な状態でした。そこから「怖いもの」を知り、現実を知っていくことで変わっていくことになるかと思います。たとえ困難な道であっても、面白さや素敵だなと思えるものを見つけて進んで行く。そんなひかるたちの姿を描けていけたらなぁと思っています。

——そして登場する5人目のプリキュアは、キュアコスモ。変身前の彼女は、怪盗でアイドルという設定ですが。

柳川　そこは子どもたちに好きになってもらえそうな、グッとくる設定をみんなで盛り込んでいった結果です。

村山　怪盗要素は女性陣が推していましたよね。

柳川　そうでした。私は世代的に「女の子が怪盗に変身して活躍するアニメ」を、子どもの頃にいくつか観ていましたし。『ルパン三世』の峰不二子とか、女怪盗ってスタイリッシュなイメージがありますよね。「自立しているカッコいい女性」というイメージで。

村山　峰不二子というワードは、確かに出ていましたね。

——ブルーキャットがキュアコスモに変身することで、どんなことが起こるのでしょうか？

村山　キュアスターたち4人の前に、これまでにない「明確な目的」を持ったキュアコスモが現れることで、キュアスターたちの心境にも変化があるはずです。5人が合わさることによって生まれる化学変化を、ぜひ見てもらいたいです。画としてのコスモのカッコ良さも、きっと目を惹くと思います！

成瀬瑛美さんと小原好美さんはキャラそのもの!?

柳川　成瀬さんも小原さんも、イメージぴったりですよね。成瀬さんは、これまで声のお仕事の経験がほとんどない中での主役。小原さんもまだそれほどキャリアがある方ではなくて。お二人のフレッシュな雰囲気もいいなと思っています。特にひかるのお芝居は、成瀬さん独特の喋り方がいい意味でそのまま出ていますね。

村山　本当に素敵だと思います！

柳川　オーディションの時は、まだ私たちスタッフの間でも「ひかるはこういう子」という共通認識が完全には固まってなかったんですが、ひかるとしての成瀬さんの声を聴いた時に、「ひかるが現実にいたら、こんな子に違いない！」と直感しました。

村山　本編のアフレコが始まったら、「スターは成瀬さんそのもの」って感じがさらに強まって。『映画プリキュアミラクルユニバース』の打ち上げで、ABC（朝日放送）の田中昂プロデューサーたちと「今後のひかるが進む方向性はもう、成瀬さんに直接聞いたほうがいいんじゃない？」なんて話も出たりしたくらい（笑）。

柳川　アフレコでも、成瀬さんは自分を爆発させている感じのお芝居で、小原さんはわりと周囲を意識しながら演技をされている印象。そこも、ひかるとララに似ていますね。変身シーンの歌でも、成瀬さんは自分をドーンと全面に出す感じの歌い方で、小原さんは少し探りながらの歌い方です。とってもキャラに合っているなと思います。

NEWS!

いよいよ誕生！キュアコスモ

5人目のプリキュアの名前は「キュアコスモ」。そして変身するのは、これまで何度かひかるたちと接触があった、怪盗ブルーキャット（＝宇宙アイドルマオ）だ。ミステリアスでありつつ、敵ではなさそうな言動も見せていた彼女だが……第19話のラストでは8本のプリンセススターカラーペンをひかるたちからすべて奪い取るという衝撃の展開が。そこから、どういうドラマを経てキュアコスモになるのかは大いに気になるところ。

またブルーキャットは、出身地である惑星レインボーの人々を元通りにするという大きな目的も持っている。そのために怪盗として活動しつつ、カモフラージュとしてアイドルのマオとしても活動してきた。それがプリキュアとなることでどう変化するのか？　楽しみがいっぱいだ！

「コスモ」は強さのイメージ

「キュアコスモの名前を考える時には、まだはっきりとキャラ性や属性まで決まってない段階でした。追加戦士らしい『強さ』を出す上で、『コスモ』になった気がします。『猫モチーフの宇宙人』というのは、デザインを発注する段階では決まっていたので、その要素を変身後の姿に取り入れる形で、高橋さんに描いていただきました」（柳川）

すべてに猫モチーフを

「キュアコスモが猫モチーフのデザインに決まり、そこからアイドル姿や怪盗姿も猫モチーフになりました。ブルーキャットの名前は宮元さんの発案です。怪盗感もあるし、異論なしって感じでした。惑星レインボーがアイワーンに滅ぼされ『プリンセスの力』で復活させようとしているという設定は、ブルーキャットの設定と同時に考えていきました」（村山）

香水瓶

ブルーキャットの香水。これを身体に吹きかけると、様々な姿に変わることができる。ノットレイダーの一員・バケニャーンも、実はブルーキャットが香水で変化した姿だった。

ブルーキャット

宇宙を股にかける少女怪盗。常にサングラスをしているのは顔を隠すため。つまり怪盗の仮面という位置づけだ。「メガネをかけているお子さんもいると思うし、メガネを使えば怪盗に変身できるという感じで遊んでもらえたらいいかなと」（柳川）。髪型も一見怪盗っぽくないが、観ている子どもたちが手軽になりきり変身できるという意図が込められている。

マオ

超人気の宇宙アイドル。マオは中国語で「猫」という意味だ。「〜にゃん」というあざとい語尾とにゃんこポーズに、男性ファンはメロメロ。このマオの時の顔がブルーキャットの素顔というわけではないらしいので、今後も注目だ。

キュアコスモ

キャラカラーは虹色だが、「玩具展開等の関係から、青もコスモを代表する色になっています」（柳川）とのこと。髪の色やブーツ、ロンググローブなど青系中心の色合いになっている。髪型はブルーキャットの姿の時に近いお下げ髪だ。
（声／上坂すみれ）

クレヨン画のような星々が浮かぶ、淡いピンクの宇宙空間。このユニークな舞台「星空界」は、『スター☆トゥインクルプリキュア』ならではのもの。美術デザインの増田竜太郎さんといいだりえさん、そしてコンセプトアーティストの升井秀光さんによって、ファンタジックな世界が生み出されている。

増田さんは『ハートキャッチプリキュア！』以降、『プリキュア』シリーズの美術デザインを何度も務めてきた。いいださんも歴代シリーズで各話の美術に参加しており、ひかるたちの住む観星町関連の美術デザインもお二人の仕事だ。一方、『映画プリキュアミラクルユニバース』で美術設定を担当していた升井さんは、コンセプトアートという、これまでのシリーズにはなかった役職で本作に参加。各話で登場する惑星や宇宙人の多くは、升井さんの描いた原案を元にデザインされている。

現在ひかるたちはララの里帰りに便乗して、星空界を航行中。スターロケットが故障し、ひとまず修理のために密航者・ヤンヤンの故郷のプルルン星に向かうことになった。惑星サマーンも早く見たいけど、プルルン星もどんなわくわくが詰まっているのか楽しみだ。２０１９年夏休み宇宙の旅は、まだまだ続く！

スターロケットのメインフロア

操縦席兼リビング。席が５つあるのは、プリキュアの人数に合わせてのこと。ララの座席位置（エレベータに一番近い奥の席）には、操船時に天井から馬蹄形の操縦装置が降りてくる。これは「操縦席っぽくしない」という宮元監督の意向を受け、増田さんが考えたアイデア。

ララの部屋

ひかるの部屋

まどかの部屋

えれなの部屋

スターロケットの個室

※いずれも美術ボード

ひかるの部屋はテレビやヘンテコ生物のぬいぐるみなどが置かれており、「あまり勉強していない感じを表現してみました（笑）」といいださん。ララの部屋は「スッキリした方向性」という要望から、一番シンプル。本編に出てくるメロンソーダのようなテーブルもいいださんのアイデアで、「ララは初夏っぽさが合いそうだなと」（いいだ）。えれなの部屋は、全体にメキシカンテイストで、サボテンの鉢も置かれている。まどかの部屋は落ち着いたイメージで、香久矢家に通じる荘厳な雰囲気も。

スターロケットの小さなハートは個室の窓

増田　最初に改装後のスターロケットをデザインして、そこから装飾をそぎ落としていって、改装前（ララのロケット）をデザインしました。改装前の外装にあるネジみたいなポッチは、それらしく見える記号として絶対入れたほうがいいと思いました。

いいだ　むき出しのメカ感がありますよね。

増田　ロケット内部は、全部いいださんがデザインしてくれました。メインフロアは「あまり操縦席っぽくしたくない」という宮元監督の要望もあって、リビングにもなるし操縦室にもなる部屋です。

いいだ　玩具との兼ね合いで、「カフェスペースみたいにしたい」という話もありまして。ピンクベースの改装後デザインを先に作って、そのギャップがつくように改装前の色（淡い紫）を決めました。ひかるたちの個室はソファベッドがついたユニット構造で、４人それぞれの個性が出ればと。宮元監督から「こういう感じ」といったラフ画もいただきました。

増田　ロケットの内部は一応、３階建てくらいのイメージです。

いいだ　あまり明確にはしていないんですけどね。外から見た時の大きな星型が、メインフロアの窓です。その下の小さなハート柄は、４人の個室の窓。エレベータは船体の一番奥で、エアロック（正面出入り口）の反対側に位置します。

フルな可能星！

いいだりえ　ポップで懐かしい感じのする宇宙に

オーディションのお題は星空界の全景と各惑星

―増田さんは『プリキュア』の美術デザインは久しぶりですね。

増田　『スタプリ』では、久しぶりに美術デザインのオーディションが実施されたんです。東映アニメーションの美術課の意向でオーディションを受けてみたら通っちゃって。

いいだ　私もオーディションを受けたんですが、増田さんに決まりました。

増田　その頃の自分は『おしりたんてい』の美術デザインも担当していたので、かけ持ちはあまり良くないかなと思ったんですけど、せっかく選んでいただいたので腹をくくりました。

―お二人でやることになった経緯というのは？

増田　歴代の美術デザインは一人でしたが、設定を作るのに時間が足りなくなることもあったんです。それで新たな試みとして二人体制にしたらどうかと提案して、いいださんに入ってもらえるよう、自分から製作に頼んでみました。

いいだ　そうだったんですね！　今回は久しぶりに増田さんが美術デザインをやる『プリキュア』ということで、私も楽しみにしていたんです。そうしたら一緒にできることになって嬉しかったです。

―お二人の作業分担というのは？

増田　明確には決めていませんが、世界観や方向性といった大枠を自分が作って、それを元に、いいださんが肉付けしてバリエーションを作るのが、だいたいの流れです。たとえば、自分が作ったのとは別のキャラの自宅のデザインをお願いしたり、建物の外観を自分が、部屋の中をいいださんが作ったり。ケースバイケースです。

いいだ　増田さんからアイデアだけをもらって、私のほうで具体的に絵にしていくこともありますね。

―シリーズディレクターの宮元宏彰さんたちと話し合ったことなどは？

増田　モチーフが宇宙、テーマが多様性と言われました。地球にいる時はこれまでのシリーズと大きくは変わらないけれど、宇宙に出た時はあまり見たことがない不思議な世界を作りたいと思って、チャレンジしています。

いいだ　宮元監督から、「ポップな感

スター☆トゥインクルプリキュア

★毎週日曜日★朝8時30分★ABCテレビ・テレビ朝日系
HP★http://www.toei-anim.co.jp/tv/precure/

作画用設定

原案デザイン

ヤンヤン
スターロケットに潜入していたヤドカリ型宇宙人。宮元監督の大ラフを元に升井さんが原案を作成。背中の貝殻がミニバケツになっていて、そこに体を潜ませる仕組みは、升井さんの原案に基づくもの。

スターパレス
12星座のプリンセスがいる惑星。玉座も含め、いいださんのデザイン。ハート型の本星やリボンの衛星など、とにかくかわいい！「星空界の中心にある星なので、心臓のイメージでハート型にしました。それにハートは女の子が好きなモチーフですから」（いいだ）

スターパレス玉座
12星座のプリンセスの玉座がある場所は、スターパレスの雲海に浮かぶ空中庭園。1つ1つをガゼボ（あずまや）にするというのは増田さんの案だ。ガゼボの屋根の上に浮かぶ円盤は、プリンセス復活に呼応して12星座のマークが灯る部分。マークの点灯ギミックや円陣の配置は、玩具会社からの提案に基づくもの。

観星町の町並みはアメリカのカントリー調

星奈ひかる キュアスター
みんなそろってスターロケットで星空界への旅行ができて大喜び。しかも夏休みだから、いつもと違って長旅で、もうキラやば～っ☆

ララ

ララの故郷・惑星サマーンへの旅は、想定外の長期航行に？　今月は美術スタッフの方々から星空界の作り方についてお聞きしました。ひかるたちの惑星探訪を振り返ろう☆

美術デザイン　増田竜太郎

じやちょっと懐かしい雰囲気を出したい」とも言われて、「どういう感じなんだろう？」って考え込んだりもしましたが（笑）。

――ピンクの空間にクレヨン画のような星々は、まさに「ポップな宇宙」という印象です。

増田　この雰囲気は、自分が最初にオーディションで描いたものがベースになって、そこから広げていった感じです。

――オーディションのお題は、星空界だったんですか？

いいだ　星空界の全景と、各惑星のアイデアだったような？

増田　そうでしたね。特に惑星レインボーは、オーディションで自分が描いたデザインがそのまま採用されました。オーディションの頃は、惑星レインボーがどういう星なのかといった詳しい設定はまだ聞いていなかったので、単純に「見た目の面白い星」を自分の中でテーマにしていましたが、監督たちのイメージにちょうど合っていたのかもしれません。

――星空界の惑星は、いろいろな色や形があって楽しいです。

増田　あまりリアルに考えすぎると、デザインできなくなっちゃうので（笑）。

いいだ　ファンタジー世界ですからね。特にロングショットでの星の外観は、リアルには考えないで、見た目のかわいらしさを優先しています。

増田　惑星レインボーや今後出てくる惑星サマーンなど、物語の主軸になる星は僕らでデザインしていますが、それ以外の各話の惑星は升井さんの原案デザインがあります。それを元に、本編の描写（演出）に合わせて調整させてもらい、本編用のデザインを作っています。

地球の背景美術は油絵のような重たさで

――地球の美術デザインは、現代日本の風景とは印象が異なりますが、意識したところは？

増田　「プリキュア」シリーズの街並みは、たいてい上品なヨーロッパ系が多いんです。今回はそこからは少し趣向を変えて、アメリカのカントリー調の、素朴な感じでまとめてみました。

――商店街のレトロな和菓子屋さんや

ひかるたちの星空界探訪記

1 ケンネル星（第8話）

最初にひかるたちが訪れた星空界の惑星。骨型の外観は脚本の描写に沿ったものだが、本星周辺にも骨型の雲のようなものが浮いている（升井さんの原案にある雲状のものを、増田さんたちがアレンジ）。原案では比較的リアルな宇宙で描かれており、「この頃の僕は『惑星自体を引き立たせるには背景を暗めのトーンにしないと』と、まだリアルさに囚われていた部分があったんです」と升井さん。神殿も、原案ではリアルな骨のイメージがより強く出た外観だった。

原案デザイン

ケンネル星の3人組

どの惑星のゲスト宇宙人も、升井さんの原案に基づき、各話作監が作画用キャラ設定（左の3体）を起こしている。ケンネル星の住人は、犬型の獣人ではなく、ふさふさの犬の体毛からイメージを膨らませてモップのような造形に。頭のチョンマゲは犬の尻尾のイメージ。原案では、女の子であるネギーはビン底メガネだったが、「僕の原案よりもかわいく仕上げてくれて、本編デザインはいいなって思いました」と升井さん。原案ボードにはドギーの体毛がない状態の参考も。

美術ボード

原案ボード

2 惑星クマリン（第10話）

重力が地球の２倍という、苛酷な環境の惑星。「吹雪と灼熱による地形で、山は雪山にもピラミッドにも、植物は氷柱にもサボテンにも見えるデザインを考えました」（升井）。金平糖のような外観と合わせて、本編デザインとの差異は少ない。この星の住人・クムがクマムシ型なのは脚本通り。田舎っぺ喋りに合わせた素朴なおじさんぽい顔つきや、カラフルな体色は、升井さんの原案によるもの。二足歩行する姿は、打ち合わせの席で宮元監督から要望されたそうだ。

原案ボード

原案デザイン

原案デザイン

オークション会場の宇宙人

ゼニー星に居を構えるドラムスはイケメン成金だが、最初の原案ではワルい雰囲気をうまく出せなかったとか。「髪型をリーゼントに変えたことでぐっと雰囲気が出ました。少年マンガに出てきそうな、ちょいワル系のワイルドさを出しつつ、話の展開から三枚目な雰囲気も入れてみたり」（升井）。ドン・オクトーはタコ型宇宙人というオーダー。マフィアのドンの記号的なイメージを入れ込みつつも、タコっぽいキャラに留めているのがミソ。美食家のシタコ・エーテルは具体的なモチーフはなく、ふっくらした女性という漠然としたオーダーで、映画『ゴーストバスターズ』に登場するマシュマロマン的な方向でまとめた。

原案ボード

オークション会場

第15話での重要な舞台。本編ではポップな色味に変更されているが、ボックス席やセンターのステージなどは、原案通りの雰囲気が活かされた。天井側は本編では映らなかったが、巨大なシャンデリアがある構造が想定されている。

原案ボード

3 ゼニー星（第15話～17話）

星空連合に属さないカジノの惑星で、升井さんがルーレット盤をモチーフに未来都市風にデザイン。ネオンサインの構造物が林立しているのは、「宮元監督からもオーダーがありました。歓楽街っぽいイメージがあったようです」（升井）。本編デザインでは、よりエレクトリカルな面が強調され、星全体が派手なネオンサインのような見え方になった。

魚屋さんもミスマッチ感が面白いです。

増田　宮元監督としては、お店自体は普通の商店街っぽいものにしたかったみたいです（笑）。

いいだ　景観はさておき、お話の舞台は日本ですからね（笑）。

増田　お店の配置もきっちり決めてあります。そうしないと、画面を作れないですから。商店街は大きな湖の小島にあるので、ひかるは湖の橋を通って商店街を抜けて、岸の反対側にある学校に通っています。

――商店街が小島に作られているというのも、風変わりな景観ですね。

増田　普通の商店街だと面白くないなぁと思って、一つの独立した区画にしたくて。

いいだ　実際には、なかなかないですよね。

増田　街のシンボルにもなって面白いんじゃないかなと。小島には公園や展望台もあります。

――今作は全体的に、どんなスタイルの美術にしようと思いましたか？

増田　不思議な宇宙空間を見せたいということと、技法のスタイルとして、これまでは「線画」を使ったものが多かったので、今回は「絵画的な重い背景」にしたいと思いました。色でしっかり塗り分ける感じの。

――確かに、建物などの主線がほとんどないですね。

増田　主線を使わない、絵画風の表現ですね。これまでは、まず主線を引いて、その中を軽めの色で塗り分けていくような形だったんですが。

いいだ　地球の美術デザインが特にそうで、油絵みたいな重みのあるスタイルにしています。ただ、メリハリを出すために、宇宙空間ではあえて主線を使っているところもあります。場所ごとにバリエーションや多様性を出すのも、今までのシリーズではなかったことかなと思います。

――今回の美術デザインで、ここを注目してもらえたい点というのは？

増田　宇宙については、なるべく現実にはなさそうな方向で作っているので、それを見て「不思議だな、どうなってるんだろうな？」と思ってもらえたらと思います。

いいだ　私も、いろいろな星が出てくるたび、「見たことがない場所」になるといいなと思っています。これからも楽しみにしてもらえたら嬉しいです。

斬新さと普遍性をあわせ持つデザインに

コンセプトアーティスト 升井秀光

「スタプリ」のお仕事の話は、去年の７月に柳川あかりプロデューサーからいただきました。今年３月の「映画プリキュアミラクルユニバース」の美術設定の話がきたのと、わずか一日違いくらいの差でしたね。
　増田さんが作られたビビッドな星空界のデザインは、とてもカラフルでキャッチーです。「本当にこういう宇宙があったらいいな」と思わせる空間になっていて、子どもたちが喜びそうだし、見ているだけで楽しい気持ちになります。
　TVシリーズで僕が担当しているのは、惑星の外観や地上の景観、それと特別なロケーション。ケンネル星なら骨の神殿、アイスノー星なら氷の洞窟、あとは住んでいる宇宙人の原案です。どれも「現実にある具体的なもの」からアレンジする方向で作っています。
　脚本を複数回読み、それぞれの星の住人のセリフや、惑星の特徴が描写されている箇所をすべて書き出します。ちゃんとキャラクターの印象をつかめているか、惑星のロケーション的に各シーンの演出ができるかなど、確認しながらデザインを検討します。宮元監督は打ち合わせの際、風景の参考写真のほか、自分で描いたラフ画も出してきてくださるので、宇宙人のイメージはそのラフ画が元になっていることも多いです。
　全体を通して言えることですが、たとえば「犬のような宇宙人が住んでいる星」というお題に対して、そのまま「犬の惑星」を提示したらダメなんです。それだと「人間と犬を入れ替えた地球」になってしまう。僕らが日常で目にする動物や地形をモチーフにしつつも、「地球の文化や生態系とは明らかに違う感じ」を出さないといけません。
　特に意識しているのは、宮元監督や増田さんに最初に見せた時に、まず驚いてもらうということ。そういうものなら、お客さんも新鮮に感じてもらえるんじゃないかなって。とはいえ、本当にわけの分からない荒唐無稽なデザインだと「なんだろう？」で終わってしまう。「斬新さ」と「普遍性」をあわせ持つデザインで、かつどんな星なのか想像が膨らむ、親しみを感じられる造形なら、ひかるも「キラやば～っ☆」とリアクションしてくれるかなと（笑）。「プリキュア」でないと表現できない、かわいい宇宙や惑星の数々、皆さんにも楽しんでもらえたら嬉しいです。

プルルン星の原案ボード

美術ボード

4 惑星レインボー（第19～21話）

ユニの故郷。初登場は第18話ラストだが、実は番宣ポスターやOPのラストカットの背景として早々に発表されていた。地上は荒野で、ユニたちは大きな窪地の中に神殿や居住エリアを作って暮らしていた。「トルコのカッパドキアに洞窟を掘って暮らしていた遺跡があるんです。発注時にもそういった説明があり、参考にしました」（増田）。空は惑星の外見を反映して虹色になっている。

5 アイスノー星（第24話）

氷と雪の惑星。升井さんの原案では複数の雪だるまが結合した外観だが、本編デザインではズバリ雪だるま型の星にアレンジされた。氷の台地に雪が覆い被さる風景は、原案の雰囲気を活かしている。「住人のユキオとイルマが雪の精と氷の精なので、雪と氷が両立している感じにしました」（升井）。クライマックスの舞台となった氷の洞窟は、客席とステージの雰囲気。ツララが鉄琴風の音色を奏でる要素も升井さんの提案だ。

ユキオとイルマ

二人ともほぼ升井さんの原案そのままで、ユキオの作画用設定（上）にあるキザなポーズや鼻を付け替えたバリエーションも、升井さんの原案通り。本編では、飛行時のイルマの頭上にローター的なエフェクトが出現するが、これは雪の結晶が回転している設定だ（原案では天使の輪のように常時ある形で設計）。その際の氷粒的なパーティクルも升井さんの原案に基づいている。

原案デザイン

美術ボード

原案デザイン

03 エピソード・ゼロ年表

ひかるとララが出会う前、宇宙の歴史はどのように動いていた？
村山功さんのインタビューに基づき、時系列を整理しました！

故郷の星を失ったガルオウガが、ノットレイダーの星に辿り着く

- その後の幹部となるカッパードやテンジョウも含め、虐げられた宇宙人たちが徐々に合流する。
- 宇宙を孤独にさすらっていた幼いアイワーンをガルオウガが保護。

そこから数年後

- ノットレイダーの星にダークネストの構造体が突き刺さる。
- ガルオウガが、ダークネストの意志を感じ取り、その復活のための侵略活動を開始。
- アイワーンはノットレイスーツを発明。ノットレイダーの星の幹部以外の住人は、このスーツを着てノットレイとなる。

第1話より数ヵ月前

- ノットレイダーが星空界の聖域・スターパレスへ侵攻。12星座のプリンセスは敗北。
- トッパー麾下の星空連合の艦隊も手も足も出ず、トッパーは強い敗北感を味わう。
- この危機に、12星座のプリンセスがフワを誕生させ、自らは12本のペンとなり宇宙へ散らばる。フワを託されたプルンスは脱出に成功し、プリンセスの力を解放できるという伝説の戦士・プリキュアの探索を始める。
- ノットレイダーは、一部のプリンセススターカラーペンの入手に成功。同時に残りのペンやフワ奪取のための探索も開始。
- アイワーンがダークペンのプロトタイプを開発。すでにスターパレスを滅亡させたノットレイダーの話は、惑星レインボーのオリーフィオにも届いており、不信感を強くして対応。アイワーンはダークペンのプロトタイプを使用し、想定外の暴発。レインボー星人は滅亡。
- ユニだけがかろうじて難を逃れ、惑星レインボーを脱出。
- 惑星レインボーの数々の秘宝も散逸。星空界の富裕層に闇ルートで流れる。

惑星レインボー滅亡から間もなく

- 猫型宇宙人が暮らしているという情報を得たユニ。レインボー星人かもしれないという期待を胸にウラナイン星のハッケニャーンの元を訪れる。
- バケニャーンと名乗る猫型宇宙人が、ダークペンの実験をしていたアイワーンの前に現れ、ノットレイダーに加わる。
- 宇宙アイドル・マオが彗星の如く現れて大ブレイク。プリキュア探しの成果を得られず心が折れかけていたプルンスも、マオの歌声を聴いて勇気づけられ大ファンになる。
- それと前後して、怪盗ブルーキャットが惑星レインボー由来の秘宝中心に盗みを始める。
- マオが惑星ゼッケインの山頂で野外ライブを開催。
- 惑星サマーンから、ララがデブリ調査任務でロケットに乗り、旅立つ。

第1話にかなり近い時期

- スペースデブリの調査のためにロケットで星空界を巡っていたララが、プルンスとフワに出会い、プリキュア探しを手伝うことに。
- アイワーン、生き物の歪んだイマジネーションを増幅させてノットリガーに変化させるという、改良版のダークペンを完成させる。

第1話

- ララたちは、フワを追っていたカッパードと星空界で遭遇。攻撃を受けて逃げるが、その最中にフワのワープ能力で太陽系へ。フワはワープアウトと同時にロケット内から消失。
- ひかるが想像で描いたフワ座のイラストからフワが出現。
- ララは、フワの反応のある第三惑星に着陸。偶然その場に居合わせたひかると出会う。そこにカッパードも現れて戦いとなり、ひかるはプリキュアに変身！

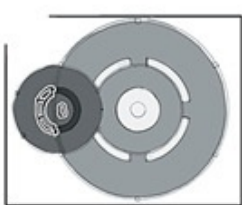
美術ボード集

各ページで載せきれなかった美術ボードをまとめて紹介。アメリカンカントリー調の観星町と、ポップでファンタジックな星空界、どれもかわいくて楽しい！

観星町の全景
観星町は森林地帯に立地しており、巨大な湖と浮島がランドマーク。左奥の小高い丘に天文台、ふもとのほうに学校、岸の逆側（右下）にひかるの家、中央の浮島に商店街がある

天文台周辺 天文台は観星町のシンボル的な建物。外観は洋館風にまとめられている。商店街よりも先にデザインされた

天文台の観測室
美術ボード名は「星の部屋」。遼太郎の書斎も兼ねていそうだ。この天文台はどの部屋もアンティーク調にまとめられている

観星町商店街
湖の浮島にある商店街。円形の広場をぐるりと囲む形で、様々な個人商店が軒を連ねる。スタードーナツや花屋ソンリッサもここにある

星空警察の署長室
第36話アバンに登場した星空警察オフィス。パブリックスペース風のホールの奥にある、ガラス張りの部屋が署長室だ

ウラナイン星の全景
第38話の脚本では「台座（布）に乗った水晶のような星」と書かれており、占いの水晶玉がモチーフとなっている

ゼニー星（アングラエリア）
第15話、17話のゼニー星。夜の歓楽街といったイメージだ。本編ではこのままは用いられず、ひかるたちが街を歩くシーンの雰囲気に活かされた

映画
スター☆トゥインクルプリキュア
星のうたに想いをこめて
©2019 映画スター☆トゥインクルプリキュア製作委員会
アニメージュ2020年1月号増刊
「スター☆トゥインクルプリキュア」特別増刊号ふろく